

スピリティズムによる福音

アラン・カルデック 著

角 智 織 訳

本書には、スピリティズムの教義に基づいたキリストの道徳的原理の解説、並びに、日常生活での様々な場面におけるその応用が著されている。

揺るがぬ信仰とは、人類のどの時代においても道理と真正面から立ち向かうことのできるものでなくてはならない。

*この翻訳はF E B版 [O EVANGELHO SEGUNDO O ESPIRITISMO] の訳である。

【 目 次 】

序文.....	8
序章.....	9
一、本書の目的.....	9
二、スピリティズム教義の権威.....	10
三、歴史的背景.....	14
四、ソクラテスとプラトン・キリスト教思想・及びスピリティズムの先駆者たち.....	16
ソクラテスとプラトンの教義の要約.....	17
第一章 私は法を破るために来たものではありません.....	22
モーゼ.....	22
キリスト.....	22
スピリティズム.....	23
科学と宗教の同盟.....	24
霊たちからの指導—新しい時代.....	24
第二章 私の国はこの世のものではありません.....	27
未来における生活.....	27
イエスの王位.....	28
視点.....	28
第三章 私の父の家には多くの住処があります.....	30
死後の世界における魂の様々な状態.....	30
霊の住む世界の様々な分類.....	30
地球の運命—人類の惨めさの原因.....	31
霊たちからの指導—劣った世界、優れた世界.....	31
試練と報いの世界.....	32
更生の世界.....	33
世界の進歩.....	34
第四章 生まれ変わらなければ誰にも神の国を見ることはできません.....	35
復活と再生（リインカーネーション）.....	35
再生は家族の絆を強める一方で、単一の存在性は家族の絆を断ちきってしまう.....	38
霊たちからの指導—再生の限界.....	39
受肉（インカーネーション）の必要性.....	40
第五章 悲しむ者は幸いです.....	42
悲しみの正当性.....	42
現世に存在する悲しみの原因.....	42
前世に存在する悲しみの原因.....	43
過去の忘却.....	45
悲しみ甘受しなければいけない理由.....	46
自殺と狂気.....	47
霊たちからの指導 — 善い苦しみ、悪い苦しみ.....	48
悪とその薬.....	48
幸せはこの世のものではありません.....	49
愛する人の死 早すぎた死.....	50
善人であれば死んでいた.....	51
志願して受ける苦痛.....	51
本当の不幸.....	52
憂鬱.....	52
志願した試練、本当の苦行.....	53
第六章 救い主キリスト.....	56
軽いくびき.....	56
約束された救い主.....	56

霊たちからの指導 真実の霊の出現.....	57
第七章 魂の貧しい者は幸いです.....	59
魂が貧しいということはどういうことか.....	59
自分を高くする者は下げられます.....	59
博学な者や知識人に隠された謎.....	60
霊たちからの指導—自尊心と慎ましさ.....	61
地上における知性的な者の役割.....	64
第八章 心の清い者は幸いです。.....	66
素朴さと心の清さ.....	66
思考による罪—姦淫.....	67
真なる清さ—洗っていない手.....	67
恥—もしあなたの手が恥の原因となっているのであれば、切り落としてしまいなさい.....	68
霊たちからの指導—子供達を私の元へ来させなさい.....	69
目が閉じている者は幸いです.....	70
第九章 柔和で、平和をつくる者は幸いです.....	72
霊たちからの指導—愛想の良さと温和さ.....	72
忍耐.....	73
服従と甘受.....	73
怒り.....	73
第十章 あわれみ深い者は幸いです.....	75
神があなたを赦してくれるよう、あなたは人を赦しなさい.....	75
敵対者と和解すること.....	75
神に最も喜ばれる犠牲.....	76
おが屑と目の中の杭.....	76
人に裁かれないよう、人を裁いてはいけません—罪を負わないものが最初の石を投じなさい.....	77
霊たちからの指導—攻撃を赦すということ.....	78
寛大さ.....	79
他人をしかることは許されますか。他人の不完全性を指摘し、他人の悪を広めることは許されていますか。.....	80
第十一章 自分を愛するように隣人を愛しなさい.....	82
最大の戒め.....	82
カエサルにはカエサルのものを.....	82
霊たちからの指導—愛の法.....	83
エゴイズム.....	85
信心と慈善.....	86
罪人に対する慈善.....	86
第十二章 あなた達の敵を愛しなさい.....	88
悪を善によって報いる.....	88
肉体を失った敵.....	89
誰かがあなたの右の頬をたたいたなら、もう一方の頬も出しなさい.....	90
霊たちからの指導—復讐.....	90
憎しみ.....	91
果たし合い.....	91
第十三章 右手が行うことを左手に知られてはなりません.....	95
見せびらかすことなく善を行うこと.....	95
見えざる不幸.....	96
やもめの寄付.....	97
貧しい者、不具者を招くこと、見返りを求めずに与えること.....	98
霊たちからの指導—物質的な慈善と道徳的な慈善.....	98
善行.....	99

慈悲.....	103
孤児達.....	104
感謝されない善行.....	104
排他的な善行.....	105
第十四章 あなた達の父母を敬いなさい.....	106
孝心.....	106
誰が私の母親で、誰が私の兄弟なのでしょう.....	107
肉体的な親族と霊的な親族.....	108
霊たちからの指導—子供の親に対する忘恩.....	108
第十五章 慈善なしには救われません.....	111
最大の戒め.....	112
聖パウロによる慈善の必要性.....	112
教会なしには救われません—真実なしには救われません.....	113
霊たちからの指導—慈善なしには救われません.....	114
第十六章 富と神の両方に仕えることはできません.....	115
財産家の救い.....	115
強欲から身を守る.....	115
ザアカイの家でのイエス.....	115
悪しき金持ちの話.....	116
タラントの話.....	116
神意に従った富の使い方—富と貧困の試練.....	117
富の不平等.....	118
霊たちからの指導—真なる財産.....	118
富の利用.....	119
地上の財産への執着心を捨てること.....	121
財産の相続.....	123
第十七章 完全でありなさい.....	124
完全性の特徴.....	124
善人.....	124
善いスピリティスト.....	125
種を蒔く者の話.....	126
霊たちからの指導—義務.....	127
徳.....	127
上位の者、下位の者.....	128
この世の人類.....	129
肉体と霊を大切にする.....	129
第十八章 多くの者が呼ばれるが、選ばれる者は少ない.....	131
結婚披露宴のたとえ話.....	131
狭き扉.....	132
霊たちからの指導—持つ者に与える.....	134
行いによりキリスト教徒であることを知る.....	135
第十九章 山を動かす信仰.....	137
信仰の力.....	137
宗教的な信仰・揺るがぬ信仰の条件.....	138
枯れたいちじくの話.....	138
人間的な信念と神性の信仰.....	140
第二十章 最後の労働者たち.....	141
霊たちからの指導—最後の者が最初になる.....	141
スピリティストの使命.....	142
第二十一章 偽キリストや偽預言者が現れるであろう.....	144

果実によってその木を知る	144
預言者たちの使命	144
偽預言者たちの奇蹟	144
すべての霊を信じてはなりません.....	145
霊たちからの指導—偽預言者	146
真なる預言者の特徴	146
幽界における偽預言者たち	147
エレミアと偽預言者たち	148
第二十二章 神が結び合わせたものを引き離してはなりません.....	150
解消してはならない結婚	150
離婚	151
第二十三章 聞き慣れない教え	152
父母を憎む	152
父母と子を捨てる	153
平和ではなく分裂をもたらしに来た	154
第二十四章 カンテラを升の下に置いてはいけない	157
升の下のカンテラ・なぜイエスはたとえ話で話すのか.....	157
異邦人達のところへ行ってはならない	158
医者が必要としているのは健康な者ではない	159
信仰の持つ勇氣.....	160
十字架を背負う命を救いたい者は命を失うことになる.....	160
第二十五章 探しなさい、そうすれば見いだせるでしょう	162
あなた自身を助けなさい。そうすれば天があなたを助けてくれます.....	162
天の鳥を見て下さい	163
金を手に入れることに悩んではいけません.....	164
第二十六章 ただで受けたのだから、ただで与えなさい.....	165
支払われた祈り	165
宮を追われた行商人	165
ただで受けた霊媒性	166
第二十七章 求めなさい。そうすれば与えられます	168
祈りの条件	168
祈りの効果	168
祈ること—思考の伝達.....	169
理解できる祈り	172
死者や苦しむ霊たちへの祈りについて	172
霊たちからの指導—祈り方	173
祈りの喜び.....	174
第二十八章 スピリティストの祈り	176
序文.....	176
I、一般的な祈り	176
「主の祈り」	176
霊媒への祈り	181
II、個人的な祈り	182
守護霊、保護霊への祈り	182
悪い霊を遠ざけるために	183
誘惑に抵抗する力を求めるために.....	184
誘惑に勝つことができたときの感謝の祈り	184
忠告を求めるために	184
願いが叶ったことを感謝して	185
甘受と忍従の気持ち	186

切迫した危険の前に	187
危険から免れることが出来たことを感謝して	187
就寝の時.....	187
近い死を感じたとき	187
III、他人への祈り	188
苦しむ者への祈り	188
他人に与えられた利益への感謝の祈り	189
私たちの敵や私たちの不幸を望んでいる者への祈り	189
私たちの敵に与えられた利益への感謝の祈り	190
スピリティズムの敵対者への祈り.....	190
生まれたばかりの子供への祈り	191
危篤状態にある者への祈り	192
IV、霊への祈り	192
死後間もない人への祈り	192
私たちが愛情を抱いていた人への祈り	194
祈りを求める苦しむ魂への祈り	194
他界した敵への祈り	195
犯罪者への祈り.....	195
自殺者への祈り.....	196
後悔する霊への祈り	196
強情な霊への祈り	197
V、病人、憑衣に煩う者への祈り	198
病人への祈り	198
憑衣に煩う者への祈り	199

序文

天の美德である神によって送られた霊たちは、前進する偉大な軍隊のように、天命にしたがって地球上のあらゆる場所へと広がって行きます。流星のように行く道を照らし、盲者たちの目を開かせて行きます。

あなた方に告げます。すべてのことが、その真の姿によって改めて確立されるべき時代が来しました。闇を散らし、おごり高ぶる者はずかしめ、真に正しい者を讃える時代です。偉大な天の声は、ラッパのように鳴り響き、天使達はそれに合わせて合唱します。人類よ、あなた方を、神のコンサートにお招きしましょう。あなた方の手でリラを奏で、あなた方の声を合わせ、宇宙の隅から隅まで響き渡る神聖なる歌を唄いましょう。

親愛なる兄弟、人類よ、私たちはあなた方と共にあります。お互いを愛しなさい、そして天におられる神の望みに身をまかせ、「神よ、神よ」と唱えなさい。そうすれば天の国へ入ることができるでしょう。

真実の霊

注一このメッセージは、霊媒を介して伝えられたものですが、スピリティズムの真なる性格と、本書の目的を同時に要約しているものです。そのため、ここに序文として記載致しました。

一、本書の目的

福音書に記された内容は五つの部分に分類することができます。それは、一、キリストの生涯における出来事、二、奇跡、三、預言、四、教会の教義を確立させるために用いられた言葉、五、道徳的な教え、です。

最初の四つの部分は議論の対象となってきましたが、最後の一つに関しては誰も攻撃をしていません。この神聖なる法の前には、不信心さえも屈するのです。この法とは、すべての宗教が集まる場所であり、その法の旗の元には、信仰の対象がどのように違っていようと万人が宿ることができます。なぜなら、それは教義の違いによって様々な場所で常に引き起こされ続けてきた宗教的な論争の対象となりえないものだからです。もしそれについて議論するのであれば、その宗派は自らに対する非難に出会うこととなります。そのような宗派は、ほとんどの場合一人一人の改革を強いる道徳的な部分よりも神秘的な部分に執着しているものです。キリストの道徳的な教えとは、人類の個人的・社会的生活のあらゆる状況における行動の規則であり、最も厳格な正義によって築かれたすべての社会関係の原則となるものです。それは、幸福を手に入れるためのなによりも間違いのない道であり、ベールにおおい隠された未来の生活の一端をかいま見せてくれるものなのです。本書の極めて重要な目的はこの部分です。

誰もが福音の道徳には感心し、その崇高さとその必要性を唱えます。他人が言ったことを信じたり、格言と化した教えの言葉を用いるように、その必要性を多くの人が唱えますが、その深い意味を知る者は非常に少なく、そこから結果を引き出すことができる人は更に減ります。その理由は、ほとんどの場合、福音の読み方が難しく、多くの人にはそれを理解できないからです。装飾的な表現や意図的に神秘性を加えられた言葉のために、福音の朗読が義務感からや強要されることによって行われるものとなってしまっており、それでは意味を理解することなく祈りを唱えるのと同じで、まったく無益なこととなってしまいます。方々に散らばった道徳の規律は、物語の間に入り交じっているために、見失われてしまいます。そして、全体を一つとして理解し、朗読の対象となるものと、熟考の対象となるものを区別することが不可能となります。確かに、福音の道徳に関する様々な専門書が今までに書かれてはいます。しかし、その現代的で文学的なスタイルは、本来の魅力と威厳を構成していた素朴な簡潔さ失っています。その他にも、最もきわだった教えを、最も簡単な格言的な表現に縮めてしまったものもあります。しかし、それらは気の利いた格言に過ぎず、教えが伝えられたときの状況や、場面が伴っていないために、その関心が奪われてしまっています。こうした不都合を避けるために、本書では信仰する宗教が何であるかに関わらず、全世界共通の道徳の法を構成することのできる条項を集めました。引用については、その考えを発展させるために有効な箇所は残し、そのテーマに関連しない部分だけを除外しました。また、節の分割に関しても、サシー (Sacy) による翻訳に正確に従いました。しかしながら、年代順に従うことが不可能なことと、そうすることによる実質的な利益もないため、その代わりに教えをその相応する性格にしたがって系統的に分類し、それによってできる限り一つ一つがつながって行くようにしました。章の番号と節の番号を付したことにより、場合によっては一般的な分類で調べることもできます。しかし、それ自体はこの本の物理的な面であり、二次的なことでしかありません。

最も肝心なことは、曖昧な部分への解説と、教えを生活のあらゆる条件に当てはめることを考えながら、それを十分に展開させ、教えを皆の手の届く所に置くことです。私たちは、見守ってくれている善霊たちの助けを借りながらそうすることを試みました。

福音書や、聖書、またはその他の一般的な聖典の多くの部分は不明瞭で、中には本当の意味を理解することを可能にする鍵が見当たらないために、道理に合っていないと思われるものもあります。スピリティズムにはこの鍵が完全な形で存在するため、その教義を真剣に研究した者たちを納得させたように、後になればその鍵がどれほど役に立つのかを知ることができるでしょう。スピリティズムは全ての場所に、太古の時代より人類のあらゆる時代に存在してきました。文献、信仰、記念碑等、あらゆるものにその形跡を見つけることができ、それによりスピリティズムは未来へ向けて新しい地平線を拓くとともに、過去の謎に明るい光を投じるのです。

各々の戒律の補足として、いくつかの指導を選択して加えましたが、それらは様々な国で様々な霊媒を通じて霊たちが伝えたものです。もしそれらの指導がただ一カ所だけから得られたのであったとす

れば、特定の個人や、それを伝えた者たちの影響を受けていたでしょうが、色々なところから得られたという事実が、霊たちが区別なしに同じ教えを伝えていることと、そうした教えに関して、どんな特権を受けた者もないのだということを証明しています（注一）。

本書はすべての者のためにあります。本書からすべての者が、キリストの道徳に則して行動する方法を知ることができます。その方法とは、スピリティストにとっては特に関係の深いものです。人間と不可視の世界との関係が今後も永遠に成り立っていくおかげで、霊たちがすべての国々に教えてくれた福音の法は、もはや死語ではなくなるのです。なぜなら、一人一人がそれを理解することによって指導霊たちの忠告にしたがい、継続してそれらを実践することを強いられることになるからです。霊たちによってもたらされるこうした指導はまさしく天の声であり、人類の謎を解き明かし、福音の実践に招いてくれるのです。

それぞれの主題に関して本書の中で引用されたもの以外にも、他の町や他のスピリティスト・センターにおいて多くの通信が受けられていたことがもちろん考えられます。しかし、無意味な繰り返しによって単調になることを防ぐ必要があったため、基調と形式において本書の計画に最も適当なものを選択を絞らねばならず、本書に記すことのできないものについては今後の出版のためにとっておくこととしました。霊媒達に関しては、彼らの名前を記すことは避けました。ほとんどの場合、彼ら自身の希望により記名がされなかったため、例外なく記名しないこととしました。また、それ以上に、霊媒達の名前が、霊たちの事業に何らかの価値を付け加えることはありません。名前を記すことは彼ら自身の自尊心を満足させることでしかなく、本当に真剣な霊媒であればまったく価値をおかないことです。彼らはその役割が単に受動的なものであり、通信の重要性が、彼ら自身の価値を高める物ではないということをよく理解しています。その知性的な仕事に自分は機械的に協力したにすぎず、おごってしまうことが愚かであることを知っているのです。

二、スピリティズム教義の権威

霊たちによる教えの普遍的管理

もし、スピリティズムの教義が、まったく人間だけの考えによって成り立ったものであったとしたら、それを実際に理解した人の啓蒙以上には何も保証することはできなかつたでしょう。しかし、この世の中で絶対の真理を排他的に所有していると心底から心に抱くことは誰にもできません。もし、霊たちが啓示をたった一人の人間に対だけしてもたらしていたとすれば、その啓示がどこからきたのかを誰にも保証することはできないでしょう。なぜなら、霊たちから教えを受けたと主張する者一人だけの言葉を、私たちは信じなければならぬからです。それらをまったく誠実に私たちが受け止めたとしても、彼ができることは、せいぜい彼の周囲にいる人々を納得させる程度でしょう。彼が一つの宗派を設立することができたとしても、世界中を集めることはできません。

神は、新しい啓示が最も速く正当な方法によって人類に届くことを望んだため、地球の端から端まで啓示が運ばれていくよう霊たちに託し、霊たちはあらゆる場所で啓示を残しました。特定の人間だけにその言葉を聞く特権を与えるようなことはありませんでした。一人であれば騙されたり、また自分で間違えたりします。しかし何百万人もの人々が同じ事を見たり、聞いたりした時にはそうではありません。付け加えるならば、一人の人間を消すことはできても、すべての人を消すことはできないのです。本を焼却することはできても、霊たちを燃やすことはできません。また、すべての本を焼却したとしても教義の源は無尽蔵であり続けます。それは教義の源が地上にあるのではなく、いかなる場所にも現れるからで、誰もがそこに渴を癒すことができるのです。そこに欠けているのは教義を普及させる人々なのです。

すべての人々に対して働きかける霊たちがいつも存在しても、そうした霊たちのもとに誰も手は届きません。したがって、霊たち自身が無数の霊媒の力を借りて教義の布教を行っているのであり、同様に霊たちは色々な場所から示してくれるのです。もしただ一人の紹介者しか存在しなかったとしたら、その通訳がどんなに良くても、スピリティズムは知られることはなかつたでしょう。その通訳がどんな階層に属していたとしても、彼は多くの人々の警戒の対象となっていたでしょうし、すべての国々がそれを受け入れることはなかつたでしょう。

一方で、霊たちは地球上のあらゆる場所で、すべての国の人々や、すべての宗派、すべての政党に対して通信をしてくるのであり、誰もがそれを受け入れるのです。

スピリティズムには国境もなく、あるいは既存の宗教の一部をなすものでもありません。誰でもが他

界した家族や友人から指導をうけることができるのですから、どんな社会階級をも要求しません。スピリティズムが人類すべてを兄弟愛へと導くためには、そうである必要があるのです。中立的な立場を維持しなければ、不和を鎮めるかわりに勢いづけることになってしまいます。

スピリティズムの力と、その大変早い普及の理由は、霊たちからの教えのこうした遍在性にあります。たった一人の人間の言葉は、出版の力を借りたとしても、すべての人々に知れ渡るには何世紀もかかるであろう一方で、幾千もの声が地球上のあらゆる場所で同時に、誰もがそれを受け継ぐことができるように、最も無知な者たちから最も博学な者たちにまで、同じ原理を宣言するのを同時に聞かせてくれるのです。それは今日までに生まれた教義のいずれもが享受したことがなかった有利な点です。よって、スピリティズムが真理であるならば、人類に嫌われること、道徳的な革命、地球の物理的崩壊さえも、そのいずれもが霊たちの元まで及ぶことはないのですから、それらを恐れることはないのです。

しかし、スピリティズムの置かれた特別な位置からもたらされる有利な点はこればかりではありません。スピリティズムは、人々の野心からであれ、ある霊たちの矛盾からであれ、生じうるいかなる意見の相違に対しても、攻撃することのできない保証を与えてくれています。そうした矛盾は、疑いもなく障害となりますが、悪と隣り合わせてそれ自身がその薬を持ち合わせているのです。霊たちはそのそれぞれの能力の差違がゆえに、個々に考えた場合、彼らが真理のすべてを手にするにはほど遠いところにいると考えていることが知られています。ある種の謎については、すべての霊に知ることが許されているわけではありません。一人一人の霊の知識は各々の浄化の程度に応じているのです。平凡な霊たちは、多くの人間が知る事以上を知ることはありません。彼らの間には、人間の間にもいるように、自分の知らぬ事を知っていると思ひこんで、うぬぼれたり知ったかぶりをする者がいるのです。自分の考えが真実であると思ひこむ者。結局、より高級な分類に属する、完全に物質から脱却している霊たちのみが、地上的な偏見や考えを捨て去っているのです。

しかし、人を騙す霊たちが、彼らの理想郷を騙して信じ込ませようと、自分達には属さない名前を、うしろめたく思うことなく名乗ることということも知られています。

そのことから、道徳的な教えの範疇からはずれた事柄すべてに関して、各々が得ることのできる啓示は個人的な性格を持ち、そこには確実性を示す印は存在しません。それらはある霊の個人的な意見としてとらえるべきであり、それを絶対的な真実として軽率に広めては、慎重さに欠けることとなります。

証明のための第一の分析方法は、間違いなく理性による分析であり、霊から来るすべてのことを例外なしに、理性によって分析しなければなりません。良心や厳格な理論、既に得られている肯定的な事実に矛盾する理論は、それがどんなに表敬に値する名前によって署名されていたとしても、すべて否定されるべきです。

しかしながら、人々に知識が欠けていることや、多くの人々が自分の意見を真偽を判断する唯一の手段であると考える傾向にあることから、多くの場合この分析だけでは不十分となります。そうであるならば、自分自身に対して絶対的な自身を持たない人はどうすればよいのでしょうか。大勢の人々の見解を求め、それを自分の意見の指針とすればよいのです。霊たちが伝えることに対しても同じようにしなければならず、彼らこそ、第一に私たちがそうする方法を与えてくれているのです。霊たちからの教えが一致していることが、最良の真偽の証明です。しかし、それがある決められた条件のものであることが大切です。

ある疑わしい事項について、様々な霊に対してある霊媒が一人でたずねる場合、証明する力は弱くなります。その霊媒が憑衣のもとにある場合、もしくは人を騙す霊と結びついている場合、その霊が同じ事を様々な名前を用いて述べるのが可能だと言うことは明かです。同じ集会所で様々な霊媒によって得られる教えの一致であっても、そうした霊媒達が同じ影響下にある可能性があるため、十分な証明の保証とはなりません。

霊たちの教えの唯一の保証が存在します。お互いに知らない多数の霊媒達を通じ、様々な場所で霊たちによって自発的に伝えられた啓示が一致していることです。これは、二次的な関心事に関する通信についてではなく、教義の原理に関する通信についてそうであるということに注意して下さい。経験により、ある新しい原理が述べられるとき、それは自発的に様々な場所で、同時に、その形式や真意までも同じ方法で伝えられることが分かっています。ですから、もしある霊が風変わりな方法で、自

分の意見だけにに基づき真実を除外するとしたら、その考えは制限され続け、あらゆる場所において伝えられる教えの前に必ず崩されることを確信してもよく、それはこれまでも多くの事例が示してくれています。こうした全員一致の方法が、スピリティズムの始まりにおいて部分的に現れた、可視の世界と不可視の世界との関係を支配する法を知らぬままでの霊現象に対する個々の独

自の説明が崩れていったのです。

教義の原理を確立する際に、私たちはこうした方法に頼りました。私たちの考え方と同じであるためにそれが真実としているわけではありません。私たちが至上の真実の裁定者であると自らを主張するのでは決してなく、「信じて下さい。なぜなら私たちが信じなさいと言っているのですから」などと言うことはありません。私たちの意見は、私たちにとってある個人的な意見に過ぎず、それが真実であろうが偽りであろうが、他の考え方に比べて絶対に確実であるとも考えていません。また、私たちにある原理が教えられたからそのことを真実としているのではなく、一致した容認を受けたからなのです。

地上のあらゆる場所に散在する、千に近い真剣なスピリティズムの集会所から通信を受けたという立場から、それらの一致がどんな原理を確立しているのかを観察する条件を整えていると考えます。この観察が今日まで私たちを導き、また今後もスピリティズムが新たに開拓しなければならない分野へと導いてくれるでしょう。なぜなら、フランス国内から来た通信にしても、外国から来た通信にしても、それらを注意深く観察すると、それらの啓示の特別な性格からスピリティズムが新しい方向に進もうとしており、前へ向かって大きく踏み出す時が来たことが認められるからです。多くの場合隠された言葉によって行われるこれらの啓示は、しばしばそれらを受けた人達にも見逃されて来ました。また、自分達だけが啓示を得られるのだと信じている者たちもいました。それらを個別に受け取るのであれば、それらは私たちにとってどんな価値も持ち得ません。それらが通信内容が一致していることがその重要性を持たせるのです。その後、それらが公開されると、各々が同じ意味の通信を受けていたことを知ることになります。こうした全体的な動きについて、その扱いをどうするかを判断を助けてくれている私たちの指導霊たちに助力をうけながら、私たちは観察・研究したのです。こうして世界的に証明されることは、未来におけるスピリティズムの普遍性を保証し、それに矛盾するすべての理論を打ち消すこととなります。そのとき、未来において真実の基準となるのです。

『霊の書』『霊媒の書』に著された教義が好結果を生んだのは、人々がこれらの本に書かれたことの証明を、あらゆる場所で霊たちより直接受けたためです。もし様々な場所から、霊たちがその内容と矛盾することを伝えようと現れていたとしたら、それらの書物はとっくに、他の空想的な概念すべてが会ったのと同じ目に会っていたでしょう。出版社の助力さえも、そうした概念を不幸な結果から救うことはできませんが、『霊の書』『霊媒の書』は出版社からの助けを奪われながらも、速い速度で広まる道を開きそびれることはありませんでした。そこには霊たちの助力があったのであり、彼らの意志はそうなったことに十分であったばかりか、人間の悪意をも圧倒したのです。霊たちから発した考えであれ、人間から発した考えであれ、誰にも反対することが許されない力を持ったこの対決の試練に耐えられない考えはみな、このようになることでしょう。仮にあるタイトルによって、反対の内容の本を書くことに喜びを感じる霊がいるとしましょう。彼らが敵意によって、教義の信用を失わせようとするのを目的とし、悪意が偽の通信を引き起こさせたとします。しかしこの霊もが、その霊と反対のことを言っていたとすれば、こうした書物が一体どんな影響を及ぼすことができるでしょうか。

どんな考え方であれ、その名を用いて唱える場合には、こうしたことに固執することがそれを保証してくれます。たった一人の唱える主義主張と皆が唱えるものとの間には、単一から永遠までの距離があります。何百万もの友好的な声が届き、宇宙のあらゆる隅々から家庭の中にまで聞こえ渡るとき、大衆の考え方に対して、それを汚し、その価値を失わせようとする議論に何ができるのでしょうか。この点について、理論は経験によって既に実証されていないのでしょうか。スピリティズムを倒そうという意向がもたらした無数の出版物はどうなったのでしょうか。どの出版物かが、さもすればスピリティズムの歩みを遅らせたのでしょうか。現在に至るまで、こうした視点で問題が重要な問題として議論されたことはありません。それぞれがめいめい勝手な考えを伝えたのにすぎず、霊たちにたよることはなかったのです。

一致の原則は、スピリティズムを自分の都合に合わせ、自分達自身の利益になるような宗派にしよう

と加られかねない変更に対する保証にもなります。元来の神意からそれを曲げようとする者は、霊たちの教えの普遍性によって、霊たちは真実から離れたいかなる変更をも地に倒すことになるという簡単な理由のために、成功することはないでしょう。それらすべてから根本的な真実が導かれます。すでに確立されたり公認された考えに対抗しようとする者は、実際にある局地的で一時的な動揺をもたらすことができるかも知れません。しかし、決して全体的に支配することは、そのときにおいても、また、未来においても不可能です。

さらに、霊たちによって与えられる指導のうち教義によって解説されていない点については、それらが孤立しているうちはそれが法をなすものではないのだということを導き出すことができます。ゆえに、そうした指導は結果的には制限付きで、解明の必要なものとして受け入れられなければなりません。そこには、それらを公表する際の最大の慎重の必要性があります。そしてそれを公表してもよいと判断された時には、それがおよそ可能性のある、個人的な意見に過ぎないものとして公開することが大切で、そして必ずその確認をとることが必要です。軽率であるとか、浅はかな信心だと非難されたくないのであれば、ある主義主張を絶対的な真実であると公開する前に、その確認がやってくるのを待たねばならないものです。超越した英知によって、優秀な霊たちは啓示を行います。教義の大きな問題については、知性がより高い水準の真実を理解することができるようになるにしたがって、またその状況がその新しい考えを送信するにふさわしくなった時、徐々に攻撃していきます。そうであるために最初からすぐにすべてを伝えなかったのであり、今日においてもいまだにすべてを言うはおらず、熟していない果実を求めるせっかちな者たちの短気にそれを譲ることはありません。神がそれぞれの事柄に対して割り当てた時間を早めようとすることは、無駄なことで、なぜなら、そうした時、本当に真剣な霊たちはそれに参加することを拒むからです。軽率な霊は、真実に気をとられることはなく、すべてに返事をします。そのために、期の熟していないあらゆる質問には、いつも矛盾した答えが返ってくるのです。

上記の原則は、個人的な理論によってもたらされたものではありません。それらは霊たちがその置かれている状況から強いられたものです。ある霊があることをある場所で言う一方で、何百万もの別の霊がその反対をどこかで言うのであれば、推し量られる真実とは、たった一人、もしくはほぼ一人と見られる者が持つその考えの中にあるはずはありません。誰か一人が、その他すべての者に反対されながら、理にかなっていると主張しようとすることは、人間の間でも理屈に合わないのと同様に、霊たちの間でも理屈にあいません。本当に思慮深い霊たちは、ある問題に関して彼らが十分に理解していると考えない以上、決して絶対的な方法でそれを解決することはありません。彼らは、彼らの個人的な観点からその問題を扱っていることを宣言し、その確認を待つことを勧めます。

ある考えがどんなに美しく、正しく、偉大であったとしても、最初の時点からあらゆる意見を集約することは不可能です。そこで起こる衝突とは、引き起こされる運動が避けることの出来ない結果です。それらは真実がより際だつために必要であり、偽りの考えがすぐに取り除かれるためにも、早くから起きた方がよいのです。この点に関して何らかの恐れを抱くスピリティストはまったく安心してよいのです。

孤立したあらゆる思い上がりは、物事自身の力によって、普遍性の偉大で強力な基準の前に滅びることになるのです。ある人の意見に他人が集まるのではなく、異口同音に発せられる霊たちの声に集まるのです。それは一人の人や、私たちや、正統派スピリティズムを始めることになる別の誰かでもありません。または誰であれ一人の霊が強要しに来るのでもありません。それは神の指示により、地球のあらゆる場所において通信する霊たちの教えの普遍性に集まるのです。それがスピリティズムの教義の根本的な性格であり、その力であり、権威です。神はその法が揺るがぬ基礎の上に君臨することを望み、そのために一人の儂い頭をその基礎としなかったのです。派閥や妬み深い競争相手、宗派、国家さえも存在しない、それ程強力な審判の前には、あらゆる反対意見も、野心も、個人的な優位性のうぬぼれも崩壊してしまいます。私たちが自分達自信の考えによって至上の法を変更しようとするれば、自分達自身を破滅させることになってしまいます。神のみが論争される問題を決定し、異論者には閉口させ、道理にかなう者にはその正当性を与えるのです。こうした天からの威厳のあるあらゆる声を前に、一人の人間や霊の意見に何ができるのでしょうか。それは海の中に落ちて消滅する一滴の水や、嵐によって打ち消される子供の声よりも小さな事です。普遍的な意見こそが最高の審判であり、それは最後の時に発言することになるのです。

あらゆる個人的な考えは、こうした中に形成されます。もしその内の一つが真実であれば、計りには

その相対的な重量しか示されないこととなります。それが偽りであれば、その他の意見に対して勝ることはできません。この広大な競争の中で、人類の自尊心に対して新たな失敗となる個々の特異性は失われることとなります。調和のとれた合同の働きは既に描かれています。今世紀はそれが光り輝くことなく過ぎていくことはなく、それは不確実を明らかにしていきます。一方、今からそのときまでは強力な声がそれを聞かせる任務を受けて、人類を一つの旗の元に集め、土地は十分に耕されたからです。それが実現するまでの間、二つの相対する主義の間をさまよう人には、どちらの方向に向かって一般的な考えが形成されていくか観察することができるでしょう。その方向が、様々場所において通信する霊たちの大半が発言する方向を正しく示していることになり、二つの主義のうちのどちらが生き残るかを示す確かな印となります。

三、歴史的背景

福音のいくつかのくだりをよく理解するには、その中でしばしば用いられている語彙で、当時のユダヤ人社会の習慣を特徴づけるものの価値を知ることが必要となります。私たちにってはもはや同じ意味を持たないために、こうした語彙はしばしば誤解され、それゆえに不確実性をもたらしています。それらの語彙の意味を理解することはなによりも、一見風変わり映るいくつかの金言の真なる意味を解説してくれることとなります。

書記官一主にユダヤの王の秘書や、ユダヤ軍の監督官に与えられた名前。後にモーゼの律法を民衆に解説する博士達の呼び名として特に用いられるようになった。その従う主義と改革者たちに対する敵対心において、ファリサイ派の人々と共通している点がある。そのことからイエスはファリサイ派の人々へ対する戒めに彼らをも含めた。

エッセニア人—紀元前一五〇年程に、マカベウの時代に創設されたユダヤ人の宗派の一つで、その人々は修道院のような場所に住み、道徳的・宗教的結社として活動していた。その寛大な習慣や厳しい美徳を特徴とし、神と隣人に対する愛、霊魂の不滅を教え、復活を信じていた。独身生活を営み、奴隷制と戦争を非難し、その財産を分かち合い、農業に従事した。不死を否定した官能主義のサドカイ派や、見せかけだけの美徳や単に表面的にだけ厳しい習慣を持っていたファリサイ派の人々とは反対に、エッセニア人達はそれら二つの宗派が敵対し合った論争に決して参加することはなかった。彼らの過ごし方が初期のキリスト教徒達と似通っており、また、彼らの教えた道徳の原則の内容のために、イエスはその任務を開始する前にエッセニア人の社会に属していたのではないかと多くの人々に思わせることになった。イエスがエッセニア人達のことを知っていたことは確かであるが、それに属していたことを証明するものはなにも存在せず、それについて書かれたものはすべて仮説に過ぎない。(一)

ファリサイ人—(ヘブライ語で分離・区別を意味する「parush」がその語源)—ユダヤ人の神学はその伝統の重要な位置を占めていた。その神学とは、教義の条項として採用された聖典の意味に従った、代々与えられた解釈と、それを教義の条項として採用し、編集されたものから成り立っていた。博士達の間では、中世の時代におけるスコラ学派の神学的な議論の類の、終わることを知らぬ論議がしばしば最も単純な言葉や形式の問題に関して交わされた。そこから様々な宗派が生まれ、どれもが真理を独占しようとし、お互いを憎み合うようになった。こうした宗派のうち、最も影響力を持っていたのはファリサイ人達であったが、その長としてヒレル(Hillel)(注二)というバビロニアに生まれ有名な学校を設立し、そこでは聖書のみ信仰を抱くべきであると教えた。その起源は紀元前一八〇～二〇〇年に遡る。ファリサイ人達は様々な時代において迫害されたが、特にユダヤの王であり最高の教皇であったヒルカノ(Hircano)、シリアの王であるアリストブーロスとアレクサンドロスには特にそうであった。しかし、この後者は、ファリサイ派の人々に名誉を与え財産を補償したため、過去の勢力を回復し、西暦七十年頃のエルサレムの没落までそれを維持した。しかしその後にはユダヤ人達が離散したためにその名は消えていった。ファリサイ派の人々は宗教論争に積極的に参加した。外見的な儀式や習慣を厳格に守る人々であった。ユダヤ教の改革に対する熱意に満ちた、革新者たちの敵で、その主義の厳格さを保つ人々であった。しかし、細かな点に至るまでのその熱心な見せかけの一方で、ふしだらな習慣に対しては目をつぶり、自尊心が強く、なによりも支配することに対す

る過剰の切望を抱いていた。彼らにとって宗教とは、誠実な信仰の対象というよりも、彼らの目的により近づくため手段に過ぎなかった。見せかけや、目立ちたがる事以外にどんな美徳をも有していなかった。しかし、彼らのうちのある者たちは民衆に大きな影響を与え、そうした民衆からは聖なる人々であると見られていた。そのことから彼らはエルサレムにおいて大きな勢力を有していた。神を信じていたというよりも、少なくとも神や魂の不滅、永遠の罰、死者の復活を信じているふりをしてきた。(第四章、四) イエスは法の中で何よりも簡素さや魂の質を重んじており、殺す学問よりも生を与える魂をより重要視したため、その使命の間に彼らの偽善を暴こうとした。そのために、彼らの中には残忍なイエスの敵がいたのである。こうした理由によって、ファリサイ派の人々は主要な聖職者たちと同盟し、民衆が反乱を起こしてイエスを消すようにけしかけたのである。

ナザレ人—古代の法において、一生涯、もしくは一時的に完全な純粋を保つことを誓約したユダヤの人々に与えられた呼び名。彼らは貞節を守り、アルコールを飲むことを避け、髪を伸ばしていた。サムソン、サムエル、バプテスマのヨハネはナザレ人であった。イエスがナザレ出身であったことちなみ、後になってユダヤ人達は初期のキリスト教徒達にこの呼び名を与えた。また、この名前は西暦初期の二、三百年に存在した異教の宗派にも与えられた。彼らはエボナイト派と同様にいくつかの原則を持っており、モーゼの法とキリストの教義の実践の両方を混在させたが、四世紀、この宗派は消滅した。

関税徴収人—彼らは階級の低い税徴収者たちで、主に町に入るための税金の徴収を行っていた。その役割は、関税の徴収を行う税関の職員の職務にほぼ相当する。パブリカン(税務官)が一般的に受けていた反感を共に受けていた。こうした理由によって福音の中ではしばしば関税徴収人は罪深い人々の表現と共に用いられている。この分類は墮落した者や浮浪者という意味は持っていなかった。関税徴収人とは悪い仲間を持つ人々の同意語であり、他の人々と共に生活するにふさわしくない人々という意味で用いられた。

パブリカン(徴税官)—古代ローマ時代において公共の税金を徴収したり、所得税をはじめとするあらゆる税金の徴収を引き受けていた人々のことを、ローマでもまたローマ帝国のその他の地方でもこう呼んでいた。今日においてもいくつかの場所に残るアンシャン・レジーム時代のフランスにおいて見られた競売人や賃借人のような人々であった。彼らが危険にさらされていたことから、人々は彼らの富に対して目をふさいでいたが、そうした富とは、一部の者においては不当な徴税や不正な手段によって得た利益であった。パブリカン(徴税官)という名は後になって、公的資金を管理する人々や、それに従属して働く代理人までもを指すようになった。今日この言葉は慎重さに欠けた財政官や代理人を指すために、軽蔑の意味を持って用いられている。不当な手段によって得た富を指し、場合によって「パブリカンのように貪欲である」とか「パブリカンのように金持ちである」という表現が使われている。ローマの支配下において、ユダヤ人はなかなか税金を受け入れず、彼らを大いに苛立たせていた。そのために多くの反発が生まれ、そこから宗教的な問題に転化し、それを法に反するものであると考えたのである。そしてゴロニテのユダと呼ばれた者の支配下により税金を支払わないことを原則とした強大な政党までもが組織された。ユダヤ人達は結果的に税金とそれを徴収する任務にあったものを嫌い、そのことからあらゆる種類のパブリカンに対する嫌悪が生まれた。彼らの中には尊敬すべき人物もいたにも関わらず、その役割によって彼らは蔑視され、また彼らと関係を持っていた人々までもが同じ非難を受けた。著名なユダヤ人達は、こうした人々と親しくなることは身を危険にすることであるとと考えていた。

サドカイ派—紀元前二百四十八年頃に形成されたユダヤの宗派であり、その名は創始者のサドックに由来する。不死も復活も信じることがなく、良い天使と悪い天使をも信じない。とはいえ、彼らは神を信じていた。しかし、死後に何も待ち受けるものはく、一時的な報酬だけを目的に神に仕え、彼らによれば、その報酬とは神の意志により決められていた。こう考えることにより肉体的な感覚を満たすことを人生の根本的な目的とした。法典に関しては、彼らは旧法に従った。伝統やいかなる解釈をも受け入れなかった。善の行いをし、法を簡素かつ純粋に守ることを外見的な儀式の実践よりも上においていた。彼らは当時における唯物主義者、多神教者、官能主義者であった。宗派に属する人は少数であったが、その幹部には重要な人物達がおり、ファリサイと敵対する政党となった。

サマリア人—十部族の分裂の後、サマリアはイスラエルから分裂した王国の首都となった。幾度も破壊されては再建され、ローマ時代には、パレスチナの四つの分割された地区の一つであるサマリア国の頭となった。偉大なるエロデは贅沢なモニュメントによりサマリアを美化シアウグストゥスをたたえ、アウグストゥス、ギリシア語でセバステと命名した。サマリア人達はほとんどいつもユダの王達と戦争にあった。分裂の時代以来、深い敵意が二つの民族の間に続くことになり、相互の関係は避けられるようになった。分裂をさらに広げ、宗教的な祭を祝うためにエルサレムへ行く必要をなくすように、自分たちだけのために宮を建て、幾つかの変革を加えた。彼らはモーゼの法が記された「モーセ五書」だけを用い、それらに後に付け加えられたその他の書物はどれも用いなかった。彼らの聖典は最も古いヘブライ語で書かれていた。正統派のユダヤ人にとって彼らは異教徒であり、故に蔑視され、敵視され、迫害された。お互いに信仰の起源は同じであったにも関わらず、二つの国家の間にあった敵意は、宗教的な意見の不一致によるものであった。当時のプロテスタント達である。今日に至ってもレバントの一部の地域、特にナブルス及びジャファにはサマリア人が存在する。彼らは他のユダヤ人達よりも厳格にモーゼの法を守り、彼らの間だけで結婚をする。

シナゴーク（集合、集会を意味するギリシャ語の *synagoge* より）—ユダの国には、エルサレムのソロモンの宮ひとつしかなかったが、そこでは宗教の様々な儀式が行われた。ユダヤ人は毎年そこへ行き、過越祭、奉納の祭り、神殿の祭り等の主要な祭りのために巡礼した。こうした祭りの機会には、イエスもそこへ行くことがあった。その他の町には宮がなく、シナゴークがあった。そこではユダヤ人が毎週土曜日に集まり、長老や書記官、律法学者たちが指揮をとって公式に祈った。またそこでは聖典の朗読も行われ、続いて解説や説教が行われ、それには誰もが参加できた。そのために、イエスは司教ではなかったが土曜日にシナゴークで教えたのであった。エルサレムが没落してユダヤ人が分散した後、ユダヤ人達が生活を続けた町で、シナゴークはその宗派の祭りをを行う寺院となった。セラペウター（仕える、面倒を見るを意味するギリシャ語 *therapeuon* が転じて、神に仕える、治療者を意味する *therapeutai* より）キリストと同時代のユダヤの宗派で、特にエジプトやアレクサンドリアに存在した。エッセニア人との関係が深く、同様にあらゆる美德の実践を受け入れた。食事において極端に質素であった。また、独身主義であり、孤立した生活を送ることを良いと考え、宗教結社を形成していた。アレクサンドリアのユダヤ人でプラトン主義哲学者フィロンは、セラペウターをユダヤ教の一宗派として考えた最初の人であった。エウセビオス、（聖）ヒエロニモス、その他教会の司教達は、彼らをキリスト教徒であると考えた。そうであったか否かは別にせよ、エッセニア人と同様に彼らはユダヤ教とキリスト教の統合した面影を残していることは明らかである。

四、ソクラテスとプラトン・キリスト教思想・及びスピリティズムの先駆者たち

イエスがエッセニア人の宗派を知っていたからと言って、イエスが自分の教義をそこから取り込んで生み出したと結論付けることは誤りであり、またそうであったとすれば、もしもイエスが別の環境に生まれていたら別の主義を唱えていたことになってしまいます。偉大な考えというものは、決して突然登場することはありません。真実の上に位置する考えというものはいつも先駆者がおり、彼らは部分的に道を切り開く準備をして行きます。後になって、そのときがやってくると、神はその考えを要約し、整え、散らばった要素を補い、それらを教義の幹としてまとめる者を送ることになります。このように、その考えは突然現れるのではないため、それが登場した時にはそれを受け入れる準備のできた霊たちに出会うことができるのです。キリスト教思想にもこのことがおこり、イエスやエッセニア人の何世紀も前には、その主な先駆者としてソクラテスとプラトンがいました。ソクラテスはキリストと同様に何も記しませんでした。少なくとも何も書き残しませんでした。当時の信仰を攻撃し、偽善や偶像の上に真なる美德を掲げ、いわば、宗教的な偏見をうち破ったため、キリストのように狂信者の犠牲となり、罪人として死を遂げました。ファリサイ派の人々によって、その教えが民衆を墮落させていると非難されたイエスと同じように、ソクラテスも当時のファリサイ派にあたる人々に非難されました。神の唯一性、靈魂の不滅と未来の命についての教義をとнаえて非難された人々は、いつの時代においても存在したのです。イエスの教義をその使徒達の書き残したのものによってのみ知ることができるように、ソクラテスの教義もその弟子プラトンによる記述によってのみ知る

ことができます。ここで、最も重要な点について要約し、ソクラテスの教義とキリスト教徒の原則の一致している部分を示すことは有意義であると考えました。これらの二つの教義の対照を不敬であると考え、多神教者の教義とキリストの教義の間に共通点があるはずがないと考える人々に対しては、ソクラテスが多神教者ではなく、彼の目的は多神教を崩すことにあったのだと申し上げておきます。より完全で浄化されたキリストの教義は、その比較において何も失うものはありません。神意によって送られたキリストの使命の偉大さが減じられることはありません。故に、その他のことについては、誰にも打ち消すことのできなかつた歴史的事実として扱われるのです。人類は、升の上に自ら光を灯す時代にまでたどり着いています。人類は充分成熟し、それに真正面から向かい合うことができるようになり、聞く耳を持つとしない者にとってはより難しい時がやってきました。物事をより広く、崇高に考える時代がやってきており、もはや宗派や階級によるせまい心に制限された視野で見る時代ではありません。さらに、このことは、ソクラテスとプラトンがキリストの思想を予感していたのであれば、その記述の中にスピリティズムの基本的な原則をも見出せるであろうことを証明してくれるでしょう。

ソクラテスとプラトンの教義の要約

1、人間とは肉体を持って生まれた魂である。肉体を持って生まれる以前はその本質的なもの、真理、善、美の考えに属していた。そこから肉体を得て分離するが、その過去を覚えているために、そこへ戻ろうとする欲求に大なり小なり苦しめられる。

知性的な根本と物質的な根本との区別と、その独立性を、それ以上明確に表現することはできません。更に、魂が存在するという教えについても同様です。人間は、熱望するもう一方の世界に対する曖昧な直感、つまり死の後に、肉体の滅亡を越えて存在し続けることや、肉体を受けて生まれるために霊界から出てくること、そして再び同じ世界へ戻っていくこと、を抱き続けています。そして最終的には墮落した天使の教義にたどり着きます。

2、魂は、肉体を使ってある目的を達成しようとするすると動揺する。移り行くものに執着するために、酔ったようにめまいをおこす。一方で、自らの本質を見つめるときには純粹で永遠、不死なるものに向かうが、魂の性質がそうであるためにできる限り長くそこにつながれようとする。すると、普遍的なもの結びつくために、道に迷わなくなる。その魂の状態を英知という。

このように、物事を地上においてしか考えることのできない人間は錯覚を起こしているのであって、物事を正確に鑑賞するには高いところから、つまり靈的な視点から見なければなりません。故に、本当の英知を有する者は肉体と魂を分離させ、霊の目によって物事を見なければならぬのです。それはスピリティズムが教えることと同様です。（第二章、五）

3、私たちの肉体と魂がこの墮落の中に存在するうちは、私たちの望む真実を手に入れることはできない。私たちには肉体の面倒を見る必要があるため、そこから幾千もの障害が生じてくる。それに加え、肉体は欲望や、食欲、恐れ、数知れぬ妄想や、つまらぬことによって私たちを満たし、そのために、肉体を持っている間に、分別を持つことは、ほんの一瞬の間でさえ不可能となる。しかし、魂が肉体に結びついている間、私たちには何も純粹な形で物事を知ることができないのであれば、選択は二つに一つである。つまり、真実を決して知ることができないか、死後それを知ることになるかのいずれかである。肉体の狂気から解放されれば、同様に解放された人々と会話をし、私たちは物事の本質を自ら知ることになるのだ。こうした理由によって真なる哲学者は死の準備をするのであり、彼らにとって死は決して恐怖ではないのである。

肉体の器官によって弱められた魂の能力が、死後になって広がるのだ、という基本的な考え方がここにはあります。しかしそれはすでに浄化した魂におこることであり、不浄の魂に同様なことがおきることはありません。（「天国と地獄」第一部 第二、第二部 第一章参照）

4、不純な魂は、その状態において抑圧された状態にあり、不可視で非物質的であることによって、可視の世界に引きずられていくことになる。すると人々は、遺跡や墓石の周りで不気味な亡霊を

見ると、それらが肉体を後にしながら、いまだに完全に浄化していないために、物質的な姿を引きずっているもので、それが人間の目に見えのだと間違えてしまう。実際には、それらは善なる魂ではなく、悪しき魂であり、こうした場所にさまようことを余儀なくされ、自分とともに生前の罰を引きずりながら、その物質的な姿に伴う欲求が再び別の肉体に反映されるまでさまよい続けるのである。そして疑いもなく、最初の人生において有していた習慣を再び身につけ、それがその魂の執着となる。

リインカーネーション（訳者注①）の原則ばかりか、スピリティズムにおいて霊との通信によって見られるような、肉体の枷（かせ）の下にある魂の状態もがここに明確に表現されています。更に、肉体への再生は魂の不浄の結果であり、浄化された魂は再生することから免れているとされています。まったく同じことをスピリティズムは述べていないでしょうか。付け加えるのであれば、霊界において善い決意を持った魂は、再生する際に、既に有する知識とより少ない欠点、より多くの美德や直感的な考えを、その前の人生の時よりも多く持ち合わせているのです。こうすることによって、一回ごとの人生は知性的、道徳的な進歩をもたらすことになるのです。（『天国と地獄』第二部の例 参照）

—リインカーネーション— 魂が新たな肉体を授かり物質界に生まれること。再生。

5、私たちの死後、生きていた間任務にあった妖精（ダイモン、デビル）は、ハデス（地獄）へ行かなければならないものをすべて集めて連れて行き、そこでは審判が下される。魂達は、ハデスにおいて必要な時間を過ごす、複数回に渡る長い人生に再び導かれる。

これは守護霊、もしくは保護霊の教義と、霊界におけるある程度の時間の間隔をおいた、連続的な再生の教義に他なりません。

6、ダイモンは地上と天を分ける空間に存在する。その空間とは、すべてを自分自身に統合する偉大なる絆である。神が人間に直接通信をすることは決してなく、それはダイモンを介して行われ、ゼウス（神々）は彼らと取り決めを行い、起きていた間も寝ている間もそれに従事する。

ダイモンという言葉はディーモン（悪魔）の語源となっていますが、昔は現代のように悪者と考えられてはいませんでした。悪意のある者だけを指すのではなく、一般的な霊を指し、その中にはゼウス（神々）と呼ばれる優秀な霊たちも、人間と直接通信をする劣った霊、つまりいわゆるディーモン（悪魔）をも指していたのです。スピリティズムでも霊たちが宇宙空間に住んでいると言います。神は純粋な霊たちを介してのみ人類と通信し、それらの霊たちは神の意志を伝えることを任されるのです。起きていた間も寝ている間も霊たちは人間と通信します。ダイモンという言葉の箇所を霊という言葉置き換えれば、スピリティズムの教義がそこにあることが分かります。天使という言葉に置き換えると、そこにはキリスト教を読みとることができます。

7、（ソクラテスやプラトンの考えに基づく）哲学者たちの不断の関心事は、魂に対して最も多くの注意を払うことであり、一時しか続くことのない現在の人生には多くの関心を持たず、永遠を視野に置くことである。魂は永遠なのであるから、永遠を見据えて生きる方が賢明ではないか。

キリスト教とスピリティズムは同じことを教えています。

8、魂が非物質であるならば、この人生の後には同様に不可視で非物質の世界を取らねばならず、それは肉体が分解して物質へと戻るのと同じである。しかしそのとき、神のように思考や科学によって自らを養う純粋で真に非物質の魂と、物質の不純さによる汚点を残した魂で、神に向かって昇っていくことを拒み、地上において存在した場所に残留する者たちとを区別することが大切である。

この通り、ソクラテスとプラトンは魂の非物質化の程度の違いを完全に理解していたのでした。その純粋さの程度により状況が多様化することを主張したのです。彼らが直感的に述べたことをスピリティズムは私たちに無数の例を通じて証明しています（『天国と地獄』第二部）。

9、死が人間の完全ある消滅であったのであれば、悪人は死によって多くを得ることになるであろう。なぜなら、同時に肉体や魂、悪癖からも自由になることができるからである。外見的な装飾ではなく、適切なものによって魂を飾ることができたものだけが別の世界へ旅立つ時を平穩に待つことができる。

これは唯物主義が、死の後には無が待っているということで、これまでのあらゆる責任を白紙にし、結果的に悪を助長することになるのだと言っているのに等しいのです。悪は、無によってすべてにおいて得をすることになります。悪癖を捨て美德によって豊かになった人だけが、別の人生に目覚めるのを安心して待つことができるのです。スピリティズムは毎日私たちに示してくれる例を用いて悪人にとって、この人生から別の人生、未来の人生への入り口へと移っていくことがどんなに苦しいことかを教えてくれます（『天国と地獄』第二部 第一章）。

10、肉体はそれが受けた手当や遭遇した事故の痕跡をはっきりと保っている。同じことが魂にも言える。肉体に別れを告げると、魂はその性格の明白な形跡やその愛情、人生の間に残したあらゆる行動の跡を保つことになる。そのために、人間において起こりうる最悪の不幸とは、別の世界へ罪に覆われた魂を持って移って行くことである。あなたと同じように、カリクレスもボルックスも、ゴルギアスも、別の世界に行った時に有益となるような別の人生を歩まなければならないのだということを証明することはできない。これほどに多くの意見の中でも唯一揺らぐことのないことは、悪を働くよりも悪を受ける方がよいことであり、なによりも、私たちは外見においてではなく、内面において善の人とならなければならないということである。（牢におけるソクラテスの弟子との対話より）

ここに私たちは、今日においては科学によって裏付けされたもうひとつの重要な点を見いだすことができます。すなわち、浄化されていない魂は地上で持っていた考えや、傾向、性格、情熱を抱き続けると言うことです。悪を働くよりも悪を受ける方が価値があるという金言は、まったくキリスト教の考えと等しいではありませんか。同じ考えをイエスは次の表現で表しました。「誰かがあなたの頬を打つのであればもう一方の頬をも出しなさい」（第十二章七、八）。

11、二つに一つ。死が絶対的な破滅であるか、魂が別の場所へ移行するであるか。もしすべてが消滅するのであれば、死とは夢も見ず、自分自身の意識も無しに過ぎすまねな夜のようなものである。しかし、もし死が生きる場所の変更に過ぎず、そこに死者たちが集まるのであれば、そこで知人に会う喜びのなんと大きいことか。私の最大の喜びとはその別の場所の住人を近くで観察し、自分をなんであるかと唱える人たちのうち、誰がそれにふさわしく誰がふさわしくないのかを知ることである。しかし、今は私たちを別れる時が来た。私は死へ、あなた達は生へ。（判事に対するソクラテスの言葉）

ソクラテスによると、地上に生きた者は死後に出会い、お互いを認識しあいます。スピリティズムは、生きている間に人々がお互いに築いた関係は継続し、それゆえに死は人生の中断でも、終わりでもなく、継続性のある避けることのできない変遷であると示しています。その五百年後に広められたキリストの教えや、今日スピリティズムが広める教えをソクラテスとプラトンが知っていたとしても、彼らは別の言い方をすることはなかったでしょう。

偉大なる真実永遠で、進歩した霊がそれを地上に来る前に知り、地上にもたらしたのであると考えれば、それは驚くことではありません。すなわち、ソクラテスやプラトンのような当時の偉大なる哲学者たちは、後の時代において、まさしく他人に比べ崇高な教えをよりよく理解する条件を備えていたために、キリストの神聖なる使命にしたがって、そのために選ばれた可能性があります。

そしてついには、同じ真実を人類に教える役割を担う霊の集団に加わっていると考えることができます。

12、私たちに与えた損害が何であろうと、それに対して不義によって報いたり、誰かに悪を働いたりしてはならない。しかし、この原則を受け入れる者は少なく、彼らとそれを理解しない者たちとは、

疑いもなくお互いを蔑視することになるであろう。

悪を悪によって報いず、敵を赦すことを教える慈善の原則がここに書かれているのではないのでしょうか。

13、果実によって木を知るのである。いかなる行動もそれがもたらすものによって評価されなければならない。そこから悪がもたらされる時、それを悪と判断し、善の源となっている時には善であると判断する。

「果実によって木を知る」という金言は福音の中に繰り返し記載されている。

14、富は大きな危険である。富を愛する者は皆、自分自身をも自分自身に属するものをも愛さない。その者に属する物よりも慣れない物を愛しているのである。

15、最も美しい祈りも、最も美しい供え物も、神に同化しようと努力する徳の高い魂ほどに神を喜ばすことはできない。神々が私たちの魂よりも私たちの供え物に関心を抱くと考えたとしたらそれは重大な誤りである。そうしたことがおきたのならば、より責任を負うものが、都合良くなることができるようになってしまう。しかし、そうではない。言葉と行動において真に正当で公正な者だけが、神々や人々に対して負う義務を遂行する（第十章、七一八）。

16、魂よりも肉体を愛する者を悪習の者と呼ぶ。愛は自然のあらゆる場所に存在し、私たちを知性の行使を招いてくれる。天体の動きの中にも愛は見いだせる。その愛とは、自然を装飾する豊かな絨毯のようなものである。愛は花が咲き芳香が漂うところを飾り、そこに存在する。人間に平和を与え、海を鎮め、風を静まらせ、痛みを和らげるのも愛である。

一つの兄弟愛の絆によって人類を結びつける愛とは、自然の法としての宇宙の愛に関する、プラトンの理論の結論です。「愛は一つの神でも、一人の死すべき人間でもなく、一人の偉大なダイモンである」とソクラテスは言いましたが、つまり、宇宙の愛に生きる偉大なる霊の存在であり、そのことによって彼は罪人として罪を負わされたのです。

17、美德は教えられるものではない。神の賜としてそれを有する者に与えられる。これはほとんど、恵みについて教えるキリストの教えと同等です。しかし、美德が神の賜であるならば、それは特別な待遇であり、なぜそれがすべての者に与えられていないのか質問をすることができます。他方で、それが賜であるのだとすれば、それを有する者の功労は失われてしまいます。スピリティズムはより明解であり、美德を有する者は、それを連続した人生の中で自らの努力によって、少しずつ不完全性を捨てながら手に入れたのだと教えています。恵みとは、悪を追放し善を行おうという意志のある者に神が与える力のことなのです。

18、他人の欠点よりも、私たち自身の欠点に気がつくことが少ないのは、私たちすべてにあてはまる自然の傾向である。

福音には記されています。「あなたの隣人の目の中にあるおがくずを見て、自分の目の中にある杭が見えない」（第十章、九、十）。

19、成功しない医師がいるのであれば、それは病気のほとんどを治療するとき、肉体は治療しても、魂を治療していないからである。すべてが善い状況になれば、病人の一部が善くなることも不可能である。

スピリティズムは魂と肉体との関係の鍵を与え、一方が他方に対して絶え間なく作用していることを証明しています。これにより、科学の新しい道を開いています。いくつかの病気の真の原因を示すこ

とにより、それと戦う手段をより容易なものとし、肉体の営みにおける霊的要因の作用を科学が考慮するようになれば、医師達の失敗も少なくなることでしょう。

20、どんな人間も、その幼い時代から善よりも多くの悪を働く。
ソクラテスのこの文は、地上における悪の優勢のという重大な問題に触れています。その問題は世界の複数性や、人類のほんの一部が住む地球の運命についての知識なしには解決できないものです。この問題はスピリティズムだけが解決できますが、それは後の第一、二、三章に記されています。

21、知らないことについては知っているふりをしないほうが賢明である。この言葉は、基本的な事項さえも知らずに批判をする人々に差し向けられます。プラトンは、ソクラテスのこの考えを補足して次のように言いました。「まず最初に、可能であれば、言葉をより誠実に受け止めてみる。そうでないのであれば、彼らには気をかけず真実だけを求めればよい。私達自身を教化することに心をかけ、彼らは侮辱してはいけません。」

スピリティズムも、悪意の有無に関わらずそれに対して反論する者たちに対して、このように接しなければいけません。プラトンが、今日再び生きることになれば、自分の時代とほとんど同じ状態の物事を見て同じ言葉を使うことでしょう。また、ソクラテスもその霊に対する信念をあざける人々に出会うことになり、弟子プラトンと共に狂人として扱われるでしょう。こうした原則を唱えたために嘲笑の対象となり、後に不信心の罪に問われ毒を飲まされたのでした。確かに、多くの関心や偏見に取り組むことになる偉大な新しい真実は、戦いや殉教者なしには定着することはないのです。

(注1) エッセニア人によって書かれたと言われる『イエスの死』はまったくの偽りの書物であり、その唯一の目的はある考えを支えることに過ぎない。その著書自体の中に、それが現代に書かれたものであることが証明されている。

(注2) このファリサイ人の宗派を設立したヒレルと、その二百年後に生き、ヒレリズムとして知られる忍耐と愛の宗教的社会的原則を築いた同名のヒレルを混同してはならない。(FEB 一九四七)

第一章 私は法を破るために来たものではありません

三つの啓示—モーゼ、キリスト、スピリティズム。科学と宗教の同盟。霊たちからの指導—新しい時代

一、私が、法を破ったり、預言者たちを否定しに来たのだと思ってはなりません。それらを破りに来たのではなく、成就しに来たのです。・・・よって誠に申し上げます。法にあるすべてのものが完全に守られなければ、最後の一字一句まで守られずに残るうちは、天も地も変化することはありません。(マタイ、第五章、十七、十八)

モーゼ

二、モーゼの戒律は、二つの異なった部分からなっています。シナイ山で宣言された神の法と、モーゼによって定められた民の法、または規律の法です。一方は変化し得ないもので、もう一方は国民の習慣や性格に適合したものであり、時とともに変化します。神の法は次の十戒の中に定められています。

- 一、私は、あなた達を奴隷の住処であるエジプトから救った神であり、あなたたちの主である。私の前に他の神は存在しない。天の上にあるものについても、地上にあるものについても、彫刻された像や、地上の水の中にあるものについても、いかなる偶像も創ってはならない。それらを崇拜したり、それらに対して儀式を行ってはならない。
- 二、あなた達の神である、主の名前を無駄に唱えてはならない。
- 三、土曜の日を聖日とすることを覚えよ。
- 四、あなた達の父や母を敬い、あなた達の主である神が、あなた達の地上における長い人生を与えてくれるようにせよ。
- 五、殺してはならない。
- 六、姦淫を犯してはならない。
- 七、盗んではならない。
- 八、あなた達の隣人に偽証を行ってはならない。
- 九、あなた達の隣人の妻を求めてはならない。
- 十、あなた達の隣人の家や奴隷、家来、牛、ろば、また何であれ彼らに属するものを羨ましがってはならない。

あらゆる時代のすべての国にこの法律は存在し、それゆえその性格は神意を持つものであるのです。それら以外のものはすべてモーゼが定めた法で、騒々しく規律のないその民の間でエジプトにおいて奴隷となっていた時に染まってしまった偏見や悪癖を根絶する必要があると、民は恐れからその内容に従ったのです。その法の權威を示すためには、原始的な立法者が皆そうしたように、それらの起源が神にあるという意味合いを持たせることが必要でした。人間の權威は神の權威に頼る必要があったのです。しかし、無知な人々に強い印象を与えることができたのは、恐ろしい姿をした神の觀念のみで、まだ未発達な人々はその中に道徳感や真っ直ぐのな正義感を見出すことができたのです。モーゼの戒律の中のうちに含められた「殺してはならない。隣人を害してはならない」という部分は、根絶を義務として、矛盾させることができなかったことは明らかです。正しく言うならばモーゼの律法は、基本的に暫時的な性格を持つものだったのです。

キリスト

三、イエスは法を破るために来たものではありませんが、その法とは神の法のことです。その法を成就しに来た、つまり、その法を発展させ、その真なる意味を与え、それを人間の進歩の度合いにあわせ、適応させるためにやってきたのです。ですからこの法の中には、教義の基本である神と隣人に対する私たちの義務の原則が現れています。厳密に言うところのモーゼの法では、それらは内容にお

いても、表現においても、大きく変えられています。常に外見的な習慣や誤った理解をうち消そうとしましたが、それらを要約するには、以下の言葉以上に核心的なものとはできませんでした。「自分を愛するように、神をなににもよりもまして愛せよ。」また、その中にはすべての法と預言が存在すると付け加えています。「最後の一字一句まで守られずに残るうちは、天も地も変化することはない」という言葉によって、イエスは、神の法が完全に守られること、つまり、地上においてその法が完全に、その純粋さを保たれ、すべての広がりと重要性において実践されることが必要だと述べたかったのです。しかし、ある種の間人、もしくはある単一の民族だけの特権を形成するためにその法が宣言されたのであったとすれば、実際何の役に立つことができたでしょうか。神の子である人類の、すべてが、まったく区別されることなく、同じように配慮されているのです。

四、しかし、イエスの役割というのは、その言葉に排他的な権威を持つ単なる道徳的立法者となることではありませんでした。イエスの到来の預言を遂行することがその役割であったのです。イエスには、神から与えられた使命と、その霊としての特別な性格による権威があったのです。イエスは、真なる命というものが地上において起こるものではなく、天の国において生きる命がそうであることを人類に教えに来たのです。この天の国へと導く道や、いかに神と調和するか的手段を人々に教え、また人間の運命の実現のために訪れる事柄の流れの中に、その手段を感知することを人々に教えたのです。しかしながら、すべてを述べたのではなく、多くの点に関しては、イエス自身が述べたように、まだ理解されないであろう事柄について真実の種を蒔くにとどまったのです。すべてについて触れながらも、言葉の裏に隠した形で伝えました。その言葉のいくつかに隠された意味が学び取られるには、新しい考えや新しい知識によって、それを理解するのに不可欠な鍵がもたらされることが必要でしたが、そうした考えというものは、人類の霊がある程度の水準に成熟しなければ現れることができなかったのです。そうした考えの登場と発展のために、科学は大いに貢献する必要がありました。したがって、科学が進歩するために時間を与える必要があったのです。

スピリティズム

五、スピリティズムは霊界の存在とその様相、およびその物質界との関わりを、否定できない証明によって人類に示す新しい科学です。スピリティズムの中では、霊を超自然のものとして示すのではなく、反対にそれが自然界で絶え間なく働いてきた力の一つとしてとらえ、今日においても理解の不足から驚異と空想の産物として軽視されている、様々な霊現象の根源としています。キリストはこうした関係について多くの場面において言及しましたが、彼の述べたことの多くは理解されなかったり、誤って解釈されてしまいました。スピリティズムは、その助けによってすべてをより容易に解説するための鍵なのです。

六、旧約聖書の法はモーゼによって具現化されました。新約聖書の法はキリストによって具現化されました。スピリティズムは神の法の第三の啓示ですが、どんな個人にも具現化されていません。なぜなら、それは人間によって与えられた教えではなく、霊たちによって与えられた教えの結果であるからで、それは無数の媒介者の協力によって地上のあらゆる場所に伝えられた天の声なのです。別の言い方をすれば、それは集合的な存在であると言うことができ、それは霊界の存在者の集合によって形成され、その個々が人類に対して光のささげ物をもたらし、霊界を知らしめ、人類を待つ運命を教えてくれているのです。

七、キリストが「私は法を破りに来たのではなく、それを成就するために来た」と言うようにスピリティズムも「キリストの法を破るために来たのではなく、それを実行するために来たのです」と言うことができます。キリストが教えたことに反することは何も教えていませんが反対にそれを発展させ、補足し、たとえ話の形でしか述べられていなかったことを、誰にとっても明解な言葉によって解説します。予言された時にキリストが宣言したことを遂げるために、そして未来の出来事に対する準備をするためにやってきたのです。したがって、スピリティズムはキリストの業であり、その宣言の通り、地上における神の国を準備するための刷新の指揮をしているのです。

科学と宗教の同盟

八、科学と宗教は、人類の知性における二つの梃子の役割を果たしています。一方は物質界の法を明らかにし、もう一方は道徳の世界を示します。しかし、これらの法は同一の原理である神に矛盾することはできません。もし一方が他方を否定するのであれば、どちらかが必然的に誤っていることになり、もう一方が真実であることになりませんが、神は自らの創造物の破壊を意図しているはずがありません。これら二種類の考え方の間に存在すると考えられる不一致は、一方の他方に対する誤った観察や、過度の排他主義からくるものでしかありません。そこから衝突が生じ、不信や偏狭が生まれました。キリストの教えが完成されなければならない時代が到来したのです。その教えのいくつかの部分に掛けられたベールが取り去られなければならない時が来たのです。科学は排他的に唯物的であることをやめ、靈的要素を考慮に入れなければなりません。宗教は有機的な法や物質の普遍の法則を無視することをやめ、一方が他方を補い合う二つの力として、ともに歩み、相互に協力しなければなりません。その結果、宗教は科学に否定されることがなくなり、理性に従うものとなるために、事実による否定しようのない論理に対しては反対することができなくなり、不動の力を得ることになります。科学と宗教が今日までお互いを理解できなかったのは、それぞれが排他的な視点を持って対立し、お互いを拒絶していたからです。両者を隔てる空間を埋め、両者を近づけるための統合の絆が欠けていました。この統合の絆は、靈的宇宙を支配する法や、その物質界との関わりに関する知識の中に存在します。この法とは普遍の法であり、あらゆる存在や天体の動きを支配するものことです。こうした関係が経験により証明されると新たな光が生まれました。信仰は理性へと進み、理性は信仰の中に不合理を見出さず、かくして唯物主義は打破されたのです。しかしすべてにおいてそうであるように、一般的な動きによって引っ張られて行くまで、それに遅れる人々が存在します。そうした人達はその考えについて行こうとせず、それを圧迫し、それに対して抵抗します。今起こるすべての革命に霊たちが働き操作しています。十八世紀以上続いた一つの準備を経て、その実現が到来し、人類の生活における新しい時代を画すことになるのです。その結果を予見することは容易です。社会関係に避けて通ることの出来ない変革を引き起こすことになり、それに対して誰も抵抗することはできなくなるでしょう。なぜならそれは神意の内に存在し、神の法である進歩の法から生ずる出来事であるからです。

霊たちからの指導—新しい時代

九、神は唯一であり、そのことをヘブライ人のみならず、多神教の民にも知らしめるため、その使命を託されて神によって送られた霊がモーゼです。ヘブライの民は、モーゼや預言者たちによって神の啓示を受けることで神に対して仕えた道具であり、この民族が経験した苦しみは、一般の人々の注意を呼び、神意を人類の目から隠していたベールを取り除くことを目的としていたのです。モーゼを仲介して与えられた神の戒めは、広義におけるキリストの道徳の種を含んでいます。ところが、それらをまったく純粹に実行してもその意味が理解できなかったために、聖書の解説はその意味を狭めています。しかし、そうであるからと言って神の十の戒めが、人類が通らねばならない道を明るく照らす灯台としての輝かしい姿を失うわけではありません。モーゼが教えた道徳は、更正をうながす人々の当時の段階には進度に適切なものだったのです。こうした人々は、魂の完成度に関おいては半原始的で、生贄を使わずに神を崇拜したり、敵を赦すといったことを理解することができませんでした。彼らの知性の遅れは物質的観点から見たその芸術や科学においても、道徳性においても見られ、完全に靈的な宗教の支配に改められてはいませんでした。ヘブライ人達の宗教がそうであったように、彼らには半物質的な形で見せつけられることが必要であったのです。神の考えが霊たちに話しかけると同じように、生贄は彼らの感情に訴えました。キリストはより純粹でより崇高な道徳、キリストの福音の創始者であり、それは世界を革新し、人類を兄弟として近づけるものです。人類のすべての心の中に慈善と隣人への愛を芽生えさせ、人類の間に共通の連帯感を生み出すものです。その道徳は、いずれ地球を変革し、今日そこに住む霊たちよりも優れた霊たちのすみかとするのです。自然界を支配する進化の法は成就し、スピリティズムは人類の前進のために神が用いる梃子の役割を果たすのです。神の心の中にある進歩が実現するために、様々な考えが発展しなければならない時がやってきました。自由の観念やその先駆けとなった考え方が通った道と同じ道を辿ることになります。しかし

この発展が戦いなしに生じると考えてはなりません。そうです、そうした考えが成熟するためには動乱や議論の対象となることが必要で、その結果大衆の注意を引くこととなります。一度それが達成されたなら、道徳の神聖さと美しさが霊達の心を動かし、人々は永遠の幸せの扉を開く未来の生活へ鍵を与えてくれる科学を受け入れることとなります。モーゼは道を開き、イエスはその事業を継続させました。スピリティズムはそれを完成させることとなります。(あるイスラエルの霊、ミュルース 一八六一)

十、あるとき神は、その尽きぬ慈悲により、真実が闇を追い払うのを人類が目にすることを許しました。その日、キリストが到来しました。生きた光が去り、再び闇が戻ってきました。真実か闇かの選択肢が与えられた後、世界は再び道に迷いました。すると旧約聖書の中の預言者たちのように、霊たちがあなた達に注意を促すために話し始めました。世界はその根本において動揺しています。雷が鳴り響いています。覚悟をして下さい。スピリティズムは自然界の法そのものに則し、神の命令に従うものであり、神の命令に従うものはすべて偉大で有益な目的を伴っていることを確信して下さい。あなた達の世界は迷っています。科学は道徳を犠牲にして発展し、あなた達を物質的な豊かさへと導きましたが、闇の霊たちが広まる原因となりました。キリスト教徒達が知るように、心と愛は科学と共に歩まねばならないのです。ああ、十八世紀が過ぎ、多くの殉教者たちが流を流したにも関わらず、キリストの国はまだ到来していません。キリスト教徒達よ、あなた達を救おうとしている師の元へ戻ってください。信じ愛することを知る者にとってはすべてが容易です。愛はそうした者を言い表しようのない喜びで満たします。親愛なる子供達よ、この世は混乱しています。善霊たちはあなた達に何度も言います。嵐の訪れを告げる突風に身をかがめ、風によって地に倒されないようにして下さい。つまり、予期せず夫が戻ってきて打たれた、愚かな処女達と同じめにあわないように準備をして下さい。準備が進められている革命とは、物質的革命というよりも精神的な革命です。神のメッセンジャーである偉大なる霊たちは、信心の風を吹き、明晰で熱意にあふれた労働者であるあなた達すべてが、自分の謙虚な声を聞くようにします。あなた達は砂の粒ですが、砂の粒無しには山は存在しないのです。「私たちは小さい」というだけではこと足りないのです。一人一人に使命があり、それぞれの仕事を与えられています。蟻達はその共同生活の巣をつくり、とるに足らない微生物は大陸を作り上げているではありませんか。新しい十字軍の始まりです。宇宙の平和の使徒達よ、戦争によってではなく、現代の聖ベルナルドとして、前を見つめ前進して下さい。世界の法とは進歩の法です。(フェヌロン、ポアチエ、一八六一)

十一、聖アウグスティヌスはスピリティズムの最も偉大な伝道者の一人です。ほぼすべての場所にその姿を現わします。その理由は、この偉大なるキリスト教哲学者の生涯の中に見ることができません。彼は教会の創設者たちの集団に属しており、そこから彼のキリスト教への忠誠とその強固な支えを得ています。他の多くのものがそうであるように、彼は多神教から去り、より正確に言うならば、深い不信仰から真実の輝きに導かれました。過度の贅沢に身をまかせていると、その魂の中に特別な響きを感じ、その響きは彼を我に返らせ、幸せとは儂く無気力をさそう快樂の中ではなく、別の所に存在しているのだと言うことを理解させたのです。そしてついにダマスカスへ向かう道の途中「サウロよ、サウロよ。なぜ私を追うのですか」と言う聖なる声を彼も聞かされたのです。「神よ、神よ。お赦してください。信じます、私もキリスト教徒です。」そしてそれ以来、福音を支える最も強い者の一人となりました。この輝かしい霊が残した注目すべき告白を読むと、その性格と同時に、聖モニカの死後に語った預言的な言葉を知ることができます。「私は、私の母親が私に会いに来て、忠告をくれ、未来の生活において何が私たちを待ち受けているのかを明らかにしてくれることを確信しています。」なんと大切な教えがこの言葉の中にあることでしょうか。なんと激しく、来るべき教義の予告が響いていることでしょうか。こうした理由によって今日、古来より予感された真実を布教する時が到来したのを見て、熱心な布教者となり、彼を呼ぶ者すべてに答えるために姿を様々なところに現すのです。(聖パウロの弟子、エラストゥス、パリ、一八六三)

注一聖アウグスティヌスは積み上げたものを崩すためにやってきたのでしょうか。もちろんそうではありません。その他の多くの者がそうであるように、彼は人間として生きていた間見ることはできなかったものを、霊の目で見ているのです。魂は解放され、新しい光をかいま見て、以前理解していな

かったことを理解したのです。新しい考えがいくつかの金言の本当の意味を彼に示すことになりました。地上においては、そのとき持ち合わせていた知識にしたがって物事を評価していました。しかし、新しい光が彼を照らすと、それらをより賢明に評価できるようになりました。そのために、それまで霊に対して抱いていた考えや、反対者の論理に対して浴びせていた非難を捨てなければならなかったのです。キリスト教の純粹さのすべてが現れた今日、キリストの使徒であることを放棄することなく、彼はいくつかの点について、生きていた時と違う方法で考えることができるのです。自分の信心を否定することなく、スピリティズムの布教者となり、予言されたことを達成しに来たのです。スピリティズムを布教することにより、現代において私たちが記録をより適切で論理的に解釈できるように導いてくれるのです。同様の立場にある他の霊たちにも同じ事が起きています。

未来における生活—イエスの威厳—指導霊たちからの指導—地上における王位

一、ピラトは再び宮殿に入ると、自分の前にイエスを呼んで、尋ねた。「おまえはユダヤの王なのか。」イエスは答えた。「私の国はこの世のものではありません。もし私の国がこの世のものであったとしたら、人々は戦って、私がユダヤ人の手に渡ることを阻止したでしょう。しかし、私の国はまだここではありません。」するとピラトは言った。「おまえは王か。」イエスは答えた。「あなたの言う通り。私は王である。私がこの世に来たのは真実の証しをするためです。真実に属する者は私の声を聞く。」（ヨハネ第十八章三十三、三十六、三十七）

未来における生活

二、これらの言葉によって、イエスははっきりと未来における生活について触れていますが、それはいかなる場合においても、人類がいずれ持つことになる目標であり、地上における人間の最大の関心の対象となるべきものであるとしています。それについての金言はこの大きな原則から発していません。未来における生活がなければ、イエスの道徳上の教訓のほとんどは、どんな根拠も存在しないことになってしまい、そのことから、未来における命を信じない者たちは、イエスが現在の生活についてのみ語っているのだと考え、その教えを理解できずに、無益なものだと考えたのです。したがって、この教義はキリストの教えの中心軸であり、そのために、本書の初期の章のうちに挿入されました。そしてこの教えは人類すべての目標とならなければならないのです。この教えだけが、地上における生活の上で生じる不平等を正当化し、神の正義に基づいて明かしてくれるのです。

三、ユダヤ人達が未来における生活について抱いていた考えとは、単に不明確なものでしかありませんでした。天使を信じていましたが、それらは創造主によって特権を与えられた存在であると考えていました。しかし、人類がいつの日にか天使となり、その幸せを分かち合うことができるようになるのだということは知りませんでした。彼らによると、神の法の遵守は、地上の富や自分たちの国の優勢、敵に対する勝利によって報われると考えられていました。災害や敗北は、それらの法を破ったことによる罰であったのです。モーゼはなによりもまず、この世の物事に心を動かされる必要のあったその無知な牧人達には、それ以上のことを伝えることはできませんでした。時が過ぎ、イエスは、神の正義が支配する別の世界があることを示しました。そしてイエスはこの世界を神の戒めを守る者達に約束し、そこで善き人々はその報いを受けることができるとしたのです。そこがイエスの支配する国なのです。この地上を後に戻って行くその国に、イエスの栄光が存在するのです。しかし、イエスは当時の人類の状況にその教えを合わせ、完全なる光を彼らに与えても、理解されず、当惑させてしまうだろうと察し、そうすべきではないと考えました。確かにイエスは、未来における生活をあくまでも原則として示し、その作用から誰も逃れることができない自然の法なのだと断言しました。だから、すべてのキリスト教徒は必然的に未来における生活を信じます。しかし、多くの人々がそれに対して持つ考えは曖昧で、不完全であり、それゆえ多くの点において誤っています。多くの人々にとって、それは単なる信仰箇条以上のもではなく、絶対的な確信を欠き、そこから疑問と不信心が生まれます。この点についてスピリティズムは、その他の多くのものと同様に、キリストの教えを補うために、人類が真実を学ぶのに十分成熟した時に登場したのです。スピリティズムによって未来の生活は信仰の単なる一箇条でも単なる仮説でもなくなります。それは事実が物語る、物質的な現実となります。なぜなら、未来の生活のすべての側面を、すべての出来事において描写する者は、自らそれを目撃した証人達であるからで、そのためにこの事柄に対するいかなる疑問を抱くこともできないばかりか、ある詳細な描写を読むことによって、ある国のことを誰もが想像できるように、普通の知性にとってその生活についての真の姿を想像することを可能にさせてくれるからです。そこでの未来の生活の描写はあまりにも細かく説明されており、彼らがそこで幸せなのか、不幸なのか、彼ら自身の生活がどうなのか、その状況はあまりに合理的で、ここにいる私たち各々は、否応なしにそれがそれ以外にあり得ないことを認め、自分に言い聞かせることとなり、それが神の真なる正義であることを明らかにするのです。

イエスの王位

四、イエスの国がこの世のものではないことを皆理解していますが、しかし、地上においてもイエスには王位があるのではないのでしょうか。王という称号に一時的な権力の行使が伴うとは限りません。この称号は、いかなる考えによるのであれ、その素質によって、その階級の第一等の頂点に昇った者で、その時代を支配し、人類の進歩に影響を与える者に、異議のない同意によって与えられます。こうした意味において、私たちは、哲学、芸術、詩人、作家等の「王」または「王子」ということがあります。こうした個人の功績からくる王座や、子孫によって神聖化された王座とは、多くの場合、実際の王冠が持つ王位よりも優勢なものとして映ってはいないのでしょうか。前者の王座が消滅しえないものである一方、後者の王位は盛衰の対象となります。前者を受け継いだ世代はそのことをいつも賞賛しますが、もう一方に対しては、しばしばののしることになるからです。地上での王位は命とともに終結します。道徳的な王位は永続してその力を持続し、その死後においても支配します。こうした点でイエスは、地上において権利を与えられた王よりも権威を有していると言えないのでしょうか。ピラトに対して「私は王です。しかし私の国はこの世のものではありません」と言ったのはこうした理由があったのです。

視点

五、未来における生活に対する明確で細かな考えは、未来に対する揺るがぬ確信を形成し、その確信は人間に、彼らをとりまく地上における生活に対する視点を完全に変わらせたため、人類の道徳化に多大な影響を引き起こします。その思考において自分を無限の霊的な生活に置くことができる者にとっては、肉体を持つ生活は単なる一過性もの、不幸な国における一時的な滞在となります。その生活における盛衰や混乱は、それらが今しか続かないものであり、その後にはより幸せな状態がやってくることを知るために、忍耐を持って堪え忍ばねばならない出来事に過ぎなくなります。死はもはや恐れをもたらすものではなく、それは虚無に対して開かれた扉ではなく解放に通じる扉となり、そこを流刑者たちは平和と至福の家に入っていけることになるのです。今いる場所での滞在が永遠ではなく一時的であることを知っているため、人生の心配事に対する関心を抱かず、それが霊的な平静をもたらす、そのことは悲哀の多くを取り除くこととなります。未来の生活を疑うという単純なことから、人間はそのあらゆる考えを地上における生活に差し向けます。地上における富以上に貴重な富を見つけることができず、自分のおもちゃ以外の何も目に入らぬ子供のようになります。そして彼らにとって本物として映る唯一の富を獲得するために、どんなことでも行います。そうした富のほんの少しでも失うものなら、それは苦悩をもたらす、間違い、失望、満たされぬ野心、自分が犠牲となる不正、傷つけられた自尊心や虚栄心といった数々の苦痛が、人生でいつまでも続く苦悩と化すのです。このように、彼はいつも真の拷問を自らに課していることとなります。物質世界こそが自分が実際にある場所であると考え、その場所にその視点を置くために、自分の周りにあるものがその視野全てを占めることとなります。そうした目には、自分のもとに訪れる悪や、他の者を動かす善等が、大きな重要性を持つように見えることとなります。都会の中にいる者にはすべてが大きく見えます。記念碑のような高い場所へ上った者も同様です。しかし、彼が山に登ると、人も物も小さく見えるようになります。未来の生活に視点を置き、地上の生活に向かう人にはこうしたことが起きます。人類は、天にある星と同じように、無限の広がりの中で見分けがつかなくなります。すると蟻塚の上にいる蟻のように、大きな物も小さな物も混同してしまっていることに気づきます。無産者も主権者も同じ背丈であることがわかり、これらのはかない生き物たちが、彼らをほとんど昇進させることのない、あまりにも短い間しか続くことのないその居場所を勝ち取るために、どれだけ疲労してしまっているかを見て悲しみます。そして、地上の財産に与えられた重要性とは、いつも未来の生活への信仰にまったく反比例するものだと考えるようになります。

六、もしすべての者がこのように考えるようになっては、誰も地上のことに気を取られなくなってしまい、地上のものはすべて危険にさらされてしまいます。しかし実際にはそうはなりません。人間は本能的に快適な生活を求め、その場所に短時間しかいないことが確実であったとしても、そこに最

も良い状態で、もしくは可能な限り悪の少ない状態でいようとします。手に棘が触れたとき、それに刺されないようにとその手をどけない人はいません。快適さへの欲求は人間にすべてを改善させることを強要しますが、それは自然の法の中にある、進歩と保存の本能によるものです。故に人間は必要性や嗜好、または義務によって働き、このようにして神の意に叶うことができ、また神もそうした目的のために人類を地上に送ったのです。単純に言えば、未来に心を託し今日に対しては必要以上に關心を持たない者は、失敗しても、自分を待ち受ける未来について考えて、容易に自分を慰めることができるのです。神は地上の楽しみを非難することはありません。しかし魂に損害を与えるまでこの楽しみにおぼれることは非難します。イエスの言った次の言葉を自分自身に対して応用させることができるものは、こうした乱用を予防することができます。「私の国はこの世のものではありません。」未来の生活を自分のこととして考えることができる者は、少額を失うことに動揺せぬ金持ちのようです。地上の生活にばかりに考えを集中させる者とは、持つものをすべて失い途方に暮れてしまう貧乏な人のようです。

七、スピリティズムは思考をひろげ、新しい地平線を切り開きます。狭苦しく小さな、現世ばかりに集中した視野は、地上に住む一瞬だけを唯一の儂い未来の基軸と考えさせますが、それとは違い、スピリティズムは現世というものが、調和のとれた壮大な創造主の一連の業の一端に過ぎないのだということを示してくれます。ある同じ存在、同じ世界に住むすべての存在、すべての世界のあらゆる存在の生活を変化させる連帯関係を示してくれます。それにより、宇宙全体の兄弟愛の存在の理由と基礎が与えられるのですが魂は一人一人の肉体が生まれる時に創造されるのだという教義では、すべての存在がお互いに知らぬ者同志だということになってしまいます。ある一点を考慮にいれさえすれば、一つの全体の各部を結びつけるこの連帯感とは、一見説明しようがない事柄をも解説することになります。キリストの時代、人類はこの全体について理解することができなかつたに違いなく、そのためにイエスは、そのことが他の時代に知られるようになるようにととっておいたのです。

霊たちからの指導 地上における王位

八、「わたしの国はこの世のものではありません」とイエスが言われたことの本当の意味を、いったい誰が私以上に理解することができるのでしょうか。私は地上で暮らす間、自尊心によって自分を見失っていました。地上での王位というものが、こちらでは何の役にもたたないということ、女王であった私が言っているのです。地上の国から、私はこちらに何を持って来ることができたでしょうか。何一つ持って来ことはできませんでした。それどころか、地上の墓にさえも持って来ることができなかったということは、このことを理解させてくれる痛ましい現実でした。人間達の間で女王でいる者は、天の国へ行っても女王であり続けるものだと思っていました。しかし、何という誤解であったことでしょうか。最高なる者として迎えられる代わりに、私より上に、はるか上に、地上では高貴な血を引いていないからといって、身分の低い者として軽んじていた人たちを見た時の恥ずかしさ。ああ、やっとなるとき、人類の高慢さと、地上で人類が貪欲に求める「高い地位」のつまらなさを知ることができました。こちらの国に必要なものは、献身、つつましき、慈善、すべての人に対する慈悲深さです。あなたが地上で何であったか、どんな身分でいたかは問われません。あなたがどのような善を働いたか、どれだけの涙を乾かしてあげることができたかが問われるのです。ああ、イエスよ。あなたの国はこの世のものではないと言われました。それは、天にたどり着くには苦しまなければならぬからです。そして、この世の王位など持つていくことはできないからです。人生の苦しい道のりが天へ導いてくれるのです。だから、花の中にはではなく、とげの中に道を求めなければならないのです。人類は、それをあたかも永遠に自分のものとするかのように、地上の富を追いかけます。しかし、こちらにはそのような幻想は存在しないことを知り、こちらの国の扉を開く唯一の、確実に永続するものをそれまで軽んじて、影ばかりを追いつけていたのだということにすぐに気付くのです。天の国の王位を得ることのできなかつた者を哀れんで下さい。あなた達の祈りによって、なぜなら祈りは人を神に近づけ、地上と天を結ぶものだからです。どうかそのことを忘れないで下さい。(あるフランスの女王、ルアール、一八六三)

第三章 私の父の家には多くの住処があります

死後の世界における魂の様々な状態 霊の住む世界の様々な分類 地球の運命 地球上の惨めさの原因—霊たちからの教え—優れた世界、劣った世界—試練と報いの世界—更正するための世界—世界の進歩

一、あなた達の心を乱してはなりません。神を信じ、私のことも信じて下さい。私の父の家には多くのすみかがあります。もしそうでなかったとしたら、私はそのことをあなた達に言っていたでしょう。私はその場所を準備しに行きます。私が行き、あなた達の場所を準備した後、再び私は戻ってきて、私がいるところにあなた達もいることができるように、あなた達を私とともに連れていきます。

死後の世界における魂の様々な状態

二、父の家とは宇宙のことです。様々なすみかとは、無限の宇宙の中で霊たちに生まれる場所を提供する、霊たちの段階に応じて存在する世界のことです。これらのイエスの言葉は、世界の多様性とは別に、死後の世界に存在する霊たちの幸運、または悲運な状態に関してもあてはめることができます。物質への執着から解放されたか、あるいはある程度浄化しているかどうかということによって、その霊の置かれる状況、そこでの物事のありさま、そこで感じる事、そこで所有する感覚が霊によって無限に違ってきます。ある者が生前住んでいた場所から離れられない一方で、別の者たちは宇宙の色々な世界を行き来します。罪のある霊たちが闇の中で過ちを犯す一方で、至福を得た霊たちは光輝く明るさと無限なる神の崇高な業を享受することができます。結局、悪は後悔や苦しみに悩まされ、慰安を受けることもなく、その愛情の対象となっていた者たちから引き離され、多くの場合孤立してしまい、道徳的な苦しみに悲しむことになり、正しい者は愛する者たちとともに生活し、表現し難い幸せの喜びを享受することになります。だから、場所も示されていなければ、その区画もされていませんが、そこには多くのすみかがあることになるのです。

霊の住む世界の様々な分類

三、霊たちによってもたらされた教えから、様々な世界の状況は、そこに住む霊たちの進歩または劣性の度合いによってお互いに大きく違っていることがわかります。それらの世界の中には、まだ地球よりも、道徳的にも物質的にも劣っている世界があります。他には、私たちの世界と同じ分類の世界も存在します。また、すべての点において他の世界よりも優れた世界も存在します。劣った世界では、存在はすべて物質的であり、感情がすべてを支配し、道徳的生活はほとんど存在しません。この世界は、進歩するにしたがって物質の影響が減少しますが、そのようにより進んだ世界においての生活は、いわばほとんど霊的であるということができます。

四、中間に位置する世界には善と悪とが混在しており、そこに住む霊たちの持つ進歩の度合いによって、どちらかがその世界を支配することになります。様々な世界を絶対的に分類することはできませんが、その世界の状態とその世界が持つ運命にしたがって、またその世界の最も目立つ特徴をもとに、一般的に次のように分類することが出来ます。人間の魂の初期の肉体化のための原始的な世界、悪を克服するための試練と報いの世界、更に試練に立ち向うべき魂が新しい力を吸い込み、戦いの疲れを癒す更正の世界、善が悪に勝る幸運の世界、浄化した霊たちの住む善だけが君臨する神の世界、です。地球は試練と報いの世界の分類に属し、だからこそ、そこにはこれほどまでの苦しみを抱えた人々が住んでいるのです。

五、ある世界に生まれてきた霊は、いつまでもそこに留められるのでもなければ、その世界の中で、完成するまで実現しなければならぬ進歩のステップのすべてを経るわけでもありません。霊たちは、一つの世界においてその世界が与える進歩の度合いを達成すると、より進んだ世界へと進んで行き、それを純粋な霊の段階に至るまで繰り返して行きます。多くの様々な滞在地が存在し、それぞれにおいて既に達成している段階に適した進歩の要素が霊たちに提供されるのです。彼らにとって

は、より進んだ世界へ昇ることが報酬であるように、ある不運な世界での滞在が延長されることや、悪に固執する限り出ることのできない世界よりもさらに不幸な世界へ追放されることは、罰となります。

地球の運命—人類の惨めさの原因

六、多くの人々が地球上にこれほど多く存在する悪意や粗雑な感情、あらゆる種類の惨めさと病に驚き、人類とはとても悲しいものだ結論づけてしまいます。こうした狭められた視野から下された判断は、全体に対しての誤った考えを彼らに与えてしまいます。地球上には人類のすべてが存在しているのではなく、人類のほんの一部しかいないのです。実際、人類という種は、宇宙の無数の天体に住む、理性を持った存在すべてを含めて意味するのです。では、これらの世界に住む人口に比べ、地球上の人口とはどんなものでしょうか。ある大きな国に比べた、小さな村にも満たないでしょう。地球の運命と、そこに住む人々の本質を知るならば地球上の人類の物質的、道徳的状況に何も驚くようなことはありません。

七、ある大きな町の郊外の最も卑しく最低な地区の住人によって、その町すべての住人を判断してしまうのは誤った考えとなります。病院には、病気の人や、不具の人しかいません。刑務所には、あらゆる醜行、悪徳を見ることができます。不健康な地区では、その住人の大半は青白く、やせ細り、病的です。それでは、地球を郊外の地区、病院、刑務所の、すべてが同時に存在するところだと考えてみれば、なぜ苦しみが喜びに勝って存在するのかを理解することができます。健康である者を病院へ送ったり、悪いことをしていないのに刑務所に送ったりはしません。また病院や感化院は歓喜のための場所とはなりません。しかし、ある町の住人のすべてが病院や刑務所にいることがないように、地球上にも人類のすべてが存在しているわけではありません。そして、病気が治ると病院を退院し、懲役を済ませば刑務所から出所するのと同じように、人類も道徳的な病を治癒した後には地球を去ることになるのです。

霊たちからの指導—劣った世界、優れた世界

八、劣った世界と優れた世界の性格とは絶対的なものではありません。というよりも、大変に相対的なものです。ある世界が劣っているか、優れているかということは、進歩の段階の中でその世界の上または下に存在する世界と比べた場合にのみ決まることです。地球を例として、劣った世界の住人を、私たちの天体の原始的な時代の痕跡である原始的な人種や、いまだ私たちの間に存在する野蛮な国々の人々に例えてみれば、その劣った世界の状態がどのようなであったか考えることができます。遅れた世界では、そこに住むものはある意味において原始的で、人間の形をしていても、美しさは存在しません。彼らの本能は、ほんのわずかの感情が、善意、正義と不正の区別すらをも持つまでに和らげられてはいません。彼らの間では粗暴な力が唯一の法です。産業も発明も欠けているため、食物を手に入れることに人生を過ごします。しかし神は、そのいかなる創造物をも見捨てることはありません。知性の闇の底には、ぼんやりと神の存在を感じさせるものが潜在的に横たわっています。この本能は、彼らの間にお互いの優劣を作り出し、より完全な人生へと昇っていく準備をするために充分なのです。というのも、彼らは墮落した存在なのではなく、成長しつつある子供であるからです。劣った段階と、より進んだ段階との間には、無数の段階が存在しますが、物質から解放されて、栄光に光輝く純粋な霊たちを見て、彼らもかつてはこうした原始的な霊たちであったことを知ることは、人間の成人を見て、その人が胎児であったことを思い出すのと同じように困難なことです。

九、優れた段階へ到達した世界においては、道徳的・物質的生活の条件は地球上の生活とは非常に違っています。どの場所においてもそうであるように、そこでも体は人類と同じ形をしています。その形はより美しく、完成され、何よりも浄化しています。その体は、地球上でのような物質性をまったく持っていないので、あらゆる肉体の必要性に束縛されることもなければ、物質に支配されていることによって生じる病気や肉体の老化に冒されることもありません。その知覚はより純粋になるため、地上の世界では物質の粗暴さが妨げとなっていた感覚をもとらえることができます。体の特殊な軽快さは、容易で敏速な移動を可能にします。地面の上を重々しく体を引きずるのではなく、正しく

言うならば、意志以外の何の力も加えることなしに、表面を滑っていったり、その環境の中を水平移動して行き、それは昔の人々が極楽浄土における死者の靈魂を想像した姿や、天使達に表される姿と同じです。人類はその意志によりその過去の人生の面影を残すことができ、それらは生前において知られていた姿によって出現します。しかし、そのとき神の光に照らされたり、内面の高尚な性格は形を変容させています。苦しみや感情によって打ちひしがれ青ざめた顔つきではなく、画家達が聖人の後光や光輪として描いたように、知性と生命が輝いています。既に多くの進歩を遂げた霊たちに対して物質はわずかな力しかもたず、体は非常に早く発達し、幼年期はほとんどありません。苦しみや心配から免れ、その人生は地上のものよりも均一的でずっと長いものです。第一に、寿命はその世界の段階に比例します。死が肉体の分解という恐怖をもたらすことなどまったくありません。死は、恐ろしいどころか、幸せな変容と考えられ、そのためそこでは未来に対する疑いは存在しません。そこで送る人生の間、魂はうっとりとした物質に束縛されることはなく、心を広げ、ほぼ永久にその魂を自由にさせてくれる光明を享受することができ、そのことはその魂が自由に思考を伝達させることを可能にします。

十、こうした幸運な世界では、人々の関係はいつも友情にあふれており、誰も野心によって妨害されたり、隣人を隷属化しようとしたりすることもなく、そこでは戦争が起きることなどありません。奴隷主と奴隷の関係が生まれ持った特権などは存在しません。ただ知性的・道徳的優位性のみが条件の違いを生み、優越を与えます。権威はいつもその価値のある者だけに与えられ、いつも正義によって行使されるため、すべての人々の敬意を受けることになります。人々は他人の上に昇ろうとはせず、自らを完成させることによって自分の上に昇ろうとします。その目的は、純粋な霊の分類に向かって駆け昇っていくことで、この欲求は彼を苦しめることはなく、高貴な大志となって、純粋な霊たちと同様になろうと熱心に勉強するように導きます。そこでは繊細に高められた人間的感覚は増し、浄化されています。憎しみや、つまらない嫉妬や、低俗な羨みというものを知りません。すべての人々を愛と同胞愛の絆がつなぎ、より強い者は弱い者を助けます。大小に応じて獲得した知性という財産を所有しています。しかし、誰も必要な物が不足することによって苦しむことはなく、誰も償いのために存在しているとは考えていません。一言で言うならば、そのような世界に悪は存在しないのです。

十一、あなた達の世界では敏感な善を知るために悪が必要です。光をたたえるために闇が必要です。健康の価値を知るために病が必要です。別の世界ではこのような対立は必要ありません。永遠の光、永遠の美、永遠の魂の平和が永遠の喜びをもたらす、物質的な生活の苦しみによって妨害されることはなく、また、そこには悪が近づくことができないため、悪との接触によって動揺することもあります。そうしたことを人間の霊が理解しようとするのは非常に困難なことです。人間は地獄の苦しみは大変巧みに描きましたが、天における喜びを想像することはできませんでした。なぜでしょうか。それは、人間が劣っているため、苦しみや惨めさしか経験をしたことがなく、天の明るさを予感することがなかったからです。つまり、知らないことについて語ることはできないのです。しかし、人間が昇進し、浄化して行くにしたがって、地平線は延び、自分の後ろに存在する悪を理解したように、自分の前に存在する善を理解することになります。

十二、しかし、神はそのどの子に対しても不公平を働くことはなく、よって幸福の世界とは、特権を与えられた天体ではありません。そのような世界に到達するために、神はすべての者に対して同じ権利と容易さを与えます。すべての者が同じ場所から出発し、優れたものが他人よりも恵まれるということはありません。最高の分類は誰にも到達可能なのです。ただ、より早く到達できるか、活動することなく何世紀も人類のぬかるみにとどまるか、人間はそれらを労働によって征服しなければならないのです。（優秀な霊たちからのすべての指導の要約）

試練と報いの世界

十三、あなた達が住む世界を見回してみればわかるのですから、未だ知らぬ試練の世界について何を言えばいいのでしょうか。あなた達の中に住む優れた知性の数は、地球が、創造主の手元から離れ

たばかりの霊たちが生まれてくる、原始的な世界ではないことを示しています。彼らが身につけている生まれつきの性質は、彼らが既に存在し、ある程度の進歩を遂げていることの証です。しかし、無数に悪癖をおかしがちであることは、道徳的な不完全性のしるしです。あなた達は人生の惨めさや苦しい労働を通じ、より幸せな惑星へと昇って行くまで、そこで過ちを償うためにこそ、神はあなた達を骨の折れる世界へ送ったのです。

十四、しかしながら、地球上に生まれるすべての霊が、報いのためにそこへ行くのではありません。未開と呼ばれるような人種は、まだ幼年期を脱したばかりの霊たちによって構成されており、より進んだ霊たちと接触することによって発展していくために、彼らは、いうならば教育の講習を受けているのです。次に半文明化した人種は、進歩の途上にあるこうした霊たちによって構成されています。彼らは、ある意味で地球の先住民族であり、そこから何世紀もの長い期間を要しながら、少しずつ進歩していき、そのうちある者は既に、より高尚な人々と同じ知性的な完成に到達しています。報いを行う霊とは、いうならば、地球にとっては外来の人々です。既に他の世界で生活したことがあり、そうした世界において悪に固執し自ら悪を行い、善の妨げとなったために追放されたのです。遅れた霊たちの間に過ごし、既に獲得している知識の種と発達した知性を用い彼らを進歩させる任務のためにある期間の間、段階を下げられて生まれなければならなかったのです。そのため、罰せられる霊たちは、より知性的な霊たちの間に存在するのです。だからこそ、こうした人種にとって、人生の不運はそれほどまで苦く感じられます。彼らの内面はより敏感であり、道徳感が鈍い原始的な人種よりも、支障や不快によって試されるのです。

十五、結果的に、地球は無限に多様化した報いの世界のうちの一つを提供していますが、そうした世界を明らかにしてみると、共通した特徴として、神の法に対し反抗的な霊たちの追放の場所となっています。これらの霊たちは同時に、そこで人間の不道徳と自然の残酷さと戦わなければならない、それはまた心と知性の質を発展させる二重の険しい労働なのです。このように、神はその善意によって、罰そのものが霊の進歩をもたらすようにしているのです。（聖アウグスティヌス、パリ、一八六二）

更生の世界

十六、空の青い天井の中に輝く星のなかには、神によって試練と償いのために差し向けられた、あなた達の世界と同じ様な世界がどれだけあるのでしょうか。しかし、より惨めな世界も、より良い世界も存在すれば、更生の世界と呼ぶことができる、移り変わりにある世界も存在します。同じ中心の周りを移動する惑星の渦は、それぞれが原始的な世界、追放の世界、試練の世界、更生の世界、幸福の世界を引きずっています。すでに私たちは、善と悪についてはまだ無知ではありながらも、その自由意志によって、自分自身を支配する神へ向かって歩む可能性を持った、生まれたばかりの魂が送られる世界について話しました。また、善を行うために広い能力が魂に与えられることをあなた達に明らかにしました。しかし、ああ、気力を失ってしまう者よ。それでも神はそうした霊たちが抹殺されてしまうことは望まず、生まれ変わりを重ねることによって浄化、更生し、彼らに与えられる栄光にふさわしくなって戻ってくるのできる世界に行くことを許すのです。

十七、更生する世界は、報いの世界と幸せな世界の間の変遷の役割を果たします。後悔する魂はそこで平和と休息を得ることが出来、やがて浄化していきます。疑いもなく、そのような世界では、人間はいまだに物質を支配する法に従わなければなりません。人類はその感覚や欲望を経験しますが、あなた達が隷属している無秩序な感情からは解放されており、心を黙らせる自尊心、人類を苦しめる嫉妬、息を詰まらせる憎しみもありません。すべての者の額には愛という言葉が書かれています。社会には完全な平等が支配し、すべての者が神を知り、神の法を守りながら神に向かって歩もうとします。しかしながら、これらの世界にあるのは未だに完全な幸せではなく、幸せの兆しなのです。そこに住む人類は未だ肉体をもっているために完全に物質から脱却した人だけが解放されることになる苦しみを、依然として受ける状態にあります。いまだに試練に耐えなければなりません、報いのような痛々しい苦しみはありません。地球に比べるとこうした世界はとても幸せで、あなた達のうちでも

多くの者がそこに住むことに喜びを感じるでしょう。それは、そうした世界が嵐の後の静けさ、残酷な病気から回復した時のようだからです。しかしながら、物質にはわずかしこ心を奪われていないため、そこの人々はあなた達よりもはっきりと未来を見つめることができます。真なる命を授かるために死が再び彼らの体を滅ぼした時、主によって約束された、彼らにふさわしい他の喜びが存在することを理解しています。そして、自由となり、魂はすべての地平線の上を旋回します。物質的で粗暴な感覚はありません。ペリスピリト（*）の純粹で完全な感覚だけが、神自信から直接放射される、その胸の中心から放たれる愛と慈善の香りを吸い込むのです。

十八、ああ、しかし、これらの世界でも、人間はまだ誤りやすく、悪の霊たちも完全にその統治を失ったわけではありません。前進しないことは後退することであり、善の道をしっかりと踏まなければ、報いの世界に再び戻ることになり、そこで新たな恐ろしい試練がその者を待ち受けることになるのです。ですから、夜、休み、祈る時、青い空をじっと眺め、あなた達の頭上に輝く無数の天体のことを想い、地球上での報いを終えた後、どの天体があなた達を神へと導いてくれるのか自分自身に尋ね、また、更生の世界があなた達を迎えるために開かれることを神にお願いしなさい。（聖アウグスティヌス、パリ―一八六二）

（*）訳者注―ペリスピリトとは半物質からできた霊の体とも言える

世界の進歩

十九、進歩は自然の法です。創造された存在は、動物であれ、静物であれ、すべてが拡大し、繁栄することを望む神の善意に服従しているのです。人間にとってはすべての存在の結末と思える破壊でさえも、変遷を通じより完成された状態にたどり着くための手段に過ぎず、それは、すべてが生まれ変わるために死ぬのであって、消滅させられるものがないことからわかります。すべての存在が道徳的に進歩すると同時に、彼らの住む世界は物質的にも進歩します。最初の原子が差し向けられ、世界を築くために集まって来たときから、ある世界をその様々な段階において見ることができたとしたら、その世界が絶え間なく進歩する階段を駆け昇っているのが見えるでしょう。しかしその段は、それぞれの世代の人々にとっては感じることはできませんが、彼ら自身が進歩の道を進むに連れ、ますます住み良い住処となっていくのです。このように、人間、動物、それらを助ける者たち、植物、そして住処は平行して進歩していき、自然界において停止し続けるものは何もありません。この創造主の考えのなんと偉大で、その尊厳のなんと高貴なことでしょうか。それに対して、配慮と用心を取るに足らない一粒の砂である地球だけに集中させ、人類を地球に住むほんの僅かな人間だけであると限定してしまうことの、なんとけちで、下劣なことでしょうか。その法に従えば、この世界もかつて、今日よりも道徳的にも物質的にも劣った状態にあったのであり、この二つの側面においてより進歩した段階に昇ることになるのです。地球には変遷の時代が到来しており、その時代には報いの天体から、更生の惑星へと変わっていき、そこには神の法が君臨するため、その世界で人間は幸せになるのです。（聖アウグスティヌス、パリ、一八六二）

第四章 生まれ変わらなければ誰にも神の国を見ることはできません

復活と再生 — 再生が家族の絆を強める一方で、人生が一度限りであれば絆は断たれることになる 霊たちからの指導—受肉の制限 — 受肉の必要性

一、カイザリア・ピリポ地方へ行った時、イエスは使徒達に訪ねました。「人々は人の子についてどう言っていますか。私が誰だと言っていますか。」彼らは答えました。ある人達はあなたがバプテスマのヨハネだと言っています。外の者はエリアだと言い、外の者はエレミアか、その他の預言者の一人であると言っています。」イエスは彼らに問いました。「あなた達は私が誰だと言っていますか。」シモン・ペトロは答えました。「あなたはキリスト、生きる神の子です。」するとイエスは答えました。「ヨナの子、シモンよ、あなたは幸いです。なぜならそのことをあなたに顕わしたのは血でも肉でもなく、天にいる私の父だからです。」（マタイ第十六章 十三—十七、マルコ第八章 二十七—三十）

二、さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「洗礼者のヨハネが、死人の中からよみがえったのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ」と言い、他の人々は「彼はエリアだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。（マルコ第六章 十四—十六、ルカ第九章、七—九）

三、（変容した後）使徒たちはイエスにお尋ねして言った。「いったい、律法学者たちは、なぜエリアが先に来るはずだと言っているのですか。」答えて言われた、「確かに、エリアがきて、万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言うておく。エリアはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かつてに彼をあしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受けることになるだろう」。そのとき、使徒たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った。（マタイ第十七章 十一—十三、マルコ 第九章十一—十三）

復活と再生（リインカーネーション）

四、再生は、復活という名によってユダヤ人の教義の一部として存在していました。死と共にすべてが終わると信じていたサドカイ人だけが復活を信じていませんでした。この点に関するユダヤ人の考えは、その他の事柄に対する考えと同様にあまりはっきりと定まっておらず、なぜならそれは、魂や魂と肉体との結びつきについて、ぼんやりとした不完全な認識しか持っていなかったからです。正確にどのような方法で、どのようになるのかは知らぬまま、かつて生きていた人が再び生きることができると信じていました。彼らはそれを「復活」と呼んでいましたが、それをスピリティズムではより正確に「再生」（リインカーネーション）と呼んでいます。「復活」という言葉は、既に死亡した肉体が蘇るという考えをもたらします。しかし、朽ちた肉体がすでに散乱してしまったり、他の物質に吸収されてしまった後、その肉体が再び蘇るということは物理的に不可能であることを科学は証明しています。再生（リインカーネーション）とは霊魂が物質的な生活に戻ることですが、過去において用いた肉体とはまったく関係のない、その霊のために特別に準備された別の肉体に戻ることです。故に復活という言葉はラザロには適応できますが、エリアやその他の預言者たちには適応できないのです。ですから、もし彼らが信じていたように洗礼者のヨハネがエリアであったのであれば、ヨハネの肉体はエリアの肉体であったはずはなく、また、ヨハネには子供の時代があり、その両親も知られていたのです。つまり、ヨハネは再生したエリアでありえますが、復活したエリアではないのです。

五、ファリサイ派の者たちの中にユダヤの指導者ニコデモと言う名の者がいた。彼はある夜、イエスのもとへ来て言った。「先生、あなたが神の元から送られ、師として私たちに指導に来られたことを知っています。なぜならあなたが行うような奇蹟は、神がともにある者でなければおこすことができないからです。」イエスは答えました。「まことに言います。生まれ変わらなければ誰にも神の国を見ることはできません。」するとニコデモは言った。「既に年老いた者がどうすれば生まれ変われるのですか。再び生まれるために母親の胎内に入ることができますか。」イエスは答えて言った。

「まことにあなたに申し上げます。人は水と霊から生まれなければ神の国に入ることはできません。肉体から生まれるものは肉体であり、霊から生まれるものは霊である。再び生まれることが必要であるとあなたに言ったことに驚いてはなりません。霊は好きどころに息を吹き、あなたの声をききませんが、あなたはそれがどこから来るのか知らなければ、それがどこへ行くのかも知りません。霊から生まれる人には皆同じ事があてはまる。」ニコデモは答えて言った。「そんなことがどうしておきましようか。」イエスは彼を見て言った。「あなたはイスラエルの指導者でありながらこんなことも知らないのですか。まことに言います。私たちは知ることしか述べず、見たことに対してしか証ししません。それなのにあなたは私の証しを受け入れません。私があなた達に地上の事を言っているときにそれを受け入れないのであれば、私が天の事を言っているとき、どうしてそのことを受け入れることができようか。」（ヨハネ、第三章、一一十二）

六、ヨハネがエリアであったという考えや、預言者たちが再び地球上に生きることができるという信仰は、福音の多くの場所に、特に上に引用した部分に見ることが出来ます。もしこの信仰が誤っていたのであれば、イエスは、その他多くの信仰を否定したようにこの信仰を否定していたに違いありません。しかしそれとは反対に、イエスはその信仰をその権威において全面的に認め、次のように言うことによってそれを必要条件として位置づけました。「生まれ変わらなければ誰にも神の国を見ることはできません。」そして、「私があなたに再び生まれる必要があると言うのを聞いて驚いてはなりません。」と付け加えることにより、繰り返しています。

七、「人は水と霊から生まれなければ」という言葉は、洗礼の水による精神的生まれ変わりと解釈されてきました。しかし、原文には単純に「水と霊から生まれなければ」と書いてあるだけです。さらには、「霊から」という言葉はいくつかの翻訳において「聖なる霊において」という言葉と置き換えられてしまい、もはや同じ考えに対応しなくなっています。この重大な点は、福音に対する最初の解釈に端を発していますが、いつかは誤解なしに明らかになることでしょう。（注1）

八、これらの言葉の真なる意味を理解するには「水」という語句の意味に注意しなければならず、なぜなら、そこではその言葉が本来の意味によって用いられていなかったからです。昔の人々の持つ自然科学の知識は非常に不完全なものでした。彼らは地球が水から生まれたと思い、水を絶対的な発生源となる要素であると考えていました。そのことは「創世記」にも「神の霊は水の上に持上げられた。水の上に浮いた」と記されています。「水の中で空が創られ、天の下にある水は一カ所に集まり不毛なものがあらわれる」「水は生きた動物や水の中を泳ぐ動物、地上や空を飛ぶ鳥を生む」。この考え方に従えば、水は物質性のシンボルとなり、それは霊が知性のシンボルであるのと同じです。「もし人が水と霊から再び生まれなければ、もしくは、水と霊によって再び生まれなければ」という言葉は、故に次のような意味を持つこととなります。「元来は、もし人は肉体と魂によって再び生まれなければ」原来こうした意味でこれらの言葉は理解されていたのでした。こうした解釈は次の別の言葉によっても正しいことが分かります。「肉体から生まれたものは肉体であり、霊から生まれたものは霊である」。イエスはそこに霊と肉体の間に明らかな区別を定めています。「肉体から生まれたものは肉体」と言う言葉は明らかに肉体が肉体のみから発して、霊はそれとは独立しているということを示しています。

九、「霊は息を吹きたいところに吹く。あなたたちはその声を聞くが、その声がどこから来て、どこへ行くのか知らない。」このことは、望むものに対して命を与える、つまり人間に魂を与える神の霊について述べているのだということを理解することができます。この最後の「どこから来て、どこへ行くのか」というのは、誰もそれが何であったのか知らず、霊が何であったかも知らなかったことを意味します。もし、霊もしくは魂が、肉体が創られたのと同じ時にできたのだとすれば、その始まりを知っているので、それがどこから来たのかも分かることとなります。どうであれ、このくだりは魂が以前から存在していたという考え方を神聖化しており、それはつまり生存の複数性を示しているのです。

十、バプテスマのヨハネの時代から今まで、天の国は暴力によって支配されており、それを奪

おうとする者たちは乱暴である。ヨハネまでの預言者たちと律法はこのように預言した。もし私の述べることを理解したいのであれば、彼は正に来るべきエリアである。聞く耳を持つ者が聞けばよい。
(マタイ第十一章、十二―十五)

十一、再生の原理は、ヨハネの書に表現されているように、まったく単に神秘的な意味によって解釈されたかも知れませんが、このマタイの一節には同じ事はあてはまらず、間違えようがありません。「彼は正に来るべきエリアである。」ここには喩えも、装飾もありません。断定の表現です。「洗礼者のヨハネの時代からから今まで、天の国は暴力によって支配されており」その時代にはまだ洗礼者のヨハネが生きていたのに、この言葉は何を意味しているのでしょうか。イエスはそれを、「もし私の述べることを理解したいのであれば、彼は正に来るべきエリアである」と説明しています。つまり、ヨハネがエリア当人であるので、イエスはヨハネがエリアという名で生きていた時代のことを暗示しています。「今まで、天の国は暴力によって支配されており」これは、従う者に約束された土地、ヘブライ人の樂園を手に入れるために、従わぬ者の根絶を命じたモーゼの律法の暴力性を示しており、一方、新しい律法においては、天の国は慈善と穏かさによって得られることを示しているのです。そして、「聞く耳を持つ者が聞けばよい」と付け加えました。イエスが何度も繰り返した言葉は、必ずしもすべての人がある種の真実を理解する条件を満たしていたのではなかったことをはっきりと示しています。

十二、あなたたちの民で死を宣告されたものは、再び生きることになる。私のなかで死んでいた者は、私を通じ生き返るであろう。粉塵の中に住む者よ、眠りからさめ、神への賛美を歌えよ。なぜならあなたたちの上に落ちる露は光の露であるからで、またあなたたちは地上と巨人の国を悪しくするからである。(イザヤ第二十六章、十九)

十三、このイザヤの一節にもたいへんはっきりと書かれています。「あなたたちの民で死を宣告されたものは、再び生きることになる」預言者イザヤがもし霊界における命について、処刑された人々が霊として死んだのではないということ述べたかったのであれば、「再び生きる」ではなく「まだ生きている」と言ったはずです。霊的な意味においてはこれらの言葉は理に反します。なぜなら、魂の命の中断の意味を含むことになるからです。道徳的更正という意味においては、死んだ者すべてが再び生きるのですから、永遠の罰の否定を意味することになります。

十四、しかし人が一度死に、肉体がその霊から切り離され、消耗してしまうと彼はどうなるのか。一度死んだ人は再び生きることができるのだろうか。私の人生の上で毎日起こるこの戦いのなかで、私が変わることを望む。(ヨブ第十四章、十、十四 Le Maistre de Sacy の翻訳)
人は死ぬとすべての力を失い、消滅する。その後どこに在るのか。人は死ぬと再び生きるのか。何かの変化が訪れるまで、私は毎日の戦いの中で待ち続けるのだろうか。(同前、プロテスタント、Osterwald の翻訳)
人間は死ぬと、永遠に生きる。地上における私の日々が終わるとき、そこへ再び戻るまで、私は待つ。(同前、ギリシャ教会の訳)

十五、これらの三つの翻訳の中に、存在の複数性は明確に表現されています。ヨブが、まったく知るはずもない水による洗礼による更正について言いたかったのだとは誰にも想像できないでしょう。「人は死ぬと再び生きるのか」。一度死ぬという考えや再び生きるという考えは、何回も生まれたり死んだりするという考えを含んでいます。ギリシャ教会の翻訳に更に詳細に表されていますが、それはそのことが可能であるというようです。「地上における私の日々が終わるとき、そこへ再び戻るまで、私は待つのだろう」。つまり、地上における生活へ戻るということです。そのことはまったく明らかであり、それはあたかも「私は家を出ていきますが、やがて戻ってきます」と言っているかのようです。「私の人生の上で毎日起こるこの戦いのなかで、私が変わることを望む」。ヨブは明らかに、人生の謎に対する戦いについて触れたかったに違いありません。「私は変わることを望む」と言うことは、甘受することです。ギリシャ語の翻訳においては、「私は待つ」とありますが、そのことは、新たな人生があることをより望んでいるかのようです。「地上における存在が終わるとき、そこへ再び戻るまで、私は待つ」それは、死の後、一つの人生と次の人生を分けるインターバルの間

に、再び戻る時をそこで待つ、とヨブが述べているようです。

十六、故に復活という名によって再生の原理がユダヤ人達の基本的な信仰の一端であったことは疑いようありません。イエスや預言者たちが正式な形で確認した事項です。したがって、再生を否定することはキリストの言葉を否定することになります。しかし、いつか、この言葉が先入観なしに熟考された時には、他の多くの事柄に関してもそうであるように、この点に権威が確認されるでしょう。

十七、宗教的観点からのこの権威は、事実の観察から得られる証拠に対して、哲学的観点を加えません。結果から原因へと遡る上で、再生は絶対的な必要性として、人類について回る条件として現れます。一言で言えば、それは自然の法として現れるのです。動きが隠された動力の存在を証すように、言わば物質的に、結果によって再生の存在が明らかになります。再生のみが人類に対して「どこから来たのか」「どこへ行くのか」「なぜ地球上にいるのか」を説明し、人生に見られるあらゆる変則や、見かけ上の不公平を正当化することができるのです。(注一) 魂の前存在や存在の複数性なくしては、多くの場合福音の教えは理解し難いものとなってしまう、そのためにこれほどに矛盾した解釈がなされているのです。真なる意味が蘇るための鍵はこの原理の中にあるのです。(注) 再生の教義についてはアラン・カルデック著『霊の書』第四章、第五章、『スピリティズムとは何か』第二章、ペッツァニ著『存在の複数性』を参照のこと。

再生は家族の絆を強める一方で、単一の存在性は家族の絆を断ちきってしまう

十八、一部の人が考えるように、再生によって家族の絆はどんな破壊をも被ることはありません。かえって絆は強まり固く結ばれることになります。逆の考え方においては、絆を破壊してしまうことになります。宇宙において霊たちは愛情や好意、意向の類似性によって結びついたグループ、もしくは家族を形成します。共に会うことは幸せなことで、こうした霊たちはお互いに相手を探し求めます。肉体を持って生まれることは、一時的に彼らを引き離しますが、霊界に戻ると、旅から戻ってきた友達同志のように集まります。しばしば、肉体を持って生きる間まで他方を追っていくこともあり、相互の進歩のためにお互いに努力し合うために、地上で同じ家族に生まれたり、同じグループに生まれることもあります。一方が地上に生まれ、他方が生まれてこないからといって、思考の上での結びつきまでも失うことにはなりません。自由にある側は、束縛されたもう一方を守ります。より進歩した側は、遅れた側の進歩のために努力します。一回毎の人生の後には、皆が完成へ向かう道の上で一步進んでいることになります。物質への執着が少なくなればなるほど、相互の愛情はより生き生きとしたものとなり、それは、愛がより浄化すれば、エゴイズムや情熱の陰におびやかされることなく同じです。したがって、このように、互いに愛情によって結ばれた者同志は、お互いを結びつける相互の気持ちにいかなる打撃をもうけることなしに、限られた数の肉体を持った人生を過ごすことができるのです。ここで述べている事が魂と魂を結びつける真なる愛情のことであり、肉体の破壊をも越えて生き続けるものである一方で、この世の人々は霊の世界において求め合う動機となることのない感情のみによって結びついています。永続しうるのは霊的な愛情だけなのです。肉体的な要因から生まれた愛情は、その要因とともに消滅します。しかし、魂は永遠に存在するので、霊の世界においては同様な要因は存在しません。関心事による動機のみによって結ばれた人々に関係することと、これらのことはまったく異なるものです。死はそうした者たちを天と地とに分けることになります。

十九、親族の者同志の間に存在する絆と愛情は、彼らを近づけた、以前から存在するお互いの思いやりの印です。そのことから、ある人の人格や趣味、趣向が、肉親や親戚にまったく似かよっていないとき、その人はその家族の人間ではないとよく言うものです。そのような言葉は、想像する以上に深い真実を言い表していることになります。家族の中に、このような敵意のある者や見知らぬ者の霊が肉体を持って生まれてくることにより、そのことがある者には試練となり、また他の者にとっては進歩の手段となることを神は許すのです。そのようにして、悪しき者は善い者たちとの接触と、彼らが払ってくれる注意によって少しずつ改善していきます。彼らの性格はより穏和になり、その習慣

は洗練され、敵意は消えていきます。このようにして、違った分類の霊たちが混ざり合いますが、それは地上において異なった人種や民族が混ざりあうのと同じです。

二十、親族がインカーネーションの結果無限に増えていくのではないかという恐れは、利己的な考えの上に立っています。そう考えることは、そうした者に、多くの人達を迎えるだけの広い愛が欠けていることを証明しています。多くの子供を持つ父親が、その子供達のうちの一人を愛するとき、例えば一人っ子であった場合に愛する時よりも少ない愛情を持って愛すると言うことがあるでしょうか。利己的な者たちよ、心を落ち着けて下さい。そうした恐れに根拠はありません。ある人が10回再生したと言うことは、霊界において10人の父親と母親、10人の妻とそのときに出来た子供達や新しくできた親族に出会うというわけではありません。そこではその愛情の対象となった人々に必ず会いますが、そうした人達とは地上において様々な続柄で、あるいは、同じ続柄によって結ばれていたに違い在りません。

二十一、今度は再生を否定する教義がどういう結果をもたらすか見てみましょう。その教義は必然的に魂の既存性を否定します。魂は肉体と同時に創造されることになり、魂同志の間にはいかなる既存の関係もなく、したがって、魂同志はまったく見知らぬ者同志ということになります。子供にとって父親は親しみのない存在となります。親子関係は、いかなる霊的な関係でもなく、ただの肉体的な親子関係だけに限られてしまいます。そして、先祖がどうであり、どんなにすばらしい人であったかといって光栄に思うことはまったくなくなってしまいます。再生の考えにおいては、先祖も子孫も、既にお互いに知り合い同志で、共に生活し、愛し合った可能性があり、また、その先においてもお互いの好感の絆をより強めるために集まることができるのです。

二十二、以上のことは過去についてのことです。再生のない考え方から生まれた基本的な教義によれば、未来については、魂はたった一度の人生の後、まったく撤回しようのない運命を定められてしまうことになっています。決定的な運命の定めはあらゆる進歩を止めることになります。なぜなら、いくらかでも進歩があるならば、決定的な運命ではないことになるからです。善く生きたか、悪く生きたかによって、魂達は直ちに至福の住処か、永遠の地獄へ行くことになります。直ちに、そして永遠にそうなることによって、霊たちは離ればなれとなり、再び出会う希望も奪われ、父母と子、夫婦、兄弟や友人同士も決して再会を確信することはできなくなります。そこには家族の絆の絶対的な切断が起こります。再生とそこに見られる進歩によってこそ、愛し合う者は皆地球上でも宇宙においても出会うようになり、ともに神に向かって引かれていくことになるのです。誰かが途上で衰える時、彼らはその進歩と幸福を遅らせることにはなりますが、すべての希望を失うことはないのです。彼を愛する者たちによって助けられ、勇気づけられ、守られることによって、いつの日か彼らの埋もれたぬかるみから抜け出すことになります。再生によってのみ、永遠の連帯が生者と死者の間に存在することになり、そのことから愛情の絆が強まることになるのです。

二十三、要約すれば、墓石の向こう側の未来に関して、人間には四つの選択肢が用意されていることになります。一、唯物主義者の考える無、二、汎神論者の考える宇宙への合一、三、教会の教える運命の定められたアイデンティティーの存続、四、スピリティズムの考える無限の進歩を可能にするアイデンティティーの存続。最初の二つの考え方においては、家族の絆は死と同時に断ち切られ、未来において魂達が再会することのできる希望は残されていません。三番目の考え方によっては、魂同志が、天国であれ、地獄であれ、同じ場所へ行く限りは再会する可能性があります。漸進的な進歩と切り離すことができない人生の複数性の考え方においては、愛し合った者同志の関係の継続は確実であり、そうした関係が真なる家族を形成することになるのです。

霊たちからの指導—再生の限界

二十四、再生の限界はどこにありますか。霊の体を構成する被いだけを考慮に入れる場合、その被いの物質性は霊の浄化にしたがって薄れていくために、正しく言うならば、再生に正確な限界はありません。地球より進歩したいいくつかの世界に

おいては、その被いの密度は薄れ、軽量化し、より希薄であり、結果的には変化を受けにくくなります。より進んだレベルにおいて、その被いは透き通り、ほぼフルイド（*）化した状態になります。徐々に非物質化し、最後にはペリスピリト（*）と間違える程になります。生きるために連れて行かれる世界にしたがって、霊はその世界の性質に適当な被いをまとうことになるのです。ペリスピリト自体も連続的な変化を遂げていきます。純粋な霊たちの条件となる完全な浄化まで、徐々にエーテル化して行きます。大きく進歩した霊たちのために特別な世界が存在するのであれば、彼らの劣った世界でそうであるように束縛されることはありません。彼らのある種解放された状態は、彼らに託された役割の呼ぶあらゆる場所に行くことを可能とさせます。地上においてそうであるように、物質的な視点のみから再生を考えるのであれば、それは劣った世界にのみ限られるものです。したがって、それから早く解放されるか否かは、自己の浄化のために努力する霊にかかっているのです。また、考慮に入れなければならないのは、肉体を失う間、つまり、肉体を持った存在と存在の合間において、霊の状況はその霊の進歩を結びつける世界の性質を保つということです。したがって、霊界（エラティンティエー（*））において、霊は多かれ少なかれ幸福で、脱物質化の程度によって、自由となり高尚になるのです。（聖王ルイ、パリ一八五九）

受肉（インカーネーション）の必要性

二十五、受肉（インカーネーション）は罰であり、罪を負う霊たちだけがその苦しみを被ることになるのですか。

霊が肉体の世界で過ごすことは、物質的な行動を通じて神が彼らに託したその意思の実行を遂げるために必要なのです。彼らのためにそれらは必要で、彼らに強いられた活動は彼らの知性の発展を助けることとなります。卓越した正義である神は、その子たちにすべてを平等に分配しなければなりません。そのため、すべてのために同一の出発点、同一の能力、遂行すべき同一の義務、進む上での同一の自由を設けたのです。いかなる特権もひいきとなり、不公平となります。しかし、受肉はすべての霊にとって、一過性の状態に過ぎません。それは人生を開始する上で神が彼らに強いる任務であり、同時に彼らがその自由意思を行使する最初の経験なのです。この任務を熱意を持って遂行する者は速いスピードで、苦しみもより少なく最初の段階を通り過ぎ、自分の苦勞のもたらす結果をより早期に味わうことができるようになります。反対に神が与えてくれた自由を悪用する者はその歩みを遅らせ、そのことは頑固さとなって現れ、インカーネーションの必要性を無制限に引き延ばすこととなり、そうなるとインカーネーションは罰と化することになるのです。（聖王ルイ、パリ、一八五九）

二十六、注意——一般的に知れた次のようなたとえがこの違いを理解しやすくしてくれます。学生は、科学の最高の研究まで導いてくれる一通りの講義を受けなければ、そこまで到達することはできません。こうした講義は、それらがいかなる努力を強いることになろうとも、学生がその目的を達成するための手段であり、強要された罰ではありません。もしその学生が努力家であれば、道を短縮し、それにより、その道のりで出会う茨も少なくなります。一方で怠惰と無精のためにそうした講義を繰り返して受けさせられる者たちには同じようにはいきません。講義における努力が罰となることはありません。同じ努力を再び開始しなければならないことが罰となるのです。

同じ事が地上の人間にも起こります。霊としての生活を始めたばかりの原始的な霊にとって、受肉は知性を発展させるための手段です。しかしながら、道徳的な感覚が広く発展したより明晰な人にとって、すでに終わりに到達していただろう時に、苦しみの満ちた肉体生活のステップを踏むことを再び強いられることは、不幸でより劣った世界での滞在を延長しなければならないという意味で、罰となります。反対に、道徳的進歩のために積極的に努力する者は、物質的なインカーネーションの時間を短縮することができるばかりでなく、より優れた世界と自分を隔てている途中のステップを一度に進んで行くことができるのです。では、霊たちはある天体に一度だけ生まれ、次の人生は他の天体において過ごすと言うことはないのでしょうか。もし地球上においてすべての人間が知性的にも道徳的にもまったく同じレベルにあったとしたら、同様の見方を認めることができるでしょう。しかし、未開人から文明人に至るまでの人々の間に存在する相違は、彼らがどのような段階を昇らなければならないかを示しています。ところで、インカーネーションは有益な目的を持っているはずで、幼

少で亡くなる子供達のはかないインカーネーションの目的はなんでしょうか。自分にとっても他人にとっても、利益無く苦しんだのでしょうか。神の法はすべてが卓越した叡智に満ちており、なにも無益に行うことはありません。同じ地球上における再生によって、同一の霊たちが、再び接触させ、お互いに被った損失を取り戻す機会が与えられることを神は望んだのです。また、そればかりでなく、以前にあった関係を通じて、家族の絆が霊的な土台の元に確立し、連帯、兄弟愛、平等の原則を自然な法によりそうことができるようになることを望んだのです。

(注1) Osterwaldの翻訳は原文の通りになっており、「水と霊によって生まれ変わらねば」となっています。Sacyの翻訳には「聖なる霊」、Lamennaisの翻訳には「聖霊」となっています。アラン・カルデックの注釈に対して今日私たちは、近代的な翻訳が原文を取り戻しているといことを付け加えることが出来ます。故に、「聖なる霊」ではなく、「霊」と印刷されています。Ferreira de Almeidaのブラジル語、英語、エスペラント語の翻訳を調べると、どれにおいても「霊」とだけ書かれています。こうした近代的な翻訳に加え、「…genitus ex aqua et Spiritu…」 「…et quod genitum est ex Spiritu, spiritus est」と書かれた一六四二年のTheodor de Bezaのラテン語の翻訳にもそれを確かめることが出来ます。アラン・カルデックが述べるように「聖なる」という言葉が書き加えられたものであるということは疑う余地もありません。—F E B—一九四七

第五章 悲しむ者は幸いです

悲しみの正当性—現世に存在する悲しみの原因—前世に存在する悲しみの原因 — 過去の忘却— 甘受しなければいけない理由 — 自殺と狂気霊たちからの指導— 善い苦しみ、悪い苦しみ— 悪とその業— 幸せはこの世のものではありません— 愛する人の死、早すぎた死— 善人であれば死んでいた— 志願して受ける苦痛— 本当の不幸— 憂鬱— 志願した試練、本当の苦行

一、「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満たされるからです。」「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ第五章—四、六、十）

二、「貧しい者は幸いです。神の国はその人のものとなるからです。」「いま飢えている者は幸いです。その人たちは、やがて飽くことができますから。」（ルカ第六章—二十、二十一）「しかし、富んでいるあなたがたは、哀れな者です。慰めを、すでに受けているからです。」「いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。」「いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて嘆き悲しむようになるからです。」（ルカ第六章—二十四、二十五）

悲しみの正当性

三、地上で悲しむ者にイエスが約束してくれる償いは未来の生活でしか受け取ることができません。未来への確信を持たねば、これらの金言は意味を持たなくなってしまうか、あるいは人をだます偽りの言葉となってしまう。未来への確信を持っていたとしても、悲しむことによって幸せを得るということを理解するのはたいへん難しいことです。悲しむことにより、より価値のある幸せを得ることができるようになるのだと言う人がいます。しかし、それならばなぜ、ある人は別の人より多く悲しまなければならないのでしょうか。なぜ、理由を明らかにされることなく、一部の人は貧しい生活を強いられ、他の人々は贅沢な暮らしをすることができるのでしょうか。なぜ、すべてがうまく行かない人々がいる一方で、すべてがうまく行き笑って過ごせる人々がいるのでしょうか。さらに理解できないのは、なぜ幸せと不幸が、美德と悪徳の両側に不均等に散らばっているのかということです。美德の高い人達が、はびこる悪者たちの間で苦しんでいるのを見ることができるのはなぜでしょうか。未来を信じることにより、慰めを得たり、辛抱を得ることができます。しかしながら、こうした普通とは違った考え方も、その理由を教えてもらえないのであれば、それは、神の不公平さを認めているようなものです。しかし、神の存在を認めるのであれば、その永遠の完全性を考慮に入らずに神について考えることは不可能です。神は万能、完全なる正義、善良でありそれ以外であれば神とはなり得ません。そしてもし神が至上の善と正義を持つのであれば、気まぐれやえこひいきによって行動するわけはありません。人生の悲しみには理由があり、神が公平である以上、その理由も正当であるはずで、このことをすべての人々が納得できるように、人類がこの原因を理解できるよう、神はイエスの教えに託して人類を導いてくれました。そして今日、人類はその教えを理解するのに十分成熟したため、神はスピリティズムを通じ、霊たちの声に託し、この原因を完全な形で示してくれたのです。

現世に存在する悲しみの原因

四、人生の悲しみには二通りあります。言い換えるならば、二つのまったく違った種類の原因があります。一種類目の原因とは現世の中にあり、もう一種類は現世以外のところに存在します。地球上で私たちが体験する悲しみをさかのぼれば、その原因の多くは悲しんでいる人自身の性格、あるいはその人自身の行いの中にあることがわかります。しかしそれでは、どのくらいの人々が自分自身に原因があるという事を認めることができるのでしょうか。どのくらいの人々が自分自身のプライド、野心、不注意の犠牲となっているのでしょうか。どのくらいの人々がその規律のなさ、執着心のなさ、不適切な行動、きりのない欲求によってみじめな思いを強いられているのでしょうか。本心を無視し、私欲、虚栄心の計算のもとに結ばれ、不幸を迎える夫婦が何組あるのでしょうか。もう少し慎重に行動し、怒り

をこらえることを知っていれば、何組もの不和、口論、致命的な言い争い、離別を防ぐことができたのではないのでしょうか。不節制や、すべてにおける過度がどれだけの不具、病気をもたらしているのでしょうか。幼いときからのしつけを怠ったために、子供と関係がうまくいかなくなってしまった親が何人いるのでしょうか。子供に対する弱さと無関心が子供の中にうぬぼれやエゴ、虚栄心の種を植え付け、乾いた心をつくってしまうのです。しばらくして、その植え付けた種を収穫するとき、親に対し尊敬を欠いた恩知らずな子供を見て驚き悲しむのです。人生の変遷による失望によって心を傷つけられた者は自分自身の良心に問うてみなさい。あなたの悲しみの原因を一步一步たどって行けば、ほとんどの場合それがあなた自身の中に存在する事を知り、「これをやっていたらなければ」、とか「あれをやっていたらこんなことにはならなかった」などとは言えることができるでしょう。自分自身のせいでないとするならば、いったい誰のせいだ悲しまねばならないのでしょうか。人間はこのように、ほとんどの場合、自分で自分自身の不幸の主要原因となるのです。しかしながら、不幸の星とは、実際はその人自身の怠慢であるのにもかかわらず、自分の自尊心が傷付かないように、そのことを認めずに、運命や神、チャンスの不足、星などのせいにしてしまった方がより容易なのです。こうした態度は、必ず人生の中に無数の悲しみを生み出すこととなります。人間は、その道徳的・知性的な自己の改善によってのみこれらの悲しみから逃れることができるでしょう。

五、人間の法律は悪に応じて罰を与えるようになっています。悪をはたらき処罰される者は自らの行った悪行の結果を受けることとなります。しかし、法律はすべての悪や罪を扱えるわけではありません。法律は社会的な損害をあたえる罪を処罰するように出来ており、過ちを犯す者個人に損害をもたらす罪を処罰するようにはなっていません。しかし、神はすべての人間の進歩を見守ってくれています。ですから、正しい道から反れると、どんな小さな過ちであっても神は罰するのです。いかに小さな過ちであったとしても、神の法律に反していれば、多かれ少なかれ、避けることの出来ない悲しい結果を必ず得ることとなります。小さな罪であれ、大きな罪であれ、人間はその犯した罪に応じて罰せられます。だから、罪を犯した結果として現れる悲しみは、罪を犯したのだという警告なのです。悲しみはその人に善悪の区別を体験として教え、将来の不幸の源となりうるものを改める必要性を教えてくれるのです。そうした動機がなければ人間は自分を改めようとはしません。罰は与えられないのだと信じていれば、その人の向上は遅れ、さらに幸福な人生への到達も遅れてしまいます。そうした改善の必要性を認識させてくれるような経験は、時には少し遅れてくることもあります。生命がすでに消耗され、混乱に陥り、悲しみがもはやその人を向上させるためには効力を失った時、人は概してこう言います。「もし人生のスタートからこんなになることを知っていたら、どれだけの過ちを未然に防ぐことが出来ただろう。もし、やりなおすことが出来たら、私はまったく別の生き方をさせていただこう。でも、もう時間はない！」その人は、怠惰な労働者が、「今日も何もせずに一日が終わってしまった」と言うように、「人生を無駄にしてしまった」と言うことになるでしょう。しかし、その翌日、労働者の頭上にはまた太陽が輝き、新しい日が始まり、失った時間を取り戻すことができるように、人生においても、墓の中で過ごす夜が過ぎると、新しい太陽が輝くのです。その新しい人生の中で、過去の経験や、未来へ向けて固めた決意を生かすことができるのです。

前世に存在する悲しみの原因

六、しかし、その人自身が原因となっている悲しみが現世に存在する一方で、他にも少なくとも見かけはその人の意志とはまったく関係なく、宿命のように訪れる悲しみもあります。例えば、親愛なる人や、家庭を支える者の死のように。誰にも防ぐことのできない事故、まったく手の打ちようのない富の没落、自然の災害、生まれつきの病気、特に、その不幸な者から働いて生計をたてる手段を得る可能性をも剥奪してしまうような病気。身体の障害、知的障害。こうした状態で生まれる者は、現世においては、そのような悲しい運命にあわねばならないようなことを何もしていないし、その償いを受けることもできません。またそれを避けることはできず、それを变えることもできず、社会の憐れみの恩恵を受けることとなります。なぜ、同じ屋根の下の同じ家族のだというのに、この哀れな者の横には、すべての知覚においてその者より優れている人々がいるのでしょうか。早く死んで行った子供は、結局、悲しみしか味わうことができなかったのでしょうか。こうした問題のいずれに対しても、どの哲学もいまだに答を出していません。どんな宗教も正しい明解な理由を説明することができ

ません。肉体と魂が同時に生まれ、地球上で少しの時間過ごした後、取り消すことの出来ない決められた運命をたどるといふことであれば、こうした不幸や異常は神の良心、正義、意志を否定するものなんでしょうか。神の手元から離れて行ったこのような不幸な人達はいったい何をしたのでしょうか。現世においてこれほどみじめな思いを強いられ、良い道も悪い道も選択することができないのであれば、既に決められた償いか罰をまた将来にも受けなければならないのでしょうか。すべての結果には原因が存在するという公理から、これらの悲しみもなにか原因があつての結果であるといえるはずで、正義にあふれる神の存在を信じるのであれば、この原因も正当であると考えられるに違いありません。いつでも原因は結果の先に立つものですが、原因が現世には見当たらないのであれば、その原因は現世以前、すなわち、前世に存在すると思えなければなりません。一方で、神は善行や、行ってもいない悪行を罰するはずがありません。もし私たちが罰せられるのであれば、私たちが悪行をはたらいたからのはずで、とすれば、もし、現世に悪行を行っていないのであれば、前世においてそれを行っているということになります。現世か前世のいずれかにおいて悲しみの原因が存在することは、免れる事のできない事実なのです。このように、私たちの道理は、そうした事実のなかに働く神の正義というものがいかなるものか、教えてくれるのです。つまり、人間は現世の間にだけ完全に罰せられて終わるわけではありません。しかし、過去における原因が生んだ結果からは逃げることなく最後まで従う必要があるのです。悪人の繁栄は一時的なものでしかありません。もしその人が今日償うことが出来なければ、明日償わねばならないのです。すなわち、今日悲しむ者は、過去における過ちに対する償いを行っているのです。一見その人にとってふさわしくない悲しみも、その存在理由があるのです。悲しむ者はいつもこのように言うべきです。「神よ、過ちを犯した私をお許し下さい」と。

七、前世に存在する原因から来る悲しみや、または現世に始まった原因による悲しみは、常に人生におけるその人自身の過ちから来るものです。厳しく、公平に行き渡る正義によって、人は他人を苦しめた方法と同じ方法で苦しむのです。冷たく非人間的な人は、冷たく非人間的に扱われることとなります。誇りの高すぎる者は屈辱的な経験をさせられるでしょう。けちで利己的な人、物質的な富を悪用する人は、その有り難さや必要性を感じさせられることになるでしょう。悪い息子であれば、自分の子供に苦しめられるでしょう。そのように、様々です。このように、人生の多様性や、報いの世界としての地球上での運命が、地上の善人と悪人の間に不均一に分配された人間の幸、不幸の理由を説明してくれます。この不均等性は単に見かけ上だけのものです。なぜなら、私たちは現世においてしか各々の問題を見ることができなからです。しかし、思考によって心を持ち上げ、連続性のある人生を考えてみれば、霊の世界において決められている通りに、各々にはその人にふさわしい人生が与えられているということを理解することができ、そこに神の正義が欠ける事はないということがわかります。人間は、低級な世界に生きているということを忘れてはなりません。人間がそこに存在するのは、人間の不完全性のためなのです。悲しみに出会うたびに、そのような悲しみも、より高級な世界へ行くことができれば味わうことはないのだということを思い出し、また、地上へ再び戻ってくるかどうかということは、各々の努力とその向上にかかっているのだということを認識しなくてはなりません。

八、人生における苦労は、強情な霊や無知な霊に与えられます。それにより、そうした霊は自分が何をしているのかを自覚した上で正しい選択をすることができるようになります。本当の悲しみを心から体験することによって欠点を改め、向上しようという意志を持った霊によって、自発的に選択され、受けとめられる苦労があるのです。課された任務をうまくなし遂げることができなかった霊は、その任務につくことによって得ることができたはずのデメリットを失わないよう、改めて最初からその任務が課されることを望みます。こうした任務としての苦しみは、過去の過ちへの償いであると同時に将来へ向けての試練なのです。だからこそ、人間に改善の可能性を与え、最初の過ちを永久に非難することなく、人間を絶対に見放すことのない神の好意に感謝しようではありませんか。

九、しかし、人生の悲しみのすべてがある特定の過ちの証しであると信じてはなりません。多くの場合、悲しみとは、自分の浄化と進歩の速度を早めるために、霊自身が選んだ道であることがあります。そのような場合、悲しみとは償いとしてだけではなく、試練としての意味を持つのです。しか

し、試練は必ずしも償いであるとは限らないのです。完全性を得ることのできた者は試される必要はないのですから、試練にたたされたり、償いの場が与えられるということは、その霊がまだ劣性であることの証明に変わりはありません。しかし、ある階級への進歩を成し得た霊が、さらにより上の階級への進歩を望むことによって、苦みに打ち勝った分の報酬として向上をしようと、その向上に値するだけの苦境での任務を神に求めることがあります。善行を、生まれたときから既に身につけ、高揚した魂を持ち、高潔な感覚を持ち、過去からの悪をどこにも引きずってついでいないような人で、キリストのように苦しい境遇に対し忍従し、不満をこぼすこともなく、神の加護を求める人がいるならば、その人はこのような場合に当てはまるということができるといえるでしょう。反対に、その人にとって不満の原因となったり、その人の神への反感の原因となるような悲しみとは、過去の過ちへの償いであるということができません。ある悲しみがその人に不満をもたらさなかったのであれば、その悲しみは間違いなく試練であると考えられます。そうした悲しみは、霊自身が自発的に求めたものであり、過ちへの償いとして強要されたものではありません。すなわち、そうした悲しみは、その霊の強い決意の証しであり、進歩の印なのです。

十、霊は、完成することなく完全なる幸福を求めることはできません。どんな小さな汚点があっても、その霊が不完全であれば至福の世界へ入ることはできません。ある伝染病がひろまった船に閉じこめられた乗組員達が、どの港に到着しても、伝染病に感染していないことが証明されるまでは上陸の許可が降りないのと同じです。霊は幾度にもわたる再生によって、不完全性から少しづつ脱却していくのです。人生における試練は、うまく乗り越えることができれば、霊を進化させます。償うことにより、過去の罪を清算し、霊は浄化します。それらは傷を癒し、病人を治すための薬であり、重症であればあるほど、薬も強いものである必要があります。つまり、多く苦しむ者は多くの罪を償う必要があるものであり、はやく治してくれる薬が与えられたことを喜ぶべきでしょう。その苦しみに忍従することによってそれを有益なものとし、その苦しみがその人にもたらしてくれたものを不満をこぼすことによって失ってしまうことがないようにできるかどうかは、その人自身にかかっているのです。そうすることが出来ないのであれば、再び同じ様な苦しみを繰り返さねばならないでしょう。

過去の忘却

十一、過去の人生のことを覚えていないから、過去の経験を生かす事ができないと考えるのはつまらぬことです。神が過去をベールでおおうことにしたのは、その方が有益と考えられたからに違いありません。過去を覚えていたとしたら、実際に多くの不都合を生じるでしょう。過去の事実によってひどく辱められることもあるでしょうし、また、過大な自尊心を持つようになってしまうこともあるでしょう。私たちの過去は、私たちの自由意志を束縛することになるでしょう。いずれの場合であれ、過去を覚えていたとしたら、社会的関係において必ず大きな混乱を招くこととなります。霊はよく、過去に過ちを犯した相手を償うために、過去に生活したときと同じ環境、同じ人間関係の中に生まれ変わります。もし、こうした関係のなかで、過去に憎んでいた人が再び存在していると分かってしまったら、また憎しみが湧いてくるでしょう。もし過去に攻撃した相手を前にしたらいたたまれない気持ちになるでしょう。神は私たちの向上のために、私たちが必要とするものを、ちょうど足りるだけ与えてくれているのです。すなわち、神は私たちに良心の声と本能的な習性を与えてくれ、私たちに不利益になるものは私たちから奪ったのです。人間は生まれた時から、それまでに獲得したものを持って生まれます。生まれるものは、過去に生きていた通りに生まれ変わるのです。一回一回の人生のすべてが新たな出発点です。過去どうであったかというのは、重要なことではありません。もし罰せられているのであれば、過去に過ちを犯したからです。その人の現在の悪い習性は、その人自身がまだどこを正さねばならないのかを示しているのです。そうであるからこそ、そうした自分自身の悪い性癖を見逃さないよう、その人は注意しなければなりません。なぜなら、既に完全に正された悪は、表には出てこないからです。良心の声が善と悪との区別を警告し、悪の誘惑に乗らないようにする力を与えてくれるとき、人は善なる決断をすることができるのです。過去の忘却は、地上で生活している間だけのものです。霊の世界へ戻れば、自分の過去を思い出すこととなります。したがって、過去の忘却とは、一時的な記憶の中断に過ぎません。それは私たちが寝ている間、地上での生活の記憶に一時的な中断があるにもかかわらず、次の日、寝た前日やそれ以前の記憶を失っていないの

と同じことです。過去の記憶を取り戻すのは、死後だけのことではありません。霊は過去の記憶を失う事はなく、人間は睡眠中、体の寝ている間、霊がある種の自由を得ることができ、また、過去の人生の記憶を持っているということを経験は証明しています。したがって、霊はなぜ苦しむのか知っており、またその苦しみが正当なものであるということも知っています。過去の記憶は、霊が地上で寝ずに活動している間だけ消えています。その霊にとっては苦しく、社会的に生活する上で不利益とななりうる過去の細かな記憶を消されているということが、その解放の時間をうまく利用することができる霊にとっては、新しい力を得ることを可能にさせるのです。

悲しみ甘受しなければいけない理由

十二、「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」という言葉で、イエスは、悲しむ者が受けるべき代償と、悲しみというものが病める私たちの回復の始まり、私たちは悲しみを有り難く受けとめなければならないことを同時に述べています。これらの言葉は次のようにも言い替えることができます。悲しむことを幸せに感じなければいけません。なぜなら、この世におけるあなた達の悲しみは、あなた達の過去の過ちに負うものであるからです。これらの痛みは、地上で辛抱強く耐えられるのであれば、未来の何世紀にも及ぶ生活への蓄えとなるのです。したがって、神が、現世においてあなた達に義務を果たす機会を与えてくれ、未来での平和を約束し、義務を軽減してくれているのだということに感謝しなければなりません。悲しむ者とは、多大な借金をかかえた者のようなものです。その者に対し、借金を取り立てる者が、「今日中に百分の一でも払ってくれるのなら、残りはすべて水に流してあげましょう。もし、払わないのであれば、最後の一元まで、取り立てに追い回すこととなります」と言ったとします。借金を負う者は、すべてをかけて百分の一だけを支払って負債から逃れたほうが幸せでしょう。このように言ってくれる取立人には文句を言うどころか、感謝をするのではないのでしょうか。これが「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」の意味です。悲しむ者はその借金を返済することができるのですから幸いなのです。なぜなら、支払いを終えれば自由になるからです。しかし、その借金を払いながらも、また別の方から借金をするならば、永久に負債から逃れることはできません。新しい過ちを犯す度に負債は増えるのです。なぜなら、いかなる過ちであれ、避けることのできないの罰を与えられないものはなにひとつないからです。もし今日支払うのでなければ、明日には支払わねばなりません。現世で支払うのでなければ、来世において支払うことになるでしょう。神の意志に対する甘受の気持の欠如も、まず一番目にこうした過ちのうちに含めなければなりません。なぜなら、もし、私たちが苦労や悲しみに対し不満を持ち、私たちにふさわしいものを受け入れず、神を不公平であると非難するのであれば、苦労が与えてくれる利益を失い、新たな債務を負うことになるからです。それは、私たちが追い立て苦める債権者に少しずつ支払いながら、同時にまた新たな負債を負い、また新しい支払いを始めなければならないのと同じことです。霊の世界に入った人間とは、報酬を受け取りに現れた労働者のようなものです。そのうちの何人かには雇い主が言います。「あなたの働いた分の報酬です」しかし、地上で満たされた者、怠惰な生活をし、幸せを自分勝手な私欲や自尊心のために、また世俗的な快樂に求めてきた者に対して雇い主は言います。「なにも支払うものはありません。なぜなら、あなた達は地上ですでに報酬を受け取っているからです。行きなさい。あなた達の仕事をやり直しなさい。」

十三、人は人生のとらえ方次第で、与えられた試練を軽く感じたり、重く感じたりします。試練の期間が長いと感じれば感じるほど、そこから来る痛みも増します。霊の世界に視点を持ち、地上での物質的な人生というものが、永遠の生命の中のある一瞬でしかないと見ることの出来る者には、その人生の短さを理解することができ、痛みもすぐに過ぎ去ってしまうということが分かるでしょう。近い将来に必ず幸せがやってくるであろうという確信は、苦しむ者に勇気を与え、その支えとなります。悲しむのではなく、彼を進歩させてくれる痛みを、天に向かって感謝することになります。物質的な人生しか目に入らない者には、それがいつまでたっても終わらないものであるかのように見え、悲しみは重くのしかかってきます。霊の世界から人生を見れば、この世のあらゆるものの重要性は薄れてしまいます。人間的な欲望を和らげることによって置かれた立場への満足を得ることができます。人の身分を羨むことがなくなれば、悲運や失望もあまり感じなくなるでしょう。そうした人は、心の平静と甘受の気持ちを持つ事ができるようになり、その気持ちは身体の健康にとっても、ま

た魂にとってもたいへんよい影響を及ぼします。一方、羨みや野心は、短い人生のみじめさや悲しみを増大させその者を苦境に導きます。

自殺と狂気

十四、地上での人生に対する視点を変えることによって得られる心の平静、甘受の気持ち、将来への信念は、霊に心の落ち着きを与えるのですが、そうした心の落ち着きとは、自殺や狂気への最良の予防薬となります。狂気のほとんどは、人間が耐えることのできない苦しみが原因となっています。スピリティズムが教えているように、高い視点からこの世を見ることができるようになると、普通であれば、大きな落胆の原因となるような悲運や失敗を前にしても、それらを冷静に、時には喜びさえ感じて受けとめることができるようになります。同時に、こうした悲しみを乗り越えさせてくれる力が、人間を精神的な動揺から守ってくれるのです。

十五、自殺に関しても同じことが言えます。無意識の自殺と考えられる、泥酔や狂気によっておきる自殺を除けば、各々の直接の動機が何であれ、ほとんどの自殺の原因は人生に対する不満であるといえます。悲しみがたった一日だけのものであり、次の日には必ず幸せがくるのだと確信できる人は、容易に我慢することができます。そうした人は、この世の悲しみに終わりが無いと思わない限り、絶望することはありません。永遠の生命の中で、人間の一生とはどのようなものなのでしょう。それは、ほんの一日よりもさらに短いものなのです。それにもかかわらず、すべてが一生のうちこの世の中が終わると考えて、いやなことや失敗を悲観し、永遠の生命を信じない者は、死ぬことのみによって悲しみから救われると考えるのです。そして、この世におけるどんな解決も期待できないまま、悲しみを自殺によって短縮することが自然で論理的であると考えられるのです。

十六、神を信じなかったり、将来への単純な疑問、唯物主義的な考えを持つことは、人を自殺に導く大きな刺激となり得ます。なぜならそうした考えは、道徳の弱体化をもたらすからです。自分の知識の権威に支えられたある有能な人が、人間の死後にはなにも存在しないということを、彼の聴衆や読者たちに対して納得させようとしているとしたら、それは、「不幸であるのなら自殺してしまいなさい」といっているのと同じことではないでしょうか。この有能な人は、彼の聴衆や読者たちが自殺しないために何と言ってあげることができるのでしょうか。自殺しないことによって、何を達成することができるかと教えてあげることができるのでしょうか。どんな希望を与えることができるのでしょうか。

「無」以外なにもありません。不幸な者に与えられる英雄的な唯一の救いであり希望が「無」なのであれば、悲しみが増す前に、すぐにでも「無」のなかに身を投じたほうが利口であると、必然的に結論が出てしまいます。したがって、唯物主義的な考えは、自殺の肯定を多くの人に伝えることになる毒なのです。そして、唯物主義者たちは重大な責任を負うことになるのです。スピリティズムに生命の謎は存在しません。そのことによって、私たちの人生への視点は変えられます。スピリティズムを信じる者は、生命は死を越え、まったく新しい形で、無限に続くということを知っています。そうした理解は、私たちに忍耐と甘受の気持ちを与えてくれ、私たちを自然に自殺から遠ざけてくれます。また、そこから私たちの中に道徳的な勇気が生まれるのです。

十七、自殺の問題に関し、スピリティズムは、もうひとつの有益で、より決定的な結果をもたらしてくれます。スピリティズムは、自殺した人の死後の不幸な状態を見せてくれ、誰も罰せられることなく神の法則を破ることはできないのだということを証明してくれます。神は、人間が自分に与えられた人生を短縮することを禁じています。自殺した者の味わう悲しみは永遠ではなく、一時的なものですが、だからといって、それが恐ろしいものではないということではありません。神の命令が下る前にこの世を去ろうとする者がその実態を知ることができれば、誰であってももう一度考え直したくなるような恐ろしいものなのです。このように、スピリティズムを信じる者は、自殺に反対する多くの理由を持っています。地球上に生きる間に甘受し、堪え忍んだ悲しみが大きければ大きいほど、幸せにすることのできる未来の生命への確信。人生を短縮することが、期待する結果とはまったく反対の結果を生むという確信。悲しみから逃れても、さらに恐ろしく、長引くことになる苦境へ追いやられるだけであるという確信。自分を死に追いやれば、より早く天国へ行けると考えることが誤ってい

るといふ確信。自殺は霊の世界で愛する者と再会する上で障害となるという確信。これらすべてが、自殺が失望しかもたらさず、自分達の関心とは相反しているものであると結論づけてくれるのです。スピリティズムが改心させる自殺願望者の数は非常に大きなものです。もし、すべての人がスピリティズムの考えを信じるようになれば、意識的な自殺者はいなくなるでしょう。自殺に関して、唯物主義とスピリティズムの教義のそれぞれがもたらす結果を比べるならば、一方の理論は自殺を促し、一方の理論は自殺を防ぐのだということがわかり、そのことは経験からも証明されています。

霊たちからの指導 — 善い苦しみ、悪い苦しみ

十八、キリストは「苦しむ者は幸いです。天の御国はその人のものだからです」と言いましたが、それは苦しむ者すべてについて触れたものではありません。なぜなら、地球上に生きる者は、わらの上に寝ようと、王位に就こうと、その度合いは違っていても、みな苦しむからです。しかし悲しむべきことに、良い苦しみを知るものはあまりにも少なすぎます。試練をよく耐え抜いて初めて天の御国に導かれるのだということを、ほんのひと握りの人たちがしか理解していません。苦しみの前に落胆してしまうことは誤りであり、神は、勇気に欠ける者を慰めてはくれませんが、それだけでは充分ではありません。厚い信仰の基礎には神の優しさによせる固い信頼がなければなりません。神は弱い肩の上に重荷をおくことはない、ということを何度も聞かれたことがあるでしょう。重荷は常にそれに耐える力に応じて置かれるのです。それは、甘受と勇気に応じて報いが得られるのと同じです。苦しみが多ければ多いほど、得ることのできる報いも大きくなります。しかし、その報いを受けるには、私たち自身がそれに値しなければなりません。だからこそ、人生には試練があふれているのです。戦線に送り込まれない兵士は基地に待機し、休憩をしては向上できないと不満を持ちます。そのような兵士達のようにになりなさい。体を衰弱させ、魂を麻痺させてしまうだけの休息を望んではなりません。神があなただけを戦いへ送り込んだのであれば、満足しなければなりません。なぜなら、その戦いとは、戦場での戦いではなく、人生の苦しさとの戦いのことだからです。そこでは、流血の戦いよりも勇気が必要となる場合があります。なぜなら、そこでは、戦場でしっかりと敵の前に立てる者でさえ、道徳的な痛みで苦しめられると、屈してしまうからです。こうした勇気に対して、人間は地上で報酬を受けることはできません。しかし神は勲章や栄光のある場所を用意し、待っていてくれるのです。心配や不満のきっかけとなる苦しみにつかまってしまったら、それを乗り越えようと努力しなさい。我慢しきれないほどの激しい苦しみである怒りや落胆を克服したときには、自信を持って、「私の方が強かったのだ」と言い聞かせましょう。「苦しむ者は幸いです」は、次のように理解することができます。「その信仰の強さ、決心の固さ、辛抱強さ、そして神の意志に従うことを試された時に、それを証明できたものは幸いです。なぜなら、そうした者は地上で逃すことになる喜びを百倍にして与えられるからです。そして、働いた後には、休憩できる時が与えられるでしょう。」（ラコルデール、ルアーブル、一八六三）

悪とその薬

十九、地球は、喜びと楽しみにあふれる楽園なのではないでしょうか。預言者たちの声はもうあなた達の耳には残っていないのでしょうか。イエスはこの苦しみの谷に生まれる者には、涙を流し、歯ぎしりをしなければならぬ時が来るということを宣告しませんでしたか。そうなのであれば、ここに住む者は誰もが苦い涙と苦しみを覚悟しなければなりません。その苦しみがどんなに深く鋭くとも、天を見上げ私たちに試練を与えることを望んでいる神に感謝しようではありませんか。人類よ、神があなただけの体の傷を癒し、あなたのおくる日々を美と富とで飾ってくれた時以外に、神の偉大なる力を認めることができますか。あなたを栄光で飾り、輝きと潔白を与えてくれた時以外に、神の愛を感じることはできますか。あなたは、模範として与えられた者の真似をするべきでしょう。イエスは、惨めさと悲しさのどん底にあった時、肥やしのある山の上に体を横たえて神に言いました。「主よ、私は富むことすべての喜びを知りました。そして、まったくの貧窮に私を送ってくださいました。有り難うございます。あなたのしもべを試そうしていただき、有り難うございます」死によって限りのある地平線ばかりをいつまであなたは見つめているのですか。あなたの魂はいつになれば棺の向こう側に向かっていくのですか。一方、もしこの生涯を、苦しみ、泣き続けたとしても、甘受、信仰、愛をもって悲

しむ者に与えられる永遠の栄光に比べれば、それがいったいなになるのでしょうか。神が準備してくれる未来への慰めを求めましょう。また、あなたの苦悩の原因を過去に求めましょう。そして、最も苦しんだと感じる者は、祝福された者であると感じましょう。死を迎え、宇宙をさまよっていた時、あなたは自分が耐えきれぬであろう試練を選択したのです。なぜ今になって不満を言わなければならないのですか。あなたは、誘惑と戦い、克服しようと望み、富と栄光を求めたのです。精神的、肉体的な悪に対し、全身全霊で戦いたいと望み、その試練が大きければ大きいほど、勝利を得た時の栄光は偉大であることを知っていたはずですが。たとえ体は肥やしの上の山の上に終わり、死を迎えたとしても、勝利をおさめることができたならば、苦悩と悲しみによる洗礼を受けた潔白に輝く魂を放つことになるのです。残酷な憑依、死に追いつめるような悪に攻撃された者にどんな薬を与えてあげることができるのでしょうか。間違いなく効く薬は、たったひとつしかありません。それは、天に通じる信仰を持つことです。最も激しく痛ましい苦しみのまっただ中で神への賛美の歌を口ずさみなさい。そうすれば、あなたの横にいる天の使いが、救いの道とあなたがいずれたどり着くことになる場所を示してくれます。信仰こそが苦しみの唯一の薬です。信仰は常に永遠なる地平線の方向を示してくれ、現在の日々を幾日も覆っていた雲を追い払ってくれます。病気、傷、試練、苦勞の薬を求めてはなりません。信じる者は信仰という薬によって力づけられ、その薬の効力を信じない者は、たとえ一瞬であっても、直ちに苦痛や悲しみを味わい、罰を受けることになるのです。神は神を信じる者には目印をつけています。キリストは、信仰だけで山をも動かすことができると言いました。わたしは言います。苦しんでいようと、自分自身を支えるだけの信仰がある者は神の加護を受け、苦しみを感じなくなります。最大の痛みの時間が幸せな永遠のメロディーの前奏の音符のように聞こえてきます。魂はそうやって体から離れて行き、後から来る者がまだ地上でもがき苦しんでいる時、天の国に滑りこみ、天の使いたちと一緒に神の栄光と神への感謝を賛美して歌うのです。悲しみ、涙を流す者は幸いです。神が祝福を積んでくれるので彼らの魂は幸せです。（聖アゴスティーヌ、パリ、一八六三）

幸せはこの世のものではありません

二十、私は幸せではない、幸せとは私のためにあるものではない、と一般に人はどんな社会的階層に属していても訴えます。親愛なる子供達よ、このことは、「コヘレトの言葉」の金言「幸せはこの世のものではありません」が真実であることを、どんな推論よりもはっきりと示しています。まことに、どんな財産も、どんな権力も、青春の盛りも、幸せの本質的な条件ではありません。多くの人が切望するように、たとえこれらを三つとも持っていたとしても幸せにはなれないでしょう。と言うのも、特権階級の中でさえも、色々な年齢の人がその置かれた生活環境を嘆いているからです。こうした事実があるにもかかわらず、労働者階級の人々が、富に恵まれた階級を非常に強くあこがれ羨むのはなんとも理解しがたいものです。この世においては、誰であったとしてもそれぞれに与えられた労苦と貧困があり、苦しみと誤りの分け前があるのです。そのことから、地球とは試練と償いの場所であるという結論にたどりつくのは容易です。そうであるならば、地球が人類にとって唯一の住処であり、そこでの一回の人生において、自分の持ち合わせた可能性の中での最大限の幸せを得ることが許されているのだと信じる者は、騙されているのであり、その者に耳を傾ける者を騙すことになるのです。何世紀にもわたる経験からも、この地球上で人間の完全なる幸せを得るための必要条件がそろふことは異例である、ということをお思い出し下さい。一般的な意味としては、幸せとは理想郷（ユートピア）のことであり、決してそこにたどりつくことなく、何世代にもわたって探し続ける所であると考えられます。なぜなら、この世では賢者というものが珍しいものであるように、本当に幸せな人を見つけるのはさらに大変であるからです。地上で、分別をもって生きて行かぬ者にとって、幸せとは非常にはかないものです。一年、一ヶ月、一週間の完全な満足を感じたとしても、残りの人生は苦しみや落胆の連続となるでしょう。親愛なる子ども達よ、私は、一般の人たちが羨む地上での幸福について述べているのだということをお覚えておいて下さい。そうしたことから結論づけると、地上での住処が試練と償いの場であるならば、この世の他にも、人間の霊が依然として物質的な体の拘束を受けながらも、人間の生活に固有の喜びを完全な状態で味わうことができるような、よりすばらしい住処が存在することを認めなければなりません。そうであるからこそ、神は星雲のかなたに、より高等で美しい惑星をつくったのです。そして、あなた達はその努力とその性向のために、そこへ行くにふ

さわしくなるまで浄化され、完成された時、その星に引きつけられて行くことになるのです。しかし、私のことばかり地球は悔悟だけのために存在するのだと結論してはいけません。決してそうではないのです。将来の地球の進歩がどれほどのものとなりうるのか、やがて訪れることになる、新しく満たされ、さらに改められた社会とはどのようなものなのか、地球が過去において既に成し遂げた進歩や、社会的な向上からそれらを想像するのはたやすいことです。これが、霊たちによって明らかにされた新しい教義であるスピリティズムのもつ大きな役割なのです。親愛なる子供達よ、聖なる競争心に刺激され、あなた達一人一人が精力的に自己の改革に取り組めますように。既にあなた自身を改革しつつあるスピリティズムを広めることに全身を捧げなさい。この神聖なる光の中にあなたの兄弟達を招き入れることがあなたに課された任務です。親愛なる子供達よ。仕事にとりかかりましょう。この厳粛な集まりにおいて、あなた達の心をひとつにし、将来を担う未来の世代のために、幸せという言葉が無駄にならないような世の中を築き上げるといふ大きな目標を掲げるのです。（モルロー枢機卿、フランソワ・ニコラ・マドレーヌ、パリ、一八六三）

愛する人の死 早すぎた死

二十一、死があなた達の家族を襲い、年の区別なしに若い者を年老いた者より先に連れて行った時、あなた達はよく次のように言います。「神は不公平だ。まだ先の長い、強い者を連れて行き、もう長い年月を生き、落胆ばかりしてきた者が置いて行かれてしまった。役に立つ者が連れて行かれ、もう役に立たなくなってしまう者が取り残されてしまった。喜びのすべてであった罪のない子供を奪い、母親の心を傷つけた」人類よ、このようなことに対してこそ、あなたたちはその考えを持ち上げ、最善なことというものが多くの場合あなたたちの見逃している、死すべき運命の中に存在しているのだということを理解する必要があります。なぜあなた達の基準で神の正義をはかろうとするのですか。宇宙の神がそのきまぐれで、あなた達に残酷な痛みを与えるなどと考えられますか。何事も知的な目的なくして行われることはなく、すべての出来事にはその理由があるのです。あなたにふりかかるすべての困難をよりよく調べて見ることができれば、そこには必ず神の決めた理由、あなたに改心を促す理由があることがわかります。それを理解することができれば、あなたたちのみじめな関心事というものが、それに比べれば二次的なものであることがわかり、あなたはそれを後回しにすることになるでしょう。私が述べることを信じて下さい。二十歳の者にとっても、尊敬すべき家系の面目をつぶしたり、母親を悲しませ、父親の頭を早く白くさせてしまうような不品行よりは、死は選択されるべきものなのです。早すぎる死はほとんどの場合、神によって与えられる恩恵であり、それによってその者を人生の惨めさや、その者を破滅に導くような誘惑から遠ざけてくれるのです。人生の真っ盛りにある者の死は、運命の犠牲者ではなく、神がこれ以上地上にいるべきではないと判断した者なのです。希望に満ちあふれる者の命があまりにも早く断ち切られてしまうことは悲劇であるである、とあなたは言うでしょう。しかし、その希望とは、どんな希望のことを言っているのですか。地上の希望、それによって輝き、その経歴と富を築く希望のことですか。いつも物質的な世界から脱却することのできない狭い視界で物事をとらえているのではありませんか。希望にあふれていたとあなたが言うその人の運命が実際にはどうであったのか、あなたは知っているのですか。それが苦しみにあふれたものではなかったとどうして言い切ることができるのでしょうか。未来の人生への希望を無視し、後に残した地上でのつかの間の人生をより望むのですか。至福の霊たちの間に獲得することになる地位よりも、人間の間に占めることのできた地位のほうが大切だと考えるのですか。この惨めな谷底から、神があなたの子供を連れて行っても、泣くのではなく、喜ぼうではありませんか。その子供に、私たちと一緒に苦しむために残れというのは、自分勝手ではないでしょうか。ああ、信心を持たぬ者の抱く悲しみ、死を永遠の別れだと考える者の悲しみ。しかしあなた達スピリティズムを学ぶ者は、魂は肉体の包みから解放された時の方が、あなたの霊はよりいきいきとすることができることを知っています。母親達よ、あなたの愛する子は、あなたのすぐ近くにいるのです。すぐ近くにおいて、そのフルイドの体はあなたをとりまき、その考えはあなたを守ってくれているのです。その子へのあなたの良い思い出は、その子を満足させるのです。しかし、同時にあなたの悲しみは、その子を悲しめる原因となるのです。なぜなら、それはあなたが信心に欠けていることの証拠であり、神意に反することであるからです。霊界での生活を理解するあなた達は、愛する者たちを呼ぶあなたの心臓の鼓動に耳を傾けて見てごらんください。彼らが神によって祝福されるようにあなた達が願う時、あなたの

涙を乾かしてくれる心強い慰めをあなたの中に感じることができるでしょう。そして、その偉大なる希望は神により約束された未来を見せてくれるでしょう。（もとパリ＝スピリティズム協会のメンバー、サンソン、一八六三）

善人であれば死んでいた

二十二、ある危険から逃れた悪者を見て、善人であれば死んでいた、などとよく言います。これは確かに真実だと言うことができるでしょう。なぜなら、神は多くの場合、善い霊にはその功勞の代償として、できるだけ短い試練を与えるのに対し、若い進歩しつつある霊には、より長い試練を与えるからです。しかし、だからと言ってこのように言うことは神に対する冒瀆です。悪者の隣に住むある善人が死んだとします。あなた達は、「あっちが死んでいればよかったのに」などとすぐに言いません。そのときあなたは大きな間違いを犯しています。死んで行く者はその任務を終えたのであり、残った者はたぶんその任務を開始さえもしていないのです。それなのに、なぜ悪者にその任務を終わらせるための時間が与えられないことを望み、善人がこの地上にとどまることを望むのですか。刑期を終えたのに刑務所に残らなければならない囚人と、一方で権利を持たないのに自由を与えられた囚人を見て何を考えますか。本当の自由とは肉体からの解放であり、地上にいる間は、収容所にいるのだということを覚えておかなければなりません。理解できないことについてとやかく言うのはやめましょう。すべてにおいて公平である神を信じましょう。あなた達に悪く見えることが、しばしば善いことでありえます。しかし、あなた達の能力はあまりにも制限されているため、あなた達の鈍い感覚では大きな全体像をすべてとらえることができないのです。あなたの考えによって、この小さな地球を乗り越えられるよう努力しましょう。考えを高く持ち上げるにつれて、地上の重要性というものがかんたんに小さくなって行きます。なぜなら、この地上における人生とは、霊としての真なる唯一の永続的な命の前には、単なる小さなひとつの出来事ではないからです。（フェヌロン、サンス、一八六一）

志願して受ける苦痛

二十三、人間は絶え間なく幸せを求めています、その幸せはいつも逃げて行ってしまいます。それは、地上において純粋な幸せは存在しないからです。しかし、生きている間、避けて通ることのできない様々な出来事をもたらす人生の浮き沈みはあるものの、相対的な幸せというものは得ることができます。ところが、そうした幸せも、不滅の最高の幸せをもたらす魂の喜びの中に求めずに、消滅しうるものや物質的な満足に求めるのであれば、それはまた、人生の浮き沈みの犠牲となってしまいます。この世の真なる幸せである心の平静を求めずに、動揺と負担をもたらす物に幸せを求めていることになるのです。そう考えると、興味深いことに、人間は自分だけの力で避けることができたはずの苦痛を、自ら招いているのだということがわかります。妬みや羨みによって生まれる苦痛ほど苦しいものがあるでしょうか。羨ましがる者、嫉妬深い者は、苦痛から休まる暇はありません。どちらも、絶え間なく、引くことのない熱に悩まされます。他人の物を欲しがるとは不眠の原因となります。ライバルの成功には気を惑わされます。他人を上回ることにしか関心が無く、同じ様に妬み深い他人に、自分に対する嫉妬を抱かせることによってその人は喜びを得ているのです。かわいそうな、愚かな者たちよ。その者の人生を毒する嫉妬の対象となっている無益な物を、もしかしたら明日、すべて失わなければならないかも知れないということを忘れてしまっているのです。「苦しむ者は幸いです。なぜなら、慰められるからです」という言葉は彼らにはあてはまりません。なぜなら、彼らの関心事は天において報われるものではないからです。反対に、既に得た物によって満足することを知っている者は、なんと多くの苦悩を避けることができるのでしょうか。自分の所有しないものを羨むことなしに見ることができ、実際の自分以上に自分を見せようとはしません。自分の上を見るのではなく、常に自分より少なく所有している者、自分より下を見るので、いつも豊かであると感じることができるのです。ばかげた欲求を生み出したりはせず、いつも平静を保つことができます。人生の苦悩の合間に感じることでできるそうした心の平静は、ある種の幸せだということができるのではないのでしょうか。（フェヌロン、リヨン、一八六〇）

本当の不幸

二十四、すべての人が不幸について語ります。すべての者がそれを経験したことがあり、その様々な様相を知っている思っています。しかし、あなた達に申し上げます。ほとんどすべての人が誤解をしているのです。なぜなら、本当の不幸とは、人間が考えるもの、つまり、不幸と感じている人々が考えるものと、まったく違っているからです。貧しくみじめな生活、火のともらぬ暖炉、せき立てる債権者、明るく微笑んでいた赤ん坊のなくなったゆりかご、涙や、悲しむ心に見送られる棺、裏切られた苦しみ、高貴な衣装に身を包みたくとも貧しさに妨げられ、その貧しい身体に見栄をまとうプライドの高い者、これらすべてを、また、これら以外にも多くのことを、人間の言葉では、不幸と呼びます。まったく、現在しか見ることの出来ない者にとっては、それは不幸であることに違いはありません。しかし、本当の不幸とはそのこと自体ではなく、それがもたらす結果の中に存在するのです。今の瞬間には最も幸せな出来事が、後になって不幸な結果をもたらすのだとすると、見かけは不幸でも後に善いことをもたらす事に比べ、実際にはより不幸であるということができるとはではないでしょうか。木々をなぎ倒しながら、死を招くような不健康な有毒ガスを散らし、その環境を清める嵐は、不幸というよりは幸いであるということができるのではないのでしょうか。ある出来事を判断する時には、その出来事のもたらす結果について見る必要があります。人間にとって何が本当に幸せで、何が本当に不幸であるのかを知るには、この世の向こう側まで行って見なければなりません。なぜなら、地上での出来事の結果というものは、そこへ行ってから表れることになるからです。つまり、あなたの狭い視界に不幸として写るものは、人生の終わりとともに消滅し、その償いを未来の人生において受けることができるのです。新しい形の不幸、つまり、あなたの錯覚した魂がそのすべての力を使って求める、美しく、華々しい出来事に隠された不幸というものを示しましょう。不幸とは、喜び、満足、名声、不毛な心配、良心を窒息させ、考えを圧迫し、人の未来というものに疑問をもたせるような、虚栄心を満たす大胆な満足のことです。不幸とは、人間が最も熱烈に求める、忘却のアヘンをとることなのです。泣く者よ、希望を持ちなさい。笑うものは、震えなさい。なぜなら、肉体で満足を得ているからです。神を欺くことはできません。誰もその行き先から逃れることはできません。試練は、貧困に耐えられずに後を追いかけてくる浮浪者よりも非情な取り立て人のように、あなた達の後を追って来ます。あなた達が休息時間と錯覚している間にも、攻撃してくる時を狙っており、突然あなた達を本当の不幸に陥れ、エゴと無関心によって弱められたあなた達の魂を驚かすのです。スピリティズムが真なる光によって、あなた達の無知によってひどく変形されてしまった真実と偽りを、はっきりともと通りに示してくれますように。そうすればあなた達は、栄光も進歩ももたらすことのない平和よりも、危険な戦いを望む勇敢な兵士のように行動することができるようになるのです。栄光の勝利を得ることができるのであれば、戦闘中に武器、装備、衣類を失おうと、その兵士にとって何なのだというのでしょうか。未来を信じる者にとって、その魂が天の国に入り、輝くことができるのであれば、戦場に命を落とし、財産、肉体を失うことが何なのだというのでしょうか。(デルフィーヌ・デュ・ジラルダン、パリ、一八六一)

憂鬱

二十五、あなた達は、なぜ時々、心の中に悲しみが押し寄せてきて、人生がとても苦いものを感じるのか知っていますか。それは、あなた達の霊が幸福と自由を熱心に求めようとしても、牢屋のような肉体の中に閉じ込められているため、そこから解放されたくとも解放されず、無駄な努力を繰り返すことにくたびれてしまうからなのです。そうした努力をすることが無意味である事を知ると、やる気を失い、すると、その影響は肉体にも及び、虚脱感、意気消沈、無気力に占拠され、あなた達は不幸に陥ってしまうのです。私が言うことを信じ、あなたの意欲を弱体化させるこうした気持ちに、精力的に抵抗しなさい。よりよい人生を熱望する気持ちは、すべての人間の霊に生まれつき備わったものですが、それをこの世に求めてはなりません。今日、神はあなた達のために善霊たちを送り、あなた達のために用意された幸せを教えてくれるようにしてくれたのです。自由の天使を辛抱強く待つのです。彼らはあなた達の霊を拘束し続けるものから解放してくれるのです。あなた達が地球上にいる間は、家族のために身を捧げたり、神によって与えられた様々な義務を行うといった、もは

や疑ってはならない、あなたにまかされた使命を果たさねばならないのだと考えなければならないのです。そしてもしこの試練の間、あなた達の役割を遂行する途中に、心配、不安、苦悩が降りかかってくるのであれば、強く、勇気をもってそれに耐えなければなりません。決断を固め、立ち向かって行きなさい。きっとそれは短期間に終わり、その結果、あなた達の到着を喜んで迎え、共に泣いてくれる友達の所へあなた達を導いてくれるでしょう。そして彼らはあなた達の前に腕を広げ、地上の苦しみの届かない所まで、あなた達を連れて行ってくれるでしょう。（フランソワ・デュ・ジュネーブ、ボルドー）

志願した試練、本当の苦行

二十六、試練を易しくすることは許されているのですか、とあなた達は訪ねます。この質問は次のような質問を思い出させます。「溺れる者が助かろうとすることが許されていますか」「とげに刺された者はそのとげを抜こうとすることが許されていますか」「病気にかった者が医者を呼ぶことが許されていますか」ふりかかる試練はあなた達にその忍耐、甘受の気持ちだけでなく、知性をも働かせることを目的としているのです。ある人は悲痛で困難な状況に生まれてきますが、そのことはまさにその人に困難に打ち勝つ方法を考えさせることになります。避けることのできない困難がもたらした結果を不満をこぼすことなく耐え、戦い続け、それがうまく行かなかったとしても挫折してしまわないところに、試練を受けることのメリットがあるのです。いかなることも、手を施すことなく、そのままにするのでは、それは美德というよりは怠慢でしかありません。同じ質問は、さらにもうひとつの質問を思い起こさせます。すなわち、『イエスが「苦しむ者は幸いです」と言ったのであれば、自ら志願し、さらに苦しみを強めることにメリットはありますか』その質問に対し、私ははっきりと答えます。「はい。そうした苦しみというものが隣人のためのものなのであれば、それは大きなメリットです。なぜなら、それは自分を犠牲とした慈善の行いであるからです。しかし、そうした苦しみというものが、その者だけのためであるならば、メリットはありません。なぜなら、そうした苦しみとは、熱狂することによって生まれる、単なるエゴイズムの結果でしかないからです。」大きく区別をする必要があります。あなた達自身は、神によって与えられた試練を有り難く受け入れねばならないのですが、既に重く感じている物を更に重くする必要はありません。不平ではなく、信心をもってそれらを受け入れなさい。神があなた達に望んでいることは、既にあなた達が受けているものだけなのです。無駄な喪失や目的のない苦行によってあなた達の体を痛めつけてはなりません。なぜなら、あなた達は地上における任務を遂行するために、全身の力を必要としているからです。あなた達を支え、強めてくれるあなた達の体を痛めつけ、自発的に自分を苦しめることは、神の法を犯すことです。濫用することなく使わねばなりません。それが神の法なのです。優れたものを濫用することは罰に値し、避けることのできない結果を生みます。一方で、隣人の苦しみを軽減してあげるために受ける苦しみがあります。自分は寒さと飢えに耐え、必要としている者に衣服を与え、飢えを癒してあげることができるのであれば、あなたの体はそのことによって苦しみますが、その犠牲は神によって祝福されます。居心地の良いあなた達の家を出て、汚れ、荒れ果てた小屋まで慰めを運んで行きなさい。あなた達の繊細な手を、病む者を治すことによって汚しなさい。眠気を我慢し、病気の兄弟の枕元に夜通し看病をしてあげなさい。あなた達は、その健康な体を善行に捧げることになり、そのことによってあなた達は本当の苦行を行ったことになるのです。その苦行は、神の祝福を得ることができる本当の苦行です。なぜなら、あなた達の心の涙は、この世の喜びによって乾かされることはないからです。あなた達は魂を弱める富がもたらす大きな喜びに溺れるのではなく、貧しい者に慰安を与える天使となったのです。では、誘惑を避けるために孤独に生きようとする世を逃れた者にとって、その者の地球上での役目は何なのでしょう。試練に立ち向かう勇気はどこにあるのですか。戦いから避け、格闘から逃れているのではありませんか。苦行を行いたいのであれば、あなたの肉体ではなく、魂で行わねばなりません。あなた達の身体ではなく、魂を制しなさい。あなた達の誇りに鞭を打ち、不平を言わずに辱めを受けなさい。自分への愛を痛めつけなさい。肉体の痛みよりきつい、侮辱や中傷の痛みを耐え、無感覚となりなさい。それが本当の苦行です。そこで負う傷は神によって数えられています。なぜなら、それは神の意志に従おうとするあなたの意欲と勇気を証明するものだからです。（ある守護霊、パリ、一八六三）

二十七、隣人の試練は、可能であれば終りにしてあげるのがよいのでしょうか。それとも、神の意志を重んじ、その隣人にその試練を受けさせてあげるのがよいのでしょうか。

既にあなた達には申し上げ、幾度も繰り返しました。あなた達は償いの世界において受けるべき試練を遂行しようとしているのです。そこで起きるすべての事があなた達の過去の人生がもたらした結果であり、払い残した債務なのです。しかし、このことからある一部の人達は、不幸な結果をもたらすことになる、避けるべきつまらぬ考えを持ちます。ある一部の人達は、地球上に償いのために生きている以上、様々な試練が計画された通りに実行されることが必要なのだと考えています。また一方で、それらの試練を軽減させるどころか、より有益となるように、それらをよりきついものにするべきだと考えるのです。しかし、それは大きな間違いです。確かにあなた達の試練は神の計画された通りに実行されるべきものです。しかし、あなた達は神がどのような計画を立てたのか知っているのですか。それらの試練がどこまで続くものなのか知っているのですか。あなた達の慈悲深い父は、あなたの兄弟が苦しむのを見て、「それ以上苦しむ必要はありません」と言ってくれるのだとしたらどうでしょうか。虐待の手段として、罪を負う者をさらに苦しめるためではなく、苦しむ者のための慰安の薬となり、あなた達の正義によって開いた傷口をふさいであげるために、神はあなた達を選んだのだということを知っていますか。だから、傷ついた兄弟を見て、「神の正義によって苦しんでいるのだ。それに従いなさい」など言うことがあってはなりません。そうではなく、反対に、「慈悲深い父は、兄弟を助けるためにどのような方法を私に与えてくれたのだろう。私の道徳的な慰め、物質的な援助、忠告によって、力、忍耐、甘受の気持ちを与え、その試練に打ち勝てるようにしてあげることができないだろうか。神はその苦しみに終わりをもたらすものとして、私をここに遣わしたのではないだろうか。」と言わなければなりません。「私にとっても試練や償いとして、その苦しみを葬り、平和の祝福と置き換える力を与えてくれたのではないだろうか」と。お互いの試練において、お互いに助け合いなさい。決して拷問の手段となってはなりません。心の優しい者は皆、特にスピリティズムを学ぶ者であるならば、このように考えなければなりません。なぜなら、スピリティズムを学ぶ者は、他の者より増して、神の無限なる善意の広がり理解しなければならぬからです。スピリティズムを学ぶ者は、その人生は愛と献身の実践でなければならず、神の決意に反する時には、神の正義によって処されるのだと考えなければなりません。スピリティズムを学ぶ者は、恐れることなく全力で試練の苦しみを軽減するように努めなければなりません。なぜなら、神だけが、試練を終わりとすべきか延長すべきかを判断することのできる存在であるからです。傷口にさえも銃を突きつける権利があると考えるのは、人間の高すぎる自尊心の表れであると言えるのではないのでしょうか。試練であるという口実のもとに、苦しむ者に更に多くの毒を盛ってはいませんか。ああ、あなた達は苦しみを和らげる手段として選ばれたのだと思いなさい。次のようにまとめることができます。「すべての人が償うためにこの地球にいるのです。しかし、あなた達の兄弟の受ける苦しみは、愛と慈善の法に沿って、いかなる苦しみを例外なく和らげてあげられることができるよう全力を尽くしなさい。」
(守護霊、ベルナルダン、、ボルドー、一八六三)

二十八、ある人が苦悶し、残酷な苦しみの餌食となっています。その人は既に絶望的な状況に追い込まれていることがわかります。苦悶の時間から少しでも逃れることができるように、その人の最期を短縮してあげることが許されていますか。

神の計画を予知する権利を、誰があなたに与えてくれるとお思いですか。ある人を墓の一步手前まで歩ませ、その後すぐにそこからひき戻すことによって、その人が自ら考えを改めるようにさせることが、神にできることではないのでしょうか。瀕死の人が、死のどれだけ手前にまで行っていようと、誰にもはっきりとその人の最期の到来を断言することはできません。これまでに科学が、その予知を間違えたことがありませんでしたか。理性によって、絶望的と考えられるケースが存在することはよく知っています。しかし、命や健康を完全に取り戻さなかったとしても、息を引き取る直前に突然回復し、少しの間、活力と感覚を取り戻すことがよくありませんか。そうです。その病人に与えられるその貴重な一瞬は、彼にとって最も重要な時間となりうるのです。苦痛に痙攣する間、その人の霊が省みるものが何であるのか、また、そうした間の一瞬の反省が、その人をどれだけの苦しみから解放してくれるのか、あなた達は知ろうともしないのです。肉体のことしか考えない唯物主義者には、魂

の存在など考慮に入れることは出来ず、以上のようなことを理解することができません。しかし、スピリティズムを学ぶ者は、墓の向こうに何があるのかを知っており、最期の思いの重要性というものを知っています。最期の苦痛をできる限り和らげてあげなさい。しかし、たとえ一分であったとしても、命を短縮させてあげようなどという考えは遠ざけなさい。なぜなら、その最期の一分によって、その人は将来多くの涙を流さずに済むことになるかもしれないからです。

(聖王ルイ、パリ、一八六〇)

二十九、生きることが嫌になってしまった者が、自殺はしないまでも、自分の死を何かの役に立てようと、死を求めて戦場へ出かけて行くことに罪はありますか。

ある人が自殺しようと、自分を人に殺させようと、いずれにしてもその目的は人生を短縮することにあります。それゆえ、実際に自殺をしなくとも、意図的な自殺をしたことになりえるのです。自分の死が何かの役に立つだろうなどと言う考えは錯覚でしかありません。それは単なる言い訳であって、罪深い行動であることを隠し、自分自身の目をごまかして責任逃れをしているに過ぎないのです。もしその人が真剣に母国のために身を捧げたいのであれば、母国を守ろうために生き延びようとするはずであり、死のうとはしません。なぜなら、一度死んでしまえば、もう何の役にも立たないからです。本当の献身とは、役に立とうとする時に死を恐れずに危険に立ち向かい、必要であれば、命を捨てることに前もってこだわることなく、その犠牲をも捧げることです。しかし、最初から死を求め、危険な場所、危険な任務に自分を置くのであれば、その行動に真なる功労はないこととなります。(聖王ルイ、パリ、一八六〇)

三十、ある人の命を救おうとし、死ぬことを覚悟で切迫した危険に身を投じることは、自殺と考えることはできますか。

そうしたとき、そこに死を求める意志がないのですから、自殺とは考えられません。死ぬ確信があったとしても、そうさせるものは献身と無我の気持ちです。しかし、この死ぬ確信というものも、誰が持つことができるでしょうか。危篤の状態となった時、神の意が予期せぬ救いの方法を与えてくれないとも限りません。その神意は大砲の砲口に立たされた者さえも救うことができるのではないのでしょうか。また、多くの場合、神意は忍従の気持ちを試すために人を最期の限界まで追いつめ、予測していなかった状況において、致命的な一撃を遠ざけてくれるのです。(聖王ルイ、パリ、一八六〇)

三十一、自分の苦しみを甘受し、自分の未来の幸福のために神の意志に服従する者が、自分だけのために働くことによって、自分の苦しみを他人のために有益なものとすることができますか。

そうした苦しみは、物質的にも道徳的にも他人のために有益なものとなりえます。働くことによって、その人の喪失や犠牲が他人に安楽を与えるのであれば、物質的に有益となることができます。神の意志に服従する態度は、他人への模範となり、道徳的に有益となることができます。スピリティズムを学ぶ者が模範となって示す信仰の力は、不幸な者に甘受の気持ちを持つことを教え、彼らを未来における絶望的な状況や不幸な結果から救うことになるのです。

第六章 救い主キリスト

軽くくびき—約束された救い主 霊たちからの指導—真実の霊の出現

軽くくびき

一、苦しむ者、重荷を負っていると思う者は、皆私のところへ来なさい。私があなたがたの苦しみを和らげてあげます。私のくびきを負い、私が心優しく、へりくだっているのだということを学びなさい。あなた達の魂は休まることができるでしょう。なぜなら、私のくびきは負いやすく、私の荷は軽いからです。（マタイ第十一章一二十八—三十）

二、キリストが人類に教えてくれた通り、貧困、落胆、肉体的苦痛、愛する者の死等、すべての苦しみの慰めは、未来を確信し、神の正義を信じることによって受けることができます。反対に、この人生の向こう側には何も期待せず、あるいはそれに疑問を持っている者の苦しみは、そうした者の上に重くのしかかってくることになり、その苦しさを和らげる望みは一切なくなってしまいます。このことが「疲れた者は私のところへ来なさい。私が疲れを和らげてあげます」とイエスに言わせたのでした。しかし、イエスは、イエスの救援と苦しむ者が幸せを約束されるための条件を決めています。その条件とは、イエスが教えてくれた神の法そのものです。イエスのくびきとはこの法を守ることです。しかしそのくびきは軽く、その法はやさしいのです。なぜなら、その法は愛と慈善の実践を義務とする法だからです。

約束された救い主

三、もしあなたがたが私を愛するなら、あなたがたは私の戒めを守るはずです。私は父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの救い主をあなたがたにお与えになります。その救い主がいつまでもあなたがたとともにおられるためにです。その方は、真実の霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。（ヨハネ第十四章一十五、十七）しかし、救い主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。（ヨハネ第一四章一二十六）

四、イエスはもう一人の救い主の出現を約束しています。それは、当時の世界がまだ知ることのできなかつた真実の霊です。世界はそのことを理解するにはまだ未熟であったのです。神はすべてのことを教え、キリストが述べたことを思い出させるため、真実の霊を送るのです。真実の霊が、後になってすべてを教えるために現れるということは、イエスはすべてを教えることができなかったこととなります。キリストが述べたことを思い出させるために出現するという事は、イエスの教えが忘れられてしまったか、あるいは間違っ理解されてしまったからです。スピリティズムは決められた時代にキリストの約束を守るために現れました。真実の霊がその確立を指導しています。彼は人間に法を守ることを呼びかけています。キリストがたとえ話でしか話さなかったことを理解できるよう、すべてを教えてくれています。キリストは「聞く耳を持つ者だけが聞きなさい」と言いました。スピリティズムは目や耳を開くために現れました。なぜなら、スピリティズムは偶像や装飾を通じて話すのではないからです。意図的にベールで覆われた神秘の謎を解き明かしてくれ、地上で見放された者や苦しむ者すべてに、すべての苦しみには正当なる理由と有益な目的があることを示すことによって、最高の慰安をもたらしてくれるのです。キリストは「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」と言いました。しかし、なぜ苦しまなければいけないのかを知らされずに、どうして苦しむことにより幸せになることができるのでしょうか。スピリティズムは、その理由が過去の人生と、人類が過去の償いを行う場所としての地球自体の行方のなかに存在するというを明らかにしています。また苦みの目的とは、療法となる有益な手段となり、未来の人生における幸せを得るための浄化の手段となることであると示しています。人間は自分が苦しむに値することを理解し、苦しみを正当であ

ると認めることができるようになります。その苦しみが自分の進歩を助けることを知っているの、報酬を約束された労働にとりかかる者のように、不満をこぼすことなく苦しみを受け入れることができるのです。スピリティズムは、未来に対する揺らぐことのない確信を人間に与え、それによってその魂からは疑いの余地さえ失われてしまいます。人間に物事を高い視点から見おろすことを教えてくれ、地上での盛衰の重要性など、スピリティズムの示す光輝く広い地平線の彼方に消え去ってしまうのです。そして未来に待つ幸せへの希望は、道を最後まで歩み続けるための忍耐、甘受の気持ち、勇気を人間に与えてくれるのです。このように、人間がどこから来て、どこへ向かい、そしてなぜ地球上に生まれたのか教え、真なる神の法の原理を思い出させ、信仰と希望による慰安を与えてくれることによって、スピリティズムはイエスが約束した救い主を現実のものとしてくれるのです。

霊たちからの指導 真実の霊の出現

五、かつて道に迷えるイスラエルの民に真実をもたらし、闇を払おうとした時と同じように、私はやって参りました。私の言うことを聞いて下さい。私の言葉が過去においてそうしたように、スピリティズムは無神論者たちに、彼らの頭上には普遍の真実、すなわち、草花を芽生えさせ、波をおこす善なる神、偉大なる神、が君臨しているのだということを教えなければなりません。私は神の教義を示し、また、それを収穫する者として、人類に散らばった善を束にまとめ、「苦しむ者よ、私のところへおいでなさい」と申したのです。

しかし、恩知らずな人達は、私の父の君臨する国へつながる広くまっすぐ延びる道からはずれ、険しい不信仰の小道に迷ってしまったのです。私の父は、人類を全滅させようとしているのではありません。父は、あなた達が、生きる者も死ぬ者もお互いに助けあい、救いあうことを望んでいるのです。死ぬ者とは、肉体の死んでしまった者のことです。なぜなら死は存在しないからです。そして、預言者や伝導者に耳を傾けるのではなく、地上にもはや存在していない者たちがこう叫ぶ声を聞いて下さい。「祈り、信じなさい。死とは生き返ることです。人生とは選択された試練なのです。その試練の中であなた達の耕す美德というものが、杉の木が延びるように育ち、発展するのです。」

弱く、自分の知性の闇を知っている者は、温厚なる神が手渡してくれた灯を遠ざけてはいけません。その灯はあなたの道を照らし、迷える子供達をその父親のふところへ導いてくれるのです。あなた達の惨めさや、また、天国を見上げながら過ちのどん底に落ち、道に迷ってしまった不幸な者たちに手を差し伸べようともしないあなた達のあまりの弱さに、私は深い同情を抱えています。あなた達の目の前で明らかにされることを信じ、愛し、熟考しなさい。良い種と悪い種とを混ぜてはいけません。夢想と現実とを取り違えてはいけません。

スピリティズムを学ぶ者よ、お互いに愛し合いなさい。これが最初の教えです。自分を教育しなさい。それが第二の教えです。すべての真実がキリストの教えの中に存在します。キリスト教の中に根付いてしまった誤りは、すべて人類が生み出したものなのです。ですから、あなた達が何も存在しないと考えていた墓の向こうから、あなた達に向かって訴えてくるのです。「兄弟達よ、何事も消滅するものはないのです。イエス・キリストはすべての悪に打ち勝ったのです。あなた達は、不信仰に打ち勝たねばならないのです」と。(真実の霊、パリ、一八六〇)

六、私は、かわいそうな見捨てられた貧しい者たちを慰め、教えるために参りました。あなた達の甘受の気持ちを試練のレベルまで引き上げよと伝えに来たのです。あなたの痛みはオリーブの園にて神聖なものとされたのですから泣いてもよいのです。泣いて、待てばよいのです。慰安のための天使達が、あなたの涙を拭きにきてくれるからです。働く者たちよ、あなたの道のりを計画しなさい。前日の厳しい道のりを、再びその次の日もまた歩み続けなさい。あなた達の手によってなされる労働は、あなた達の肉体に地上の糧を与えてくれます。しかし、あなた達の魂も忘れられてはいけません。なぜなら神聖なる庭師である私は、あなた達の思考の静まっているとき、あなた達の魂の手入れを行っているからです。あなた達の休む時間がやってきてその日の日課から解放され、目をその日の光に対して閉じた時、私の蒔く貴重な種があなたの中で芽生えるのを感じることができるでしょう。私たちの父の国では、何も失われるものはありません。あなた達の汗、あなた達の苦しみは、より進んだ世界においてあなた達を豊かにしてくれる宝となるのです。その世界では、光が闇に取ってかわり、あなた達の中で最も質素な者がきつと最も輝かしくなるでしょう。まことに申し上げます。自分達の

重荷を背負い、その兄弟達を助ける者たちこそが私の愛する者たちです。反抗による過ちを消し、人間の試練の崇高なる目的を教えてくれる貴重な教義をもって自分自身を教育しなさい。風が吹いて埃を追い払うように、霊たちの一吹きによって地上の富を得た者たちに対するあなた達の羨みが吹き飛ばされて行きますように。地上の富を得た者たちとは、たいてい最も惨めな者たちであるのです。なぜなら、彼らの試練はあなた達の試練に比べて、より危険であるからです。私はあなた達とともにあります。私の使徒達はあなた達に教えます。愛の生きた泉に愛を求めなさい。人生に拘束された者たちよ、あなた達の完成のためにあなた達を弱く造られた者のもとへ、いつの日か、自由と喜びをもって向かって行くことができるよう、その準備をしなさい。造形しやすい粘土を自分達の手で形づくり、自ら不滅の自分を造り上げることを神は望まれているのです。

七、私は魂の医者です。あなた達を必ず治すことのできる薬を持ってきました。弱い者、苦しむ者、病にかかった者は私の特に愛する子供達であり、私は彼らを救いに来たのです。私のもとにおいでなさい。苦しみ、悩むあなた達は皆、慰められ、楽になることができます。別の場所に力と慰めを求めてはなりません。なぜなら、この地上の世界にはそれを与えることができないからです。神はスピリティズムを通じて、あなた達の心に最高の救いを投げかけてくれるのです。耳を傾けなさい。無慈悲、偽り、過ち、不信心があなた達の痛ましい心から根絶されますように。こうしたものこそがあなたの血液の純粋な部分を吸い上げ、あなた達をほとんど死にまで至らせる傷を負わせる怪物なのです。未来において、創造主に慎ましく服従することができるように、神の法を実践しなさい。愛し、祈りなさい。主より送られてくる霊たちの教えを、素直に受けとめることができますように。神を心の底から呼びなさい。そうすれば、主はあなた達にすばらしい言葉を伝え、教授してくれる、神の愛する子を送ってくれるでしょう。私はここにいます。あなた達が私を呼んだので、私はここにいます。（真実の霊、パリ、一八六一）

八、神は慎ましい者たちを慰め、神の力を嘆願する苦しむ者たちに力を与えます。神の力は地球上のすべての場所に及び、流される一つ一つの涙のそばには慰安の薬を用意してくれています。自己を犠牲にし、献身して生きるということは、途絶えることなく祈っているようなものであり、そこには深い教えが含まれています。人類の知恵はこの二つの言葉の中に生きているのです。痛みや道徳的な苦しみに対し、不平を訴えるのではなく、それらが地上で生きるために与えられた分け前であるという真実を、苦しむ霊たちが理解することができますように。献身と自己犠牲—これらの二つの言葉を標語として掲げ、強く生きなさい。なぜならこれらの言葉には、慈善と慎ましさを実践するのに必要なすべての義務が込められているからです。義務を果たすことができた時の達成感、あなた達の心に平安と甘受の気持ちを与えてくれます。心臓はよりよく響き、魂は落ちつき、肉体は衰弱しなくなります。なぜなら、霊が深く痛めつけられるほど、肉体は同じように苦しむからです。（真実の霊、パリ、一八六三）

魂が貧しいということとはどういうことか—自分を高くする者は下げられます 博学な者や知識人に隠された謎霊たちからの指導—自尊心と慎ましさ、地上における知性的な者の役割

魂が貧しいということとはどういうことか

一、魂の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。（マタイ第五章一四）

二、魂の貧しい者は幸いです。信心のない者は、他の多くの金言と同様に、この金言を理解せず、馬鹿にします。しかし、イエスは知性に貧しい者を意味したのではなく、慎ましい者を意味したのです。天の国は慎ましい者のためであり、ごう慢な者のためにではないと言ったのです。教養があり、知性的な人は、この世を見る限り一般的には自分達を高く評価し、その優秀さを強調し、神のこと等その関心に値しないと考えています。彼ら自身のことだけが心配で、神のことまでその考えを持ち上げることができません。このように自分達をあらゆるものより優秀であると考え、彼らを優秀と考えるために彼らを低くするものを否定し、しばしば神さえも否定します。あるいは神を認める時には、自分を最も優秀な神の属性のうち一人と考えるのです。天命を受けこの世の事だけに対し働きかけることで、この世を統治するのは十分であるとうぬぼれているのです。自分の知性を宇宙の知性の大きさを持つと考え、何事も理解することができると信じ、理解できないこともありうるのだということ認めることができないのです。彼らは何かについて発言するとき、その判断に対しての反論を受け付けません。見えない世界と人類を超えた力を認めないのは、それらが手の届かない所にあるからではなく、彼らの考えの土台を掘り崩してしまうような、立脚することのできない観念に対して自尊心が反発するからです。だから、目に見え、手に取ることのできる世界以外のものに対しては、軽蔑の笑みを見せることしかできないのです。そうしたことを信じるには、自分達の知性は高すぎ、多くの知識を持っており、彼らの考えるには、そうしたことは無知な人々に向いているのであり、そうした人を魂の貧しい者と見なしているのです。しかし、何を言おうと、いつかは他の人達と同じように、皮肉を込めて馬鹿にしている目に見えない世界に入らねばならないのです。そのとき、彼らは目を開き、過ちに気付くのです。しかし、公平である神は、その力と認めなかった者たちを、神の法を慎み深く守った者たちと同じように迎えるわけにはいかず、同じ者として割り当てることもできません。質素な者だけに神の国があるという言葉のなかで、イエスは、心の純真さと魂の慎ましさがなければ神の国で認められることはないと教えたのです。これらの資質を持った無知な者の方が、神よりも自分を信じる賢人よりも好ましいのです。いかなる場合においてもイエスは、神に近づける徳として慎ましさを、神から遠ざける欠点として自尊心を述べています。慎ましさは神に対する服従の態度であり、自尊心とは神に対する反発の印であるという、とても自然な理由からです。したがって、人間の幸せのためには、この世で言われる意味で魂が貧しくとも、道徳的な資質に富んでいることがより大切なのです。

自分を高くする者は下げられます

三、そのとき、使徒たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には入れません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人なのです。また、だれでも、このような子どものひとり、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。（マタイ第十八章一一一五）

四、そのとき、ゼバダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわれるようにおことばを下さい。」けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めて

いるのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは人々を支配し、偉い人たちは人々の上に権力をふるいます。あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための救済の代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」（マタイ第二十章一二十一二十八）

五、ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。招かれた人々が上座を選んで座っている様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が招かれているかもしれないし、あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうすれば、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すこととなります。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

六、これらの金言は、神に選ばれた者に約束された幸せを得るための根本的な条件として、イエスが絶えず教えている慎ましさの原則から生まれたもので、イエスは次の言葉にそれをまとめて示しました。「魂の貧しい者は幸いです。天の国は彼らのものです。」イエスは純心であることの象徴として子供を選び、「子供のように、自分を低くし、謙遜する者が、天の御国で一番偉い人です」と言ったのです。それは、上の者や強い者に媚びを売るということではありません。同じような基本的な考え方が、別の金言に結びつきます。「大きくなろうとする者は仕える者になりなさい。」「自分を高くするものは低くされ、自分を低くするものは高くされます。」スピリティズムは実例によって理論を確認し、私たちに、地上で小さくあった者たちの霊界における偉大さを教えてくれます。そして多くの場合、地上において最も偉大で強い権力を持っていた者たちが、霊界においてはとても小さいのです。これは、霊界において彼らを偉大にさせる、決して失われることのない美德を、人間は死んでも持ち続けるからです。一方で、富、地位、栄光、生まれた家族の高貴さ等、地上では彼等を偉大にしていたものは、別の世界へ持っていくことができないのです。それら以外に何も持っていなかった者は、別の世界へ入ると、着るものまでも失った遭難者のようにすべてを失います。自尊心だけを失いきれずにいることが、地上において軽蔑していた者たちが自分より上に、栄光に輝いておかれているという新しい位置を、さらに屈辱的なものにします。スピリティズムは同じ原理の応用を、連続する人生という視点から別の方法で示しています。ある人生において最も高い地位にあった者は、野心や自尊心を克服できなかったのであれば、次の人生において最も低い地位に降ろされます。ですから、強制的に次の人生において地位を下げられたくないのであれば、地上において一番高い地位を求めたり、自分を他人より高い地位においてはなりません。反対に、最も慎ましく、質素な地位を求めなさい。あなたがより高い地位におかれるに値するのであれば、神は天においてより高い場所を与えてくれるでしょう。

博学な者や知識人に隠された謎

七、するとイエスは次の事を言いました。「天と地の主、父よ、これらのことを博学な者や知識のある人には隠し、素朴で小さい者たちに見せてくれたことを感謝いたします。（マタイ第十一章一二十五）

八、これらのことを魂の貧しい、素朴で小さい者たちに見せてくれたことをイエスが感謝している

のは、少し不思議に感じられるかもしれません。なぜなら、見かけ上は博学な者や知識人の方がこれらのことを理解しやすいように見えるからです。しかし私たちは、この慎ましい者とは、神の前で自分を卑下し、他人に対して自分が優れていると感じない者のことであるということを理解しなければなりません。また、一方の自尊心の高い者とはこの世における知識によってうぬぼれてしまい、自分が賢者であると感じ、そのために神の存在を否定したり、あるいは神を否定しないまでも、昔、知識人であることが賢者であることを意味していたように、自分を神と同様に扱う者のことであるということを理解しなければなりません。そのため、神は地上の秘密の探求を知識人達にまかせ、神の前に屈服する慎ましい者たちに天の秘密を見せてくれるのです。

九、スピリティズムによって今日明らかにされた偉大なる真実についても同様です。信心のない人達は、彼らを納得させ、改心させようとする霊たちの側の努力が不足しているのだと言います。しかしそれは、霊たちにとっては、強い信仰と慎ましきをもって光を求める者たちのことの方が、もう既にすべてを知っていると信じていて、神がその存在を証明して彼らを神の方向へ導くことができれば神は喜ぶであろうと考えている者たちのことよりも、気にかかるからなのです。

神の力は、大きな物にも小さな物にも示されています。神はその光を隠すのではなく、あらゆる所へ放っています。盲目な者たちはそれを見ることができないのです。神は彼らの目を無理矢理には開こうとはしません。なぜなら、彼ら自身が目を閉じていることを好んでいるからです。しかし自ら目を開く時が来る前に、暗闇にあることの苦しさを感じ、神の存在を認識し、彼らの自尊心が必然的に傷つけられる時が来なければなりません。不信心な者たちに神の存在を示すために、神は彼ら一人一人にそれぞれ合った方法をとります。しかし、不信心である者が、「私を納得させるにはどれをやって下さい。いつ、どうして下さい。なぜならそうすれば私は納得するからです」と言うように、何をし、何を言うべきなのかを決めるものではありません。

神や、神の意志を伝える霊たちが、こうした不信心な者たちの要望に応えてくれないからといって驚いてはいけません。そうではなく、もし自分の最も身分の低い家来に何かを強要されたとしたら、なんと応えるか考えてみるべきです。神が条件を決めるのであり、条件を強要されるのでは神ではありません。神は彼を慎ましく求める者には暖かく耳を傾けてくれますが、神より勝っていると考える者たちのことは聞いてはくれません。

十、最も神を信じない者までもが屈してしまうような奇跡的な証拠によって、不信心な者たちを神は個人的に触れることはできないのかとよく訊かれます。まったく疑いなくそれは可能です。しかしその場合、そうすることの価値はどこにあるのでしょうか。さらには、それが何の役にたつといえるのでしょうか。彼らは、毎日あらゆる証拠を見せられていながらそれを受け入れず、「見ることは出来たが信じることはできない。なぜならそのようなことは不可能であることを知っているからだ。とまで言うのです。真実を認めることを拒否するのは、それを理解するその者の霊も、それを感じるその者の心も、まだそうなるところまで発達しきっていないからです。自尊心は彼らの目をおおう目隠しのようなものです。盲目な者の前に光をかざしてどうなるというのでしょうか。したがって、まず悪の原因を治すことが必要です。そうであるからこそ、優秀な医者のように、神はまず自尊心を罰します。神が迷う子供達を見捨てることはありません。なぜなら、遅かれ早かれ彼らの目は開かれることを知っているからです。しかし、神はそれが各々の自分の意志によって開かれることを望んでいるのです。そうなれば、不信心であったことによって受けた苦しみに打ち勝ち、父親に赦しを求めた放蕩な息子のように、自ら神の腕の中にやってきます。

霊たちからの指導—自尊心と慎ましき

十一、親愛なる友よ、神があなたたちに平安をもたらしますように。あなた達が正しい道を進むことができるように励ましにやってきました。神は、その昔地上で慎ましく生きた霊たちに、あなた達を教化する任務を与えられました。あなた達の進歩を助ける機会という恵みをお与え下さいました。神の名があがめられますように。聖なる霊が私に光を与え、私を助けてくれることによって、私の言葉が分かり易いものとなり、それらの言葉がすべての人達の元に届きますように。光に出逢うことができないあなた達すべての人間の目の前に、光を輝かせることができるように、神の意志が私を

助けてくれることをお願い致します。慎ましきは、あなた達の間では忘れ去られてしまった一つの美德です。あなた達に与えられた大きな模範は、ほんの少ししか守られていません。しかし、慎ましきなしに、隣人に対する慈善の気持ちを持つことができるでしょうか。ああ、できるわけがありません。なぜなら、慎ましきこそが人間を平等にするからです。あなた達は兄弟であり、それゆえお互いに善に向かって助け合わなければならないのです。自分達の体の不格好さを隠すために衣装を持っているかのように、慎ましきに欠けるあなた達は持ちもしない美德で身を飾ります。私たちに救ってくれた者のことを思い出して下さい。彼を偉大にしたその慎ましきが、あらゆる預言者たちよりも彼を上位置づけたのです。自尊心は慎ましきにまったく相反するものです。キリストが最も貧しい者たちに天の国を約束したのは、地上の偉大なる者たちが名誉や豊かさとは自分自身の功勞に対して与えられるものだと考え、自分達を貧しい者たちよりも純粋な存在だと考えていたからなのです。それゆえ彼らは、名誉や豊かさが彼らのためのものであると信じ、神が彼らを地上から連れ去ると、神が不当であると不満を言うのでした。おお、なんとというおかしなことでしょう。なにも見えていないのです。神はあなた達の体を見て区別するのでしょうか。貧しい者と豊かな者の肉体は同じではありませんか。創造主は二種類の人間を造ったのでしょうか。神の造られたものすべてが賢く偉大なのです。自尊心の強いあなた達の頭から生まれる考えを、神に属するものであるなどと決して考えてはいけません。ああ、富める者たちよ。寒さから守られた金の屋根の下であなた達が眠る間、何千人ものあなた達とまったく同じ兄弟達がわらの上横たわっているのを知っていますか。飢えに苦しむ不幸な者たちは、あなた達と同類の者ではありませんか。こうした言葉にあなた達の自尊心は反発することを私はよく知っています。施しものを与えることに同意することはあっても、その貧しい者の手を兄弟愛をもって握りしめることはありません。「高貴な血縁のもとに生まれた、地上における偉大なる私が、そのぼろをまとった惨めな者たちと同じだなんて。それは偽哲学者のつくりあげたつまらぬ理想郷のことだ。もし、私たちが彼らと同じならば、なぜ神は私をこんなに高いところにおき、彼らをあんなに低いところにおいたのだ」 富める者たちの衣装は、貧しい者たちのそれとは似ても似つかぬことは事実です。しかし、それらが奪われてしまったら、両者の間にどんな違いがあるのでしょうか。それにもかかわらず、血筋が気高いのだと言うかも知れません。しかし、今日までに科学は高貴な者と平民との間に、または、奴隷の主人と奴隷との間に血液の違いを発見していません。あなたが過去においても彼と同じように惨めで哀れな状態でなかったと、誰が断言できるでしょうか。あなたも物乞いをしたことがあるのではないのでしょうか。あなたが今日軽蔑している相手に、未来は物乞いをする可能性がないと誰が言い切れるのでしょうか。富とは永遠なるものなのでしょうか。あなたの霊をとりまくはかない覆いである肉体が消滅すれば消えてしまうものではありませんか。ああ、もう少し慎ましくあってください。この世の現実にも目を向け、何が人を偉大さに導き、何が人の価値を下げるのかに目を向けて下さい。死は誰をも残してくれないように、あなたをも残してはくれません。今日にでも、明日にでも、いつ襲ってくるか判らない死の攻撃から、あなたの地位はあなたを守ってはくれません。もしあなたがその自尊心の中に埋もれ続けるのであれば、ああ、私にとってそれは大変悲しいことです。あなたは深い同情を受けるに値します。誇り高き者よ。高貴で、強い権力を持つようになる以前、あなたは誰であったのでしょうか。もしかしたら、あなたの召使いのうちの最も下層の者よりも低いところに居たのかも知れません。ですから、あなたの誇り高い額を下げるのです。なぜなら、あなた達が額を最も高く上げたとき、神はあなた達にその額を下げさせるようにすることができます。神の秤の上で、人類は皆平等です。一人一人の持つ美德だけが、神の目には区別されるのです。すべての霊が同じ素からなっており、すべての肉体が同じ物質から造られています。名前や地位はあなたのどこも変えることはできません。名前や地位は墓の中に残され、選ばれた者たちに与えられる幸運を享受するためには何の役にも立ちません。選ばれた者たちの高潔な地位とは、慎ましきと慈善の行いによってのみ築かれるのです。かわいそうな者よ。あなたは苦しむ子供の母親なのです。寒さに震え、飢えを訴えている彼らのために、パンのかけらを手に入れるため、重い十字架を背負い、頭を下げて出て行きなさい。おお。あなたの前に私は頭を下げます。私にとってあなたはなんと高貴で尊いことでしょうか。祈り、待つのです。至福は未だこの世のものではありません。神を信じる抑圧された貧しい者たちのために、神は天の国を与えてくれるのです。労働と剥奪の前に放り出された、未だ子供でしかない娘よ。どうしてそんなに悲しむのですか。なぜ泣くのですか。慈悲深く穏やかな神の元へあなたの目を向けてみなさい。神は小鳥達にも食べ物を与え、あなた達を信じてくれています。神はあなた達を見放されることはありません。宴に響く笑い声や、この世の喜びに

あなたの胸は高く鳴ります。髪を花で飾り、地上の幸運な者たちと共に交わりたいと思うでしょう。屈託なく楽しそうに笑いながら通り過ぎる女達を見て、私も同じように豊かになれるのだとつぶやくでしょう。おお、そのようなことを言うのはおやめなさい。それらの飾られた衣装の下に、どれだけの涙と語りきれない苦しみか、どれだけすすり泣く声か、その騒がしい話し声にかき消されていることか。あなたは自分の貧しさと慎ましい小屋の方がよっぽど好ましいと思うに違いありません。あなたを守る天使が、その白い羽の下に顔を隠しながら神の元へ戻って行って欲しくないなら、神の目にいつまでも純潔に映ることができるように自分を保ちなさい。案内人がいなくなったことを後悔し、次の世界において罰を受けるのを待ちながら、道に迷ってこの世に何の支えもなしに残されるのがいやなのであれば。そして、人間の不当さに苦しめられているあなた達は皆、あなたの兄弟達の過ちに対し、あなた達自身も過ちから免れることは出来ないのだと言うことを自分に言い聞かせ、彼らに対し寛大でありなさい。それは慈善の行ためであり、慎ましさを証でもあります。もし中傷にあったなら、その試練の前に頭を下げなさい。この世の中における中傷があなたにとっていったいどんな意味を持つのでしょうか。あなたの行いが正しいのであれば、神によって報われるのではありませんか。人の侮辱を勇気を持って耐えるということは、慎ましく生き、神のみが偉大で万能であることを理解することです。おお、神よ。彼らが忘れてしまったあなたの法を教えるために、再びキリストがこの世に現れることが必要なのでしょうか。礼拝のためだけに存在するあなたの家を汚しに寺院に集まる行商人達を、キリストはまた追い払わなければならないのでしょうか。誰に否定することができましようか。ああ、人類よ。神がもしキリストの再来という許しをあなた達に与えてくれたとしても、あなた達は前回と同じようにキリストを棄て、キリストを冒涇者と呼んでいたかも知れません。なぜなら、キリストは現代のパリサイ人達の自尊心を辱めることになるからです。あなた達は、再びキリストにゴルゴタへの道を歩ませることになるでしょう。モーゼが神の戒めを受けるためにシナイ山へ登って行ってしまっている間、イスラエルの民は自分達だけになると、真なる神を棄て、男も女も持っていた宝石や金を、偶像を造るために捧げたのでした。あなた達文明人は、その繰り返しをやっているのです。キリストはその教義をあなた達に伝えました。あなた達にすべての美德の模範を示したにもかかわらず、あなた達は模範も規律もすべて放棄してしまったのです。一人一人がその感情にかられ、その望み通りの神を造りあげているのです。ある者によればその神は恐ろしく残忍で、また別の者によれば地上の関心事に夢中になっています。あなた達が造り上げた神とは、あなた達一人一人の考えや趣味に合わせた金の子牛でしかないのです。兄弟達よ、友よ、目を覚ましなさい。霊たちの声があなた達の心にこだましますように。見栄を張ることなく、寛大で、慈悲深くありなさい。つまり、慎ましく善を行いなさいということです。自尊心を奉り上げた祭壇を、一人一人が少しずつ取り崩して行くことができますように。一言で言うならば、本当のキリスト教徒となり、真実の国を手に入れなさいということです。神の善意の証はこれほど多く存在すると言うのに、神の善意を疑い続けるのはやめなさい。私たちは預言が実現する道のりを準備するために参りました。未来において神の寛大さがあなた達の間響きわたる時、神によって送られた使い達は、あなた達が既に大きな家族を作り始めているのを見ることができるでしょう。あなた達の優しく慎ましい心が、神のもたらしてくれる天の言葉を聞くにふさわしい者となりますように。選ばれた者たちの道のりには、善、慈善、同胞愛に戻ることによってのみ敷かれる棕櫚の葉を見ることができますように。そうすれば、あなた達の世界は地上の楽園と化すことでしょう。しかし、文明化され、科学が発達しているながらも、気高い感覚に乏しい社会を革新し、浄化するために送られてきた霊たちの声に対して、あなた達が鈍感であり続けるのであれば、ああ、あなた達にできることはもはや、その運を嘆き悲しみ、泣くことだけでしょう。しかし、そうあってはなりません。あなた達の父である神の方へ向き直りなさい。神の意志を達成するために貢献してきた私たちすべてが、恩恵の賛美歌に調子を合わせ、尽きることのない神の善意に感謝し、いく世紀が経とうとも、神の栄光をたたえましょう。そうでありますように。(ラコルデール、コンスタンティヌス、一八六三)

十二、人類よ、なぜあなた達は自分達で頭の上に積み上げた災いに対して不平を言うのですか。キリストの聖なる神の道徳をあなた達は軽んじているのです。だから非道がその杯からあらゆる方向へあふれだしても、驚いてはなりません。問題は広がっています。いつも自分達どうしでお互いをつぶし合おうとしているあなた達を責めずに、いったい誰を責めればよいのでしょうか。お互いの慈悲心なしには、あなた達は幸せになることはできません。しかし、慈悲心と自尊心がどう共存することがで

きるでしょうか。自尊心とはあなた達の悪のすべての根源です。自尊心がもたらす悲しい結果を長引かせたくないのであれば、それを打ち壊すことに精を出して下さい。そしてそのためには、あなた達が身を捧げるべき唯一の失敗することのない方法があります。キリストの法をあなたの行動の不変の規則とすることです。あなた達が自分達の勝手な解釈によって拒否したり、偽物にしてしまったあのキリストの法です。あなた達はなぜ、心に訴えるものよりも目に輝いて映るものに重きを置かなければならないのですか。なぜ、裕福さの中にある不徳に媚び、卑しいものの中にある真なる価値のあるものを軽蔑するのですか。肉体も魂も失ってしまった墮落した金持ちには、どこにおいてもあらゆる扉が開かれ、すべての関心が注がれる一方で、自分の仕事に精を出す真面目な人に対しては、あなた達はもったいぶり、挨拶さえもしようとしません。他人への配慮が、その者の持つ金の量や、その者の使う名前によってはかられるのであれば、彼らにとって、その欠点を治すことに、何の面白味があると言えるのでしょうか。もし世の中の意見が、金をまとった者の不徳を、ぼろ服をまとった不徳と同じようにこらしめたとしたら、大きく違って来るでしょう。しかし、自尊心は裕福な者の不徳に媚びを売ることには寛大です。現代は貪欲さと金の時代なのだ、と言われるでしょう。それは疑いようもありません。しかし、どうして物質的な関心に良心と理性を支配させてしまうのでしょうか。なぜ、皆が自分達の兄弟よりも上に立とうとするのでしょうか。今日の社会はこうしたことのもたらす影響を受けています。そのような状態は、いつでも確実に道徳的墮落の印であることを忘れないで下さい。極端なまでに自尊心が膨らんでいることは、近く落ちぶれる兆候です。神は高慢な人間を罰しないことはありません。神が彼らが持ち上げられることに同意する時は、彼らに熟考する時間を与え、注意を促すために時々おとずれる、自尊心に打ち響く出来事によって、自分を改めることができるようにする時です。しかしそのとき、彼らは自分を辱めるよりも、反抗します。すると、杯はあふれ、神は完全にその者をその高い所から降ろすのです。彼が自分を高く持ち上げていればいるほど、下落は彼にとって恐ろしいものとなります。エゴイズムによってすべての習慣を墮落させてしまったかわいそうな人類よ、なによりもまず、改めて勇気を出して下さい。神はその無限なる慈悲によって、あなた達の欠点を治す強力な薬を送ってくれ、それは惨めな状態にあるあなたにとって、思いがけない救済となるでしょう。光に向けて目を開きなさい。そこには、もう地上には存在しない魂達が、あなたを本当の任務につかせようと呼びに来てくれています。彼らは、虚栄心や一時的な地上での生活における偉大さというものが、無限の世界の前にどれだけつまらないものであるかということ、彼らの持つ経験を通じて教えてくれるでしょう。地上で兄弟を最も強く愛した者は、天においても最も愛されることになるでしょう。権威を濫用する地上の権力者は、自分の召使い達に従わなければならないように下げられるでしょう。慎ましさと慈善の気持ちは手を取り合う姉妹のようなもので、永遠なる神の前に恵み受けるための、最も有効な手段なのです。(アルジェの司教、アドルフ、マルマンド一八六二)

地上における知性的な者の役割

十三、あなたの知識によって鼻を高くしてはなりません。あなたの知識とは、あなたの住む世界における非常に狭い範囲の中に限られたものなのです。この地球上で、あなたがその知性によって非常に重要な人物であったとしましょう。しかし、そうであったとしても、あなたはそのことによってうぬぼれる権利を持つわけではありません。神がその意向により、あなたの知性を発達させることができる環境にあなたが生まれることを可能にしたのは、あなたがその知性を皆のために使うことを望むからです。あなたの手にはあなたが発展させることのできる道具を与え、あなたの回りにはより遅れた知性の持ち主を送り、あなたが彼らを神の方向へ導くことができるようにすることによって、あなたに地上における任務を与えたのです。与えられたその道具には、どのような使い方をすべきなのかを示されてはいませんか。庭師がその助手に鍬を手渡す時、それは土を耕せよと示しているではありませんか。その助手が仕事をするかわりに、その鍬を振り上げ、主人を傷つけようとしたら、あなたは何というのでしょうか。恐ろしいことだ、その助手を解雇するべきだ、と言うでしょう。兄弟達の間において、神とその意志に関する考えを打ち崩すことにその知性を利用する者に対しても、同じ事が言えるのではありませんか。土地を耕すために与えられた鍬を、主人に対して振り上げていることになりませんか。彼には約束された賃金をもらう権利があるのでしょうか。反対に、その庭から追放されるべきではないでしょうか。彼がすべてを負っている神の前に頭を下げるようになるまで、疑い

もなく、屈辱にあふれた惨めな人生を過ごさなければならないでしょう。知性には未来のためになる価値があふれています。ただし、それは正しく使われた場合です。もし人類すべてが神の意志に沿って知性を使うのであれば、霊たちにとって人類を進歩させる任務は容易に達成することができるでしょう。しかし悲しいことに、多くの者が知性を、自尊心を強め、自分自身を破壊する道具にしています。人間は、他の能力と同じように知性をも濫用します。しかし、知性を与えてくれた強力な神の手は、人類に与えたものを剥奪することができるのだということを教えてくれる出来事は、数え切れぬほど見ることはできるはずです。（守護霊、フェルディナン、ボルドー、一八六二）

第八章 心の清い者は幸いです。

素朴さと心の清さ—思考による罪、姦淫—真なる清さ、洗っていない手—恥、もしあなたの手が恥の原因となっているのであれば切り落としてしまいなさい 霊たちからの指導 —子供達を私の元へ来させなさい—目が閉じている者は幸いです

素朴さと心の清さ

一、心の清い者は幸いです。その人は神を見るからです。（マタイ第五章 一八）

二、さて、イエスにさわっていただくとして、人々が子どもたちをみもとに連れて来た。ところが、使徒たちは彼らをしかった。イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子供達を私の元へ来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。（マルコ第十章 一三—一六）

三、素朴さや慎ましさと心の清さは切り離すことができません。いかなる利己的な考えや自尊心も取り除かねばなりません。だからイエスは、慎ましさと同じように、心の清さの象徴として子供を例に取り上げるのです。しかし、子供の霊であっても、その霊が歳をとっており、肉体を持った生活に生まれ変わった時点で、その前世において脱することのできなかつた不完全性を持ち合わせていると考えた場合、心の清さと子供の例えは矛盾するよう見えます。完全性を達成した霊だけが本当の心の清さというものを私たちに教えてくれることができるのだといえます。それはまったく正しい考え方です。しかし、現在の人生の視点から見た場合、子供のうちというのは未だ非道徳的な意図を示すこともできず、私たちの目には無邪気で純粋な姿に映ります。そのことから明らかのように、イエスは天の国が子供達のためにあると言ったのではなく、子供達のように心の清い者のためにあると言ったのです。

四、子供の霊が、既に過去において地上に生きたことがあるのであれば、なぜ生まれたそのときから、その霊がどのような霊であるかを示さないのでしょうか。神のなされる業は常に最高の英知であることを忘れてはなりません。子供には、母親の優しさだけが与えることができる特別な心遣いが必要です。同時に、その母親の優しさは、子供の無邪気さと弱さのために更に増すものです。母親にとってその子供は常に天使であり、またそうあるべきなのです。それにより子供は母親の配慮を引きつけることができます。もし母親がその子供の飾り気のない恵みを受け取るかわりに、その子供の幼稚な振る舞いのなかに大人のような性格や考えを感じとり、ましてやその子供の過去を知ってしまったら、その母親は同じ様に献身的に子供を世話することはできないでしょう。一方で、極端に早熟な子供の肉体はその霊の大きな活動に耐えられないことから、知性の活動は肉体の弱さとつりあっていないければなりません。再生が近づくにしたがって霊は変動し、少しづつ自分自身の認識を失って行き、ある一定の期間一種の眠りのような状態になり、あらゆる能力が潜在的なものにだけなってしまうのはそのためです。この変化する状態は、霊が新たな出発点に立ち、その新しい人生において妨げとなるものは忘れてしまうために必要なのです。しかし、その者の過去はその者の上に働きます。そのため、獲得された経験から得た直感によって支えられ、助けられ、道徳的にも知性的にもより大きく、より強く、生まれ変わるのです。生まれた時から霊の思考は、その器官が発達するにしたがって徐々に刺激を受けていくのですが、最初の何年間かは、その霊の性格の基盤を築く考えが未だ眠っている状態にあり、その霊は本当に子供の状態にあると言えます。子供の本能が無意識の間、その霊は従順な状態にあり、その霊を進歩させる本質を変化させる印象を受け易く、その間、親にとってはその課された任務を行い易くなっているのです。このように、霊は一時的に無垢の衣をまとうこととなります。それゆえイエスは、魂の持つ過去にかかわらず、子供を清さと素朴さの象徴とし、真実を示したのです。

思考による罪—姦淫

五、「姦淫してはならない」と昔の者たちに言われたのをあなた達は聞きました。しかし、私はあなたたちに告げます。ある女を見つめ、その女に対し情欲を抱くのであれば、心の中ではその女と姦淫を犯したことになるのです。（マタイ第五章 一二十七、二十八）

六、ここで使われている「姦淫」という言葉は、決してその言葉がもつ通常の意味だけによって理解されてはならず、もっと広義にとらえる必要があります。イエスは幾度もこの言葉の意味を広め、悪、罪、すべての悪い考えを示すために使いました。例えば、「誰でも、この罪深い姦淫の世代にあつて私と私の言葉を恥じるようになる者は、人の子も、聖なる使い達と共に自分の父の栄光のうちに到来するとき、その者を恥じるのです。」（マルコ第八章 一三十八）

真の清さは行動の中だけにあるものではありません。それは思考の中にも存在し、心の清い者は悪いことを考えることさえもないのです。イエスが言いたかったことはそのことです。イエスは思考による罪をも非難するのです。なぜならそれは不純のしるしだからです。

七、この考え方から、自然と次の疑問が出てきます。「どんな行動も伴わない悪い思考の影響を、私たちは受けているのでしょうか。」ここで重要な区別をする必要があります。霊の世界において魂がその進歩の過程を進んでいくと、悪の道に導かれていた魂も、向上しようとする意欲を示すにしたがつて、その自由意志によって少しずつその不完全性を失って行きます。どんな悪い考えも魂の不完全性がもたらします。しかし、浄化しようとして抱く欲求の強さによっては、悪い考えさえもその魂の進歩のための機会となります。なぜなら、その魂はその悪い考えを精力的に拒絶しようとするからです。悪い考えを拒絶することは、汚点を消そうとする努力のしるしです。その場合、悪い欲望を満たす機会が現れても、それに負けまいとします。それに耐えることができると、その勝利によってより強く、より満足を得ることができるようでしょう。反対に、悪い考えを拒絶しようという正しい決心をすることが出来ない者は、悪い行動を実現させる機会を求めます。たとえ実現しなかったとしても、その者の意志によってではなく、実現の機会が不足したからなのです。したがって、彼は、実現していた時と同等に罪深いことになるのです。要約するならば、悪い考えを心に抱くことさえも望まない者は、既にある程度の進歩が実現していると言えます。また、悪い考えが浮かびながらも、それを追い払おうとする者にとっては、進歩は実現しつつあります。そして、悪い思考を抱き、それに喜びを感じる者にとっては、悪がその完全な形のままだに存在しているということが出来ます。一方の者たちにおいては、なされるべきことは既に行われていますが、もう一方の者たちではまだこれから始めなければなりません。正義である神は、人間の思考や行動に対する責任を問うとき、こうしたすべての段階的な変化を考慮するのです。

真なる清さ—洗っていない手

八、そのころ、ファリサイ派の人々と書記官たちが、エルサレムからイエスのもとに来て言いました。「なぜあなたの使徒達は昔の人の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗いません。」イエスは答えました。「なぜ、あなた達も自分の言い伝えのために神の掟を破っているのですか。神は『父母を敬いなさい』と言い、『父母をののしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っています。しかし、あなた達はこう言います。『父または母に向かって、「あなたに差し上げるべきものは、神への供えものにする」と言う者は、父を敬わなくても良い』こうして、あなた達は自分の言い伝えのために神の言葉を無にしています。偽善者たちよ、イザヤはあなた達のことをうまく預言したものです。「この民は私を口先で敬うが、その心は私から遠く離れています。人間の戒めを教えながら私を無駄に崇めています。」それから、イエスは群衆を呼んで言いました。「このことを聞き、良く理解して下さい。人間を汚すものは口から入るものではありません。人間の口から出るものが人を汚すのです。・・・口から出るものは心より出ており、それが人間を不純にするのです。悪い考え、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、冒瀆、悪口は心から出ているのです。これらのことが人間を不純にするのです。手を洗わないで食事をしたからといってその者が不純になるわけではありません。」すると使徒達がイエスに近づいて言いました。「いま言われたことをファリサイ派の

人々が聞いて憤慨したのを知っていますか。」しかし、彼は答えました。「天の父が植えなかった木はすべて引き抜かれます。・・・盲人達を案内する盲人達はそのまましておきなさい。盲人が別の盲人を案内すると、二人とも穴に落ちてしまいます。」
(マタイ第十五章 一一二十)

九、彼が話していると、一人のファリサイ派の人が食事に招待しました。イエスはその家に行き、食卓につきました。ファリサイ派の人も入るとイエスを見て不審に思いました。「イエスは食事をする前になぜ手を洗わなかったのだろうか。」するとイエスは言いました。「あなた達ファリサイ派の人達は、杯や皿の外側をきれいにすることに大変気を使います。しかし、あなた達の心の内側は強欲と悪意に満ちあふれています。あなた達は愚かな者たちです。外側を造った神は内側も造ったのではありませんか。(ルカ第十一章 三十七、四十)

十、ユダヤ人達にとって、人間の定めた規則を実践し、その規則を厳重に守ることが重要であったため、彼らは神の本当の戒めを破ったのです。単純な物体は形がくずれると消滅してしまいます。道徳的に改善するよりも表面的に行動する方がより簡単であるように、心を清めるよりも手を洗う方が易しいのです。人間は、人間の決めた規則を、何をどうすべきか教えられた通りに実践すれば、それ以上神に求められることはなく、神との約束を果たしていると自分で錯覚してしまうのです。それを指して預言者は言いました。「この民が人間の戒めを教えながら、口先で私を崇めても無駄です。」キリストの道徳的教義の中にも、同じことを確かめることができます。しかし、それは置き去りにされ、その結果、多くのキリスト教徒が、昔のユダヤ人達のように、神の救いは道徳的な実践よりも外見的な実践によって保証されると思っているのです。こうした神の法に人間がつけ加えたことに対して、「天の父が植えなかった木はすべて引き抜かれます」とイエスは言ったのです。宗教の目的は人間を神の元へ導くことです。それは、人は完成しなければ神の元へ届くことができないからです。一方、人間を善に向かって向上させない宗教は、どんな宗教であれ、その目的を果たすことができないこととなります。人間が悪を働くために拠り所とするものは、偽りか、あるいはその根本から歪んでいることとなります。外見上の行いが信念より先行してしまっている宗教がそれにあたります。外見的な偶像を信じて、それが殺人、姦淫、強奪、中傷、隣人に対し損害を与えることなどの妨げとならないのであればその効力は皆無です。そのような宗教は迷信、偽善者、狂信者を生み、善なる人を生みません。見かけだけが清いだけでは足りません。なによりも心の清さを持たなければならないのです。

恥—もしあなたの手が恥の原因となっているのであれば、切り落としてしまいなさい

十一、恥じることばかりの世の中は不幸です。なぜなら、恥じるべきことは行われなければならないからです。しかし恥ずべき行動をとってしまう者たちの可哀なことよ。もし誰かが、私を信じるこの小さい者を恥じるのであれば、ろばが回している臼を一つ首にぶら下げ、その者を海の底深く投げ込んでしまった方がましです。この小さい者たちの誰をも見くびることがないように十分に気をつけなさい。私はあなた達に言います。彼らの天使達は天にいる私の父と、いつも顔を向かい合っているのです。もしあなたの手かあなたの足が恥の原因となっているのであれば、それを切り落として、あなたから遠く離れた所へ投げ捨ててしまいなさい。あなた達にとって、ひとつの手、あるいは一本の足だけで生きる方が、二本とも持ちながら永遠の炎の中に投げ込まれるより良いのです。そして、もしあなたの目が恥の原因となっているのであれば、その目をえぐり取ってあなたから遠く離れた所へ投げ捨てなさい。あなた達にとってひとつの目だけで生きる方が、二つの目を持って地獄の火に投げ入れられるより良いのです。(マタイ第十八章 六一十一、第五章 二十九、三十)

十二、一般的な意味において、恥とはある表面的な方法で道徳や品行に反するすべての行動を指します。恥とはその行動そのものの中ではなく、その行動がもたらす反響の中にあるのです。恥という言葉はいつも、多くの非難を浴びるものであると言う意味を含んでいます。多くの人は恥をかくことから免れたことに満足します。なぜなら恥をかくことによって自尊心は傷つき、その者に対する人からの敬意は低下してしまうからです。もし、自分の恥が見逃されたならば、それだけで彼の良心は落ちつくのです。イエスの言葉によれば、こうした人達は「外見的には真っ白だが中身は腐敗に満ち

た墓、外側はきれいだが内側は汚れた壺」なのです。福音の中で数多く用いられている恥という言葉の意義はより広く、したがって、場合によってはその意味が理解し難いことがあります。他人の良心をとがめるものという意味として、悪癖や不完全性がもたらすすべてのことを指し、反響の有無を問わず、ある個人から個人への悪い作用を意味します。恥とはこの場合、悪徳のもたらす結果のことなのです。

十三、「この世では恥ずべきことが存在することが必要です」とイエスは言いました。なぜなら、地上の人間は不完全であり、悪い木が悪い実を結ぶように、悪を働く傾向にあるからです。したがって、このイエスの言葉から、悪とは人間の不完全性の結果であり、人間にとって行わなければならないものではないということを理解しなければなりません。

十四、「恥ずべきことは行われなければなりません。」なぜなら人間は、地上で自分の罪を償おうとする中で、自分自身の悪癖に接し、その悪癖の第一の犠牲者となることによって、自らに罰を与え、その悪さを理解することになるからです。悪の中で苦しむことに疲れたとき、善の中にその薬を求めることになるのです。こうした悪癖に対する反応は、ある者には罰となり、ある者には試練となります。このようにして、神は悪の中から善を浮かび上がらせ、人間に自らの悪や値打ちのない事をも利用させるのです。

十五、そうであるならば、悪は必要であり、永久に続くのだと言うことができるかも知れません。なぜなら、もし悪が消滅してしまったら、神は罪ある者たちを罰する強力な手段を奪われてしまい、よって、人間が向上することは無意味なのだと言われるかも知れません。しかし、そのとき、既に罪ある者がいなくなっていたとしたら、罰することさえも必要なくなるのです。仮に、人類が皆、善なる人間に変わったとしてみましましょう。皆が善人なので、誰も隣人に悪を働こうとはせず、皆が幸せになることができます。悪の追放されたより進歩した世界とはそのような状態なのです。そして、地球も更に十分に進歩すればそのようになるのです。しかし、いくつかの世界が前へ進んでいく間、一方ではより原始的な霊によって他の世界が形成されていきます。そして、そうした世界は、幸せになった世界から拒絶され、悪に固まった反抗的な不完全な霊たちを追放する世界、または、不完全な霊たちが報いを受けるための世界となるのです。

十六、「しかし、恥ずべき行動をとってしまう者たちの可哀想なことよ」とはつまり、いつまでたっても悪であり続け、その悪い本能を利用して無意識のうちに神の正義の道具となったとしても、そのことによって悪が軽くみられることはなく、彼らは罰せられなければならないのだということです。例えば、ある恩知らずな息子は、その子を育てなければならない父親にとっては罰、あるいは試練です。なぜなら、その父親はたぶん、過去において彼の父親を苦しめた悪い息子であったからで、だから報復の罰を与えられているのです。しかし、その息子は許されるわけではなく、彼の順番が来たときには、自分自身の息子によって、あるいは別の方法によって罰せられなければなりません。

十七、「もしあなたの手が恥の原因であるならば切り落としてしまいなさい。」この激しい表現を文字どおり理解してしまっただけでは馬鹿げており、これは、自分の内にある恥の原因、つまり悪を破壊してしまうことが必要なのだということを意味しているのです。あなたの心から、すべての不純な気持ちや悪癖の源を根絶することです。さらには、人間にとって手を切り落とす方が、その手が悪い行動のための道具として使われるより、そして盲目である方が、ある物を見た時に悪い考えを与える目を持つことよりも、ましなのだということを意味しています。イエスは、その言葉の持つ深いたとえの意味を理解する者に対しては、何も馬鹿げたことなど言っていません。しかし多くの事柄は、スピリティズムが与えてくれる鍵無しには理解することができません。

霊たちからの指導—子供達を私の元へ来させなさい

十八、キリストは、「子供達を私の元へ来させなさい」と言いました。簡単でありながら深い意味

を持つこの言葉は、単に子供達へ向けられた呼びかけなのではなく、希望のない不幸が支配する、より劣った世界にいる魂達へに向けられた呼びかけなのです。イエスは人類のうちの弱者、奴隷、悪徳な者たちのように、知性的に幼少な者を自分の元と呼んだのです。物質的な制約を受け、本能のくびきにつながれ、まだ自分の中や周りに働く理性と意志の秩序を守ることができない肉体的に幼少な者たちには、イエスは何も教えることはできませんでした。イエスは、愛嬌のある姿によって、母親である女性すべての心を征服してしまうよちよち歩きの子供が、母親を信頼し母親の方へ向かって行くように、人類に、イエスのことを信じて寄ってきて欲しかったのです。そのような魂達はイエスの優しく神秘的な権威に従うことができたのです。イエスは暗闇を照らすたいまつであり、人々の目を覚ます夜明けの光であったのです。彼はスピリティズムの開始者であり、その周りには子供達ではなく、やる気をもった大人達が集まるのです。雄々しい行動は始まりました。もはや本能的に信じたり、機械的に従うのではないのです。人類は、普遍性を示す英知の法に則ることが必要なのです。愛する者たちよ、説明されることによって偽りが真実となる時は既に到来したのです。あなた達にイエスのたとえ話の本当の意味と教え、過去のものとして現在のものとの間に存在する強い相互関係を示しましょう。私は真実を伝えます。霊たちの出現は地平線を広げ、それは人類へ送られた使者として、山頂の太陽のように輝くのです。

十九、子供達を私の元へ来させなさい。私のもとには弱い者を強くする母乳があります。いたわりと慰めを必要としている憶病で弱い者を皆、私の元へ来させなさい。無知な者を、光を与えるために私の元へ来させなさい。不幸な者たち、苦悩する者たちの群れ、苦しむ者を皆、私の元へ来させなさい。人生の悪を和らげる偉大なる薬を私が教えてあげましょう。そして、あなた達の傷を治す秘密を明らかにしましょう。あらゆる心の病を治し傷口をきれいにする、それほど多くの美德をもったその崇高なる香油とは、何なのでしょう。それは、愛であり、慈善であるのです。あなたがこれらの神聖なる火を手に行っているのであれば、何を恐れる必要があるのでしょうか。生きている間、絶え間なく、次のように言ひましょう。「父よ、私の意志ではなく、あなたの意志の通りに行われますように。あなたを喜ばすことであるならば、痛みと苦しみによって私をお試し下さい。そのことが祝福されますように。それが私のためになるのであれば、私の上にかざされたあなたの手は、振り下ろされるのだと言うことを私は知っています。主よ、あなたを喜ばすことであるならば、弱い者に慈悲を与え、その者の心に健全な喜びをお与え下さい。それにより、さらに祝福されますように。しかし、神の愛が魂の中に眠ってしまわないようにして下さい。感謝の気持ちの証として、その愛が絶え間なく魂をあなたの足元まで引き上げてくれますように。」（使徒ヨハネ、パリ、一八六三）

目が閉じている者は幸いです

二十、よき友よ、なぜ私を呼んだのですか。ここにいるかわいそうな苦しむ者の上に手をかざし、病を治すためですか。ああ、善き神よ、なんという苦しみでしょう。彼女は視力を失い、暗闇につままれてしまいました。可哀想な子よ、祈り、待つのです。私は善き神の意志なしに、奇跡を起こすことはできません。私が行うことが可能であった、あなた達の知っているすべての治療は、私たち皆の父である神によるものです。あなた達が苦しむ時には、いつも目を天に向け、心の底からこう言ひなさい。「父よ、私の病を治して下さい。しかし、私の魂の病が、肉体の病よりも先に治されるようにして下さい。必要であるならば、私の肉体が罰せられ、それによって私の病んだ魂が、創造された時と同じ様に純白になってあなたの元へ引き上げられますように。」よき友よ、善なる神はいつも聞いて下さり、この祈りの後、力と勇気があなた達に与えられ、また恐る恐る願った治療も、あなた達の献身への代償として与えられるかもしれません。しかしなによりも、学ぶことを目的とした集会に今ここに参加して、視力を奪われた者は、幸いにも報いの機会が与えられたのだと考えるべきなのだ。私は申し上げます。目が邪魔になっているのであれば、目をめぐり取ってしまいなさい、それがあなたの墮落の原因となっているのであれば、火の中に投じた方がよい、とキリストが言ったのを思い出して下さい。ああ、地上に生きる者のうちで、いつか暗闇の中で、光を見てしまったことを悲しむ者がどれだけいるのでしょうか。おお、そうです、報いとして、目を罰せられた者はなんと幸いなことでしょうか。もうその目は恥や墮落の原因となることはなく、その者は完全に魂の世界に生きることができ、視力の良い者よりも良く見ることができるとは、私がこうしたかわいそうな苦しむ者のまぶ

たを開き、再び光のもとへ戻すことを神が許される時には、このように申し上げます。「愛しき魂よ、なぜ思慮と愛に生きる霊としてのすべての喜びを知ろうとしないのですか。それを知ることができれば、盲目のあなたを暗闇につつま、不純で、重たい像を見ようと頼んだりはしないでしょう。」神とともに生きようとする盲目な者は幸いです。ここにいるあなた達よりも、彼は幸せを感じ、それに触れることができるのです。魂に会い、地上での運命を定められた者たちには見ることはできない霊の世界へ、ともに飛び立って行くことができるのです。開かれた目はいつも魂を墮落させる原因となります。閉じられた目は、反対に、いつも魂を神の元へ引き上げることができます。親愛なる友よ、私を信じてください。盲目は、ほとんどいつも心の真なる光をもたらしてくれます。一方で、視力はほとんどいつも、魂を死に追いやる恐ろしい使いなのです。今度は、かわいそうな苦しむあなたのために言葉を送ります。勇気を持って待つのです。「娘よ、あなたの目は開かれるのです」と、もし私が言えば、あなたはどんなに喜ぶことでしょうか。しかし、その喜びがあなたの大きな損失となるということを誰が知っているのでしょうか。幸福をつくりながら、悲しみというものを認めた、善なる神を信じて下さい。あなたのためになることはすべて致します。しかし、あなた自身も祈らなければいけません。そして、なによりも私が来て申し上げることすべてについて考えてみて下さい。ここを去る前に、ここにいるあなた達すべてに、私からの祝福がもたらされますように。(聖ヴィアンネー、パリ、一八六三)

二十一、注意 ある苦しみが現世の行いの結果でないのであれば、その原因は前世に求めなければなりません。運命のいたずらと私たちが呼ぶものは、神の正義の行いに過ぎないのです。神は仲裁的な罰は与えません。なぜなら、過ちと罰の間には、必ず相互関係が存在しなければならないからです。神がその善意によって、私たちの過去の行いをベールで覆い隠したとしても、次のような言葉によって私たちの道を指してくれるのです。「剣によって人を殺した者は、剣によって殺される。」この言葉は、「私たちは常に犯した過ちと同じ方法によって罰せられるのだ」と解釈することができます。ですから、もし、誰かが視力を失うことによって苦しんでいるならば、彼にとって視力は墮落の原因であったからなのです。他人の視力を失ったことが原因であったのかも知れません。彼が強制した重すぎる仕事が誰かを失明させたのかも知れません。あるいは、他人を悪く扱ったり、注意不足によって失明させたのかも知れません。だから今、報復の罰に苦しんでいるのです。盲目な者自身が、自分を省みたとき、この報いを選んだのかも知れません。そのとき彼は、「もしあなたの目が恥の原因であるならば、えぐり取ってしまいなさい」というイエスの言葉を自分自身にあてはめていることになるのです。

(一) この通信はある盲目の人のために呼び起こされた Cur' e d' Ars ~アルスの司祭聖ヴィアンネーの霊によって伝えられた。

第九章 柔和で、平和をつくる者は幸いです

一、柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。（マタイ第五章 五）

二、平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。（マタイ第五章 九）

三、昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者は裁きを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでも裁きを受けなければなりません。兄弟に向かって『ラッカ』と言うような者は、審判所に被告として送られるでしょう。また、『気違い』と言うような者は地獄の火へ投げ込まれるでしょう。（マタイ第五章 二十一、二十二）

四、これらの金言によって、イエスは柔和、温和、親切、我慢を規律としています。それにより、暴力、怒り、同胞に対するいかなる無作法な表現をも非難しています。「ラッカ」とはヘブライ人の間の侮辱の表現で、価値のない人を意味し、頭を横にそらし、つばを吐きながら発音した言葉です。兄弟に対して「気違い」などと言う者は、さらにひどく責められることが、地獄の火によって脅かされています。いかなる状況でも、同じように、意志が過ちの重大さを増したり、軽減したりするということはここでも明らかです。ではなぜ、たった一言の表現がそれほど重大にとられ、それほどまでに厳しい非難を受けなければならないのでしょうか。それは、いかなる攻撃的な言葉も、人間同志に和解と協調をもたらすために支配する愛と慈善の法に背いた感情を表現するからなのです。そうした表現は、人間相互の慈悲心や同胞愛に対して振り下ろされる一撃となります。それは憎しみと恨みをもたらします。いかなるキリスト教徒にとっても、神に対する謙遜の気持ちの次には、隣人への慈善こそが最も重要な規律なのです。

五、では、人間に対し、この世の富を放棄することによって天の富を約束したイエスは、「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです」という言葉によって、何を教えようとしたのでしょうか。天の富を待つ間、人間は生きるために地上の富を必要とします。イエスは単に、後者を、前者よりも重要視することがあってはならないと教えたのです。それらの言葉により、今のところはまだ地上の富が、柔和で平和をつくる者を犠牲にして、暴力的な者によって独占されていることを示そうとしました。必要なものを過剰に所有している者がいる一方で、柔和で平和をつくる者には多くの場合、必要なものさえも欠けています。彼らに対して、イエスは、地上においても、天と同じように正義がなされることを約束しています。なぜなら、そうした柔和で平和をつくる者は、神の子と呼ばれるようになるからです。人類が愛と慈善の法に従うようになれば、誰もわがままを言うことはなくなります。弱くおとなしい者は、もはや搾取されたり、強く、暴力的な者に押しつぶされることはありません。進歩の法とイエスの約束にしたがって、悪を遠ざけることによって世界が幸せになったとき、地球はそのようになるのです。

霊たちからの指導—愛想の良さと温和さ

六、隣人への愛がもたらす、同胞への好意は、その気持ちを表現しようとするとき、愛想の良さと温和さを生みます。しかし、必ずしも見かけだけを信じてはなりません。教育を受けたり、世間慣れすることは、人間にこうした性格を見かけ上は獲得させます。善良ぶりが表向けの仮面であったり、内面的な奇形を目立たなくさせる立派な衣装のようなものでしかない人がどれだけいるのでしょうか。世の中には、口元には笑みを浮かべ、心には毒を持った、そうした人々であふれています。腹立たしいことがない限りは優しく、しかしどんな小さな矛盾にも噛みついてきます。その言葉は前を向いている間は金に輝き、後ろを向くと毒の塗られた槍となります。外見的には親切でありながら、家庭内では暴君で、家の外で自分自身が押し込まれている窮屈な思いに対してうさを晴らすように、家族や彼に従う者を傲慢と独裁の重荷で苦しめる人も、そうした人々と同じ部類に属します。他人を命令に従わせるだけの権威を持っていないため、少なくとも自分に反抗することのできない者には自分に対して気遣わせようとし、彼はうぬぼれて言います。「ここでは私が命令し、私に皆が従うの

だ。」しかしそのとき、「そして、私は皆に嫌われているのだ」とつけ加えなければならぬのだとは考えないのです。口元からのみ甘い言葉があふれていてもことは足りません。そこに心が伴っていないのであれば、それは偽善でしかありません。見せかけではない愛想の良さと温和さの持ち主は矛盾することはありません。社会的にも、個人的にも同じです。そうした者は、それ以上に、見せかけによって人間を騙すことはできても、神を騙すことはできないということを知っているのです。（ラザロ、パリ、一八六一）

忍耐

七、痛みは、神によって選ばれた者に贈られる神からの恵みです。だから、苦しむとき、不安を感じてはいけません。まず、この世において苦しみを与えることによって、天におけるあなた達の栄光を示してくれた全能なる神を崇めることです。忍耐強くあって下さい。耐えることも慈善の一つであり、あなたは、神より送られたキリストによって教えられた慈善の法を実践しなければなりません。貧しい人に小銭を与えることによる慈善は、なかでも最も容易な慈善です。しかし、他にも、より苦しくとも、より賞賛に値する別の慈善があります。それは、神が私たちの忍耐を試そうと私たちの歩む道の途中に置いた人々を赦す、という慈善です。人生が困難であることを、私はよく知っています。人生は沢山の取るに足らないことばかりで満ちており、それらが針でつつくように、私たちを痛めつけるのです。しかし、私たちに課された義務を行うならば、それが一方ではその代償や忠告を受け取ることになって、痛みにくらべれば遥かに多数の恵みとなるのだ、ということを知ることがあります。頭をうなだれた時よりも、顔を上げ、上を見上げた時の方が、背負っている荷は軽く感じられるものです。友よ、勇気を出して下さい。あなたの模範をキリストに求めて下さい。あなた達の誰よりもキリストは苦しみました、それを悔いることはありませんでした。あなた達は、あなた達の過去を報い、未来へ向けて強くならなければいけないのです。ですから、忍耐強く、キリストの教えを守る者であって下さい。それがすべてです。（ある友人の霊、ルアーヴル、一八六二）

服従と甘受

八、イエスの教義はすべての箇所において、温和さとは切り離すことのできない服従と甘受の気持ちという二つのとても能動的な美德を教えています、人々は誤ってそれを感情と意志の否定と取り違えてしまいます。服従とは理性が同意することです。甘受とは心が同意することです。どちらも能動的な力であり、反逆的な愚かな者であれば落としてしまう試練の重荷を持ち上げることのできる力なのです。憶病な者は甘受することができず、同様にごう慢な者、利己的な者は服従することができません。イエスはこれらの美德そのものとして生まれましたが、当時の人々は彼を軽んじました。イエスは、ローマの社会が墮落と衰退によって滅びようとしていた頃に生まれました。抑圧された人類の中に、献身と性欲の放棄がもたらす勝利を輝かせるために来たのです。どの時代にも、残すか失うかしなければならぬ、美德や悪徳の印が残されています。あなたの時代の美德は知性的な活動です。悪徳は道徳的無関心です。単に「活動」と表現しているのは、天才が突然向上し、自分一人だけで、他の大勢はもっと後になってからしか見ることのできない地平線を見つめることができる一方で、「活動」ではすべての者の努力を集結し、それほど輝かしくなくとも、そのとき代の知性的な向上の証となるような、ある目的を達成することを指すからです。私たちがあなた達の霊に与える刺激にしたがって下さい。偉大なる進歩の法に服従して下さい。それがあなた達の時代の言葉です。怠惰な霊や理解の扉を閉じてしまう霊の可哀想なことよ。ああ、前進する人類の導き役である私たちは、あなた達に鞭撻し、また反抗的な心には、二重の作用によって、歯止めをかけたり、拍車をかけたりします。どんなごう慢な抵抗も遅かれ早かれ負かされてしまいます。しかし、温和な者は幸いです。なぜなら、教えに従順に耳を傾けることができるからです。（ラザロ、パリ、一八六三）

怒り

九、自尊心は、あなた達を実際以上に高く思いこませます。あなたが卑しめられるような比較には耐えられなくさせます。反対に、霊的にも社会的にも、また個人的な長所においても、あなたは自分

の兄弟よりもずっと上にいるのだと考え、下級の者があなたを苛立たせ、がっかりさせるのだと考えさせます。そこから、何が続くでしょうか。そう、あなたは怒りに身を任せることになるのです。あなたを凶暴な者と変わらなくさせてしまい、冷静さと理性を失わせる、この一時的な狂気に駆られる原因を調べて見て下さい。調べてみればほとんどいつも、傷つけられた自尊心をそこにみつけることができるでしょう。最も熟考された忠告を、あなたに怒りっぽく拒絶させるのは、否認されたあなたの自尊心ではなくて何だというのでしょうか。たいてい取るに足りない不満の原因となっている辛抱のなささえも、誰もが自分の前に頭を下げるべきだと考える、各々が自分自身に抱く重要性から来ています。かんしゃくを起こすと、怒りっぽい人間はすべてに対して当たり散らします。その野蛮な性格、動かぬ物体に当たり、自分の言うことに従わないとそれらを破壊します。ああ、そのとき、冷静に自分を見つめることができたなら、自分自身を恐れるか、あるいは自分自身の愚かさを知ることができるでしょう。そのとき他人に対してどんな印象を与えたかを想像してみてください。それがたとえば、単なる自分への尊敬の気持ちからくるものでなかったとしても、自分を憐れみの対象としてしまう傾向に打ち勝つ努力をするべきです。怒りはどんな薬も抑えることができず、健康を害し、命までも危うくするという事を考えれば、自分自身が第一の犠牲者となっていることを認識することができるでしょう。しかし、何よりも、頭に入れておかなければならないもう一つの考えは、怒ることによって周りにいる人達を不幸にしてしまうということです。心を持っているのなら、最も愛する相手を苦しめることは、後悔に値することではないでしょうか。怒りの発作の時、その人を一生嘆き悲しませるような行動をとってしまったら、私たちの良心はその責任をひどく重く感じるようになるでしょう。つまり、怒りは、心から良心を奪うのではないが、私たちにどんな善行をも行うことを妨げ、私達を悪行に導くのです。このことは、人類をこの悪い特徴を克服する努力に導くには十分です。ましてスピリティストであるならば、もう一つの理由によって努力しなければなりません。それは、怒りはキリスト教徒の慎ましさと慈善に反するという理由です。（ある守護霊、ボルドー、一八六三）

十、自分自身の性格は変えることができないという大きく誤った考えによって、人はわがままを満たし、根絶するには多くの忍耐が求められる自分の欠点を改めようとする努力を免除されているのだと判断してしまいます。例えば、怒りっぽい傾向にある人は、たいていそれを自分の気質のせいにして、自分自身の責任であることを認めるかわりに、肉体組織のせい、神のせいにして、自分の犯した失敗に対しても同様の態度をとります。これもあらゆる不完全性の一つとして残る自尊心がある結果です。疑いなく、気質は何よりも暴力的な行動に役立つもので、それは、柔らかな筋肉の方が力を出すときによく働くのと同じです。しかし、そこに怒りの本質的な原因が存在するのだと信じてはならず、平和を好む霊は、胆汁質の肉体を持っていようと常に平静を保ち、暴力的な霊はリンパ質の肉体を持っていようと温和ではないということを受容しなければなりません。温和な時にのみ、暴力は別の性格に変わり、怒りは収縮され、他の場合には怒りは活発になります。肉体は、怒りを持たぬ者には怒りを生みず、同様に他の悪癖も生みません。いかなる美德も、いかなる悪癖も、霊に帰するものです。そうでなければ、長所や責任感というものはどこに存在するのでしょうか。霊と係わっていないため、不具者はもとの形に戻ることはできません。しかし、揺るがぬ意志さえあれば、霊に係わることは変化させることができます。あなたたちの目の前で行われる本当に奇跡的な変化によって、意志の力によってどこまで行くことができるのか、経験はあなた達スピリティストに対して教えてくれないのでしょうか。だから、人間は悪癖を保ちたいのでない限り、悪癖を保ち続けるのではないということを受容して下さい。自分を改めたいと望む者は必ず改めることができるのです。でなければ、進歩の法は人類のために存在しないこととなります。（ハンネマン、パリ、一八六三）

第十章 あわれみ深い者は幸いです

神があなたを赦してくれるよう、あなたは人を赦しなさい—敵対者と和解すること—神にとって最も喜ばしい犠牲—おが屑と目の中の丸太—他人に判断されないよう、他人を判断してはなりません。まったく罪がないと思う者が最初の石を投げなさい—霊たちからの指導—攻撃を赦すということ—寛大さ—他人をとがめることは許されるのでしょうか。人の不完全さを指摘し、他人の悪を言い広めることが許されるのでしょうか。

神があなたを赦してくれるよう、あなたは人を赦しなさい

一、あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。（マタイ第五章 七）

二、もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいませ。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりませぬ。（マタイ第五章 十四—十五）

三、また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。（マタイ第十八章 第十八章—十五）

そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ、兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」（マタイ第十八章 二十一、二十二）

四、あわれみ深くない者は、温和で平和を愛することはできないことから、あわれみとは温和さを補足するものであるといえます。あわれみは他人の過ちを赦し、忘れることによって成り立ちます。憎しみと怒りは、その魂が小さく、気高くないことの表れです。攻撃を忘れることは高貴な魂だけに属するもので、そのような魂は、人がその魂に対して行おうとした悪を高所から眺めることができるのです。一方は常に落ちつくことがなく、悲しく苦しい感覚です。他方は落ちついた、慈善と温和さに満ちた感覚です。「断じて赦すことはできない」と言う人は不幸です。なぜなら、その人は人間によっては非難されないとしても、必ず神に非難されることとなります。自分自身が他人を赦すことができないのに、自分の過ちを赦してもらい権利があるのでしょうか。兄弟を赦すとき、七度までではなく、七度を七十倍するまで赦しなさいと言ふことによって、イエスは、あわれみは限りないものでなければならぬと教えています。しかし、赦し方には違った二つの方法があります。一方は偉大で高尚な、真なる寛大さによって、いかなる下心も持つことなく、その責任のすべてが相手であったとしても、その人の自己感情と感受性を傷つけないように優しく扱います。もう一方の方法は、攻撃されたり、攻撃されたと判断すると、相手に屈辱的な条件を強要し、赦したことの重圧を感じさせ、それによって安心を与えるのではなく、苛立ちを与えることとなります。手を差し伸べるのは善意からではなく、見栄によってであり、そうすることにより皆に対し、「私がなんと寛大であるか見るがよい」と言います。このような場合、いずれの側にとっても誠実な和解をすることは不可能です。まったく、それは寛大さではなく、自尊心を満足させるための手段でしかありません。どのような争いにおいても、和解を求めて、自分自身の利害にかまわずに、慈善と真なる魂の偉大さを見せる者が、必ず公平な人々の同情を得ることができるのです。

敵対者と和解すること

五、あなたが敵対者と道をともにしているうちに、直ちにあなたの敵対者と和解しなさい。さもなければ、敵対者はあなたを裁判官に渡し、裁判官があなたを役人に渡し、あなたは牢屋へ送り込まれてしまいます。誠に申し上げます。最後の一銭を払い終わるまでそこから出ることはできません。

（マタイ 第五章 二十五、二十六）

六、善の行いと同様に、一般に赦しの行いには道徳的な影響ばかりでなく、物質的な影響もあります。私たちの知る通り、死は私たちを敵から解放させてはくれません。反逆的な霊はいつも憎しみとともに、その怒りの対象となる者を死後の世界を越えて追いかけて行きます。そのことから「犬を殺してしまえばその犬の怒りも消える」と言ったことわざは、人間にあてはめては間違いであるということになります。悪霊は、悪を働きたい相手に対して、その相手が肉体に収まり続け、それによって自由があまり与えられないままであり続けることを望みます。そうあることでその相手は苦しめ易くなり、その利益や最愛のものを攻撃することが可能となるからです。大多数の憑衣、特に、かなり重傷な服従的憑衣や支配的憑衣の原因を、こうした事実の中に見出すことが必要です。憑衣された者と支配する者は、ほとんどの場合、過去の復讐心の犠牲となっており、それがほぼ間違いなくそうした行動の動機となっています。神は、彼らの行った悪を罰するためか、あるいは悪を行っていないのであれば、寛大さや慈善に欠けたことによって他人を赦すことができなかつたことを罰するために、そうした憑衣のおこることを許します。ですから、未来の平安に目を向け、できるだけ早く隣人に対して行ってきた悪を改め、敵を赦すことによって、死を迎える前に、あらゆる不和の原因、あらゆる過去のうらみの深い動機をも消滅させることが重要なのです。こうすることにより、一方の世界における敵をもう一方の世界における友とすることが出来たり、少なくとも、赦すことを知る者が復讐を味わうことがないように神がしてくれるための良い機会となります。イエスが私たちに、できるだけ早く敵と和解するように勧めた時、単に今生での不和を避けるように望んだのではなく、不和が未来の人生においてまでも続くことがないことを望んだのです。イエスは、「最後の一銭を払い終わるまで」、つまり神の正義が完全に満たされるまで、「そこから出ることはできません」と言ったのです。

神に最も喜ばれる犠牲

七、だから、もしあなたが祭壇の前で供え物を捧げようとした時、そこで自分の兄弟があなたに対して反感を抱いていることを思い出したのであれば、あなたの供え物を祭壇の前に置き、まずあなたの兄弟と仲直りをしに行き、その後で供え物を捧げに来なさい。（マタイ第五章 二十三—二十四）

八、「まずあなたの兄弟と仲直りをしに行き、その後で供え物を捧げに来なさい」ということにより、イエスは、神にとって最も喜ばれる犠牲とは一人一人の悪い感情であるということをお教えたのです。神に赦しを求める前に他人を赦すことが必要であり、兄弟に対し何だかの悪を働いているのであれば、それを改めることが必要なのです。そうすることによってのみ、供え物は喜ばれることとなります。なぜなら、その供え物はいかなる悪い考えにも汚されていない、純粋な心から送られたことになるからです。ユダヤ人には物質的な供え物を捧げる習慣があり、イエスは人々の習慣に自分の言葉をあわせる必要があったため、この教訓を具現化したのです。キリスト教徒は供え物を精神化するため、物質的な供え物を捧げたりはしませんが、キリスト教徒に対してこの教訓が何の力も持たないわけではありません。魂を神に捧げるときには、清らかな形で捧げなければならないのです。神の宮に入るなら、あらゆる憎しみや反感、兄弟に対する悪い考えをも宮の外にやらなければなりません。そうすることによってのみ、その人の祈りは永遠の神の足元に届くことができるのです。もし神に喜ばれたいのであれば、「祭壇の前に置き、まずあなたの兄弟と仲直りをしに行きなさい」という言葉を、イエスは教えてくれるのです。

おが屑と目の中の杭

九、なぜあなたは、あなたの兄弟の目の中のおが屑を見つけ、あなたの目の中の杭を見つけることができないのですか。また、あなたの目の中には杭があるというのに、どうしてあなたの兄弟に対し、「あなたの目の中のおが屑を取り除かせて下さい」というのですか。偽善者よ、まず自分の目の中の杭を取り除きなさい。そうすれば、あなたの兄弟の目の中のおが屑をどうして取り除くことができるか見えるようになるでしょう。（マタイ 第七章 三～五）

十、人間の悪癖の一つに、自分自身の悪を見つける前に他人の悪を見つけるということがありま

す。自分自身を判断するには、自分を鏡で見るように、とにかく自分の外へ出て、自分を他人だと思って問うてみなければなりません。「自分が行っていることを他人が行っているのを見たら、私はどう思うだろうか。」間違いなく自尊心というものが、肉体的であれ道徳的であれ、人間に自分の欠点を見ぬふりをさせているのです。この特長は根本的に慈善に反しています。なぜなら、真なる慈善とは慎ましく、簡素で寛容だからです。誇らしげな慈善など非常識なものです。なぜなら、この二つはお互いに打ち消し合うからです。実際に、自分の人間としての重要性とその性格の優越を信じているうぬぼれの強い人が、同時に、他人の持つ悪によって自分を引き立てる代わりに他人の持つ善を目立たせ、自分を目立たなくさせるだけの自己放棄の気持ちを持つことができるでしょうか。だからこそ、自尊心は多くの悪癖を生み出し、また、多くの美德の否定でもあるのです。自尊心は人間の行動のほとんどにおいて、その根拠もしくは原動力となっています。進歩の一番の障害となる自尊心を、イエスがあれほど打ち消そうとした理由はそこにあるのです。

人に裁かれないよう、人を裁いてはいけません—罪を負わないものが最初の石を投じなさい

十一、人に裁かれないよう、人を裁いてはなりません。・・・なぜなら、あなたが他人を裁いたのと同じようにあなたは裁かれることになるからです。他人に対して用いるはかりと同じはかりを自分達にも用いなさい。(マタイ 第七章 一、二)

十二、するとファリサイ派の人や書記官達が、姦通の罪によって捕らわれた女をイエスのところへ連れてきて、人々の前に立たせ、イエスに向かって言った。「先生、この女は姦通によって捕らえられたところです。モーゼはその法によって、姦淫するものは石で撃ち殺せと命じています。それについてあなたはどのようにお考えですか。」イエスを責める口実をつくるため、イエスを試そうとこのように言ったのである。イエスは身をかがめると、地面に指で字を書き始めた。しかし、人々がしつこく問い続けるのでイエスは立ち上がって言った。「あなた達の中で、罪を犯したことの無い者が最初の石を投じなさい。」そして再び身をかがめて地面に字を書き続けた。イエスに質問をした人々は、イエスの言った言葉を聞くと、年老いた者たちから順番に、次から次へとその場を去って行った。やがてイエスと女だけが広場に残された。イエスは立ち上がり、女に聞いた。「婦人よ、あなたを責めた人達はどこへ行ったのでしょうか。誰もあなたのことを責めなかったのですか。」女が「いいえ、誰も」と答えると、イエスは女に言った。「私もあなたを責めません。さあ、行きなさい。今後、再び罪を犯してはいけません。」(ヨハネ 第八章 三—十一)

十三、「罪を犯したことの無い者が最初の石を投じなさい」とイエスは言いました。この一言によってイエスは、私たちが他人に対して寛容であることを義務としています。なぜなら、自分自身に対して寛容を必要としない人間は誰一人いないからです。この言葉は、私たちが自分自身を判断する基準以上の厳しさによって他人を判断してはならず、また、自分自身も赦してもらいたいと思うようなことで他人を責めてはならないのだということを私たちに教えてくれています。誰かある失敗によって非難する前に、自分について同じ様な非難が当てはまらないかどうか、見てみなければなりません。他人の行動に向けられる非難は、二種類の力によって引き起こされます。悪を抑圧しようという力と、行動が非難されている者に対する不信を強めようという力です。後者であれば、そこに悪意や中傷しか存在せず、弁解の余地はありません。前者であれば賞賛されるべきものともなり得、特定の場合には、人にやるべきことを指示することができます。なぜなら、そこから結果的に善が生まれるはずだからであり、また、そうでなければ社会というものは決して悪を排除することはできないからです。人間にとってその同胞の進歩を助けることは必要ないのでしょうか。必要であるがゆえに、「人に裁かれないよう、人を裁いてはいけません」という考えを、まったく文字通りに受け取らないことが大切なのです。イエス自身が悪と戦い、力のこもった言葉によって私たちに模範を見せてくれたことから、イエスが悪を非難することを禁止したとは考えられません。しかし、人を非難するだけの権威は、非難する者の道徳的権威に基づいて存在するのだということを教えたかったのです。他人を非難したことで自分自身も同じく罪を犯すということは、この権威を放棄することであり、抑制する権利を失うことなのです。ある権威を与えられた者が、その権威によって他人に適用しようとする法や規則を自ら破るのであれば、私たちの内なる本心はそのような者に対する敬意を失い、どのよ

うな自発的な服従をも拒むことになります。善にもとづく模範によって支えられた権威以外に、正当な権威というものは神の目には映りません。このことが同様にイエスの言葉にも強調されているのです。

霊たちからの指導—攻撃を赦すということ

十四、私の兄弟を何度赦せばよいのでしょうか。七回ではなく、七回の七十倍赦さねばなりません。この言葉は、イエスの伝えた言葉の中でも特にあなた達の知性に達し、あなた達の心の中で最も強い発言力を持つべき言葉です。この慈悲深い言葉を、イエスが使徒達に教えた、簡潔に要約されながらも熱望に満ちた祈りの言葉と比べてみると、同じ考えにたどり着くでしょう。完全なる正義であるイエスはペトロに答えます。「限りなく人を赦さねばなりません。その攻撃がしばしば行われるものであっても、一つ一つの攻撃を赦さねばなりません。他人からの攻撃、悪の行ため、侮辱によって傷つかなくなるように、あなたの兄弟達に自分を忘れることを教えなければなりません。それにより心は優しく、慎ましくなり、自分の温和さを量ろうなどとは決してしなくなります。結局、あなたが天の父にしてほしいと望むことを、あなた自身がしなければならぬのです。天の父はあなたを繰り返し赦してくれているのではありませんか。あなたは、何度神の赦しが下り、あなたの過ちが消されたかを数えたことがあるでしょうか。」だから、このイエスの答えを聞き入れ、ペトロのように、自分自身に当てはめて下さい。人を赦し、寛大さをもって、慈悲深く、心を広く、あなた達自身の愛に気前よくありなさい。主が補充してくれるのですから、与えなさい。主が赦してくれるのですから、他人を赦しなさい。主があなたを引き上げてくれるのですから、自分を下げなさい。主があなたを主の右側に座らせてくれるのですから、自分自身を卑下しなさい。愛する者たちよ、天高く輝く主の元よりあなた達に送るこの言葉を学び、伝えて下さい。主は常にあなた達の方を向き、十八世紀前に開始された骨の折れる仕事を愛をこめて行い続けているのです。あなたもあなたの兄弟達に赦してもらう必要があるのですから、あなたの兄弟達を赦して下さい。その赦されるべき行いがあなたに個人的な損害を与えたのだとしても、それはあなたが寛大になるためのもう一つの契機であると考えなければなりません。なぜなら、他人を赦すことの真価は赦す悪の重さに比例するからです。あなたの兄弟達が軽い攻撃しかしていなかったのだとすれば、彼らの過ちを許すことに何の価値もないこととなります。スピリティスト達よ、言葉においても、行動においても、他人の侮辱を赦すことが虚空なものとなってはならないことを決して忘れてはなりません。もしあなた達が自分達のことをスピリティストと呼ぶのであれば、あなた達が行うことのできる悪を忘れ、実現することのできる善以外のことは考えず、真なるスピリティストとならなければなりません。その道を歩みだした者は、思考の上でもその道から遠ざかろうとしてはなりません。なぜなら、あなた達は思考に関して責任を持たねばならず、神はそのことを知っているからです。思考の中から怒りのすべてを奪い去りなさい。神は一人一人の心の底にどのような感情があるのかを知っています。毎晩、私は隣人に対して何の反感もない、と言いながら就寝できるものは幸いです。(シモン ボルドー、一八六二)

十五、敵を赦すということは、自分自身の赦しを求めることです。友人を赦すことは友情の証しを示すことです。他人の攻撃を赦すことは自分が向上することを示すことです。友よ、だから神に赦してもらえよう、他人を赦しなさい。なぜなら、あなたが強情で、しつこく、頑固であり、軽い攻撃さえもいつまでも根に持つのであれば、日ごとにあなたが寛大さをより必要としているのだということを、神に忘れてもらうのを望むことはできないからです。おお、「断じて赦さない」と言う者は、自分自身をとがめていることになるのですから不幸な者です。自分自身の内面を見つめてみれば、あなた自身が攻撃者であったことがわかるかも知れません。軽い失望にはじまり不和に終わるその戦いの、最初の一撃を加えたのはあなたであったのかも知れません。あなたが他人を傷つける言葉を与えたのかもしれない。あなたは必要なすべての温和さを使いましたか。相手があまりにも気性が激しくて、間違いなくその相手に過ちがあるのかもしれない。しかし、そうであるからこそ、そこにはあなたが寛大であり、相手をあなたの非難的からはずさねばならない理由があるのです。ある場合においては、本当にあなたが他人の攻撃の犠牲者であったと仮定しましょう。しかし、その一件の仕返しをしようとすることによって、本来であれば簡単に忘れ去られていたかもしれないことを、激しい議論にまで発展させてはいないでしょうか。その一件の悪い結末をくい止めることがあなたにで

きたのであったとすれば、あなたにも責任があったこととなります。あなたの行動にまったく非のうちどころがなかったと仮定しましょう。その場合、あなたが寛容であればあるほど、あなたの功労は大きいのです。しかし、赦し方にはまったく違う二通りの赦し方があります。口先だけの赦しと心からの赦しです。多くの方は、その対立した相手に対し、「私はあなたを赦します」と言いますが、心の中ではその人に対して起きる悪を喜び、それはその人が受けるべき悪であると言います。どれだけの人が「赦す」と言いながら、「しかし決して仲直りはしない。一生相手の顔も見たくない」とつけ加えるでしょうか。この「赦し」は福音に則った赦しでしょうか。いいえ。真の赦し、キリストの教える赦しとは、過去をベールで覆ってしまう赦しです。神は見せかけだけでは満足しないのであり、したがってそのような赦しだけがあなた達の功労として数えられるのです。神は心の奥深くや、心に秘めた考えをも調べます。無駄な言葉や見せかけによって神を騙すことは誰にもできません。完全かつ絶対的に他人の攻撃を忘れることは、偉大な魂だけにできることです。恨みは常に魂の劣等生、不完全性の印です。真の赦しとは言葉によってよりも行動によって知ることができるのだと言うことを忘れないで下さい。（使徒パウロ リヨン、一八六一）

寛大さ

十六、スピリティスト達よ、すべての人間がその兄弟のために持つべき、甘く、兄弟愛に満ちた感情でありながら、ほんのわずかな人達だけがその使い方を知っている寛大さについて、私たちは今日あなた達にお話します。寛大さは、他人の持つ短所を見つ出すことはなく、また、見つけたとしても、そのことを口に出したり、他人に言いふらしたりはしません。反対にその短所を隠し、そのことが自分以外の誰にも知られることがないように努め、もし悪意を持った人たちがそのことを知ったとしても、彼らに対して、いつでも過ちを犯した者をかばう弁解を用意しています。その弁解とは、称賛に値すべき真剣なものです。人の過ちについて表向きでは寛大に受け止めるふりをしながら裏で不誠実な証言するような弁解ではありません。寛大さは、相手を助けるため以外には、決して他人の悪い行いを気にかけることはありません。しかし、相手を助ける場合でも、できる限りその悪い行いを軽くしようとします。衝撃的な注意をしたり、口で相手をとがめたりはしません。忠告だけを、それもそれとないやり方で相手に示します。もし相手を非難するのであれば、あなたの言葉からどのような結論にたどり着くことになるのでしょうか。あなたが非難するのですから、あなたは非難したことと同じ過ちを起こすことはなく、よってあなたは非難した相手よりも立派な人間であるという結論になります。おお、人類よ、いつになったらあなた達は自分の兄弟の過ちを気にかけることなく、自分自身の心、自分自身の考え、自分自身の行動をとがめることができるようになるのでしょうか。いつになれば自分自身にだけに対する厳しい目を持つことができるのでしょうか。自分自身に対し厳しく、他人に対し寛大でありなさい。一人一人の心の秘められた部分の動きを見ることができ、すべての行動の動機を知っているがために、あなたが見つかったり、非難したり、批判したりする過ちを、何度も赦してくれる、最後の審判を下す者のことを覚えていて下さい。大きな声を上げ、「破門だ」と叫ぶあなた達こそが、より重大な過ちを犯しているのかも知れないのだと言うことを覚えておいて下さい。友よ、寛大でありなさい。寛大さは人々を引きつけ、穏やかにし、元気づけますが、厳しくすることは、元気を失わせ、人々を遠ざけ、苛立たせます。（守護霊ヨセフ ボルドー、一八六三）

十七、その過ちがどんなものであったとしても、他人の過ちに対して寛大でありなさい。自分の行動以外を厳しく非難してはなりません。神はあなた達に対して寛大であり、あなた達も他人に対してそうであるべきなのです。強い者たちには耐えなければなりません。彼らが忍耐強くあるように励ましてあげて下さい。弱い者たちには、どんな小さな後悔さえも考慮してくれる神の善意を示してあげることによって、彼らを強くしてあげて下さい。白い羽を人間の過ちの上に差し延べてくれることによって、何が不純であるのかを見ることができない者たちの目からその過ちを隠してくれる、後悔の天使をすべての人に教えてあげてください。あなた達の父の無限の慈悲を理解し、あなた達の思考や、特にあなた達の行動において、「私たちを攻撃した人たちのことを赦しますので、私たちの過ちもお赦し下さい」と言うことを決して忘れてはなりません。これらの言葉の崇高な価値を理解して下さい。その言葉が見事なだけでなく、その中に込められた約束が見事なものだからです。主にあなた達の赦しをお願いするとき、あなた達は何を求めていますか。あなた達の罪を忘れて欲しいと思う

だけですか。忘れることはあなた達に何も残してくれません。なぜなら、もし神があなた達の過ちを忘れることに満足するのであったとしたら、神は罰することもなければ償ってくれることもないからです。行ってもない善に対して報酬を受けることはできず、悪を行ってしまったのであれば、たとえそのことを忘れてもらうことができたとしても、なおさら報酬を受けることはできません。あなたの過ちに対して赦しを求め、神の恵みによって再び同じ過ちを繰り返さないように願い、新しい道を進み出すのに必要な力を求めなさい。その新しい道とは服従と愛の道であり、その中であなたは、後悔を改善に結びつけることができるようになるでしょう。あなたの兄弟を赦すとき、単に過ちを忘却のベールで覆うだけで満足してはなりません。このベールはほとんどいつも、あなた達の目には透明に映ります。あなたの赦しに愛を加え、あなた達が天の父にして欲しいと望むようなことをあなたの兄弟にしてあげて下さい。汚点を残す怒りを愛によって清めて下さい。イエスがあなた達に教えてくれた疲れを知らない生きた慈善を、模範を示すことによって他人に伝えなさい。イエスが地上に生活した間ずっと行ったように、生きた慈善を、肉体の目に見えるように伝え、またそれが霊の目にしか見えなくなってしまった後にも、休むことなく伝えなさい。この神聖なる模範に沿って、その足跡に沿って歩みなさい。それらはあなた達を戦いの後、休息をとることのできる避難所へと導いてくれます。イエスのように十字架を担ぎ、痛々しくとも勇気を持ってカルバリオへと登って行きなさい。その頂上には栄光が待っているのです。(ボルドーの司教ヨハネ 一八六二)

十八、親愛なる友よ、自分達に対し厳しく、他人の弱みに対し寛大であって下さい。ほんの少しの人達しかそれに気付いていませんが、これも聖なる慈善を実践する方法の一つなのです。あなた達は皆、克服しなければならない悪癖や、改めなければならない短所、変えなければならない習慣をもっています。あなた達すべてが重い負担を抱えています。進歩の山を登るためにはそれを軽くしなければなりません。それならなぜ、他人のこととなると頭がはっきりし、自分自身のことになるとそれほどまで盲目になってしまうのですか。いつになればあなた達は、自分たちを盲目にし、下落の方向へと歩ませている杭にも気がつかず、あなたを傷つける兄弟の目の中のささいなものの気にすることをやめるのでしょうか。あなた達の兄弟である霊たちのことを信じなさい。自分を他の兄弟達に比べ、その美德や長所においてより優秀であると考えた自尊心の強い人は皆、愚かで罪深いのであり、神の審判が下るとき、神に罰せられることとなります。慈善の真なる性格は、慎ましさと謙遜であり、他人の表面的な欠点を探すようなことなく、隣人に、その人の善いところ、徳の高いところを目立たせようとするところからなるのです。なぜなら、例え人間の心が墮落の深淵のようであったとしても、その心の隠れた奥底には、必ず霊の本質の輝く火花のような善なる感情の種子が存在するからです。慰安をもたらす祝福された教義であるスピリティズムを知り、主の送られた霊たちの健全な教えを有効に利用する者は幸いです。こうした者たちにとって教えは明確であり、的を射た方法を教えてくれる次の言葉を、長い道のりの間いつも読むことができます。「慈善の実践、自分に対して行うように、隣人に対して慈善を行う。」一言で表すならば、すべての人に対して慈善を行い、神の愛はすべてのものに与えられ、なぜなら神の愛はすべての義務を要約し、また、慈善を行うことなしに神を愛することは不可能であり、神はそのことをすべての創造物のための法としているのです。(ヌヴェールの司教デュフェートル、ボルドー)

他人をしかることは許されますか。他人の不完全性を指摘し、他人の悪を広めることは許されていませんか。

十九、誰も完全ではないのですから、誰にも隣人をしかる権利はないのだということができませんか。

もちろんそうではありません。なぜならあなた達は、一人一人がすべての人の進歩のために働かなければならず、また、あなた達が面倒を見る人のためには特に働かなければならないからです。しかし、そうであるからこそ、有益な意図によって慎重に人をしからなければならず、普通そうであるように相手を痛めつけることの喜びのためであってはなりません。相手を痛めつけるためにしかるのであれば、その人の検閲は悪意でしかなくなります。有益な意図によってしかるのであれば、それは慈善によって要求された任務として、できる限りの注意が払われなければなりません。さらに、他人に

向けた批判は私たち自身にも向けられ、自分達自身もしかれるべき立場にないかどうかを見なければなりません。

二十、その人にとって何の益ももたらさない他人の不完全性に気付くことは、そのことを人に広めなかったとしてもとがめられるべきことなのでしょうか。

まったく、そこにある意図によります。確かに悪が存在するのであれば、その悪を見つけることは禁じられてはいません。すべての場所に善だけしか見ることがなかったとしたら不都合です。それは進歩を妨げることとなります。過ちは、悪に気づき、世間に不必要にその人の悪評を立てることによって、隣人に損害を与えるところにあるのです。それに悪意が伴い、他人の欠点を見つけたことに満足しながら行うのであれば、なおさらとがめられるべきことです。しかし、悪の上をベールで覆い、それを公に知らせまいとし、その悪を研究し、他人の中に非難したことを自ら避けようと、個人的な利益にむすびつけるためにのみそれを観察するのであれば、事はまったく逆になります。このような観察は、道徳を学ぼうとする者にとっては有益ではありませんか。人間の無節制を、その例を学ぶことなしにどのように表すことができるのでしょうか。（聖（王）ルイ、パリ、一八六〇）

二十一、他人の悪を見つけることが役に立つことがありますか。

この問題は非常にデリケートであり、よく理解された慈善にその答えを求めなければなりません。もしある人の不完全性がその人にしか損害を与えないのであれば、その不完全性を他人に広めることに何の意味もありません。しかし、もしその不完全性が他人にも損害を与えるのであれば、一人よりも多数の利益を重視することが必要です。状況に応じて偽善と虚偽の仮面を剥ぐことは一つの任務です。なぜなら、多くの人々が騙され、犠牲者となるよりも、一人だけが畏にはまった方がよいからです。その様な場合には、利点と不都合をよく秤に掛けて見る必要があります。（聖（王）ルイ、パリ、一八六〇）

第十一章 自分を愛するように隣人を愛しなさい

最大の戒め—カエサルのはカエサルに与えよ霊たちからの指導—愛の法—エゴイズム—信心と慈善—罪人への慈善

最大の戒め

一、しかし、イエスがサドカイ人達を黙らせたことを聞いたファリサイ人達は一団となって集まった。その内の一人は法律学者であったが、イエスを試そうとして尋ねた。「師よ、律法の中で最大の戒めとはなんですか。」イエスは答えた。「あなたの神である主を、心から、全霊を込めて愛しなさい。これが第一の最大の戒めです。これと同じだけ大きな第二の戒めは、自分を愛するように隣人を愛しなさい、です。すべての律法がこれら二つの戒めにかかっており、また預言者も同様です。（マタイ 第二十二章 三十四—四十）

二、そして、あなたが人々にそのようにしてほしいと思うことを、あなたも彼らにしてあげなければなりません。なぜならそれが律法や預言者の意味することであるからです。（マタイ 第七章 十二）

三、天の国は、奴隷達と勘定の精算をしようとした王にたとえられます。勘定の清算を始めると、一万タレントを借りていた者が現れました。しかし、彼にはそれを支払うすべがなかったので、王はその人が借金を支払えるように、その人に、その妻と子供達、またその所有する物すべてを売るように命じました。奴隷はひれ伏し、「すべてお支払いしますから私のことをご辛抱下さい」と懇願しました。すると王はその人を哀れに思い、その負債を免除し、自由にしてやりました。ところがその奴隷は出て行くと、その奴隷に一〇〇デナリの借金をしていた仲間の奴隷に出会ったので、その人ののどもとをつかみ、首を絞めつけながら、「私に借りている物をみな返せ」と言いました。その仲間の奴隷はひれ伏し、「すべてお支払いしますから私のことをご辛抱下さい」と言いました。しかし、もう一方の者はそれを聞こうともせず、負債をすべて支払うまでその人を獄にとじこめるように命じました。その奴隷の仲間である他の奴隷達は、そこで何が起きていたのかを見ていましたが、それを見ると非常に悲しみ、王にそのことを報告に行きました。すると王は、その奴隷を目の前に連れてこさせて、その奴隷に言いました。「邪悪な奴隷よ、私はおまえが懇願したので全ての負債を取り消してやった。だから、おまえも自分の仲間のことを、私がおまえを憐れんでやったのと同じように憐れんでやる必要があったのではないか」と言い、大いに憤り、その負債をすべて支払うまで獄に閉じこめるように命じました。あなた達一人一人に対してあなた達の兄弟が行った罪を心の底から赦すのでなければ、天におられる私の父は、あなた達をこのように扱うでしょう。（マタイ 第一八章 二十三—三十五）

四、「自分を愛するように隣人を愛しなさい。他人にして欲しいと思うことを他人のためにしてあげなさい。」ここには、慈善が最も完全な形で言い表されています。なぜなら、これらの言葉には私たちが隣人に負う義務が要約されているからです。他人にするべきことの基準として、この中にある、「自分自身にして欲しいこと」ということ以外に、これほど確実な基準は存在しません。私たちは同胞に対して、私たちの彼らに対する献身、慈悲、寛大さ以上のものを、どうして強要することができるでしょうか。この金言を実践することによってエゴイズムは破壊されます。これらの言葉を人間が行動の基準とし、その作り出すあらゆる制度の基盤とすれば、真なる兄弟愛を理解し、彼らを平和と正義が治めるようにすることができるでしょう。憎しみや不和はもはや存在しなくなり、調和、統合、相互の慈悲心が生まれることになるでしょう。

カエサルにはカエサルのものを

五、ファリサイ人達は出ていくと、自分達の言葉でイエスを混乱させようとたくらんだ。すると使徒達をにへロデ派の人々と共にイエスのもとに行かせ、こう言させた。「師よ、あなたは真実によっ

て、神の道を誰にでも、その人が誰であるかにかかわらずに教えてくれることを知っています。それでは、このことに対してどうお考えか教えて下さい。私たちは税金をカエサルに支払わなければならないのでしょうか、それとも支払わなくてもよいのでしょうか。」しかし、イエスは彼らのたくらみに気づき、こう答えた。「偽善者たちよ、なぜ私を試そうとするのか。税金を支払うときに使う硬貨を私に見せなさい。」そして一デナリの硬貨を見せると、イエスはこうたずねた。「この像と銘刻は誰のものですか。」彼らは、「カエサルのものです」と答えた。するとイエスは、「そうであるならば、カエサルのもものはカエサルに、神のものは神に返しなさい」と言った。そのようにイエスが答えたのを聞くと、彼らはその答えに驚き、イエスをその場に残して出ていった。(マタイ 第二十二章 十五—二十二、マルコ 第一二章 十三—十七)

六、イエスに対する質問は、ローマ人の課する税金を忌み嫌うユダヤ人が、その税金の支払いを宗教的な問題であるとした状況から生まれました。多くの政党がその税金に反対して設立されていました。その税金の支払いは、彼らの間では当時のいらだたしい問題となっていたのでした。そうでもなかったとすれば、このような質問をイエスにすることはなかったでしょう。「私たちはカエサルに税金を払うべきでしょうか、払わぬべきでしょうか。」そこには畏がしこまれており、返答によって、ローマの権威か、ユダヤの異論者たちのいづれかが、イエスに対して逆らうことを期待して質問したのでした。しかし、イエスはその悪意を知っており、それぞれの物が与えられるべき者に与えられなければならないのだという正義の教えを説き、この難題を切り抜けたのです。(序章、税の取り立て人の部分参照のこと)

七、しかし、「カエサルにはカエサルの物を与えよ」というこの文は、厳密にまったく文字どおり理解されるべきではありません。イエスのすべての教えの中にあるように、そこには大原則が、特定の場合における実用的な形で要約されているのです。この原則は、自分達に対して行って欲しいと思うように他人に対して行わなければならないという、もう一つの教えの結果なのです。その教えは、どのような道徳的・物質的損害を他人に与えることも、他人の利益を無視することもとがめています。そして一人一人の持つ権利が、皆が自分の権利を尊重して欲しいように、尊重されるべきであるということを示しています。一般に、個人に対しても、家族や社会、権威に対しても、このことは同じように広げて考えられます。

霊たちからの指導—愛の法

八、霊的に進歩することにより、本能はその進歩のレベルまで引き上げられ、それは情操へと変化していきますが、そうした情操の最も卓越した形である愛の中に、イエスの教義は完全に要約されています。人間はその起源においては本能しか持っていません。それがやがて進歩し、形が崩されていくと、それは感覚に変化していきます。教育され、浄化されると情操に変化します。情操の最もデリケートな部分が愛です。その愛とは、一般的な低俗な意味のものではなく、内なる太陽のように、その焦点に人類を越えたあらゆる啓示や熱望を凝縮し集めたものです。愛は人間の個人性を人々との協調性に置き換えます。愛は社会的な貧困を打ち消します。人間であることを越え、広い愛情によって苦しむ兄弟達を愛する者は祝福されます。肉体の貧困も魂の貧困も知らない者は祝福されます。そのような者の足どりは軽く、自分の体の外を移動しているように感じます。イエスが愛という神聖なる言葉を発すると、殉教者たちは希望に酔いしれ、劇場へと降りていったのです。スピリティズムの到来によって、神の言葉の中の二番目の言葉が伝えられました。注意深く聞いて下さい。「再生」(リインカーネーション)、この言葉は空になった墓場の墓石を持ち上げ、死というものに打ち勝ち、衝撃を受けた人々にその知的財産を示してくれるのです。しかし、それは人間を虐待に導くのではなく、自分自身の存在を征服し、高尚に変貌することに導いてくれるのです。血は霊を取り戻しましたが、今度は霊が人間を物質から取り戻さねばならないのです。人間はその起源においては本能しか持っていないと言われます。ですから、まだ本能によって支配されている者は、目的の地よりも出発点に近いところにいるのです。目標に向かって進んで行くには、情操を育てるために本能に打ち勝たねばならず、つまり、物質の中に眠る種子を抑制し、情操を完成させる必要があるのです。本能は情操の兆しであり、その種子のようなものです。どんぐりの中にかしの樹が隠されているように、本能の

中には進歩が隠されているのです。進歩の遅れたものとは、さなぎからゆっくり解放されつつも、依然として本能に支配されている者のことです。霊は畑のように耕されなければなりません。未来における豊かさは、今日の労働によってもたらされます。労働は地上における財産以上に、栄光の向上をもたらします。そのとき、すべての存在を統合する愛の法を理解することが可能となり、天における幸せの序曲である魂の優しい喜びをその中に求めることができるでしょう。（ラザロ パリ、一八六二）

九、愛とは神なる精髓からできたものであり、最も卑しい者から最も高尚な者まで、あなた達はこの神聖なる火の火花をみな心の底に持っています。まったく、このことはあなた達も何度も証明することができたに違い在りません。人間は、どんなに卑しく、貧しく、あるいは罪深くとも、誰か、もしくは何かしらの物に対し、生き生きとした熱烈な愛情を抱き、その気持ちはそれを弱めようとするどんな試みに対しても抵抗し、多くの場合、崇高な調和に至ります。私が誰か、もしくは何かしらの物と言ったのは、あなた達の間には愛のあふれる心を持ちながら、その気持の富を動物や植物、あるいは物質的な物のために費やしてしまう人達がいるからです。そうした人達は一種の人間嫌いの人達で、人類一般に対して不満を持ち、自分の周りに愛情と同情を求めようとする自分達の魂の自然の傾きに抵抗し、愛の法を本能の条件にまで引き下げてしまう人達のことです。しかし、どれだけしようとも、神が彼らを生んだときに授けた活発な種子を抑えることはできません。この種子は道徳性と知性ととともに発達し、しばしばエゴイズムによって圧迫されながらも、誠実で長続きする愛情を生み出す甘い聖なる美德の源となり、それは人生の険しく荒涼とした道のを乗り越えるための支えとなってくれるのです。自分達がうらやましいと感じている愛情深い同情を、他人が分かち合いに来るといふ考えから、再生（リインカーネーション）を受け付けない人々がいます。可哀想な兄弟達よ。あなた達の愛情はあなた達をエゴイストにしてしまうのです。あなた達の愛は親しい親類や友人の輪の中だけに狭められ、その他の人に対して無関心になってしまいます。よろしいでしょうか、神の教える愛の法を実践するには、あなた達の兄弟を無差別に愛するために一步一步近づいていかなければなりません。その任務は長く、困難ですが、いつか達成されるでしょう。神はそうなることを望んでおり、愛の法が、第一の最も重要な規律でなければならないのです。なぜなら、個人的なエゴイズムの他に、血筋中心のエゴイズム、階級的なエゴイズム、国家的なエゴイズムが存在するなかで、どのような形であろうと、あらゆるエゴイズムを愛の法はいつの日か滅ぼすことになるからです。イエスは、「隣人を自分と同じように愛しなさい」と言いました。では、隣人とはどこまでを指すのでしょうか。家族でしょうか、宗派でしょうか、それとも国家でしょうか。いいえ、人類全体を指すのです。より優れた世界においては、相互の愛がそこに住む進歩した霊たちを導き、和を築いていますが、近々著しい進歩を遂げることになっているあなた達の惑星においては、そこでおきる社会的変化のために、神を写し出すこの崇高な法を、そこに住む者たちが実践するようになるでしょう。愛の法がもたらす結果とは、人類の道徳的向上と、地上における人生の幸福です。この規律の実践がもたらす有益な結果を知ることにより、最も反抗的な者や、最も悪徳な者も自らを改めることになるでしょう。自分にして欲しくないことを他人にしてはなりません。その反対に、あなた達にできる事が可能なすべての善を彼らにしてあげなければなりません。人類の心の不毛さや冷酷さを信じてはいけません。嫌々ながらもそうした心は、真なる愛の前には譲ります。真なる愛とは磁石のようなもので、抵抗することはできないのです。真なる愛との接触は、あなた達の心の中に潜む愛の種子を発芽させ、活発にさせます。追放と苦境の天体である地球は、やがてこの聖なる火によって浄化され、その表層には慈善、謙遜、忍耐、献身、甘受、忍従、犠牲といった、すべての愛の産物が実践されるのを見ることができるようになるでしょう。ですから、伝道者ヨハネの言葉に聞きあきることがあってはなりません。あなた達が知るように、病と老いによって彼が説法を続けることができなくなったとき、「子供達よ、お互いに愛し合いなさい」というこの優しい言葉だけを繰り返しました。愛する兄弟達よ、これらの教えを役に立てて下さい。それを実践することは難しくとも、魂はそこから多くの益を得ることになります。私を信じ、あなた達にお願いする崇高なる努力をして下さい。「お互いに愛し合いなさい。」そうすることにより、近い将来、地球は樂園へと変化し、そこには正しい者たちの魂が休みに集まることでしょう。（フェヌロン ボルドー、一八六一）

十、親愛なる同胞達よ、ここにいる霊たちが私を通じ伝えてきます。「愛されるために、大いに愛

しなさい。」この考えはまったく正しく、その中には日々の苦しみを和らげ、慰めてくれるものすべてを見出すことが出来ます。分かり易く言うならば、この知恵ある教えを実践することにより、あなた達は物質を超えて向上し、地上における肉体の包みを後にする前に霊的に進歩することが可能となるでしょう。未来を理解するためにスピリティズムの研究を発展させることにより、一つの確信を持つことができるようになるでしょう。あなた達の魂の熱望に応える約束の、すべてが実現されながら神に向かって歩んでいるという確信です。ですから、あなた達は物質に束縛されることなく、自らを高く持ってものごとを判断しなければならず、神へ考えを寄せることなしにあなた達の兄弟を非難してはなりません。愛するということの深い意味は、人間が誠実、正直、良心的に、他人に対してして欲しいと思うことをしてあげるといことです。兄弟達を困らせているあらゆる痛みを自分の周りをさがし、それを和らげてあげようと親身になって感じることです。人類全体を自分の大きな家族のように考えることです。なぜなら、この世界にいる期間が過ぎた後、より進歩した世界において、その家族のすべての者と再会することになるからです。そうした家族をつくっている霊とは、あなた達と同じ、無限に向けて向上していく神の子です。だから、神が自由にあなた達に授けた兄弟を拒んではならず、それはあなた達の立場から、もし兄弟達があなたが必要としているものをくれたらあなた達は喜ぶだろう、ということを見れば明らかです。ですから、いかなる苦しみに対しても、いつも希望と慰安の言葉を持ち、完全なる愛と正義を持つことができるようになって下さい。「愛されるように、大いに愛しなさい」という賢い勧告を信じて下さい。これらの言葉は道を開きます。これらの革新的な言葉は、確実で不変の道をたどる言葉です。私の言葉を聞く者は、既に多くを得ています。なぜなら、あなたは百年前に比べれば限りなく良くなっているからです。あなた達の利益のために、大いに変化し、過去には拒んでいた自由と同胞愛や、無数の新しい考えを喜んで受け入れることができるようになりました。では、今から百年経った後には、疑いもなく、あなた達が未だその頭の中に納めることができないことを、同じ様な容易さによって受け入れることができるはずで。スピリティズムの運動がこれほど大きく前進した今日、スピリティズムの中でいつも変わることなく述べられたいる正義と確信の考えが、非常に速く知的階層に受け入れられてきたことがわかります。これらの考えはあなた達の中に潜む神聖なものすべてに應えます。それは、あなた達の中には発芽が間もない種子が植えられているからです。その種子とは、一世紀前、地球上の社会の中に植え付けられた偉大なる進歩の考えのことです。そして、すべてが神の方向へ向かって連鎖しているため、授かり、受け入れられたすべての教えは世界的に隣人への愛に置き換えられることになるでしょう。そのため、人間として受肉している霊たちは、物事をより良くとらえ、理解することができるため、地球の隅々にまで手を差し伸ばすこととなります。一人一人がお互いに理解し愛し合い、すべての不正義や、人間同志の不和のすべての原因を滅ぼすために集まることになるでしょう。「霊の書」には、スピリティズムによる偉大なる確信の考えが記されています。この規律をよく理解し、適用することによって、あなたは来るべき世紀の驚異的な奇跡、つまり人類の物質的・精神的なすべての関心を調和させる奇跡を起こすことになるでしょう。「愛されるために大いに愛しなさい。」(元パリ・スピリティスト協会のメンバー、サンソン、一八六三)

エゴイズム

十一、エゴイズムは人類の大きな傷、人類の進歩を妨げるものであり、地上から姿を消さなければなりません。様々な世界の階級の中で人類の階級をあげることが、スピリティズムの役割として託されています。故に、エゴイズムは、真なる信者がその武器である力と勇気を差し向ける標的でなければなりません。勇気、と私が申し上げるのは、多くの人が他人に勝つ前に、自分自身に打ち勝つ必要があるからです。ですから、一人一人がその努力のすべてを、自分の中のエゴイズムと戦うことに費やさねばなりません。すべての知性をむさぼる怪物、自尊心の産物であるエゴイズムは地上の世界におけるすべての惨めさの原因であることは確かです。エゴイズムは慈善の否定であり、それゆえ人類の幸せの最大の障害です。イエスは慈善の模範を示しましたが、ポンティオ・ピラトはエゴイズムの例を示しました。つまり、前者、正義なる者が殉教の道を進んだのに対し、後者は「私には関係のないことだ」と言いながら手を洗ったからです。ユダヤ人達に「この者は正しい者であるのに、なぜ彼を十字架に掛けようとするのか」とまでいいながら、処刑を続行させたからです。人間の心の弊害であるこの慈善とエゴイズムの対立は、キリストの教えがその任務を完全に果たしていないことによる

ものです。高級な霊たちは新しい信仰の使徒であるあなた達にこの悪を根絶する任務と義務があり、あなた達の進行を妨げている障害を取り除き、キリスト教にすべての力を注がなければならないのだということを明らかにしているのです。地球が様々な世界の中で向上することができるように、地上よりエゴイズムを追放して下さい。人類はもう大人の服に着替える時期に来ており、そのためには、まずあなた達の心からエゴイズムを追放しなければならないのです。（エマヌエル、パリ、一八六一）

十二、もし人類がお互いに愛し合っていたならば、慈善はよりよく実践されていたでしょう。しかし、そのためにはあなた達が心にまとう鎧から解放され、隣人の苦しみにもっと敏感になれるように努力することが大切です。キリストは、キリストを求める人の誰をも決して軽んじたりはしませんでした。キリストを求めた者は、誰であっても拒否されることはありませんでした。姦淫した女、罪人もイエスによって助けられました。イエスはそのことによって自分自身の名声に傷が付くことを決して恐れたりはしませんでした。では、あなた達はいつになればイエスをすべての行動の模範とすることになるのでしょうか。地球上を慈善が支配したとき、悪は存続しきれず、恥ずかしがってその姿を消していきます。悪はどこにいても居心地を悪く感じるため、どこかに隠れてしまいます。そのとき、悪は消滅します。そのことを良く理解して下さい。あなた達自身が模範を示すことからはじめて下さい。すべての人に対し、区別することなく慈善的であってください。あなた達のことを軽蔑の眼差しで見る人達のことを気にしないように努力して下さい。すべての正義は神の手に委ねて下さい。なぜなら、神は毎日、神の国において麦と雑草とを選別しているからです。エゴイズムは慈善の否定です。慈善なしには社会生活の中に平和はなく、さらには、安全というものがなくなります。エゴイズムと自尊心は手を取り合って存在していますが、それらによって人生はいつもずるい者だけが勝つことのできる競争となり、もしくは最も尊い愛情もが足元に踏みにじられ、神聖な家族の絆さえも軽んじられる、利害の対立になってしまいます。（パスカル、サンズ、一八六二）

信心と慈善

十三、愛する子供達よ、人類を幸せにすることのできる社会秩序を人類の間に保つためには、信心の伴わない慈善では不十分であることを私は最近申し上げました。信心なしに慈善を行うことは不可能です。宗教の無い人々の間にも実際、気前のよい衝動を見ることができます。しかし、厳密にいう慈善とは、献身と、あらゆる利己的な利益を絶えず犠牲にすることによってのみ実践することができるのであり、そうすることを感じさせてくれるものは信心だけで、現世の十字架を勇気と忍耐をもって担ぐことを可能にしてくれるのは信心以外にはないからです。子供達よ、喜びに貪欲な人間が、地上での運命に錯覚し、自分の幸せだけを心配することが許されているのだと思いこんでしまうことは人間にとって無益なのです。永遠の中で神が私達を幸せになるように創造したことは確かですが、地上での生活は、物質世界と肉体の力を借りることによってより容易に達成することのできる私たちの道徳的完成のためだけに使われなければなりません。人生の一般的な苦しみ以外にも、あなた達それぞれの様々な好み、傾向、必要性などもあなた達が完成するための手段であり、あなた達に慈善の練習をさせているのです。なぜなら、お互いが犠牲を払ったり譲歩しあつてのみ、これほどまでに多様化した人々の間に調和を保つことができるからです。しかし、この世の人間に幸せが約束されていることを断言するのも、物質的な喜び以前に、善の実践の中にその幸せを求めるのであれば正しいこととなります。キリスト教の歴史は、喜びを感じながら苦しみに向かっていった殉教者たちのことを教えてくれています。今日、あなた達の社会の中では、キリスト教徒となるために殉教の炎に立ち向かう必要もなければ、命を犠牲にする必要もありませんが、単にエゴイズム、自尊心、虚栄心を犠牲にしなければならないのです。信心によって支えられ、慈善に感得されるのであれば、あなたは勝利を収めることができるでしょう。（守護霊、クラクフ、一八六一）

罪人に対する慈善

十四、真なる慈善とは、神が世界に教えた最も崇高な教えのうちの一つです。その教義の真なる使徒達の間には、完全なる同胞愛が君臨しなければなりません。不幸な者たちや罪人達を同じ神の創造

物として愛さなければならず、それは、彼らにもあなた達と同じように後悔することにより、神の法を犯した過ちに対する神の赦しと慈悲が与えられるからです。求める者たちへの赦しと同情を拒むあなた達は、彼らより罪が重く、さらにとがめられるべきなのだと考えなさい。なぜなら、ほとんどの場合、彼らはあなたが知っているような神の存在を知らないのであり、ゆえに彼らに求められるものはあなた達よりも少ないからです。おお、他人を判断しないでください。親愛なる友達よ、他人を裁かないで下さい。なぜなら、あなた達が人を裁くときに用いる判断の基準は、あなた達を裁くときにはより厳しく用いられることになり、あなた達が絶え間なく犯した過ちに対する寛容を必要とすることになるからです。世間では小さな過ちとさえも考えられないような行動であっても、純粋な神の目には罪として映る行動が多く存在することをあなた達は知らないのですか。真なる慈善は施し物や、あなた達と共に生きる人達への慰安の言葉だけから成り立っているわけではありません。いいえ、神があなた達に求めている物はそれだけではありません。イエスによって教えられた崇高なる慈善とは、あなた達の隣人に関わるすべての事に対する不断の慈悲心からも成り立っているのです。この崇高なる美德を、あなた達は施し物を必要としていない多くの人々に対して行うことができ、愛、慰安、励ましの言葉は彼らを神の元へ導くことになるでしょう。もう一度繰り返して申し上げますが、地球に同胞愛が君臨する時は近づいています。人類を統治するのはキリストの法です。その法は節度と希望を与え、魂を至福の国へと導くことができます。ですから、同じ父の子としてお互いに愛し合ってください。あなた達と不幸な者たちを区別しないで下さい。なぜなら、神はあなた達すべてが同じであることを望んでいるからです。誰をも軽んじてはなりません。神はあなた達の中に、重い犯罪人があなた達の教師として存在することを認めたのです。やがて人類が真なる神の法を實踐することが可能となった時、これらの教えは不必要になり、劣った霊たちはその傾向にしたがってより劣った世界へと散らばって行ってしまおうでしょう。あなた達はそうした劣った霊たちに対し、救援の祈りをしなければならぬということを私は申し上げます。それは真なる慈善です。ある罪人に対し、「惨めなやつだ。地上から追放されるべきだ。このような者には死だけでは甘すぎる」などと決して言うてはなりません。そうです、絶対にそのように言うてはなりません。あなた達の模範となるイエスのことを考えて下さい。イエスは、そのそばに不幸な者がいたらなんと言うのでしょうか。その人のことを悲しみ、多くを必要としている病人のように考慮し、手を差し伸べるでしょう。実際には、あなた達に同じ事は出来ないでしょうが、少なくとも彼のために祈り、彼が未だ地上に生きている間、霊的な援助を与えてあげることができます。信心深く祈れば、後悔の念が彼の心を打つかも知れません。彼も最良の人間と同じようにあなた達の隣人なのです。道に迷い、反抗的になってしまった彼の魂も、あなた達の魂と同じように、完成するために創造されたのです。ですから、彼がそのぬかるみから出ることができるように、彼を助け、彼のために祈ってください。（フランスのイザベル、ルアーブル、一八六二）

十五、ある人が死の危険に直面しています。彼を助けるには自分自身の命を危険にさらす必要があります。しかし、死に直面している人は悪人で、もし助かれれば再び新しい罪を犯す可能性があります。にもかかわらず、命の危険を冒してまで彼を救うべきでしょうか。

この問題は非常に重要な問題であり、私たちの霊に疑問として起こるのも当然なことです。たとえ悪人であっても、私たちの命の危険を冒すべきかを知ろうとここで扱っている以上、私の道徳的進度に応じてこの問題にお答え致します。献身は盲目です。敵兵もが助けられるように、社会の敵、つまり悪人をも助けて下さい。

そのような場合において、死だけがその哀れな者の人生を奪おうとしているとあなたは考えますか。いいえ、おそらくその者のすべての過去生がそうしているのです。なぜそれを考えるのですか。人生の最後の時を奪うその瞬間に、その迷える者は過去の人生を振り返ります。もっと正しく言うならば、過去の人生が彼の前に現れるのです。死は彼にとってとても早く訪れるかもしれません。再生は恐ろしいものになるかも知れません。だから、人類よ、身を投じなさい。スピリティズムの科学によって明らかにされたあなた達は、身を投じ、彼を危険から救ってください。すると、あなた達をのりながら死んで行ったかもしれなかったはずのその悪人は、あなた達の腕の中に飛び込んでくるかも知れません。しかし、あなた達は、彼がそうするかどうかを問うてはならず、救助に走らなければなりません。なぜなら、救助することによってあなた達の心の中で「あなたには助けることができる。彼を助けよ」と叫ぶ声に従うことができるからです。（ラムネー、パリ、一八六二）

第十二章 あなた達の敵を愛しなさい

悪を善によって報いる—他界した敵—もし誰かがあなたの右頬を打つなら、もう一方の頬も差し出しなさい—霊たちからの指導—復讐—憎悪—果たし合い

悪を善によって報いる

一、「あなた達の隣人を愛し、あなた達の敵を憎しみなさい」と言うのを学んだことがあるでしょう。しかし、わたしはあなた達に言います。「あなた達の敵を愛しなさい。あなた達を憎む者に善を行い、あなた達を迫害し、中傷する者たちのために祈りなさい。そうすることによって、あなた達は、善人の上にも、悪人の上にも太陽を昇らせ、正なる者にも、不正なる者にも雨を降らす天におられるあなた達の父の子となることができるのです。なぜなら、あなた達を愛してくれる者たちだけを愛するのであれば、いったい何を報酬として受けることができるでしょうか。税の取り立て人もそのようにしてはいませんか。あなた達の兄弟だけに挨拶をするのであれば、他人に比べて何を多く行っていると言うことになるのでしょうか。異教徒達も同じ事をしてはいませんか。（マタイ—第五章、四十三—四十七）

「あなた達の正義が、書記官やファリサイ派の人達の正義よりもすぐれたものでないのであれば、天の国に入ることはできません。」（マタイ、第五章、二十）

二、「悪い人生を送っている人達でさえ、愛してくれる人を愛することができるのですから、もしあなた達が、あなた達を愛してくれる人だけしか愛さないのであれば、あなた達にはどんな功労があることになるのでしょうか。悪い人生を送っている人達でさえ同じ事ができるというのに、もしあなた達が、あなた達に善を行ってくれる人だけにしか善を行わないのであれば、あなた達にはどんな功労があることになるのでしょうか。悪い人生を送っている人達でさえお互いに貸し借りしあい、同じ便宜を受けているのに、もし、あなた達が同じ頼みを聞いてくれる相手にしか貸さないのであれば、あなた達にはどんな功労があることになるのでしょうか。しかし、あなた達はあなた達の敵を愛し、すべての人に対して善を行い、そのことによって何も期待することなく貸せば、あなたの受ける報酬は大変大きなものとなり、恩知らずな者にも、悪人にも良くして下さる神の子に、あなた達はなることができるでしょう。ですから、あなた達の神が慈悲に満ち溢れているように、あなた達も慈悲に満ち溢れるようになりなさい。（ルカ、第十一章、三十二～三十六）

三、隣人への愛が慈善の原則であるならば、敵を愛することは慈善の崇高な適用です。なぜなら、その美德はエゴイズムと自尊心に対して収められた大勝利のうちの一つであるからです。しかし一般に人々はこの場合における愛という言葉の持つ意味を間違えるものです。イエスはこれらの言葉によって、普段兄弟や友人に対して持つ温和さと同じものを、敵に対して持たなければならないと言いたかったわけではありません。温和さは信用を前提としています。しかし、私たちに悪を望んでいるということを私たちが知っている者に対して信用を持つことはできません。彼がそのような態度を悪用することを知りながら、彼に対して友情を広げることにはできません。お互いに疑いあっている人達同志には、同じ考えを共有する人達の間にあるような共感の表現は存在しません。結局、誰にも、友達といるときに感じる喜びと同じ喜びを、敵といるときに感じることはできないのです。これら二つの違った状況における感じ方の違いは、物理的法則の結果です。悪意のある思考は、痛々しい印象のあるフルイドの連鎖となります。善意に満ちた思考は私たちが心地よいフルイドの広がりによって包んでくれます。そのことによって、敵が近づいてきたときと友達が近づいてきたときの感じ方の違いを経験することができるのです。ですから、敵を愛するという事は、彼らと友達との間にまったく区別を付けてはならないという意味にはなりません。この考え方を実践するのが難しく見えたり、あるいは不可能であると考えるのは、私たちの心の中に、友達のためにも敵のためにも同じ場所を設けなさいと、イエスが私たちに示したことを誤って理解しているからなのです。人類の言語には語彙が乏しいので、様々な微妙な違いや感じを表現するために同じ語彙を用いなければならないとすれば、場合に依じてその説明を変えなければならないのです。ですから、敵を愛するという事は、自然の中に存在しない愛情を持ちなさいと言うことではありません。なぜなら、敵と接する時、心臓は友達と接

する時とはまったく違った様子で鼓動するからです。敵を愛するという事は、彼らに対して憎しみも、怒りも、復讐の欲望も持たないことです。何かのたくらみによるのではなしに、無条件に彼らの行う悪を赦すことです。彼らとの和解の障害となるものを置かないことです。彼らに対して悪を望むのではなく、善を望むことです。彼らが達成する善に対して苦しむのではなく、喜ぶことです。彼らが必要とするときには、確かな救いの手を差し伸べてあげることです。言葉と行動によって、彼らにとって害となるものを回避してあげることです。彼らを辱めることなく、あらゆる悪を善によって報いることです。これらのことを行おうとする者は、あなた達の敵を愛しなさいという掟を守ることになるのです。

四、敵を愛するという事は、不信心な者にとってはまったくばかげたことです。今生だけがすべてであると考える人は、敵を見るとき、自分の平静を乱す有害な存在としかとらえることができず、死のみによってその敵から解放されることができると信じています。そこから復讐の気持ちが生まれます。世間の目に対して、自尊心を満足させるため以外には敵を赦そうとはしません。場合によっては、本当に赦すことは自分にとって恥じるべき弱さであると感じます。復讐をしなかったにしても同じだけの怒りを保ち続け、悪の望みを心に秘めることになります。神を信じる者、とりわけスピリティストの見方は違っています。なぜなら、過去と未来を考慮し、それらにはさまれた現世は一時的な点でしかないことを知っているからです。地球自体の運命から、そこで悪人や不道德な人達に出会うことを前もって知っています。彼らの悪意は耐え抜くべき試練の標的であり、高くひき上げられた場所に視点を置くことによって、物質的であろうと人為的であろうと苦しみの辛さは減ることになります。試練に対して不平を言わないのであれば、その手段となってくれている者たちに対して不満を述べるべきではありません。その経験を悲しむ代わりに神に対して感謝するのであれば、甘受と忍耐の試練の機会を与えてくれているその手に感謝しなければなりません。この考えは自然に赦しを生みます。一方で、寛大であればあるほど、自分が自分の目に大きく感じられ、敵の悪意のこもった攻撃が届かなくなるように感じられるのです。世の中で高い身分を占める人達は、自分より劣っていると感じている人々に侮辱されても、それを攻撃とは受け取りません。物質世界の人類よりも上の、道德の世界の中で高い位置へ昇った者の場合も同様です。そのような者は、憎しみや怒りというものはその人を卑しめ、下劣にさせることを理解しています。自分の敵を上回るには、より高貴に、より寛大になり、大きな魂を持つ必要があります。

肉体を失った敵

五、スピリティストには、まだ他にも敵に対して寛大でなければならないわけがあります。第一に、スピリティストは、悪意を持った状態が人間にとって永遠の状態ではないことを知っています。悪意を持つ状態は一時的な不完全性によるもので、子供がその欠点を直していくように、悪人もいつの日かその過ちを認識し、善くなるのだということを知っているのです。さらに、死は彼を、その敵の物質的存在のみから解放してくれるだけであり、敵は地上を後にしてからも憎しみを持って追いかけてくることができるのだということを知っています。そして彼は、このように目的を達成することができなかった復讐心が、かえって一つの存在から次の存在へと続く、もっと大きな苛立ちを生むことになることを知っています。スピリティズムは、経験と、見えない世界と見える世界の間を支配する法によって、「憎しみを血によって消す」という表現が根本的に間違っていることを証明し、本当は死後も血が憎しみをもち続けるのだということを証明することができるのです。その結果、赦すことと、「敵を愛しなさい」というキリストの崇高な教えの実際の有効性の理由を与えてくれるのです。たとえ無意識のうちにあっても、善なる行いに感動しないほど非道な心は存在しません。善なる行いによって、少なくともすべての報復の口実を奪うことができます。生前であろうが死後であろうが、敵を友達に変えることができます。悪の行いによって彼が苛立てば、彼自身が神の正義の道具となり、赦さぬ者を罰することになるのです。

六、したがって、敵は生きている人達の中にも、また他界した人達の間にもいます。見えない世界に存在する敵達は、多くの人達に見られるように、憑衣や支配によってその悪意を示しますが、それらは試練の一種であり、他の試練がそうであるようにそれらも人間の進歩に寄与するため、それらを

甘受し、地球の劣った性格からくる結果であると受けとめなければなりません。地上に悪い人間が存在していなかったとすれば、その周囲に悪い霊も存在していなかったでしょう。生きている敵に対して好意を用いなければならぬのであれば、他界した敵にも同じ方法を用いなければならぬと言うことができます。昔、残酷な生け贄によって地獄の神々を静めることをしましたが、これらの神々とは悪い霊たちのことであつたのです。地獄の神々は悪魔達に引き継がれて行きましたが、それらはどちらも同じことです。スピリティズムはこの悪魔というものが、いまだに物質的な本能を棄てきつていない不道德な人間の魂に他ならず、彼らの抱く憎しみを慈善によって葬らなければ、誰にも彼らを静めることはできないことを示しています。単に悪を働くことを止めるだけでは効き目はなく、それに加えて、彼らが自らを救うように善の道に導くことによってこそ効果があります。「あなた達の敵を愛しなさい」という教えは、今生と地球上についてだけに限って説かれたものではなく、それ以前に、宇宙の同胞愛と連帯の大きな法の一部として存在するものなのです。

誰かがあなたの右の頬をたたいたなら、もう一方の頬も出しなさい

七、「目には目を、歯には歯を」と言われたのをあなた方は聞いています。しかし、私はあなた方に言います。悪い者に手向かつてはなりません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴しようとして下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン歩けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。求める者に与え、借りようとする者には断らないようにしなさい。(マタイ 第五章、三十八—四十二)

八、一般に「面目」と呼ぶものに関する世界中の偏った見方は、自尊心や自己の性格を賛美する気持ちによって生まれる不快で敏感な状態を生み、その気持ちは人間に、侮辱を侮辱によって報いたり、ののしりをののしり返したり、地上の感情の範囲を超えることが出来ない道徳観で正義と思われることによって仕返しをさせます。だからモーゼの法には、「目には目を、歯には歯を」と、モーゼの時代にあつた形で表されているのです。キリストが来ると、「悪は善によって報いなさい」、「あなたに加えられる悪に対抗しようとはなりません。彼が一方の頬を叩いたなら、もう一方の頬も向けなさい」と言いました。誇りの高い人にとって、この金言は憶病さを表しているように見えます。なぜなら、侮辱を仕返しすることなく耐える方が勇気が必要であるということを知らないからです。これは、彼らの視界には現在を越えた未来が入らないからです。しかし、この金言を文字どおり守らなければならぬのでしょうか。そうではありません。目を攻撃されたなら相手の目を潰しなさい、というもう一つの金言と同じように、文字どおりに受け取るものではありません。

これらの教えをすべての価値において理解するのであれば、たとえ合法的であってもいかなる制裁も非難し、悪を行う者には脅すことなく自由な機会を与えよ、と理解するべきです。もし、悪に対して攻撃の歯止めをかけないのであれば、すべての善がその犠牲になってしまいます。自己防衛の法は自然の法であり、誰も殺人者の前に首を出そうとはしません。ですから、この金言の意味をはっきりさせるのであれば、イエスはすべての自己防衛を禁止したのではなく、報復を非難したのです。一方の頬を叩いた者にもう一方の頬を出しなさいということによって、悪を悪によって仕返ししてはいけないということを別の言葉で表したのです。人間はへりくだることによってその自尊心を打ち消すのに都合の良いものはすべて受け入れなければなりません。最大の栄光は、人を傷つけるよりも、攻撃をせずに攻撃を受け、人の不正に耐えることです。人を騙すよりも騙される方が、他人を損なうよりは自分を損なう方がよいのです。それは同時に、自尊心の見せ合いでしかない果たし合いを否定するものです。悪を罰しないことはない神の正義と、未来における人生を信じることによるのみ、私たちの自己への愛情と自分の利益に対して放たれる攻撃に辛抱強く耐えることができるのです。ですから、いつもあなた達に申し上げます。「あなた達の目を未来に向けなさい。物質の世界よりも高い世界に自分をひき上げることができたなら、この地上の出来事で苦しむことはなくなるでしょう。」

霊たちからの指導—復讐

九、復讐とは、人類の間から姿を消しつつある野蛮な習慣のうちで、最後まで残存したものの一つ

です。復讐は、果たし合いのように、キリスト時代の初期のころから人類が戦ってきた、野蛮な習慣の最後に残った痕跡の一つであり、したがって、復讐が存在するということは、それを行う人間やそれを行おうとする霊の遅れを示していることとなります。友よ、だから、自らをスピリティストであると宣言し、述べる者の心を、この感情が動かす様なことが決してあってはなりません。復讐することは、よく知っているとおりに、キリストの「あなた達の敵を赦しなさい」といった教えにあまりにも反することであり、赦しを拒む者はスピリティストでないばかりでなく、キリスト教徒でもありません。復讐を思いつく時、心が偽りや低俗さに根ざしているのであればさらに致命的です。実際に、この致命的で盲目の感情に身を任せてしまう人は、人目につくところで復讐することはありません。それらの感情の方が強いとき、敵がいるだけで情熱、怒り、憎しみが燃え上がり、その残忍な者は、敵と呼ぶ相手の上に襲いかかります。しかし多くの場合、偽善的な見せかけを装い、その人を活気づける心の底にある悪い感情を見えなくしています。隠れた道を通り、敵の陰を追い、身の危険なしに敵を傷つけるのに適当な時を待ちます。相手から隠れ、いつもこっそりと観察しながら憎しみのこもった罠を準備し、都合の良い時がやってくると、相手のコップに毒を注ぐのです。憎しみがそれほどまでには至らない場合には、相手の名誉や愛情を傷つけます。中傷を退けることなく、裏切りのあてつけを風に乗せてあらゆる方向へ上手に広め、行く道に積もらせて行きます。結果的に、迫害者の一陣が通ったあとに現れた追われる者は、以前その人を迎えてくれていた友好的で善意にあふれた顔の変わりに、冷たい顔つきに出会って驚くこととなります。差し出していた手を、今度は握ることさえも拒否され、びっくりしてしまいます。最後には、最も親しかった友達や家族さえもがその人をさけるようになり、打ちのめされてしまいます。ああ、そのように復讐する者は、自分の敵の目の前で相手をののしる者よりも百倍罪深いのです。ですから、こうした野蛮な習慣は棄てなければなりません。こうした過去のやり方は捨て去らなければなりません。今日、いまだに復讐する権利があると思っているスピリティストは、「慈善なしには救われない」という標語を掲げる集団にはふさわしくありません。そうです、大いなるスピリティストの家族の一員が未来において、人を赦す代わりに復讐の衝動に身を任せてしまうなどと私は考え続けることはできません。(ジュール・オリヴィエ、パリ、一八六二)

憎しみ

十、お互いに愛し合えば、あなた達は幸せになります。あなたを無関心にさせてしまう人、憎しみ、落胆を与える人を特に愛さなければいけないということを、心に深く刻んで下さい。あなた達の模範とするべきキリストは、この献身の模範をあなた達に見せてくれました。愛の使者であるキリストは、愛のために生命と血液をも捧げるまで愛しました。あなた達を侮辱し、迫害する者たちを愛することの犠牲は、あなた達にとって悲痛なものです。しかし、まさにその犠牲が、あなた達を彼らよりも優位に置くのです。彼らがあなた達のことを憎むのと同じように、もし彼らを憎むのであれば、あなた達には彼ら以上の価値はありません。彼らを愛することは、あなた達の心の祭壇で神に捧げる汚れない捧げ物であり、その捧げ物の心地よい香りは高く神の元まで届くこととなります。愛の法は一人一人に差別なく、すべての兄弟を愛することを強いるのですから、悪いふるまいに対して心を堅くしてしまっはいけません。反対に、それは最も厳しい試練なのです。私は、その苦しみを地上に生きていた間経験しているのです、そのことがよくわかります。しかし、神はそこに在り、愛の法を破る者を今生、または後生において罰するのです。親愛なる子供達よ、愛が人を神に近づけ、憎しみは人を神から遠ざけるのだということを忘れないで下さい。(フェヌロン、ボルドー、一八六一)

果たし合い

十一、人生を旅に見立て、ある決められた場所へ向かって行かなければならないのだと考え、日毎の困難も苦にせず、真っ直ぐ伸びた道からその足どりを踏み外さない人だけが正に偉大であると言えます。その目をいつも到達しようとする目的地に向け、道行く彼を傷つける障害物や茨をも気にかけません。それらは彼を傷つけるのではなく、かすめるだけで、彼の進歩をさまたげるものではないことを知っています。ある不正に対して復讐をするために人生の日々を費やすことは、人生の試練の前

に怯^{ひる}んでしまうことであり、神の目には罪として映ります。人は受けた損害に目を奪われ復讐してしまうのですが、それを防ぐことができれば、復讐は馬鹿げて正気の沙汰ではないように映るはず

です。果たし合いによる殺人は、あなた達の法に定められているとおりに罪深いことです。いかなる場合においても、誰も自分の同胞の命を奪う権利は持っていません。それは神の目に罪と映るのであり、神はあなた達の従うべき行動に線を引き付けているのです。ここでは、他のいかなる場合にもましてあなた達は自分自身の判事となっています。あなた達は、自分達が赦した分だけ赦されるのだということ覚えておかなければなりません。赦すことによって、あなた達は神に近づきます。なぜなら、力の強さは温厚さと同族であるからです。地球上で、人類の手によって人類の血が一滴でも流される間は、平和と愛の君臨する真なる神の国がそこに根付いていないのであり、あなた達の惑星からは恨みや、不和、戦争が永遠に排斥されなければならないのです。そのような時が来れば、果たし合いという言葉は、既に過ぎ去った遠く漠然とした過去の記憶の中のみ存在することになります。（アルジェルの司教、アドルフ、マルマンド、一八六一）

十二、ある場合には、果たし合いは疑いもなく、命を軽んじた肉体的な勇気の証明であります、それは確実に、自殺と同様に道徳的な憶病さの証明でもあります。自殺する人は人生の苦しみに立ち向かう勇気を持っていません。果たし合いをする人は他人の攻撃に耐える勇気を持っていないのです。キリストはあなた達に、右の頬を打った者には左の頬も差し出す方が、不正によって仕返しをするよりも価値があり、より尊いことだと教えてくれませんでしたか。イエスはオリーブの園でペトロに、「あなたの剣をしまいなさい。人を剣によって殺す者は自分も剣によって殺される」と言いませんでしたか。このように言うことによって、イエスはいつも果たし合いを非難しませんでしたか。子供達よ、実際にこの暴力的な気質、血の気が多く、怒りに満ちた性質から生まれたこの勇気が、最初の攻撃に対してうなり声をあげているのではないのでしょうか。最も軽い不正も、血によってのみ洗い流すことができると考えている人のどこに魂の偉大さが見られるのでしょうか。ああ、そのような人はおののかなければなりません。その人の良心の奥底では、いつもこれらの言葉が叫びます。「カインよ、カインよ。あなたは弟に何をしたのか。」この声にその人は、「私の名誉を守るために血を流すことが必要だった」と答えます。しかし、その人の良心は響き返します。「残り少ない地上での生活のほんの僅かな時間の間、人間の前にのみあなたの名誉を守ろうとし、神の前に守ろうとしなかった。」可哀想な愚か者よ。キリストはあなた達から受けた侮辱に対して、少しでも血が流されることを強いるのでしょうか。あなた達はキリストを茨と槍によって傷つけただけでなく、恥辱の十字架にかけ、更にキリストに、残酷な苦しみの中で罵声を浴びせたのです。それほどの屈辱に対して、キリストはあなた達に少しでも謝罪を求めたのでしょうか。羊飼イエスの最後の叫びとは、自分を処刑する者たちに対する赦しの願いでありませんでしたか。おお、イエスのようにあなた達を攻撃する者のために祈り、赦しなさい。友よ、「お互いに愛し合いなさい」という教えを覚えていて下さい。そうすれば、憎しみで鳴り響く一撃に対し微笑みで答え、侮辱に対し赦して答えることができるでしょう。世間はきっと怒りに満ちて立ち上がり、あなた達を憶病者として扱うでしょう。額を高く上げ、キリストの模範のように、その額を茨によって締め付けられることを恐れないことを見せ、あなた達の手を、自愛と自尊心にしか過ぎない偽りの名誉の、見かけを守るために認められた殺人の共犯者にはしたくないのだということを示さなければなりません。神はあなた達を創造したとき、他人の生死を決める権利をあなた達に預けたのでしょうか。いいえ、この権利は再建と改正のため、神によって自然だけに与えられました。あなた達に対して神は、自分自身を棄てることさえも許しません。自殺者と同じように、果たし合いをした者は、神の前に姿を現すとき血によって印がつけられており、どちらに対しても、最高の判事である神は、厳しく長い罰を用意するのです。自分の兄弟に対して「ラッカ（気違い）」と言った者が正義によって裁かれることを神が定めたのであれば、自分の兄弟の血で手を染めて神の前に現れる者に対する罰はどれだけ厳しいものとなるのでしょうか。（聖アウグスティヌス、パリ、一八六二）

十三、果たし合いは、昔は神の審判とも呼ばれていましたが、いまだに社会を支配する野蛮な制度の一つです。では、もし二人の敵対者が、争いの決着をつけるために煮え立つ湯につけられたり、赤

く燃える鉄を当てられたりして、その苦しみによく耐えた方が正しいのだとされるのを見たら、あなた達はなんと言うのでしょうか。まったく馬鹿げた習慣であると考えないのでしょうか。果たし合いとは、このような事すべてよりもさらに悪いものです。果たし合いの上手な者にとってそれは、あらゆる計画のもとに彼の放つ一撃が有効であることを確信した上で行われる冷血の殺人です。能力のなさや弱さのために、打ち負かされることがほぼ決められてしまった相手にとっては、冷めた考えで行われる自殺であると考えることができます。多くの場合、このような犯罪的な選択を避け、問題を偶然に委ねていることを知っています。しかし、それでは中世の時代の神の審判に、別の方法で遡っていることになりませんか。その時代、事の罪は遥かに小さかったのです。神の審判と言う呼び名自体が信心の存在を示していますが、それは、無実の者が死んでしまうことを神が赦すはずがないという、神の正義に対する素直な信仰であり、結局、果たし合いにおいては、すべてを野蛮な力にまかせてしまうため、責められた者が死んでしまうことも珍しくないのです。馬鹿らしい自己中心的な愛、つまらぬ虚栄心、気の狂った自尊心は、いつになればキリストの慈善、隣人愛、キリストが教え、模範となった謙虚さにとって代わられるのでしょうか。それが実現した時にはじめて、いまだに人類を支配するこれらの恐ろしい定めが消滅するのであって、法律によってそれを抑制することはできないのです。なぜなら、悪を禁止するだけでは事足りないからです。善の原理と悪への恐れが人類の心の中に宿らなければならないのです。(ある守護霊、ボルドー、一八六一)

十四、自分が求めるべき賠償の要求を拒んだり、自分を攻撃した者に対する謝罪を求めなかったら、自分は人からどのように見られるだろうか、とあなた達はいつも言います。あなた達のように、愚かで遅れた人間はあなたを非難するでしょう。しかし、知性的で道徳的な進歩の光に明るく照らされている者は、あなたが真なる知性にしがたって進んでいると言うでしょう。

少し考えて見て下さい。あなた達の自尊心は、あなた達の兄弟によって何の意図もなく、攻撃する意志もなく述べられた、たった一つの言葉によって傷つけられたと感じ、辛辣な態度で返答し、そこから口論が引き起こされます。決定的な時がやってくる前に、自分自身にキリスト教徒の行いをしているかどうか問い直しているのでしょうか。何かをあなたの同胞から奪うことによって、社会に対してどれだけの責任を負うことになるのでしょうか。夫から妻を奪ったり、子供から母親を奪ったり、保護してくれていた父親から息子を奪ったりした後にあなた達を襲うことになる後悔について、考えてみたことがあるのでしょうか。攻撃をした者は、確かに謝罪する責任を負います。しかし、攻撃をした者が自分の欠点を認識し自ら自然に謝罪をしたほうが、攻撃され不平を言う権利を持つ者の命を危険にさらすよりも貴いことではないのでしょうか。、自分自身がひどく傷つけられたと感じたり、愛しい人が傷つけられたと、攻撃された者が感じるのとは、場合によっては、自己愛だけが原因となっているのではないかと私は思います。傷つけられた心は苦しみます。しかし、不名誉な行為を行う可能性のある惨めな者に対して、私たちの身を投じ、命を危険にさらすことは馬鹿げているばかりか、そこに存在していた何かしらの感情は、その者が死んでも消えないのではないのでしょうか。

実際に、血が流されると、事実は誇張され轟くことになります。それが偽りであるなら、自分自身に降りかかってくることになり、もし真実であったとすれば、沈黙の中で埋葬されなければなりません。

しがたって、復讐への渴きを癒すことしか残りません。ああ、この悲しい満足は、ほとんどいつも、この人生の間でも、苦しい後悔に場所を譲ることになります。攻撃する者が死んでしまうとすれば、どこで改善することができるのでしょうか。慈善が人類の行動を規制するようになった時、人類の行動と言葉はこの金言に一致するようになります。「あなた達にして欲しくないことを他人にしてはなりません。」この言葉を実現させることにより、あらゆる不和の原因は消滅し、果たし合いや、民族対民族の果たし合いである戦争の原因も、ともに消えていくことになるでしょう。(フランシスコ・ザビエル、ボルドー、一八六一)

十五、この世の人間、幸運な人々は、たった一言の衝撃的な言葉や、とるに足らぬことのために、神から授かった命を投げ捨てたり、神にのみ属する同胞の命を投げ捨てますが、そのような者は、愚かさや乏しさのために他人の家に入って盗みを働き、それを阻もうとする者を殺してしまう者より百倍も罪深いのです。そのような場合は、たいてい無教育な者が関わっているものであり、善と悪の認識が不完全なのですが、それに対し、果たし合いを行う者はより教育のある階級に属しています。一方

は野蛮に殺人を行います、他方は社会が赦してくれるよう、順序を踏んで周到に殺人を行います。まったく、果たし合いを行う者は、復讐の気持ちによって激怒したはずみで相手を殺してしまった不幸な者よりも、無限に罪深いのだということを私はつけ加えておきます。果たし合いを行う者には、感情の激化という言い訳はできません。なぜなら、侮辱と復讐の間、そこには必ず考え直す時間が存在しているからです。故に、果たし合いを行う者は、冷静に前もって計画を考えているのです。その敵を最も安全に殺すために、すべてを研究し、計算します。彼自身も命を危険にさらすことは事実ですが、そのことは世間の目には、果たし合いを行う者の名誉を回復させ、そしてその行いを、命をも惜しまぬ勇気ある行動として見ることになるのです。しかし、自分自身を安全だと考える側に勇気が存在するのでしょうか。強者の権利が法を構成していた野蛮な時代の遺産である果たし合いは、真の意味での名誉の尊重と、人類が未来の人生に対してより鮮明な信仰を抱くようになるにつれ、消滅していくことでしょう。（聖アウグスティヌス、ボルドー、一八六一）

十六、注意—果たし合いはだんだん珍しいものとなりつつあり、いくつか非常に痛々しい例もありますが、時代の流れと共に、その数は遠い昔に行われていた数とは比較にならなくなりました。昔、人は誰かに会う予定なしに家を出ることはなく、出るときには必要な準備をしていました。その時代とその人々の特徴的な習慣として、目に見えるように、あるいは隠して、攻撃や防御の武器をいつも携帯していたことがあげられます。そうした武器の使用が廃止になったことは、その習慣がすたれたことを示しており、紳士達が鉄の鎧を持ち、槍で武装して馬を乗り回した時代から、やがて簡単な剣が名誉の印や装飾品として腰につけられるようになった変化を見ることは、とても興味深いことです。もうひとつ習慣の中に見ることのできる変化とは、昔、一対一の戦いが、道のまっただ中で群衆の目の前で、戦う者たちに十分な広さだけを残して群衆が取り巻く中で行われていたのに対し、今日ではそのような光景を見ることができないということがあります。現在、人の死とは心の動揺を伴うものですが、一方で過去の時代においては、死に対して誰も注意を払う者はいませんでした。スピリティズムはこれらの野蛮な時代の最後の痕跡を消し、人類に慈善と兄弟愛の精神を吹き込むのです。

第十三章 右手が行うことを左手に知られてはなりません

見せびらかすことなく善を行うこと—見えざる不幸—やもめの寄付—貧しい者や不具の者を招くこと—見返りを期待することなく与える霊たちからの指導—物質的な慈善と道徳的な慈善—善行—憐れみ—孤児達—迷惑がられる善行—排他的な善行

見せびらかすことなく善を行うこと

一、人々に見てもらおうと、人前で善を行うことがないように気を付けなさい。なぜなら、そうでないならば、天の父からの報いを得ることはできないからです。・・・このように、人に施しを与える時には、偽善者たちが路上や神殿でそうしているように、人に誉められようとして、そのことを言いふらしてはなりません。誠にあなた達に言いますが、彼らは既に報いを受け取っているのです。・・・施しを与えるときには、右手が行うことを左手に知られてはなりません。・・・そうすれば、その施しは誰にも知られないものとなり、あなた達の父は、密かに行われていることを見て、あなた達に報いを与えてくれるのです。(マタイ、第六章、一一四)

二、イエスが山から下りてくると、大勢の人々がその後を追った。・・・そのときハンセン病をわずらう者がイエスに会おうとやってきて、イエスを讃えながら言った。「主よ、もしあなたがそう望むのであれば、私の病を癒してください。」イエスは手を伸ばすと彼に触れ言った。「私はそれを望みます。病が癒されますように。」すると同時に、ハンセン病の症状が消えた。そして、イエスは彼に言った。「誰にもこのことを言ってはなりません。しかし、祭司達にあなたの姿を見せ、モーゼによって教えられた恵みを捧げ、その証となることができるようにしなさい。(マタイ、第八章、一一四)

三、見せびらかすことなく善を行うことには大きな価値があります。与える手を隠すことはさらに価値のあることです。それは確実な道徳的優位性の証ですが、というのも、世間の人々がそうするよりも、より高いところから来る物に対して目を向けるということは、今生から自分を切り離し、来世に身をおくことが必要となるからです。一言で言うならば、人類の上に身を置き、人間の証言によって得られる満足を棄て、神に認められるのを待つことです。神にではなく、人々に認められることを好む者は、神にではなく人々の方を信じているということであり、未来における生活よりも、現世により価値を置いているということになります。もしそんなはずはない、と言うのであれば、自分の言っていることと信じていることが違っていることになります。与えた物を受け取った者が、その恩恵を声を大にして言い振らしてくれることが期待できなければ、人に与えない人がどれだけいるのでしょうか。公の場では多くを与えながらも、隠れた場所では小銭一枚さえも与えない人がどれだけいるのでしょうか。だからこそ、イエスは言ったのです。「人に見せびらかすように善を行った者は、すでにその報いを受けているのです。」誠に、善行によって自分自身の栄光を地上に求める者は、既に自分に対してその支払いを行っているのです。神にはその人に対して、もはや何も負うものはありません。その人にはただその自尊心への罰が残されているのです。

右手が行うことを左手に知られてはなりません、という言葉は、謙虚な善行の特徴を見事に示しています。しかし、真の謙虚さが存在するとすれば、偽りの謙虚さ、見せかけの謙虚さも存在します。与える手を隠しながらも、そのほんの一端だけが見えるようにしておき、周りを見回し、それを隠すのを誰かが見ているかどうか気にかける人がいます。これはキリストの金言の恥ずべきものまねです。自尊心の強い善行者が、人間の間でさえもその価値を下げられてしまうのであれば、神の前でもそうではないのでしょうか。これらの人々も地上において既にその報いを受けているのです。人々に見られることにより、彼らは満足しているのです。彼らが受け取ることができるのはそれがすべてなのです。

では、善行の恩恵の重さを、それを受ける人に負わせ、恩恵を受けていることを認識していることの証を示すことを強要し、その置かれた立場を意識させ、恩恵を与えるために凶られている犠牲の大きさや、その値段の高さを自慢する人々は、どのような報いを受けることができるのでしょうか。おお、こうした者からは、その自尊心に対する最初の罰として、その名前を人々に祝福され口にしてもらう

機会さえも奪われ、地上における報いを受けることはできません。虚栄心のために乾かされた涙は、天に昇っていくのではなく、恩恵を受ける立場にある苦しむ者の心に再び落ち、その心を痛めることになります。こうして行われた善からもたらされる益はなにもなく、自尊心の強い善行者はそのことを嘆くこととなりますが、嘆き悲しまれた恩恵とは、偽りの、価値のない貨幣でしかありません。見せびらかすことなく行われた善行には二重の価値があります。受ける人の感受性を守るのであれば、受ける人は人間としての威厳を保ち、自分自身に対して不快を感じることなく恩恵を受けることができ、そうであるならば、その善行は、物質的な慈善であるばかりでなく、道徳的な慈善でもあります。というのも、ある仕事による対価を受け取ることと、施し物を受け取るとは大いに違うからです。一方仕事を施し物の形に変えることは、その方法によっては、恩恵を受ける者を侮辱することであり、他人を侮辱するとき、そこには常に自尊心と悪意が存在します。真なる慈善とはそれとは反対に、善行を隠したり、気を悪くさせる可能性のある最も小さなことさえも防ごうと細やかに気を使い、工夫を凝らさなければなりません。なぜなら、どんな小さな道徳的な不和でさえも、必要性からくる問題を大きくすることになるからです。自尊心の強い者の慈善は受ける人を圧迫しますが、真なる慈善は温和で優しい言葉を見つけ、それによって受ける人を、善行を働く者の前に気楽にさせます。本当の寛大さは崇高で、善行者は自らの立場を逆にし、善を働く相手の前に自分が受益者であるのだと感じる方法を知っています。これが、「右手が行うことを左手に知られてはなりません」ということの意味なのです。

見えざる不幸

四、大きな災害の時には、慈善は感情に満たされ、災害から復旧するための、寛大な衝動を見ることが出来ます。しかし、こうした一般的な災害と並行して、人目に付くことなく幾千もの個人的な災害が発生しています。これらの見えざる目立たない不幸は、救済を求めることを待たずに、真の寛大によって見つけだされるものです。

よく整った簡素な衣服に身を包み、同じように質素な服装をした女の子を連れたその品の良い女性は誰でしょうか。あるみずばらしい家へ入っていきませんが、もちろんその住人のことを知っているのでしょうか、玄関で丁寧に挨拶をしています。彼女はどこへ行くのでしょうか。子供達に囲まれたある母親の横たわる屋根裏まで上っていきます。彼女がやってくると、そこにいる者たちの瘦せた顔に喜びの笑みがこぼれます。彼女はそこにいる者たちの苦しみを和らげに行ったのです。彼女は優しく心休まる言葉とともに、彼らが必要としている物を持ってきましたが、その言葉は、乞食ではない彼らが、恥ずかしいと感じることなくその善意を受けとめることを可能とします。父親は病院におり、その間、母親はその労働によって家族の必要としている物を賄うことができないのです。この女性のお陰でその可哀想な子供達は寒さに凍えることもなければ、おなかをすかすこともありません。子供達はしっかりとした服を着て学校へ行くことが出来、母親の胸から弟達に与える母乳がなくなる心配もありません。彼らの間で誰かが病気になったとしても、この善き婦人は彼らの必要とするであろう物質的援助を拒むことはないでしょう。彼らの家を出ると彼女は病院へ行きそこにいる父親を慰問し、その家族の様子を伝えることによって父親を安心させます。道の曲がり角には車が彼女を待っており、その車には皆が必要としている物がすべて積まれ、次から次へと人々を訪ねていきます。訪ねる人々に対して、どのような宗教を持っているのか、どんな意見を持っているのかなどと訪ねることはありません。なぜなら、すべての人が神の子であり、自分の兄弟であるのだと思っているからです。一まわり終えると自分に、良い一日が始まったと言います。彼女の名前は何かのでしょうか。どこに住んでいるのでしょうか。誰もそのことを知る人はいません。貧しい人々に彼女は何の意味も持たない名前を教えています。しかし、彼女が人々を慰める天使であることに間違いありません。毎晩、天の父へ向けた彼女に対する感謝の言葉をカトリック教徒からも、ユダヤ教徒からも、プロテスタントからも聞くことができます。どうしてそんなに質素な服装をしているのでしょうか。外観によって人々の貧しさを辱めないためです。なぜ、彼女の娘について来させるのでしょうか。どうやって善行を行うのかを娘が学ぶことができるようにするためです。若い娘も慈善を行いたいと思っています。しかし、母親は彼女に言います。「あなた自身が何も持っていないのに何を人に与えることができるのですか。たとえ私があなたに何かを手渡し、それをあなたが誰かに与えたとしても、あなたにとってどんな価値があるのでしょうか。その場合、実際に慈善を行っているのは私だということになり

ます。それによってあなたにはどんな功労があったことになるのでしょうか。それでは正しくありません。病気の人達を訪ねるとき、あなたは私が彼らの面倒を見るのを手伝って下さい。それだけでもたくさんだと思いませんか。これ以上簡単なことはありません。役に立つ技術を身につけてこの子供達に洋服を縫ってあげなさい。そうすれば、あなた自身の持つ物を人に与えることができます。」このようにして、真なるキリスト教徒であるその母親は、キリストの教えてくれた美徳の実践をその娘に教えているのです。彼女はスピリティストでしょうか。そのようなことは重要なことではありません。家の中では自分の置かれた立場上、まったく普通の女性として振る舞います。しかし、彼女は神と自分自身の良心によって認められることしか求めないため、彼女が何をしているか知る者はいません。ところがある日、予期せぬ時に、彼女が世話をしている人の一人が手作りの作品を売りに彼女の家にやってきました。この女性は彼女を見るとそれが彼女が世話をしてくれている人だということに気付きました。すると彼女は、「静かに。誰にも言うてはいけませんよ」と言うのでした。それはイエスがそのように言っていたのと同じです。

やもめの寄付

五、イエスは宝物庫の前に座り、人々がどのようにそこにお金を入れていくかを見守っていると、多くの豊かな人々が宝物庫に沢山のお金を入れていくのが見られた。そこへ、ある貧しいやもめもやってきて、十セントの価値しかない硬貨を二枚だけ宝物庫へ入れた。するとイエスは使徒達を呼んで言った。誠に言いますが、この貧しいやもめは、宝物庫に寄付をした他のすべての者たちよりも多く寄付をしました。他の者たちは皆、豊富にあるものを与えましたが、彼女はなくてはならなかった物を与え、自分自身を支えていくための物すべてを与えました。（マルコ、第七章、四十一—四十四、ルカ、第二十一章、一一四）

六、多くの人が、必要な物が不足しているから望むだけの善を行うことができないと嘆き、豊かになることを望むのは、その富を有効に活用したいからだと言います。疑いもなく、それは賞賛に値することで、いくらかの人かの人にとってはそれがまったく誠実な願いである場合もあります。しかしながら、ほとんどの場合、善を行いたいという気持ちはまったく無関心な事なのではないでしょうか。他人に対して善を行いたいと望みながらも、まず自分自身に対して善を行うことを重んじ、自分に不足している贅沢をもう少し楽しみ、その残りを貧しい人達に与えようとしている人がいないでしょうか。こうしたもう一つの欲望は、おそらくそうした欲望を持つ人自身の目にさえも見えていないのですが、もし彼らが自分自身をよく調べてみるなら、それを心の底に見つけ出すことができるでしょう。真なる慈善とは、人が自分のことよりも優先して他人のことを考えることなのですから、そうした欲望は良い意図のメリットをまったく打ち消してしまいます。この場合における慈善の高尚さとは、各々がその労働の中で、その力、知性、才能を活かすことによって、彼らの寛大な意図を実現させるために不足している物を求めるところにあります。その中には、神を最も喜ばす自己犠牲が存在します。不幸にして大多数の人々は、財宝探しをしたり、偶然の好機を待ったり、予期せぬ遺産相続を期待したりなどといった、途方もない計画を追いかけ、最も簡単で早く、努力なしに豊かになる方法ばかりを夢んでいます。また、そうした目的を遂げるために霊的な援助が受けられると期待する人達には、何と云えば良いのでしょうか。彼らはまったくスピリティズムの神聖なる目的が何であるか判っておらず、また、神が人間と交信することを許した霊たちの役割というものについてはなおさら知らないのです。結局彼らは失望によって罰せられることになるのです（『霊媒の書』、第二部、二九四、二九五）。その意図にまったく私欲的な考えを含んでいない人々は、自分に必要なものを少しも失うことなく人に与える金持ちの金よりも、必要なものを失ってまでも人に与える貧しい者の寄付の方が、神の天秤にはより重く計られるのだと言うことを思い出し、心に望むすべての善を行うことは不可能であるということを知って、慰められなければなりません。実際、貧困を大規模に救済することができるのであれば前者の行いの方が偉大です。しかし、もしそうした行いができないのであれば、それにしたがって、可能な限りを行わなければなりません。ただ、人の涙を乾かすことができるのはお金だけで、お金がないからと言って黙っていて良いものなのでしょうか。心からその兄弟のために役に立とうと思うものには皆、その望みを叶えることのできる機会を何回も与えられます。それを見つけようとすればその姿を見せます。ある方法が見つからなかったとしても、別の方法が見つか

るでしょう。なぜなら、能力があるにもかかわらず、どんな仕事もできず、肉体的、もしくは道徳的な苦しみを和らげたり、有益な努力を行うこともできない者はいないからです。誰もが、お金がない、仕事がない、時間がない、休みがないと言っているうちは、何を隣人のために捧げることができるのでしょうか。そこにも、貧しい者の寄付、やもめの寄付が存在するのです。

貧しい者、不具者を招くこと、見返りを求めずに与えること

七、イエスは人々を招待した者に言った。「晩餐をしたり、食事をともにするときには、あなた達の友達や、兄弟、親類、あるいは裕福な隣人を招いてはいけません。なぜなら、彼らはその後、あなた達から受けたものを返そうとあなた達を招くからです。小宴を行う時には、貧しい者や不具者、足や目の不自由な人を招きなさい。彼らにはお返しをする方法がないので、あなた達は祝福されます。正義が復活する時、報われる。」食卓についてこれらの言葉を聞いていた一人がイエスに言った。「神の国でパンを食べる者は幸いです。」

八、祝いの宴を行う時には、あなた達の友達や、兄弟、親類、あるいは裕福な隣人を招いてはいけません、と言ったイエスの言葉は、言葉通りにとればばかげていますが、そこにある精神を理解するならば、崇高です。友達の代わりに、道にいる乞食を集めてともに食卓につくことをイエスが意図したわけはありません。イエスの言葉がほとんどいつも比喩的に使われているのは、思考の繊細な色合いを感じとることができない人には、強いイメージによって鮮明な色彩を放つように見せることが必要だからです。この考えの核となる部分は次の言葉に示されています。「彼らにはお返しをする方法がないので、あなた達は祝福されます。」そのことから、報われることを考えに入れたうで善を行ってはならず、単に善を行うことに対する喜びのために行わなければならないということです。強烈な比較を使うことによって、イエスは言いました。「小宴を行う時には、貧しい者や不具者、足や目の不自由な人を招きなさい。彼らにはお返しをする方法がありません。」小宴という言葉は、大きな宴のことではなく、あなた達が普段楽しんでいる贅沢に加わる場合と理解しなければなりません。しかしながら、この注意を促す言葉をもっと文字どおりに理解することができます。なんと多くの人が、招かれたことを光栄に思い、お返しに招いてくれる人だけを宴の席に招いているのでしょうか。反対に、自分より不幸な親類や友人を招くことに満足する人もいます。あなた達のうちの誰がこの中に数えられるのでしょうか。このようにすれば、目立たずに大きな事業を行うことができます。こうした人達は、誠心誠意をもって、見せびらかすことなく、善を目立たなくさせることができるのであれば、目の不自由な人や不具者を探しに行かなくとも、イエスの教えを守ることができるのです。

霊たちからの指導—物質的な慈善と道徳的な慈善

九、「お互いに愛し合い、他人には私たちがして欲しいと思うようなことをしてあげましょう。」どんな宗教も、どんな道徳もこれら二つの考えに要約されています。これらがこの世で守られたなら、皆が幸せになるでしょう。そこには反感や不快は存在しないでしょう。更に、貧困もなくなるでしょう。なぜなら、裕福な者の贅沢な食卓から、多くの貧しい者が食事をすることができるようになるからであり、私が最後の人生の間住んでいた薄暗い街角には、すべてに事欠いた、惨めな子供達を引き連れた可哀想な女性達をもう見ることもなくなるでしょう。豊かな者たちよ、このことを少し考えてみて下さい。できる限り不幸な者たちを助けてあげて下さい。神がいつの日か、あなたの行った善に対する報いを与えてくれるように、また、あなた達が住んでいた地上から出て来るとき、あなた達に感謝する霊たちが並んであなた達をより幸せな世界へ迎えてくれるように、他人に対し与えて下さい。私の最後の人生において、役に立つことができた相手と、死後の世界において再会したときの喜びをあなた達も知ることができたなら。ですから、あなた達の隣人を愛して下さい。自分達を愛するように愛して下さい。なぜなら、不幸な者を寄せつけまいとする時、あなた達は過去の友人、父親、兄弟を自分から遠ざけようとしているのかも知れないのだということを既に知っているからです。だから、霊の世界に戻って不幸な者たちが誰であったのかを知ったとき、どんな失望を感じるようになるか考えてみて下さい。物質的にはなんの負担もなく、誰にでも行うことができるのに、実践するととなると最も難しい道徳的な慈善というものがどういうものであるのか、よく理解して欲しいと

思います。道徳的な慈善とは、生きる者たちがお互いに我慢し合うことであり、それはこの遅れた世界、あなた達が現在、肉体を持って生まれている世界においては、非常にまれにしか行われていないことです。私の言うことを信じて下さい。自分よりも愚かな者には話しをさせておき、自分は黙っていることが、人間にとって大きな利益をもたらすのです。人をひやかしてばかりいる人の口から漏れるひやかしの言葉に耳を傾けないことや、あなたを侮辱の笑みをうかべて見下す人達を無視することは、一種の慈善なのです。彼らは多くの場合、自分達があなた達よりも優れていると誤って思いこんでおり、唯一の真の世界である霊の世界においては、あなた達よりも劣っていることが珍しくありません。この場合、必要なのは謙虚さではなく、慈善です。なぜなら、他人の行う悪に関心をもたないことは、道徳的な慈善であるからです。だからと言って、この慈善は他の慈善の妨げとはなりません。故にあなた達の同胞を軽んじるようなことがないように、特に注意して下さい。私があなた達に既にお伝えしたことをすべて覚えておいて下さい。今日あなたが拒む一人の貧しい者は、今日より劣った条件におかれていた過去のあなた達にとっての大切であった誰かなのかもしれませんが。地上で幸いにして幾度か助けることができた、地上で貧しかった人と、私はこちらで会うことができましたが、今度はその人に、私が助けを懇願することになりました。貧しい者や、病気の者を拒む前に、私たちは皆兄弟なのだといエスが言ったことを覚えておいて下さい。さようなら。苦しんでいる人たちのことを考え、祈って下さい。（ロザリア修道女、パリ、一八六〇）

十、友よ、私はあなた達の多くが次のように言うのを聞いたことがあります。「私自身に必要なほんの少しの物さえも所有していないのに、どうして慈善を行うことができるのでしょうか。」友よ、慈善を行う方法は幾千もあります。思考によっても、言葉によっても、行動によっても慈善を行うことはできます。思考によって行うには、光を見ることなく他界していった、見捨てられた貧しい人々のために祈ることができます。心をこめて放たれた祈りは彼らに慰安を与えます。言葉によって行うには、日々に出会うあなた達の仲間の良い助言をしたり、落胆し、失うことによって神を冒瀆するようになってしまった者には、「私もあなたと同じでした。自分が惨めだと思っていました。しかし、スピリティズムを信じました。そして今は御覧の通り私は幸せです」と言うことができます。「無駄だ。私の人生はもう終わろうとしており、生きてきたとおりに私は死んでいくのだ。」と言う年老いた者には、「神は誰に対しても平等にその正義を用います。最後に現れた労働者（※）のことを思い出して下さい」と言うことが出来ます。この世のことばかりに気を取られてしまっている仲間達によって悪癖がついてしまい、悪の誘惑に負けてしまう子供達には、「親愛なる子供達よ、神はあなた達のことを見ているのです。」と言うことができ、あなた達はその温かい言葉を繰り返すことに飽きてはなりません。そうした言葉は、子供達のその幼い知性を芽生えさせ、彼らを怠け者ではなく、立派な人間にすることになります。これも慈善の一つです。あなた達の内、他の者は、「ああ。地上にはあまりにも多くの人間がおり、神はすべての者を見ることは出来まい」と言います。友よ、この言葉をよく聞いて下さい。「山の頂上にいる時、そこから何十億もの砂粒に目が届きませんか。いいですか。神も同じようにあなた達を見ることができるのです。あなた達はそれらの砂粒が風にまかれ、まき散らされるのを許しますが、神も同じようにあなた達とその自由意志を働かせることを許すのです。ただし、神はその無限の慈悲により、あなた達の心の底に良心と言う名の注意深い番人を置いてくれました。彼の声を聞いてみて下さい。その声はあなた達に良い忠告だけをしてくれます。時々あなた達は、悪の心と戦わせることによって彼を無感覚にしてしまいます。すると彼は黙ってしまいます。しかし、追い払われたその哀れな番人は、あなた達の中に後悔が陰を覗かせると、再びあなた達に自分を聞いてもらおうとします。その声を聞き、問うてみて下さい。多くの場合、彼から受け取る忠告によって、あなた達は慰めを得ることが出来ます。友よ、新しい連帯が現れる度に將軍は旗を掲げるものです。私はあなた達に標語として次のキリストの言葉を掲げます。「お互いに愛し合いなさい。」この規律を守り、その旗の元に集まれば、幸運と慰安を得ることができるでしょう。（ある守護霊、リヨン、一八六〇）

善行

十一、友よ、善行はあなた達に最も純粹で甘い喜び、つまり、後悔にも無関心にも邪魔されることのない心の喜びを与えてくれます。ああ、美しい魂達の持つ寛大さが、どれほど偉大で柔らかいもの

であるのかを理解することが出来れば、その感覚は、自分自身を見つめるときと同じように他人を見つめることができるようになります。そのことによって、兄弟に衣服を与えるために自分の服を脱ぐことができるようになります。友よ、他人を幸せにするということだけに身を捧げることができたなら。神の代理人として、辛さと苦しみばかりの人生しか知らない家族に喜びを届けることができた時、彼らの苦しめられた表情が、とたんに希望に輝くのを見た時の喜びは、地上のどんな宴にも例えることはできません。なぜなら、食べる物にも不足した不幸な彼らは、「おなかが減った」という、鋭い刃物のように母親の心を突き刺す言葉が、生きることが苦しむことであることを未だ知らぬその子供達によって、繰り返し泣き叫ばれるのを聞いたことしかなかったからです。おお、そのとき、一時前には失望しか感じていなかった者に再び喜びが生まれるのを見たときに受ける印象が、どんなにすばらしいものか理解しなければなりません。あなた達があなた達の兄弟との間に持つ義務を理解しなければなりません。不幸な者たちに会いに出かけなさい。なかでも、より苦しみの大きい、目立たぬ不幸の救済に出かけなさい。愛する者たちよ、救い主のつぎの言葉を心に抱き出かけて行きなさい。「これらの小さい者たちに服を着せるとき、あなたは私を通じて服を着せているのです。」慈善— すべての美德をひとつにまとめる崇高な言葉よ、それが人々を幸せに導くのです。慈善を実践することにより、その人は自分自身の未来における無限の喜びを創っているのであり、地球上に追放されている間は、やがて後に愛にあふれる神のもとに集まるときに受けることができる喜びを、試しに味わうことが慰安となるのです。神なる美德よ、地球上で満足を味わうことのできた唯一の時を与えてくれたのはあなたでした。肉体をもって生きる私の兄弟達よ、「人生の苦しみのための薬となる、心の安らぎ、魂の喜びは、慈善の中に求めなさい」と伝える友の声を信じて下さい。おお、神を非難しそうになった時には、あなた達よりも下方に目を向けて下さい。和らげてあげるべき不幸がどれだけあることか、家族を持たぬ子供達がどれだけ居ることか、死が訪れた時、親しい助けの手を誰からも差し伸べられることなく目を閉じていく老人がどれだけいることか見て下さい。やらなければならない善が、なんと多く存在することか！ おお！ 不平を言うてはなりません。反対に、神に感謝し、あなた達の同情、あなた達の愛、あなた達のお金を、この世の富を受け継ぐことが出来ず、苦しみと孤立に衰弱した者たちのすべてのために、精一杯費して下さい。この世で最も甘い喜びを感じることができるようになり、また、その後には、・・・それは、神のみが知っているのです。（アルジェルの司教アドルフ、ボルドー、一八六一）

十二、「善を行い、慈善的になりなさい。」これが、あなた達の手の中に握られた天に入るための鍵です。永遠の幸福は、どれもが「お互いに愛し合いなさい」という戒律の中に含まれているのです。魂は、隣人への献身なしに靈的に高い次元へ昇っていくことは出来ません。魂は、慈善の衝動のなかにのみ幸運と慰安を見つけることができます。善人となり、あなた達の兄弟を助け、恐ろしいエゴイズムの傷を捨て去りなさい。この勤めを遂げることが出来れば、永遠の幸福への道が開かれます。さらに、美しい献身の行動や真の慈善の行動が語られるのを聞いて、歓喜と内なる喜びによって心が打ち響くのをいまだに聞いたことがない人が、あなた達の間でどれだけいるのでしょうか。もしあなた達が、善を行うことがもたらす快樂だけを求めることができれば、いつも靈的成長の道を歩むことができます。模範に事欠くことはありません。意欲を見るのがまれなだけなのです。あなた達の歴史は、大勢の善人達の慈悲深い思い出を守っているのだと言うことを覚えておいて下さい。イエスは、愛と慈善に関することをすべてあなた達に伝えませんでしたか。なぜ神からの教えを軽んじるのですか。なぜ神からの言葉に耳を閉ざし、そこにあるあらゆる善なる規律に心を閉ざすのですか。私はあなた達に、もっと福音の朗読に関心を持ち、それをもっと信じて欲しいと思います。それなのに、あなた達は本を軽んじ、中身の無い言葉の倉庫であるかのように考え、封の切られぬ手紙のように扱い、その見事な法のことを忘れ去ってしまいます。あなた達の悪はすべて、その神の法の要約をあなた達が自ら放棄することによって生まれるのです。イエスの献身を伝える頁を読み、それを学んで下さい。強い者たちよ、お互いに愛し合いなさい。弱い者たちよ、あなた達の温情、信心をあなた達の武器として下さい。人の心を動かし、いつもあなた達の新しい教義を広めるようにして下さい。私たちがやってきたのは、あなた達に勇気を与えるためです。神によって許されたためにこうして私たちは現れ、あなた達の熱望と美德を刺激しにきたのです。しかし、一人一人が望むのであれば、各々の意欲と神の助力で事足りるのです。霊現象は、目の閉じた人、不従順な心の持ち主のためにのみ起きるのです。地上のあらゆる美德は、慈善という根本的な美德がその礎とならなければなら

りません。慈善という美德なしに、他の美德は存在し得ません。慈善なしには幸運を期待することもできなければ、慈善のない道徳的な手引きというものも存在しません。慈善なしには信仰心も存在しません。というのも、信仰心とは慈善に満ちた心を光らせる、純粋な輝きのことに過ぎないからです。慈善はどの世界においても、永遠の救いの支えです。創造主の放つ最も純粋な放射です。慈善は被造物に与えられる創造主の美德そのものです。この至上の神意を私たちはどうして軽んじることができるでしょうか。そのことを知りながら、自分の中にある慈善を妨げ、神からもたらされるこの感情を退けるほど非道な心を持っているのは誰でしょうか。慈善、この甘い慈愛に反抗するほど悪い息子となっているのは誰でしょうか。私が行ってきたことについては、あえて言うつもりはありません。なぜなら、霊たちも自分達が行ってきたことに対して恥ずかしい気持ちを抱くからです。しかし、私が始めたことは、あなた達の同胞達の慰安に最も貢献することの一つであったと考えています。私が行ってきたことを引く継ぐ任務が、責務として自分に与えられることを霊たちが願うのをしばしば見ることができます。神の慈悲深い任務に就いている、親愛なる情け深い兄弟、姉妹達の間にもそうした霊たちを見ることができます。彼らは犠牲と献身のみがもたらす喜びを感じながら、私があなた達に勧める美德を実践しています。彼らの状況がどれだけ敬意に値し、彼らの果たす任務がどれだけ守られ、尊ばれているかを見ることは、私の計り知れない喜びです。善意に満ちた堅実な意欲にあふれる善人達よ、力を合わせ、慈善を広める事業を大々的に継続して下さい。この美德を実践することにより、あなた達のための報酬を見つけることができます。今生を生きるうちから現れることのない霊的な喜びは存在しません。力を合わせ、キリストの教えに則ってお互いに愛し合ってください。そうありますように。(聖ヴィンセント・デ・パウロ、パリ、一八五八)

十三、人々は私のことを「慈善」と呼びます。私は神のもとへ続く本道を歩んでいます。私についてきて下さい。あなた達のすべてが心がけるべき目標を知っているからです。今朝、いつもの散歩に出てきて、心が悲しくなり、あなた達に次のことを伝えにやってきました。おお、友よ。貧困、涙、それらすべてをぬぐおうにも、そのなんと多いことでしょうか。無駄だとは思いつつも何人かの可哀な母親達を慰めようと、彼女たちの耳元で囁きました。「勇気を出して下さい。あなた達のことを見守るよき心を持った人々がいるのですよ。あなた達は見捨てられることはありません。我慢強くいて下さい。神はそこにいるのです。あなた達は神に愛され、神に選ばれたのです。」彼女たちには私が聞こえたようで、驚きに目を丸くして私の方へ向けました。彼女たちの外見から、霊を圧制する彼女たちの肉体は飢えており、私の言葉は確かに彼女たちの心を静めたでしょうが、彼女たちは空腹を満たすことはできませんでした。彼女たちに向かって繰り返しました。「勇気を持って下さい。勇気を出して下さい。」すると、子供に母乳を飲ませていたまだ若い一人の哀れな母親は、痩せた胸から十分な栄養を得ることの出来ないその小さな命を私に守って欲しいと願うかのように、その子を腕にかかえ、空に向かって差し出したのでした。友よ、別の場所では、仕事を失った老人達が、ついには家もなく、貧困のあらゆる苦しみに縛られながらも、その惨めさを恥じて物乞いなどしたことがないために、道行く人々の慈悲を懇願しているのを私は見ました。私は何も持ってはいませんが、心が同情で一杯になり、彼らのために物乞いとなって、寛大で情け深い人々の心に善い思考を持ってもらおうと、あらゆる場所へ行き人々の善意を刺激しに回りました。友よ、そのために私はここへ参り、あなた達に伝えに来たのです。「家に食料もなく、かまどに火をつけることもできず、寝床には毛布もないかわいそうな人々がその辺にたくさんいます。」私はあなた達に何をすべきかは申し上げません。あなた達の善なる心の自発性にまかせます。私がおその方法をあなた達に教えたとしたら、あなた達の善行は何のメリットももたらさなくなってしまう。次のことだけを申し上げます。「私は慈善であり、私はあなた達の苦しむ兄弟たちのために手を差し延べます。」しかし、頼むこともあれば、与えることもあり、与えるときには多くを与えます。あなた達を大きな宴に招き、あなた達をすべてを満足させることのできる木を提供します。その木がどれほど美しく、どれほど多くの花が咲き、実を結んでいるか見て下さい。行きなさい。行きなさい。善意という名のこの偉大なる木がもたらす果実をすべて採ることができるように。あなた達が実を採ったその枝に、私はあなた達が行ってきたすべての善行を括り付け、その木を神の所へ持っていきます。すると神は、再びその木を沢山の実に茂らせてくれます。善意は尽きることはないからです。友よ、私の掲げる旗に従う者たちのうちに数えられるように、私について来て下さい。恐れることはありません。私はあなた達を救いの道へ導きます。なぜなら、私は「慈善」だからです。(ローマで殉教したカリタ、リヨン、一八六一)

十四、慈善を行うことを、あなた達の多くは、施し物を与えることばかりだと間違えています、実際には様々な方法があります。そしてそれらの間には大きな違いがあります。友よ、施し物は、貧しい者たちの負担を軽くするという意味で、時によっては大切です。しかし、それはほとんどの場合、施し物を与える側にとっても、受け取る側にとっても屈辱的です。慈善は、逆に、与える側と受ける側を結びつけ、様々な形で隠されているのです。家族内で、または友達同志でも、お互いに寛大になり、相互の弱みを赦し合い、誰の自尊心をも傷つけないようにすることによって、慈善的になることができます。あなた達スピリティストは、あなた達と同じように考えない人達に対する接し方の中で、相手に衝撃を与えたり、彼らの確信していることに攻撃するのではなく、私たちの集會に親切に誘って、私たちの考えを聞いてもらい、彼らの心の中に私たちが入っていくことのできる入り口を見つけることによって、慈善的になることができるのです。それも慈善の一つの様相です。今度は、貧しい人達、富を受け継ぐことのできなかつた人々に対する慈善とはどういうものかを聞いて下さい。彼らは、自分達の貧困を不平を言うことなく受け入れることができれば、神に報われることとなりますが、そうするのはあなた達にかかっているのです。そのことを例を用いて明らかにしてみましょう。毎週、あらゆる年代の女性の参加するある集會を私はよく見ます。私たちにとって、ご承知の通り、彼女たちは皆姉妹です。何をしているのでしょうか。忙しそうに、とても機敏に働いています。指を早く動かしています。彼女たちの心が一つとなって鳴り響き、彼女たちの表情がなんと楽しそうであるか見て下さい。いったい何の目的で彼女たちは働いているのでしょうか。冬が近づき、貧しい家々には厳しさが増していきます。忙しく蟻のように働く彼らは、夏の間に必要なだけの蓄えをすることができず、彼らのほとんどの道具は質に入れられてしまっているのです。可哀想な母親達は、この冬の季節の間に寒さと飢えに苦しむであろう子供達のことを思って心配し、泣いています。不幸な女性達よ、どうか忍耐強くいて下さい。神はあなた達よりも、よりよく富の分配を受けている人達の感情に訴えたのです。彼女たちは集まり、衣服をつくっているのです。後日、そのうち雪が地表を覆い、あなた達が悲しみながら、「神は不公平だ」と、そのいつも苦しむ身の口からこぼす時、貧しい人々のために働くことを自任した、この善なる働き手たちの一人が現れるのを見ることができましょう。彼女たちがそのように働くのはあなた達のためであり、あなた達の悲しみは祝福に変わります。なぜなら、悲しむ者の心の中には、憎しみのすぐ後ろに愛が潜んでいるからです。これらの働き手たちには元気づけが必要ですが、彼女たちのところからあらゆる方向から、善霊たちからの通信が届いているのを見ることができます。この会に参加する男性達も協力し、それらの朗読を行って人々を喜ばせます。そして私たち霊はすべての人々の熱意に、特に一人一人に対して応えることができるように、それらの働き手たちに祝福という、天の国で唯一流通する貨幣によって、即金で支払う善い顧客を連れていくことを約束し、そればかりではなく、彼らにとってその貨幣が欠くことがないよう、間違いなく保証致します。(カリタ、リヨン、一八六一)

十五、親愛なる友達よ、私はあなた達が、「私は貧乏だから、慈善を行うことはできない」と言うのを毎日聞き、あなた達が同胞達に対して寛大さを欠いているのを毎日見えています。あなた達は何を赦すこともなく、とても厳しい判事であるかのようにとりすまし、自分に対してそのような方法で振る舞われたら満足するかどうかなどと考えようとしません。寛大であることも慈善ではありませんか。寛大になることによってのみ慈善を行うことができるあなた達は、それを広く行わなければなりません。物質的な慈善については、ひとつ別の世界での話をしましょう。二人の人がたった今亡くなりました。「この二人が生きている間、一人一人の善行を別々の袋に入れ、なくなった時、その袋の重さを量ることができるようにして下さい」と神は言ってあったのでした。二人が最期を迎えると、神は二人の袋を持って来させました。一方の袋はいっぱいになっており、大きく膨らみ、中は詰まっております。中に入っている金が鳴っていました。もう一つの袋は小さく、空っぽで、中に入っていた硬貨を数えることができました。一人が言いました。「この袋が私のだ。見ればわかる。私は金持ちであったため、多くを人に与えることができた。」もう一人が言いました。「こっちの袋が私のです。私は貧乏で、人と分け合うものをほとんど持っていませんでした。」しかし驚くことに、二つの袋を秤にかけると、大きく膨らんでいた袋のほうが軽く、もう一方の袋の方が重いことを示し、最初の袋ののった天秤の皿を高々と持ち上げたのでした。すると神は金持ちに言いました。「確かに多くを与えました。しかし見栄を張り、自尊心を奉る寺院にあなたの名前が現れるようにするために与えまし

た。さらに、自分自身で何を失うことなく与えました。左側へ行き、わずかな施しに満足しなさい。」次に、貧しい者に対して言いました。「友よ、あなたは少ししか与えませんでした。しかし、秤にかけているこれらの硬貨の一枚一枚は、あなたが自分から無理矢理奪って与えたことを示しています。あなたは施し物を与えることはなくても、慈善を行い、何よりも価値があるのは、そのことが自分のために数えられるかどうかなどと考えることもなく、慈善を自然に行ったことです。あなたは寛大で、同胞のことを勝手に判断することはありませんでした。反対にあなたのすべての行いは同胞をゆるすものでした。右側へ行き、あなたの報酬をうけとりなさい。

(ある守護霊、リヨン、一八六一)

十六、家の仕事に時間を費やす必要のない、ある裕福で幸運な女性は、同胞達の役に立つ仕事のために、いくらかの時間を費やすことができないでしょうか。娯楽に費やすお金の残りで、寒さに震える不幸な者たちのために上着を買ってあげてください。その繊細な手で、粗末でも温かい服を縫ってあげて下さい。生まれてくる子供に服を着せようとしている母親を手伝ってあげて下さい。そのことによってあなたの子供を飾るレースの飾りが少なくなったとしても、貧しい母親の子供は体を温める衣類を得ることができるのです。貧しい者たちのために働くことは、神の葡萄園で働くことです。貧しい職人であるあなたは、余剰の富を持っていなくても、兄弟達に対する愛に満ち、少ないなかからでも人に与えようとするのであれば、所持する唯一の宝であるあなたの時間のうちから、一日の何時間かを与えて下さい。幸運な者たちを引きつける優雅な細工をつくるのです。夜業の成果を売れば、あなたの兄弟達への補助のあなたの分担を行うことができます。リボンの数は何本か減るかも知れませんが、はだしで歩く者に靴を与えることができますでしょう。そして、神に人生を捧げたあなた達女性も、あなた達にできる仕事をして下さい。しかし、あなた達の仕事は、あなた達の能力と忍耐力によってあなた達の注意を引くために礼拝堂を飾るばかりではいけません。娘達よ、あなた達の仕事の生産物は、神の前にいるあなた達の兄弟達を助けることに向けられるのですから、大いに働いて下さい。貧しい者たちは神の愛する子供達です。彼らのために働くことは神を讃えることです。「空を飛ぶ鳥たちに神は食物を与える」という神の言葉のようになりなさい。あなた達の手の中で編む金と銀を、衣類や食物を得ることができない者たちへのそれに変えなさい。それを行えばあなた達の仕事は祝福されます。生産することができる者は皆、与えて下さい。あなたの才能を、あなた達のひらめきを、あなた達の心を与えて下さい。そうすれば神はあなた達を祝福します。世俗的な人々にしか作品を読まれない詩人達、文学者たちよ。彼らの娯楽を満足させるだけでなく、あなた達の作品のいくつかを、苦しむ者を助けるために捧げることも忘れないで下さい。画家、彫刻家、あらゆる分野の芸術家達よ。あなた達もその知性を、兄弟達を助けるために使ってください。そのことによってあなた達の栄光が衰えるわけではなく、いくらかの苦しみが軽減されることになるのです。誰にも与えることは出来ます。どんな階級に属していようと、分かち合える物を何か持ち合わせています。神があなた達に与えてくれたものが何であろうと、神があなた達に与えてくれた物の一部は、生きるために必要な物さえも不足している者たちに負っているのであり、なぜなら、その立場になれば、他人に対して、自分達にも分けて欲しいと思うに違いないからです。地上におけるあなた達の宝は減るかも知れませんが、しかし、天におけるあなた達の宝は増やされます。そこではこの世で蒔いてきた善行の種が、百倍になって収穫されることでしょうか。(ヨハネ、ボルドー、一八六一)

慈悲

十七、慈悲はあなた達を天使達に近づける美德です。あなた達を神のもとへ導く慈善の姉妹です。ああ、あなた達の同胞の苦しみと貧困の悲しい光景を見て、あなた達の心に同情をおこして下さい。あなた達の涙が薬となって彼らの傷の上に流れ、善意にあふれる同情によって希望と甘受の気持ちを彼らに届ける時、なんと大きな喜びを感じることができることでしょうか。この喜びは、不幸の隣で生まれるものですから、ある種の苦痛が含まれているのは確かです。しかしその中には、世俗的な快樂の辛い味はなく、そうした快樂が後に残す刺すような空しい失望感もありません。人の心の中に浸透するような優しさによって彼らをつつみ、魂を喜びで満たして下さい。心から感じられる慈悲は愛です。愛とは献身です。献身とは自分自身の忘却であり、不幸な者たちに捧げられたこの忘却と克己は優れた美德であり、それは聖なる崇高な教義と、神より送られた救い主が一生の中で教えてくれた

美德です。この教義が、その根元の純粹さによって確立される時、すべての民がその教義に従う時、地球は幸せになり、そこには調和、平和、そして愛が君臨することになるのです。

あなた達を進歩させる最も正しい感情とは、あなた達の中にあるエゴと自尊心を征服し、あなた達の魂を謙虚にし、隣人への愛と善意を持ちあわせるようにする慈悲の気持ちです。慈悲の気持ちは、兄弟たちの苦しみの奥底まであなた達を入り込ませ、あなた達が彼らに手を差し延べ、同情の涙を流すことを促します。だから、この天からくる感情をあなた達の中で抑制するようなことがあってはなりません。苦しむ者たちの惨めな光景を見ることによって楽しい生活がいくらかの時間でも邪魔されることになるという、苦しむ者たちのそばから身を遠ざけようとする心の堅くなった利己的な人々のように振る舞ってはなりません。自分が役に立てるときに、無関心であり続けようとする自分を恐れて下さい。うしろめたい無関心という対価によってあがなわれた安堵は死海の静けさであり、海面下には、腐り、墮落した泥沼が隠されているのです。

しかし、慈悲とは、利己的な人々が恐れているような混乱や嫌悪と、どれほどかけ離れていることでしょうか。疑いもなく、他人の不幸に接すると、自分のことばかり考える魂は自然に深い苦痛を感じるようになります。その感情はその人全体を振るわせ、その人を痛々しく動揺させます。しかし、そこで勇気と希望を不幸な兄弟に与えることができれば、その報酬は大きなものとなります。その兄弟は、友情に満ちた手で手を握られたことに感動し、時には目に涙をうかべ優しくあなた達に眼差しを向け、後にその目を天に向け、支えとなってくれる慰め手を送ってくれたことを感謝します。慈悲は憂鬱ですが、天から届く、第一の美德である慈善の前ぶれであり、慈善の姉妹として慈善の恩恵を準備し、高尚なものとするのです。（ミカエル、ボルドー、一八六二）

孤児達

十八、兄弟達よ、孤児達を愛して下さい。特に幼少期において、孤独に見捨てられることがどんなに悲しいことか、あなた達にお教えすることができたならば。神は孤児達が存在することを許しますが、それは私たちが彼らの両親となって仕えることを、私たちに勧告するためです。神なる慈善が、可哀想な見捨てられた存在を寒さと飢えの苦しみから避け、その魂が悪癖へと道はずしてしまうことがないようにして下さい。見捨てられた子供に手を差し延べる者は、神の法を理解し、それを実践していることになるのですから、神を喜ばせることとなります。あなたが助ける子供が、別の人生においてはあなたにとって大切な人であったということも多々あるということを見ると、その場合には、そのことを思い出すことができたとすれば、もはやそれは慈善を行っているのではなく、義務を遂行しているに過ぎないのです。友よ、このように苦しむ者は皆があなたの兄弟であり、あなたの慈善を受ける権利を持っているのです。とはいっても、それは人の心を悲しめる慈善や、受け取る手にやけどをさせる施し物ではありません。というのは、あなた達の施し物はしばしば苦い味を持っているからです。苦しむ者の粗末な家が病に見舞われたために悲惨な状況に追い込まれているのでなかったとしたら、そうした苦い施しのうちどれほどが受け取ることを拒まれていたでしょうか。あなたの与える利益に、あらゆる利益の内でも最も貴重な利益である、言葉による利益、慈愛による利益、友情にあふれる笑みによる利益と一緒に、優しく与えて下さい。自分を守ろうとする態度は、血の流れる心に剃刀の刃を立てるのに等しいので避けて下さい。そして、善を行うことは、あなた自身の利益のためであり、また、あなたの愛する人たちのためでもあるということを考えて下さい。（ある親しい霊、パリ、一八六〇）

感謝されない善行

一九、恩知らずの人々と出会わないようにと、善行を行いながらも感謝されなかったからといって、善を行うことを止めてしまう人達のことをどう考えるべきでしょうか。こうした場合、そこには慈善よりもエゴイズムが多く存在します。なぜなら、善に対して感謝することを示す態度を見せてもらうために行われる善行とは、私心を棄てて行われる善ではないからであり、私心を棄てて行われる善だけが、神に喜ばれるのです。そこには自尊心も存在します。なぜならそのような人は彼らの足元に感謝の証を示そうとひれ伏す、恩恵を受ける人たちの謙虚さを見て楽しんでるからです。自分の行う善に対する報酬を地上に求める者は、天においてその報酬を受け取る

ことが出来ません。しかし、神は善に対する報酬をこの世に求めない者たちを評価するのです。善を行った相手が、そのことに対して感謝することがないことが前もって分かっていたとしても、弱い者をいつも助けなければなりません。あなたが助けた相手がそのことを忘れた時には、恩恵を受けた者があなたに感謝した時よりも、より価値あることとして神は考慮してくれると信じて下さい。あなた達が善行に対して感謝されないことを神が許すのは、善を行うあなた達の忍耐力を試すためなのです。一時的に忘れられた善行が、後になって善い実を結ばないと誰に言い切ることができるでしょうか。反対にそれは、時間をかけて発芽する種であるのだということを知って下さい。不幸なことに、あなた達は現在のことしか目に入りません。あなた達は他人のために働くのではなく、自分達のために働いてばかりいます。善行は最も冷え切った心をも和らげます。この世においては忘れられてしまうかも知れませんが、肉体の被いから自由になった時、善行を受けたその霊はそのことを思いだし、その記憶がその人に対する罰となります。彼は自分が恩知らずであったことを嘆き悲しむこととなります。次の人生で自分の過ちを改め、恩義を返そうとし、善を施してくれた人に仕える人生を求めようとするのもまれではありません。このように、疑わずともあなたはその人の道徳的進歩に貢献することができたことになり、次の教訓の意味を正確に理解することができるようになります。「善が無駄になることは決してありません。」そればかりではなく、落胆することによって善行を行う気力を失うことなく、私心を棄てて善を行った事の功績を得ることができるのですから、自分自身に対しても働いたこととなります。ああ友よ。あなた達の前世と現世のすべてのつながりを知ることができたなら、お互いの進歩のための、人類の一人一人を結びつける関係の広さを、一目で見ることができたなら、創造主の善意と英知に大いに感心するでしょう。神はあなた達がいつか神のもとにたどり着くことができるように、生まれ変わることを許すのです。（守護霊、サンズ、一八六二）

排他的な善行

二十、同じ考え方、同じ思想、同じ政党の人同志の間だけで行われる善行とは正しいものですか。

正しくありません。なぜなら、人類は皆兄弟であり、政党、宗派といった考え方は必然的に廃止されるべきものであるからです。真のキリスト教徒は同胞達を兄弟と見ることができ、助けを必要としている者を救済する前に、何であれその人が何を信じ、どう考えているのかなどということを知ろうとはしません。あるいは、あるキリスト教徒が自分とは違う信仰を持っているからといって、苦しむ者を拒否したとしたら、そのキリスト教徒は、私たちに敵を愛さなければならないと教えたイエス・キリストの教訓を守っていることになるでしょうか。ですから、何も意識することなくその苦しむ人を救済して下さい。もしその人が宗教上の敵であるとすれば、そうすることが彼にその宗教を受け入れてもらえるようにする方法であるからで、あなたがその人を拒否したとすれば、その人はあなたの宗教を憎むことになるでしょう。（聖ルイ、パリ、一八六〇）

第十四章 あなた達の父母を敬いなさい

「孝心—誰が私の母で、誰が私の兄弟なのでしょうか—肉体的な親族と霊的な親族霊たちからの指導—恩知らずな息子と家族の絆

一、あなた達は戒めを知っています。姦淫をしてはなりません。殺してはなりません。盗んではなりません。偽証をしてはなりません。誰をも侮辱してはなりません。あなた達の父母を敬いなさい。
(マルコ、第十章、十九、ルカ、第十八章、二十、マタイ、第十九章、十八、十九)

二、主であるあなた達の神が、あなた達に地上で生きるための長い時間をあたえてくれるよう、あなた達の父母を敬いなさい。(十戒、出エジプト、第二十章、十二)

孝心

三、自分の父親と母親を愛することができない人には、隣人を愛することができないことから、「あなた達の父母を敬いなさい」という戒めは、慈善と隣人愛の一般的な法から導き出すことができます。しかし、「敬いなさい」という表現は、父母に対してさらに負う義務、すなわち、孝心を含んでいます。神はこのような形によって、両親に対する愛には彼らに対して守らねばならない義務である敬意、注意、服従、寛大さなどが伴わねばならないことを示そうとし、それは、慈善が一般の隣人に対して求めることすべてよりも、さらに厳しく守らなければならないのです。この義務は当然、父親や母親に代わる人に対してもあてはまりますが、献身の義務が少なければ少ないほどその功労も大きいのです。この戒律を守れない者を、神はいつも厳しく罰します。あなた達の父母を敬いなさいという言葉は、単に尊敬しなさいということからなるものではありません。彼らが必要とするときには、彼らの介護をしなければなりません。彼らが年老いたとき、彼らが静養できるようにしてあげなければなりません。私たちが幼かった頃、彼らが私たちにしてくれたように、彼らを優しく囲んであげなければなりません。特に何も持たない父母に対して、そうすることは、真なる孝心を表しています。自分達に必要なものを何一つ失うことなく、両親が飢え死にすることだけではないようにと必要最低限のことだけを行い、また、自分達には最高のものや、最も心地のよいものを残しておき、両親については道に放置することだけではないようにと、家の最も居心地の悪いところに追いやりながら、自分達は偉大なことを行っていると考えている人々は、この戒律を守っていることになるのでしょうか。いやいやながらそれを行ったり、両親に家事を行うことの重圧を負わせ、残された人生の代償を高く支払わせたりしないのであればまだましです。年老いた親たちが、若く強い子供達のために、仕えなければならないのでしょうか。子供達に母乳を与えてくれていたとき、母親は彼らに母乳を売ろうとしたのでしょうか。子供達が病気だったとき徹夜をしたことや、必要なものを手に入れようと歩いた道のりを、母親は果たして数えていたのでしょうか。子供達は、貧しい両親に対して最低限必要なものだけではなく、可能な範囲の中で、ちょっとした小さな気遣いや、愛情のこもった介護を負っているものであり、それらは子供達がすでに受け取った神聖なる借金の金利にしか過ぎないのです。こうした孝心だけが神を喜ばすこととなります。弱かった時に自分を守ってくれた人たちに、自分がなにを負っているのかを忘れてしまう人は哀れです。彼らは子供達の安らかな生活を確保するために何度も厳しい犠牲を払い、子供達に物質的な生活を与えながら道徳的な生活をも与えたのです。

恩知らずな者たちは哀れです。彼らは恩知らずと放棄によって罰せられます。彼らは、最も大切な愛情によって傷つけられることとなりますが、それは時として今生のうちに起こり、そうでなければ別の人生において必ず、他人に行ったのと同じことで苦しむこととなります。なかには義務を無視し、子供達に対してあるべき姿をもたない父母がいることも確かです。しかし、そうした親を罰するのは神の義務であり、その子供達のものではありません。子供達にはこうした親たちを非難する権限はないのです。なぜなら、その子供達は恐らくそのような親を持つに価したからなのです。慈善の法が、悪を善によって返すことや、他人の不完全性に対して寛大であること、隣人の悪口を言わないこと、他人の侮辱を赦し忘れること、敵をも愛することを命じているのであれば、子供にとって、親との関係においてこれらの義務はどれ程より重大であるかわかります。したがって、子供達は自分達の親に対する品行の中で、隣人との関係についてイエスが教えたことのすべてを規則として取り入れ、他人

との関係で非難される行動は、両親との関係においてはさらに大きな非難をうけることになるということを、いつも覚えておかなければなりません。そして前者との関係においては単なる過ちに過ぎないことが、後者との関係においては、罪と考えられることがあるということを覚えておかなければなりません。なぜなら、後者の場合においては、慈善の欠如ばかりか、忘恩が加わるからです。

四、「あなた達が長生きできる地を主である神が与えてくれるように、あなた達の父親と母親を敬いなさい」と神は言いました。なぜその言葉は天の生活ではなく、地上での生活を報酬として約束しているのでしょうか。その説明は次の言葉に見ることができます。「神があなた達に与えてくれる」という言葉は、現代の十戒の形式からは除かれていますが、それが意味を変えているのです。それらの言葉を理解するには、当時のヘブライ人たちの考え方や状況について言及しなければなりません。彼らは未だ死後の世界について知ることはなく、その視野は肉体を持った人生を越えるものではありませんでした。したがって、目で見えないものよりも、目に見える物によって印象づけられる必要があったのです。そこで神は、彼らの理解の届く言葉によって、子供達に話しかけるように、彼らを満足させることができるもので彼らに期待を持たせたのです。彼らは砂漠に住んでいました。神が彼らに与えるのは、約束された土地、それは彼らの熱望の的でした。彼らはそれ以上はなにも望んでいなかったのです。神は、彼らがもし戒律を守るのであれば、その地で彼らが長く生きるであろう、つまり、その土地を長い間所有するであろう、と言ったのです。

しかしキリストの出現の時代を確かめると、彼らはその考え方をより発展させていたことがわかります。より物質的でない糧をとるべき時代が到来すると、イエス自身が彼らに対し、「私の国はこの世のものではありません」と言いながら、霊的な人生について教え始めます。「地上ではなく、向こう側で、あなた達は善行の報酬を受けることになるのです。」これらの言葉によって、約束された土地は物質的な土地ではなくなり、天の母国となるのです。こうした理由によって、「あなた達の父母を敬いなさい」という戒めを守ることが呼びかけられるとき、彼らに地上の土地が約束されるのではなく、天が約束されるのです。（第二章、第三章参照）

誰が私の母親で、誰が私の兄弟なのでしょう

五、そして家へ戻ると、そこには大勢の人々が集まっており、食事をとることもできなかつた。そのことを知ると、親族がイエスを独占しようとして、霊を失ったと言ってきた。しかし、母親と兄弟達が外で待っているのを見ると、人々はイエスを呼ぶように言った。するとイエスの周りに座っていた人々はイエスに言った。「あなたのお母さんと兄弟達があなたを外で呼んでいます。」イエスは答えた。「誰が私の母親で、誰が私の兄弟なのでしょう。」そして自分の周りに座っていた人達を見回すと、「ここに私の母親と兄弟がいます。神の意志によって行う者は皆、私の兄弟、姉妹、そして母親なのです。」と言った。（マルコ、第三章、二十、二十一、三十一、三十五、マタイ、第十二章、四十六から五十）

六、イエスの善意とあらゆる人に対する普遍の慈悲心からすると、イエスの言葉のいくつかは一見、風変わり聞こえます。不信心な者はそうした部分をとりあげ、イエスが矛盾しているといつて攻撃するための武器とします。しかし、イエスの教義には原則として、その基盤に愛と慈善の法があることを否定することはできません。イエスが一方で築いたものを、もう一方で崩しているとは考えられません。故に結果として、まさに次のことが言えます。もしイエスの言ったあることが基本原則と矛盾しているのであれば、伝えられた言葉が正しく再生されなかつたか、正しく理解されなかつたか、もしくはそれらの言葉はイエスのものではないこととなります。

七、この場面で、驚くことに、イエスの親戚に対する無関心が見受けられ、ある意味で母親を裏切ったようにとらえることができます。イエスの兄弟については、彼らはあまりイエスを好んでいませんでした。進歩の遅れた霊たちであり、イエスの任務を理解することができませんでした。イエスを変わり者と考え、イエスの行動や教えは彼らの心を動かすことはなく、誰ひとりイエスの使徒として従う者はいませんでした。イエスの敵から彼らもある程度は警戒されていたと言われていました。しかし実際にはイエスが家族の前に現れると、彼らはイエスを兄弟としてというよりも変わり者として扱

いました。ヨハネははっきりと、「彼らはイエスを信じていなかった」と記しています。（ヨハネ第七章、五参照）

母親に関してイエスに対するその優しさを誰も否定することはないでしょう。しかしながら、彼女も息子の任務について正確な理解を持っていなかったことを知るべきで、彼女はイエスの教えを守ることではなく、洗礼者ヨハネがそうしたようにイエスの証人となることはありませんでした。彼女の中に勝っていたのは母親としての気遣いだったのです。イエスが母親を裏切ったと見るのは、イエスのことを知らない者の見方です。「父母を敬いなさい」と教えた者の考えの中に、そうした考えが隠されているはずがありません。したがって、ほとんどいつも、たとえ話の形をとることによってベールに覆われたイエスの言葉が持つ、別の意味を求めることが必要です。イエスはどんな機会をも無駄にすることなく教えを説きました。そこで、家族が到着したのを見て、肉体的な親族と霊的な親族の違いについてははっきりと示すためにその機会を利用したのです。

肉体的な親族と霊的な親族

八、血液のつながりは必ずしも霊的なつながりを生むわけではありません。肉体は肉体より発しますが、霊は霊から生まれるのではなく、霊は肉体の形成以前に既に存在しているのです。父親が息子の霊を創造するわけではありません。父親は息子のための肉体的な被いを用意したにすぎませんが、それによって息子の進歩のための知的・道徳的發展を補助する役割を果たしているのです。一つの家族に生まれてくる者たち、特に近い親族として生まれる者たちは、多くの場合、過去の人生での関係から結びついている好意的な霊たちであり、地上における人生で、お互いにその愛情を現わします。しかし、その霊たちが、前世でお互いの反感によって引き離された霊たちで、お互いにまったくなじまない者同士で、地上ではそれをお互いの敵意として現すこともあり、その場合、その人生はその霊にとって試練となります。家族の真なる絆とは、血液の絆ではなく、観念の共有や共感による絆であって、その絆は霊の生まれる以前、生きていた間、そして死後にも霊たちを結びつけます。違った両親を持った二人が、血のつながる兄弟以上に結びつきの強い霊的な兄弟でありえます。それによって彼らはお互いに引かれ、求めあうことになり、一方で、私たちが日々見ることができるよう、血縁のある兄弟同士が拒絶し合うこともあるのです。そこには道徳的な問題が存在し、それは存在の複数性の理解によって、スピリティズムだけが説明することができるのです。（第四章、十三）すなわち、家族には二種類の家族があります。霊的な絆で結ばれた家族と、肉体的な絆で結ばれた家族です。前者の方が継続性があり、霊の浄化によってより絆は強まり、魂の様々な移住を通じて霊界において永続します。後者の絆は物質と同じように時間が経つと消滅し、多くの場合、道徳的には今生中に消えてしまいます。これらのことをイエスは理解しやすくしようと、使徒達に、ここに私の母親と兄弟がいます、つまり、私の霊的な絆によって結ばれた家族であると言い、神の意志によって行う者は皆、私の兄弟、姉妹、そして母親なのです、と言ったのです。血縁のある兄弟達がイエスに抱いた敵意はマルコの話の中に明確に表されており、イエスを独占しようとして霊を失ったと言ってきた部分に見られます。彼らの到着が知らされると、イエスは彼らのイエスに抱く気持ちを承知していた上で、霊的な視点からそのことを使徒達に述べたのです。「私の真なる兄弟はここにいます。」イエスの母親は兄弟達と共にいましたが、イエスは教えを一般的に述べたのであり、決して肉体による母親が霊的な母親と違って無関心の対象となるべきだということを言ったわけではなく、それは他の様々な場面でイエスは十分に証明しています。

霊たちからの指導—子供の親に対する忘恩

九、忘恩は、エゴイズムから直接的に生み出された結果の一つです。誠実な心はいつもそれに抵抗します。しかし、子供達の親に対する忘恩は、さらに憎悪のこもったものです。この視点から特に忘恩について考慮し、原因と結果について分析してみましょう。この場合にも、他の場合がそうであるように、スピリティズムは人間の心が抱く大きな問題の一つに光をあててくれます。霊は地上を後にするとき、その霊の質の固有の感情や美德を持ち合わせて行き、宇宙において完成を遂げたり、光を受けようと望むまでそのまま止まったりします。故に、多くの霊たちは暴力的な憎悪にあふれ、満たされない反逆の欲望を抱いています。彼らの一部は、しかしながら、他の一部よりも進歩しており、

真実の一片を垣間見ます。すると、そうした感情がもたらす不幸な結果を味わうことになり、善き決意をしようという気持ちが起こってきます。神のもとへたどりつくには、慈善というたった一つの合い言葉しかありません。しかし、侮辱や不正の忘却なき慈善は存在しません。赦しなき慈善も、憎悪に満ちた心による慈善も存在し得ません。すると、今までにしたことのないような努力によって、そうした霊たちは地上で誰を憎んでいたのかを見ることができるようになります。しかし、憎んだ相手を見ると、彼らの心の中には恨みがこみ上げてきます。赦したり、自分自身を犠牲にしたり、彼らの財産、家族、もしくは名誉を破壊した相手を愛するといった観念に抵抗します。しかし、不幸な彼らの心は動揺します。彼らは躊躇し、ためらい、反対の感情によって気持ちが乱されます。その試練の最も決定的な時に、善の決意が優勢であれば彼らは神に祈り、善霊たちが彼らに力を授けてくれるように懇願することになります。

結果的には、何年もの瞑想と祈りの後に、その霊は自分が嫌った者の家族の一員の肉体を利用することになり、上位からの命令を伝える霊達に、その形成されたばかりの肉体の運命を、地上へ行って満たしてくる許可を求めます。選ばれた家族のなかでの行いはどうなるでしょうか。それはその霊が、自分の行った善き決意に強く固執するか否かに関わっています。かつて憎んだ相手と常に接触することは恐ろしい試練であり、未だ十分に強い意志を持っていなければ、そこで挫折してしまうことも珍しくありません。このように、善き決意を保ち続けるかどうかによって、共に生きることを招かれた相手の友達にも敵にもなります。理解できない者としか映らない、ある子供達に見られる本能的な反発や憎悪は、こうして説明がつくのです。その人生の間には、実際にそのような反感を生む原因となるようなことは何も起きていません。その原因を知るには、私たちの目を過去へ向ける必要があるのです。

ああ、スピリティスト達よ。人類の持つ大きな役割を理解しなければいけません。肉体が造られるとき、その中に宿る魂は進歩するために宇宙からやってくるのです。あなた達の義務についてよく知り、その魂が神に近づくことができるように、あなた達のすべての愛情を注いで下さい。それが神によってあなた達に任された任務であり、それを忠実に遂げることができればその報酬を受けることができます。その魂にあなた達が払う注意と与える教育は、その魂の未来での完成と平安を助けることになります。神はすべての父親にも母親にも、「私があなたに加護を任せた子を、あなたはどうしましたか」と尋ねるのだということを覚えておいて下さい。もしあなたの責任でその子の進歩が遅れたままであったなら、罰としてその魂を苦しむ霊たちの間に見ることになり、そのとき、あなたはその魂の幸せの責任を負っていることになります。すると、あなた達は後悔の念に悩まされ、あなた達の犯した過ちの謝罪を求めます。あなた達のために、そしてその魂のために、再び地上に生まれてその魂をより注意深く守り、その魂もそのことを認識した上で、その愛によって返礼することになります。

だから、母親を拒絶する子供やあなた達に対して恩知らずな子供を追い出してはなりません。そうしたことやそうした子供があなたに与えられたことは、単なる偶然ではありません。それは過去についての不完全な直感の現れなのであり、そのことから、あなた達はある過去の人生において既に大いに憎んだか、あるいは大いに攻撃されたかのいずれかであると推定することが出来ます。どちらかが、報いるためか、試練のためにやってきたのです。母親達よ、あなた達を不愉快にさせる子供を抱きしめ、自分に言って下さい。「私たち二人のどちらかに責任があるのです」と。神が母性に結び合わせた神聖なる喜びを享受するのに、あなた達がふさわしくなるように、子供達に、彼らは地上で完成し、愛し合い、祝福されるために生まれてきたのだということを教えてあげて下さい。ああ、しかしあなた達の多くは、過去の人生から引き継いでいる生まれつきの悪の傾向を、教育を通じて摘み取る代わりに、罪深い弱さか、あるいは不注意によってそれらを保ち、大きくしてしまっており、やがてあなた達の心は子供達の忘恩で痛めつけられ、それはあなた達にとって試練の始まりとなるのです。任務はあなた達の目に映るほど困難ではありません。地上の知識は必要としません。無知な者にも知識人にも、その役割を果たすことはでき、スピリティズムは人類の魂の不完全性の原因について知らしめることにより、その役割の達成に役立ちます。小さいときから子供は、前世から持ち越した善または悪の本性の兆候を表します。両親はそれを研究しなければなりません。いかなる悪も、エゴと自尊心からもたらされます。ですから、両親はそうした悪癖の芽の存在を示す小さな兆候を警戒し、より深く根を張る前に、それらと戦うように注意しなければなりません。樹木から欠陥となる芽を摘み取る善き庭師のようにならなければなりません。エゴイズムと自尊心を成長させてしまったのであれ

ば、後になってから忘恩によって報いられても驚いてはなりません。両親が子供の道徳的進歩に応じて、すべてやるべきことを行ったのにもかかわらず、その成果がないのであれば、自分自身を負い目に感じる必要はなく、良心は平静を保つことが出来ます。そうしたとき、努力の成果が生まれないことから来るごく自然な苦しみに対して、神は、それが単にその子供の遅れからくるものであり、今始められた事業は次の人生において完成し、その忘恩の息子はその愛によって償ってくれるのだという確信を与えてくれることによって、偉大な慰安を残してくれているのです。（第十三章、十九）神は試練を求める者の能力を越えた試練を与えることはありません。達成することのできる試練がもたらされることしか許しません。もし成功を収めることができないのであれば、それは可能性が不足したからではありません。意欲が欠けていたのです。悪の傾向に抵抗するかわりに、それらを楽しんでいる人たちのなんと多いことでしょうか。こうした人たちには、後の人生における涙と悲しみが待ち受けているのです。しかし、後悔に対して決して扉を閉ざすことのない神の善意を賞賛しなさい。苦しむことに疲れ、自尊心を捨て去った罪人は、いつの日か足下に身をひれ伏す放蕩息子を迎えようと神が両腕を広げてくれていることに気づくのです。よく聞いてください。厳しい試練は、神への思いを抱きながら受け止められるのであれば、それはほとんどいつも苦しみの終わりへと霊の完成を告げるものなのです。それは至上の時であり、そのとき、そうした試練のもたらす成果を失って再びやり直すことを望まないのであれば、その霊は何よりもまず、不平を言うことによって失敗しないようにしなければなりません。不満を述べる代わりに、あなた達に与えられた勝つための機会を神に感謝し、神が勝利のほうびをあなた達のためにとっておいてくれるようにしなければなりません。そうすれば、地上の世界の渦から出て霊の世界に入った時、あなた達は戦闘から勝利を収めて戻ってきた兵士のように、そこで喝采を受けることになるのです。あらゆる試練の中でもっとも厳しいのは、心に害を及ぼすものです。勇気を持って物質的な損失や貧困に耐える者も、家族の忘恩に傷つけられ、家庭内の苦しみに負けてしまいます。おお、それはなんと痛々しい苦しみであることでしょうか。しかし、そうした時、神の創造物が無期限に苦しむことは神の望むところではないから、魂の破壊が長引こうとも永遠の絶望は存在しないのだ、という確信と、悪の原因の認識以外に、何が有効に道徳的な勇気を立て直してくれるのでしょうか。苦しみの短縮が、悪の原因そのものを破壊するための一つ一つの努力にかかっているのだという考え以上に、力を与え、励ましとなるものがあるのでしょうか。しかし、そのためには、人間はその視線を地球上だけにとどめたり、人生が一度きりだと考えたりしないようにする必要があります。視線を高く上げ、過去と未来の無限へと向けなければなりません。そうして忍耐強く待てば、神の正義があなた達に明らかにされます。なぜなら、地上では本当に恐ろしいものとして見えていたものが、解釈可能となるからです。そこで開いた傷口も、単なるかすり傷であると考えられるようになります。こうして全体に向けて投げかけられた視線によって、家族の絆の真の姿があなた達に明らかにされます。もはやメンバーが単なる壊れやすい物質的な絆で結びついているようには見えなくなり、再生によって破壊されるのではなく、浄化されていくことによってより固く結びつき、永続していく霊の絆によって結びついているように見えるようになるのです。好みの類似性、道徳的進歩、集まろうと導く愛情によって、霊たちは家族を形成します。その霊たちは、地上に住む間、グループを形成するために探し会いますが、それは宇宙においてそうしているのと同じであり、均質でまとまった家族はそこに起因します。もし、その人生の巡歴の間に一時的には別々になっても、新しい進歩を成し遂げ、後に幸せな再会をすることになります。しかし、自分だけのために働くのはいけないために、進歩のためになる慰めとよき模範を受けることができるように、進歩の遅れた霊が彼らの間に生まれてくることを神は許されるのです。そうした霊が、時によって他の霊たちにとって混乱の種となることがあり、そのことはそれらの霊たちにとって試練や遂行せねばならない義務となるのです。だから、彼らを兄弟のように迎え入れて下さい。助けてあげて下さい。そうすれば、あなたが何人かの遭難者たちを救済したことを、後に霊界において家族が祝福してくれ、また遭難者たちも、自分の番には他の人を助けることができるでしょう。（聖アウグスティヌス、パリ一八六二）

霊が救われるために必要なこと—良きサマリア人の話—大いなる戒め—聖パウロによる慈善の必要性—教会の外では救われません—真実無しには救われません
霊たちからの指導—慈善なしには救われません 霊が救われるために必要なこと—良きサマリア人の話

一、ところで、人の子がその尊厳によって、すべての天使達に伴われて来ると、その栄光の座につくでしょう。すべての国々がその前に集まると、羊飼いが羊と山羊を分けるようにそれぞれを分けるでしょう。・・・そして羊はその右側へ置き、山羊はその左に置くでしょう。すると王は、その右側にいる者たちに向かって言います。「私の父に祝福された者たちよ、世の初めからあなた達のために準備された王国を手に入れなさい。・・・なぜならば、私が飢えていた時には私に食料をくれ、私の喉が渴いていた時には私に飲み物をくれ、宿を失った時には私を宿泊させてくれ、私が裸でいた時には衣服を着せてくれ、病んでいた時には私を訪ねてくれ、私が投獄されていた時には私に会いに来てくれたからです。」すると、正直な者たちは言いました。「主よ、いつ私たちが、あなたが飢えていた時あなたに食料を与え、喉が渴いている時に飲み物を与えたというのでしょうか。いつ私たちが、あなたが宿を失ったのを見て宿泊させ、裸の時に衣服を与えたというのでしょうか。そしていつ、あなたが病んでいたり投獄されていることを知り、訪ねに行ったというのでしょうか。」王は答えます。「誠に言います。私の最も小さい兄弟に対してそれらのことを行った時、それはいつも私に対して行ったのと同じです。」続いて自分の左側にいる者たちに対して言います。「邪悪な者たちよ、私の近くから離れなさい。悪魔とその使いによって準備された永遠の炎のもとへ行きなさい。なぜならば、私が飢えていた時、私に食べる物を与えてくれず、喉が渴いた時、飲み物をくれず、宿が必要であった時に宿を与えてくれず、服をまもっていなかった時に衣服を与えてくれず、病み、投獄された時、私を訪ねてくれなかったからです。すると彼らも答えます。「主よ、いつ私たちは、あなたが飢えているのを見てあなたに食料を与えず、喉が渴いているのを見て飲み物を与えず、衣服もなく、宿もなく、病み、投獄されているのを見てそれを助けなかったというのでしょうか。」すると彼は答えます。「誠に言います。これらの最も小さい者たちに対する救済を行わなかった時、私自身に対して救済を行わなかったのです。」そしてそれらの者は永遠の苦悩へ行き、正しい者たちは永遠の命へ行くのです。(マタイ、第二十五章、三十一—四十六)

二、すると法の博士が立ち上がり、彼を試そうとして言いました。「師よ、永遠の命を得るためには何をすればよいのでしょうか。」イエスは彼に答えました。「法には何と書いてありますか。法に何を讀むことができますか。」彼は答えました。「主なるあなたの神を心から、全身全魂、全力によって、あなたの霊によって愛し、あなたの隣人をあなたと同じように愛しなさい。」するとイエスは言いました。「大変よく答えました。そうすれば永遠に生きるでしょう。」しかし、その男は自分が正しい人間だと思われたかったために、イエスに言いました。「私の隣人とは誰のことですか。」イエスは、その言葉を聞き、彼に言いました。「エルサレムからエリコへ向かおうとしたある男が泥棒に捕ってしまい、泥棒はその男から盗み、男を傷だらけにし、瀕死の状態に残して去ってしまいました。すると、そこを司祭が同じ道を通ってやってきましたが、その男を見て、通り過ぎて行きました。次に法の学生がやはりその場所を通りましたが、その男を見ても、やはり通り過ぎて行きました。しかし、旅をしていたサマリア人が、その男が横たわっているのを見て哀れに思い、その男に近づくと、油とワインを傷口に塗ってその手当をし、その後自分の馬に乗せて宿に連れて行き、その男の看病をしました。翌日、『この男の面倒をよく見て下さい。お金が足りなかったら私が戻った時に支払います。』と言って、二デナリの金を宿主に渡しました。これら三人の内、誰が泥棒に捕まった男の隣人でしょうか。」博士は答えました。「彼に対して慈悲をかけた者です。」するとイエスは言いました。「それならば、行って、同じ事を行いなさい。」(ルカ、第十章、二十五—三十七)

三、イエスの道徳のすべては慈善と謙虚さに要約されています。すなわち、エゴイズムと自尊心に相反する二つの美德です。イエスのすべての教えの中に、永遠の幸福に導くこれら二つの美德が示されています。「魂の貧しい者、すなわち謙虚な者は幸いです。なぜなら天の国は彼らのものだからで

す」と言いました。「心の清い者は幸いです。」「柔和で平和をつくる者は幸いです。」「慈悲深い者は幸いです。」「あなた達と同じようにあなた達の隣人を愛しなさい。」「自分にして欲しいと思うことを他人にしてあげなさい。」「あなた達の敵を愛しなさい。」「赦されたいのであれば、あなたに対する攻撃を赦しなさい。」「見せびらかすことなく善を行いなさい。」「他人を評価する前に自分自身を評価しなさい。」謙虚さと慈善こそ、イエスが私たちに勧め、また彼自身が模範を示したものです。自尊心とエゴイズムこそ、戦い続けなければならないものです。また、慈善は勧められるだけではありません。明白に、はっきりとした言葉を用いて、未来における幸福の絶対的な条件として示されています。最後の審判を描いた場面の中でも、その他の多くの場面でそうであるように、単なるたとえ話として表された部分を区別しなければなりません。イエスが話をした人達のような、いまだに純粋な霊的な問題を理解することのできない人達に、イエスは、印象的で衝撃的な具体的イメージを与えなければなりませんでした。イエスの言うことを彼らがよりよく学ぶためには、形の上で当時の考え方からあまり遠ざからないものとしなければならず、イエスの言葉や、明白に説明することができなかつた部分の真なる解釈については、後世に残す必要があったのです。しかし、その説明の象徴的なたとえや装飾的な部分に沿ってある考えが支配しています。すなわち、正しい者に用意された幸福と悪い者に用意された不幸の考えです。その最高の審判における判決の理由は何なのでしょう。訴訟書は何に基づいているのでしょうか。審判者は果たして、取り調べられる者があれこれのしきたりを重んじたかとか、あれこれの行いを守ったかなどと尋ねているのでしょうか。いいえ、そのようなことは尋ねていません。たったひとつのことしか尋ねていないのです。それは、慈善が行われたかどうか、ということだけで次のように判定されたのです。「あなた達の兄弟を助けた者は右へ行きなさい。彼らに対して冷たく対応した者は左に行きなさい。」ところで、そこで信仰の正統性について述べているのでしょうか。ある方法で信じる者と、別の方法で信じる者との区別をつけているのでしょうか。いいえ。イエスはサマリア人を、異教徒と考えられていたにもかかわらず隣人愛を実践する者として、慈善の欠ける正統派よりも上位に位置づけています。すなわち、慈善を単に救いの条件うちのひとつとしているのではなく、唯一の条件であるとしているのです。もしその他の条件があったのであれば、イエスはそれについて述べていたはずですが。慈善を第一位に置くのは、それが暗黙の内にその他すべてを含んでいるからです。すなわち、謙虚さ、優しさ、善意、寛大さ、正義等です。なぜなら、それは自尊心とエゴイズムの絶対的な否定であるからです。

最大の戒め

四、しかし、ファリサイ人達は、彼がサドカイ人達を黙らせたのを知り、集まりました。そして、法の博士であったその内の一人が、彼を試すために彼に対して次の質問をしました。「師よ、法の中の最大の戒めは何ですか。」イエスは彼に答えました。「あなたの主である神を、心を込め、全霊を込め、あなたの霊によって愛しなさい。それが最大で最初の戒めです。そして、ここに第一の戒めと同等の第二の戒めがあります。あなたの隣人を自分と同じように愛しなさい。あらゆる法も預言者たちもこれら二つの戒めを守らなければならないとしています。（マタイ、第十二章、三十四—四十）

五、慈善と謙虚さ、それらが救済の唯一の道です。エゴイズムと自尊心、それらは破滅の道です。この原則は次の簡潔な言葉の中に明確にされています。「あなたの全霊を込めて神を愛し、あなたの隣人を自分と同じように愛しなさい。あらゆる法も預言者たちもこれらの二つの戒めを守らなければならないとしています。」そして、神への愛と隣人への愛の解釈に間違いがないようにするため、次のように付け加えています。「ここに第一の戒めと同等の第二の戒めがあります。」つまり、隣人を愛することなく神を本当に愛することもできなければ、神を愛することなく隣人を愛することもできないのです。隣人に対する慈善を行うことなく神を愛することは出来ないのですから、人間のあらゆる義務は次の金言に要約されることとなります。「慈善なしには救われません。」

聖パウロによる慈善の必要性

六、たとえ私が、人類の持つすべての言語を話せたとしても、天使の言葉を話そうとも、私に慈善がないのであれば音を立てるどらかシンバルと同じです。たとえ私に、あらゆる神秘を解き明かすこ

とのできる預言の才があったとしても、また、あらゆる物事に対する知識を持っていたとしても、また山をも動かすほどの信心を持っていたとしても、私に慈善がないのであれば私は何者でもありません。また、貧しい者に食べ物を与えるために私の財産を分配し、私の体を焼くために捧げようとも、慈善がないのであればそれらすべては私にとって何の役にも立ちません。慈善は忍耐強く、優しく、有益です。慈善は嫉妬深くありません。無謀でも性急でもありません。自尊心に満ちることもありません。高ぶったりはしません。自分の利益にとらわれません。腹を立てることもなければ、何に対しても怒ることがありません。悪いことかと疑わせることはありません。真実に喜ぶことはあっても、不正に喜ぶことはありません。すべてに耐え、すべてを信じ、すべてを待ち、すべてを受け入れます。さて、信心、希望、慈善の三つの美德があります。しかし、その中で最もすばらしいものが慈善です。(パウロ、第一コリント、第十三章、一一七、十三)

七、このように聖パウロはこの偉大なる真理を理解したのです。「天使の言葉を話そうとも、あらゆる神秘を解き明かす預言の才を持っていようとも、山をも動かす可能な限りの信心を持っていたとしても、私に慈善がないのであれば私は何者でもありません。信心、希望、慈善の三つの美德のうち、最もすばらしいのは慈善です。」間違いなくこのように、慈善を信心にも勝って位置づけています。慈善はあらゆる人の手の届くところにあるからです。つまり、無知な者から、賢者、裕福な者、貧しい者まで、特別な信仰とはまったく関係なく、誰の手にも届くのです。さらに、真なる慈善を定義し、善行の中ばかりではなく、隣人に対する善意と慈悲心、心のあらゆる特性の中でそれを示しています。

教会なしには救われません—真実なしには救われません

八、「慈善なしには救われません」という金言が、全世界的な原則として、神の子すべてに至上の幸福への扉を開いている一方で、「教会なしには救われません」という教理は、根本的な神に対する信仰と魂の不滅に基づいているのではなく、すべての宗教に共通な、ある特定の教理に対する特別な信仰に基づいています。それは絶対的で排他的なものです。神の子を一つに統合するどころか、分裂させてしまいます。兄弟達に対する愛を刺激する代わりに、家族や仲間同志であるにも関わらず、お互いを永久に極悪と考え、それぞれの異なる宗派に苛立ちを植え付け、けん制させあいます。墓の前にすべてが平等であるという偉大なる法を無視し、これらの教理はお互いを、休息の場所においてさえも反発させます。「慈善なしには救われません」という金言は、神の前の平等という原則と良心の自由を神聖化しています。それを規則とすることにより、人類は皆兄弟であり、創造主を崇拝する方法がどうであろうとも、手を差し出しあい、お互いに祈り会うことができるのです。「教会なしには救われません」という教理によれば、お互いがののしり迫害しあい、敵同志として生きることになってしまいます。お互いが容赦することなく非難しあっているために、父親が息子のために願ったり、息子が父親のために願ったり、友人が友人のために願ったりすることができません。つまり、福音の法とキリストの教えとに根本的に対立する教理なのです。

九、「真実なしには救われません」も、「教会なしには救われません」と同じで、真実という特権を主張しない宗派が存在しないことから、やはり排他的であると言えます。毎日、知識の領域は絶え間なく広がり、考えは改まっていくというのに、どんな人間に、すべてを所有していると自慢することができるのでしょうか。絶対の真実はより高い分類の霊たちだけに所属し、地上に生きる人類にはその所有を主張することはできません。なぜなら、人類はすべてを知るようには出来ていないからです。人類は単に、相対的でその進歩相応の真実を熱望することしかできません。もし神が、絶対的な真実を得ることを、未来における幸福の条件と明示していたならば、その一般的な規則を唱えていたはずであって、一方で、慈善はその最も広い意味においては誰にでも実践することができるものなのです。スピリティズムは福音にしたがって、どんな信仰とも無関係に、神の法が守られる限り誰に対する救済をも認め、「スピリティズムなしには救われません」と言うことはありません。また、いまだに真実のすべてを教えると主張するようなことはできないため、「真実なしには救われません」と言うこともありません。なぜなら、これらの教えは敵対する者たちを、統合し永続させる代わりに分裂させてしまうからです。

霊たちからの指導—慈善なしには救われません

十、親愛なる子供達よ、「慈善なしには救われません」という文の中には、人類の地上での、そして天における目的地が述べられています。なぜ地上での目的地なのかといえば、この旗の下に人類は平和に生きることができるからです。なぜ天における目的地かといえば、慈善を实践した者は神の前に恵みを受けることになるからです。この標語は天に灯るたいまつであり、人生の砂漠にある人類を案内する輝く支柱であり、人類を約束された土地へと導いてくれます。その標語は、選ばれた者たちの頭上にある聖なる後光のように天に輝き、地上では、イエスが「私の父に祝福された者たちよ、私の右側に行きなさい」と伝える者たちの心の中に刻まれています。彼らとその周りに放つ慈善の香りによって、あなた達は彼らを知ることができるでしょう。この天からの金言よりも正確に人類の義務を要約したものはありません。その金言を規則として掲げること以上にうまくスピリティズムの性格を証明する方法はなく、したがってスピリティズムは最も純粋にキリスト教を映し出しています。その金言を案内とすれば、人類は決して道を誤ることはありません。だから、親愛なる仲間達よ、その深い意味とその重要性を検討し、自分達自身でその応用を見つけることに身を捧げなさい。あなた達のすべての行動を慈善の支配下に置けば、良心は答えてくれます。それはあなたが悪を働くことから遠ざけてくれるばかりではなく、善を行わせてくれます。それは、消極的な美德だけでは不十分であるからです。能動的な美德が必要です。善を行うには、意志を行動に移すことがいつも必要です。悪を働かずにいるためには、怠慢と無関心でいるだけで事足りる場合がほとんどなのです。友よ、スピリティズムの光を享受することが許されたことを神に感謝して下さい。それを所有しただけで救われるわけではありませんが、キリストの教えをあなた達が理解するのを助けることにより、あなた達をより良いキリスト教徒としてくれるのです。だから、あなた達の兄弟があなた達を見て、真なるスピリティストとはただ真なるキリスト教徒と同じであり、慈善を行う者は所属する宗派に関わらず、すべてがイエスの使徒なのだということを知ることができるように努力をしてください。（使徒パウロ、パリ、一八六〇年）

第十六章 富と神の両方に仕えることはできません

財産家の救い—強欲から身を守る—ザアカイの家でのイエス—悪しき金持ちの話—タラントの話—富の用途—富と貧困の試練—富の不平等—霊たちからの指導—真なる財産—富の使い方—地上の財産への執着心を捨てること—財産の相続

財産家の救い

一、誰にも二人の主人に仕えることはできません。なぜなら、一方を愛し、一方を嫌うことになるか、一方にくっつき、もう一方の気持ちを害することになるからです。（ルカ、第XVI章、十三）

二、すると彼のもとに青年がやってきて言いました。「善き師よ、永遠の命を得るには何をすればよいのでしょうか。」するとイエスは答えました。「なぜ私を善いというのですか。善いとはただ神のみです。永遠の命に入りたいのであれば戒めを守りなさい。」「どんな戒めですか。」青年は問い返しました。「殺してはなりません。姦淫をしてはなりません。盗んではなりません。偽証をしてはなりません。父母を敬い、自分と同じように隣人を愛しなさい。」青年は言い返しました。「私は青年になってからそれらすべての戒めを守っています。それでもまだやらなければならないことは何でしょうか。」イエスは言いました。「もし完全になりたいのであれば、行って所有する者をすべて売り、貧しい者にそれらを与えれば、天における富を得ることができます。その後、来て私についてきなさい。」これらの言葉を聞くと、若者は多くの財産を所有していたので悲しくなり、去って行きました。するとイエスは使徒達に言いました。「誠に言いますが、富んだ人が天の国に入ることは難しいことです。また、更に申し上げますが、ラクダが針の穴に通る（注一）事のほうが富んだ人が天の国に入るよりも容易です。」（マタイ、第十九章、十六—二十四、ルカ、第十九章、十八—二十五、マルコ、第十章、十七—二十五）

（注一）この強いたとえの表現は多少強引であるようにも思えます。というのも、ラクダと針との間にどのような関係があるのか理解することができないからです。実は、ヘブライ語のラクダという言葉は、綱（ロープ）という意味にも使われるのです。翻訳では、最初の意味で訳してしまっているわけですが、イエスは別の意味でこの言葉を用いたことが考えられます。少なくともその方が自然です。

強欲から身を守る

三、すると群衆の中のある者が言いました。「師よ、私の弟に相続した財産を私と分けるように言って下さい。」イエスは言いました。「おお、人よ。誰が私をあなた達を裁き、あなた達の財産の分割をするように向けたのですか。」そして付け加えました。「いかなる強欲からも身を守るように注意をしなさい。人が何に富んでいようが、その者の命はその者の所有する財産には関係がありません。」すると続けて次のたとえ話を話しました。「自分の土地が非常に多くの作物を生産したある富んだ人がいました。そしてこのように自分の中で思いをめぐらせていました。「既に収穫物を蓄える場所がなくなってしまったが、どうすればよいだろうか。」そしてこのように言いました。「私の穀物庫を壊し、もっと大きな穀物庫を建て、そこに私の全財産とすべての収穫物を保管しよう。—そして自分の魂にこう言おう。「魂よ、何年もの間のための富がある。休み、食べ、飲み、楽しめよ。」しかし神は同時にその者に言いました。「なんと気が狂ってしまったことか。まさに今夜魂を奪うであろう。あなたが蓄えた物は何の役に立つであろうか。」自分だけのために富を蓄える者には、このことが当てはまり、そのような者は神の前には豊かではありません。（ルカ、第十二章、十三—二十一）

ザアカイの家でのイエス

四、エリコに入ると、イエスは町を通っていました。そこにはザアカイと言う名の、取税人の頭で大変富んだ者がいました。彼はイエスのことを知り合おうと、イエスのことを一目見ようと望んでい

ましたが、背が低かったため、群衆のために見ることができませんでした。そこで群衆の前へ走っていくと、そこを通るはずのイエスを見ようと、イチジクの木に登りました。イエスはそこへやってくると視線を上の方へ向け、ザアカイを見ると彼にこう言いました。「ザアカイよ、早く下りてきなさい。私を今夜あなたの家に泊めてもらう必要があります。」ザアカイは直ちに木から下りると喜んでイエスを迎えました。それを見て皆不満げに言いました。「イエスは罪人の家に宿泊に行った。」

(序章一「取税人」参照)しかし、主の前に出ると、彼に言いました。「主よ、私は財産の半分を貧しい者に分け与え、何であろうともし誰かに損害を及ぼしたならその四倍で償います。」するとイエス言いました。「今日この家には救いが来た。なぜなら彼もアブラハムの子供であるからです。」一人の子は失われていた者を探し出し、救いにやってきたのです。(ルカ、第十九章、一一一)

悪しき金持ちの話

五、あるところにある金持ちがおり、彼は紫の衣や高級な布をまとい、毎日豪華な生活を送っていました。また、ラザロと言う名の乞食がおり、その全身はできもので覆われていましたが、金持ちの家の扉の前に横たわっており、金持ちの食卓から落ちるパンくずでその飢えを癒すことを望んでいました。しかし誰もそれを与えてくれる者はなく、ただ犬がそのできものをなめに寄ってくるのでした。一さて、この乞食は死に、天使達によって、アブラハムの下へ連れて行かれました。金持ちも死にましたが、その墓場は地獄でした。苦しみにあっているとき、目を上げると遠くにアブラハムとラザロが見えました。するとこう言いました。「父アブラハムよ、私を哀れに思い、私の舌を冷やすために指先を水で濡らしたラザロをこちらへ送って下さい。この炎に包まれた苦しみは大変恐ろしいものです。」しかし、アブラハムは答えました。「息子よ、あなたは生きている間富を受け取り、ラザロには悪いことしかなかったことを思い出さない。だから今彼は慰められ、あなたは苦しみの中にいるのです。また、私たちとあなた達の間には永遠に深い淵が存在しており、それ故にここからそちらに行こうとする者はそちらへ行くことができず、また、あなたのいる場所からは誰もこちらに来ることはできないのです。」金持ちは言いました。「そうであるならば父なるアブラハムよ、お願いいたします。彼を私の父の家へ送って下さい。そこには五人の兄弟がいますが、彼らもがこの苦しみの場所へ来ることがないように、彼らにこのことを証言させて下さい。」アブラハムは彼に言い返しました。「彼らにはモーゼや預言者たちがおり、それを聞かなければなりません。」「違います、アブラハムの父よ。もし死者の誰かが彼らに会いに行けば彼らは懺悔することでしょう。」「アブラハムは答えました。「彼らがモーゼや預言者を聞かないのであれば、たとえ死者が生き返ろうとも信じることはありません。」(ルカ、第十六章、十九一三十一)

タラントの話し

六、主は自分の国を離れ長い旅に出る人のようになさります。その使い達を呼ぶと自分の財産を分け与えました。それぞれの能力に応じ、一人には五タラントを、別の者には二タラントを、そしてまた別の者には一タラントを、直ちに分け合いました。すると、五タラント受け取った者はそのお金で商売をし、もう五タラントを受け取りました。二タラントを受け取った者は、同じようにして同等のタラントを受け取りました。しかし、一タラントしか受け取らなかった者は地面に穴を掘ると、主人のお金をそこに隠しました。長い年月が経過し、その使いの者達の主人は戻ってくると勘定をするために彼らを呼びました。五タラントを受けた者はもう五タラント差し出すと言いました。「ご主人様。あなたは私に五タラント預けました。ここにそのお金とそれによって稼いだもう五タラントをお返しします。」主人は答えました。「良き忠実な使いよ。おまえは小さなことにも大変忠実であったので多くを預けた。主人の喜びをともに分かち合うが良い。」二タラント受けた者の番になると、言いました。「ご主人様。あなたは私に二タラント預けられました。ここにその二タラントと、私の稼いだもう二タラントをお返しします。」主人は答えました。「良き忠実な使いよ。おまえは小さなことにも忠実だったので多くを預けた。主人の喜びをともに分かち合うが良い。」次に一タラントだけを受けた者が来ると言いました。「ご主人様。あなたは厳しいお方で種を蒔かぬ所を滅ぼし、なにも散らさない所からも集めます。ですから、あなたを恐れ、預かった一タラントを地中に隠しておきました。ここにそのお金があります。あなたに属するものをお返しいたします。」すると主人は答えま

した。「悪しき怠惰な使いよ。おまえは私が種を蒔かぬ所を滅ぼし、なにも散らさない所からも集めることを知っているのであれば私の金を銀行に預け、私が戻ってきたとき、私の金利とともに受け取ることができるようにするべきであった。その者より一タラントを取り戻し、十タラント持つ者に渡すが良い。すでに持つ者には与えられ、それらは富をより蓄えることになるが、持っていない者は、持っているものまで取り上げられるであろう。この役に立たない使いを外の暗闇へ放り出さない。そこで彼は泣き、歯を震わせるであろう。」（マタイ、第二十五章、十四—三十）

神意に従った富の使い方—富と貧困の試練

七、イエスのいくつかの言葉を、霊によってではなく、文字通りに解釈した場合にうけとれるように、富がもし救いの絶対的な障害となるのであれば、富を容認した神は、富に抗しきれないような人々を破滅に導く手段を与えたことになりませんが、それは道理に反しています。富というのは、それが与える魅力や誘惑に人を引き込むので、貧困よりも危険な試練であることは疑う余地もありません。富は自尊心やエゴイズム、みだらな生活への欲求を強く刺激します。それは人類を地上につなぎ止める最も強い絆であり、人々の考えを天への方向から遠ざけることになります。貧困から豊かになってしまうと、しばしばそれに有頂天となってしまう、すぐにもとの境遇や、共に貧困を生き抜いてきた仲間や助けてくれた仲間のことを忘れてしまい、それらに対し鈍感で、利己的になり、うぬぼれてしまいます。しかし、富によって道のりが困難になるとはいえ、救済が不可能になったり、それが救済の手段となり得ないのではありません。ある種の毒が、思慮と分別をもって用いられれば健康を取り戻すことに役立つように、富が何に役立つのかを知る者にとっては、富は救済の手段ともなり得るのです。永遠の命を得る手段を訪ねた青年に対してイエスが、「あなたの財産をすべて処分し、私についてきなさい」と言ったとき、絶対的な条件として、一人一人が所有するものを捨て、救済はその代償として得られるのだということを確認させようとしたのではもちろんありません。そうではなく、単に地上の財産への執着が救済の障害になる、ということを示したかったのです。戒めを守っていたために自分は永遠の命にふさわしいと考えていた青年は、自分が所有する財産を放棄するという考えを拒否しました。永遠の命を得たいという彼の願望は、それを犠牲によって得ようとするところまで到達していなかったのです。イエスが彼に示した提案は、彼の考えの根底を裸にするための決定的な試験であったのです。彼は、疑いなく、世俗的な考え方においては完全に正直で、誰にも損害を与えず、隣人の悪口を言わず、うぬぼれず、高慢でなく、父母を敬っていたかもしれません。しかし真なる慈善に欠けていました。彼の美德は自己放棄にまでは達していなかったのです。イエスはそのことを示したかったのです。「慈善なしには救われません」という原則をあてはめたのです。これらの言葉を厳密にとらえるのであれば、その意味は、地上の限りない悪の原因であり未来の幸せにとって有害である富の廃止ということになります。また拡大解釈するならば、富を得る手段としての労働の否定ということになります。しかしそれはばかげた判断であって、それでは人類を再び原始的な生活へ戻すことになってしまい、それ故に神の法である進歩の法に矛盾するものとなってしまいます。富が多く悪の原因となり、悪い感情をかき立てて、多くの罪を引き起こすのであれば、それは富を責めるのではなく、神から授かったすべての能力と同じように、それを濫用してしまう人類を責めなければならないのです。濫用によって、人類にとって最も役立つものも有害になってしまうのです。それは地上の世界が劣った状態にあるということの結果です。もし富に、悪しか生み出すことができなかつたのであったなら、神はそれを地上に与えることはなかつたでしょう。富が善を生むように仕向けるか否かは、人類の権限に属するのです。もしそれが道徳的進歩に関わる要素でなかったとしても、知性的な進歩に関わる強力な要素であることは間違いありません。実際に、人類には地球上の物質的向上のために働くという役割があります。いつの日か地表が受け入れるべき人口のすべてを迎えることができるように、地球上の障害物を除き、衛生的にし、準備することが人類の裁量に任されています。絶え間なく膨らむこの人口に食物を与えるには、生産を上げる必要があります。ある国の食糧が不十分であるなら、不足する食糧を国外に求める必要があります。そうであるからこそ、異国民同志の関係が必要となってくるのです。それをより容易にするには、人々を別離させる物理的な障害を取り除き、通信がより早くなる必要があるのです。こうした仕事は何世紀にもわたる事業ですが、人類は地球の奥底より物質を取り出さなければなりません。それをより迅速で安全に行える手段を科学に求めました。しかしそれを実現させるには資力が必要でした。人類に科学を生ま

せたように、必要性が富を生み出したのです。こうした役割が強いる活動は人類の知性を広め、発展させますが、まず物質的な必要性を満足させるために集中させるその知性は、後になって偉大なる道徳的真理の理解を助けることとなります。富は実行の最初的手段であり、それなしでは大きな役割も、活動も、刺激や調査も生まれません。だからまったく富は進歩の原理であると考えられるのです。

富の不平等

八、富の不平等は、現世のみを考慮に入れる場合に限れば、無駄に解決しようとされる問題の一つでしょう。最初に問われる問題とは次のものです。「どうして人類のすべてが同じように豊かではないのだろうか。」そうでないのは、一つ単純な理由からです。それは、人類のすべてが富を手に入れるために同等に知性的、活発、勤勉ではないからであり、また富を保つために同等に節制できるでもなければ先見の明があるわけでもないからです。ただし、富が平等に分配されれば、一人一人に必要な最低限の分が行き渡るはずだというのは、あくまで数学的に言えることであって、この分配を行ったとしても、それぞれの性格や能力の違いから、その均衡はあつという間に崩れてしまうのです。たとえ均衡を保ち、長続きさせることが可能であったとして、一人一人が生きるために必要なものを所有していたとしたら、それは人類の厚生と進歩のためのあらゆる偉業を廃止することになってしまいます。そして、分け前が一人一人にとっての必要性そのものであると認めてしまえば、もはや人類を発見や有益な事業に取り組むことに駆り立てる刺激は存在しなくなります。神が特定の場所に富を集中させるのは、必要性に応じて、十分な量の富がそこから広がっていくためなのです。このことを認めたならば、今度は、皆の善のために富を役立たせる能力のない人々になぜ神は富を与えるのかという疑問がでてきます。しかしそこにも神の善意と英知の証が存在するのです。神は自由意志を与えることで、人類が自分自身の経験によって善と悪との区別をつけ、自分の意志と努力の結果として善を実践するようになることを望んだのです。人類は、善や悪に必然的に導かれるものではなく、そうであれば人類は動物と同じく無責任で受動的な道具だということになってしまいます。富は人間を道徳的に試すものなのです。しかし、それは同時に進歩のための強力な活動手段であるため、神はその富が長い間非生産的であることを望まず、そのためにいつでもそこから取り去るのです。誰もが富を得、それを費やすために行動し、富のどのような使い方を知っているのかを立証しなければなりません。しかし、すべての者が同時に富を所有することは数学的に不可能であるため、また、その上、もしすべての者が富を所有していたならば、惑星の向上を約束する労働に誰も就かなくなってしまうため、一人一人に富を得る順番があるのです。このように、今日富を所有しない者は、別の人生において既に得たことがあるか、もしくはこれから得ることになるのです。その他の、今日所有する者たちは、もしかすると明日にはそれを所有していないかもしれません。富める者も貧しい者もいます。なぜなら神は正義であり、一人一人が順番に働くように命じるからです。貧困は、それによって苦しむ者にとっては辛抱と忍従の試練なのです。他の者にとって、富は慈善と献身の試練なのです。ある人々に見られるような富の悪用や、野心が引き起こす卑しい感情を見て、「あのような者に富を与えて、神は正しいのだろうか」と嘆くことには一理あります。たしかに、もし人類にたった一度の人生しかなかったとしたら、地上の富のこのような分配を正当化するものは何も存在しません。しかし、もし私たちが現世だけに目を向けるのではなく、その反対に、複数の人生全体を考慮するのであれば、すべてが正義によって釣り合っているのです。ですから、貧しい者が神意を非難する理由も、富める者を羨ましがる理由も、また富める者がその富によって自らを讃える理由もないこととなります。富が濫用される時、悪を防ぐのは法律や奢侈禁止令ではありません。法律は一時的に外見だけを変化させることができますが、心を変えることはできません。そのため、そうした法律はつかの間しか持続せず、いつもその後には手に負えぬ反動が訪れるのです。悪の根源はエゴイズムと自尊心の中に存在します。いかなる種類の濫用も、人類が慈善の法によって支配された時、なくなることになるのです。

霊たちからの指導—真なる財産

九、人間は、この世から持ち出せるように与えられたものだけを、本当の財産として所有していま

す。地球に到着したときに手に入れ、離れるときに置いていくものは、ここにいる間にだけ享受することができます。しかし、それらすべてを放棄することを強られるのであれば、その富は、実際に所有しているのではなく、単に使用权だけを得ているのだということになります。では、人間は何を所有しているのでしょうか。肉体を使うことによるものは、何も所有していません。魂を使うことによるもの、すなわち、知性、知識、道徳的な性質は、すべて所有しています。それらは人間が地球に来るときに持参し、また持ち帰るもので、誰にもそれを奪い取ることが出来ないものであり、この世においてよりも、別の世界において、より有用となるものなのです。この世から旅立つときに、到着したときよりも豊かになっているかどうかは、その人自身にかかっています。したがって、善においてその人が獲得したものが、その人の将来の位置をもたらすこととなります。誰でも遠い国へ旅立つときには、行く先の国で役に立つもので荷物をまとめます。そこで役に立たないと思われるもののことは気にかけません。未来の人生に対しても同じように進んで下さい。そこであなた達に役に立つものすべてを蓄えておいて下さい。宿に到着した旅人に代金が払えるのであれば、よい宿が与えられます。けちな蓄えしかない者には、あまり快適でない宿が与えられます。自分のものとして何も持たない者は、粗末な寝台に寝なければなりません。霊の世界にたどり着いた人間にも同じことが起こります。どこへ行くかは持ち物によります。しかし、支払いは金ではありません。「地球ではどれだけ持っていたか。」「どんな地位にあったのか。」「あなたは王子でしたか、それとも労働者でしたか」などとは誰も尋ねません。「あなたは何を持ってきましたか。」このように尋ねられるでしょう。財産や、地位によってではなく、持ち合わせている美徳の合計によってあなたを評価するのです。この点において、労働者の方が王子よりも豊かであることもあり得ます。地球を離れる前にどれだけの重さの金を別の世界への入場料として払ったかを申し立てても無駄です。その人はこう答えられるでしょう。「この場所は買うことはできません。善の実践により獲得するのです。地上のお金で、あなたは農場や家や城を買うことができました。ここでは、すべてを魂の質によって支払うのです。あなたはそうした質において豊かですか。そうであるならば、あらゆる幸福が待っている第一級の場所へ迎えられます。そうした質において乏しいのですか。それなら最低の場所へ行ってください。そこではあなたの所有しているものに応じて扱われます。」（パスカル、ジュネーヴ、一八六〇）

十、地上の財は神に属し、神はその望みに応じて分配します。人間はその利用権を与えられているに過ぎず、分配された財のほぼ完全に知性的な管理者となります。しかしそれは人間の固有の財産ではないため、神はしばしばすべての予見を取り消すことがあり、富はそれを所有するに最良の地位を持つと信じる者からも逃げていくこととなります。そうしたことは、相続される財産に関しては理解できるが、労働によって得られた財産についてはそうではない、とあなた達は言うでしょう。疑いようもなく、正当な財産が存在するとすれば、それは正しく得られたこの後者の方であり、入手するときに誰にも損害を与えず、誠実に得られた場合にのみ財産が正当に得られたと考えることができます。不当に得られたお金、つまり他人の損害のもとに得られたものに対しては、最後の一銭に対してもその精算が求められることとなります。しかし、ある人の財産が、所有する人自身の努力によるものであったという事実は、その人が他界する時に何らかの利益をもたらすでしょうか。財産を子孫に残そうとその人が苦心したところで、多くの場合それは無駄なことではないでしょうか。まったく、もし神が彼らの手に渡したいと望まないのであれば、何事もそれにあらがうことはできないのです。精算の必要なしに人間は、生きている間その所有物を利用し、濫用することができるのでしょうか。いいえ、できません。その所有を許すことによって、恐らく神はその人生の間の努力、勇気、勤勉さに対して報おうとしたのです。しかし、もしその人が自分自身の自尊心と欲求の満足のためにそれらを用いたとしたなら、もしそうした所有物が破産の原因となるのであれば、それらは所有しない方がよいのであり、一方で得たものを他方で失い、働きの功労を打ち消してしまうこととなります。地上を後にするとき、神はその人に対して、もう報酬は受け取っているのだと言うことになるのです。（守護霊M.、ブリュッセル、一八六一）

富の利用

十一、富と神の両方に仕えることはできません。心を黄金への愛に支配されてしまったあなた達

は、このことをよく覚えていて下さい。

あなた達を他の人々よりも優位に立たせ、あなた達を隷属化させてしまう欲求の満足をもたらしてくれるからといって、あなたたちは財宝を得るために魂を売ってしまいます。それではいけません。富と神の両方に仕えることはできません。もしあなたの魂が肉体の欲に支配されていると感じるのであれば、あなた達を締め付けるくびきを急いで取り去りなさい。なぜなら、正義である厳しい神はこう言うからです。「不忠実なしもべよ、私があるに託した財産をどうしましたか。善行のためのこの強力な動力を、あなたは自己の満足のためだけに用いました」と。

では、富の最良の利用とはどのようなことでしょうか。その答えを次の言葉の中に探し求めて下さい。「お互いに愛し合いなさい。」この言葉の中には、富の正しい利用の秘訣が込められています。隣人愛によって行動する者がたどるべき道が、そこにはすべて示されています。神を最も喜ばず富の利用は、慈善の中に存在します。もちろん、ありあまる黄金を周りにばらまくことによって行われる、冷たく利己的な慈善について私は言っているものではありません。不幸を探しだして、辱めることなくそれを立ち直らせる、愛にあふれた慈善のことを言っているのです。富める者よ、あなたの余しているものを与えなさい。そしてそれ以上のことをして下さい。あなたにとって必要なもののうちの少しを与えなさい。なぜなら、あなたが必要だと思っているものも、現実には過分なものでしかないからです。しかし、知恵を用いて与えなさい。騙されるのではないかと心配して不満を訴える者を拒否してはなりません。悪の根源をつきとめなさい。まず、苦しみを和らげてあげて下さい。その次に状況を知り、仕事、助言、愛情があなたの与えるお金よりも役に立つのではないかと考えてみてください。あなたの周りに、物質的な救済とともに神への愛、労働への愛、隣人への愛を広めて下さい。尽きることなく、またあなたに大きな利益をもたらすことになる善行という基礎の上に、あなたの富を投じて下さい。知性的な富も、金銭的な富と同じように用いなければなりません。教えの宝をあなたの周りに広めて下さい。あなた達の兄弟にあなた達の愛の宝をふりまけば、それらは実を結ぶことになるでしょう。（シェヴェルス、ボルドー、一八六一）

十二、人生の短さについて考える時、あなた達にとっての絶え間ない心配が物質的な豊かさであり、道徳的完成には重きを置かず、その方が永遠に重要であるにも関わらず、それに対してはほとんど時間を割かないか、もしくはまったく捧げることがないのを見ると、私は心が痛みます。自分たちの行っている活動を前に、それらが人類の最も大切な利益をを扱っているのであると言われるでしょうが、たいていそれらは、行き過ぎたあなた達の必要性や虚栄心を満足させる状況に自分たちを置こうとしているか、不品行に身をまかせているに過ぎません。苦しみや悩み、不幸を、どれほど一人一人が自分自身に強いていることでしょうか。多くの場合、十分過ぎる財産をさらに増やそうと、眠れない夜を幾晩も過ごしているのです。無知の積み重ねの中には、働きのもたらす富と快樂に対する過度の執着によって苦しい仕事の奴隷と化してしまっているながらも、犠牲と功労の大きい人生を過ごしているのだ——自分のためにではなくあたかも他人のために働いているかのように——とうぬぼれてしまっている人をたびたび目にします。なんと気の狂っていることでしょうか。あなた達の未来や、社会的な便宜を有する者すべてに課せられる兄弟愛の義務を無視しておきながら、エゴイズム、貪欲、自尊心によって生まれた手間と努力が認められるとあなた達は本当に信じるのですか。あなた達は肉体のことしか考えていないのです。あなたの快適な生活、快樂だけがあなた達の利己的な配慮の対象だったのです。いずれ死ぬ肉体によって、永遠に生きるあなた達の霊を軽んじたのです。だからこそ、この活発で愛される主があなた達の君主となったのです。その主はあなた達の霊に命令し、その奴隷としてしますうです。神があなた達に任せてくれた人生の目的とはこういうことであつたのでしょうか。（ある守護霊、クラクフ、一八六一）

十三、人間は、神が手渡す富の管理者であり受託者であるがゆえに、自由意志によって決めたその富の使い方については厳しく精算が行われます。悪用は、個人的な満足のためにばかり使用したことからなります。反対に、あらゆる使い方において、他人の役に立つ結果を生む場合には善い使い方であるといえます。一人一人の功績は、自分自身に強いる犠牲の割合によります。善行は富の使い方の一つでしかありません。富は今日の貧困を緩和します。飢えを和らげ、寒さから守り、避難所のない者にはそれを与えます。しかし、貧困を未然に防ぐという義務も、与えることと同様に不可欠で価値があることです。それが特に大きな富の使命であり、富が創り出すあらゆる種類の仕事を通じてその

使命は達成されます。そのように富を使った者が創り出した仕事から正当な利益を得るからといって、もたらされる善が消失してしまうわけではありません。というのも、仕事は人間の知性を発展させ威厳を高めるとともに、生きる手段を自分で稼いでいるのだということを誇りを持って言うことを可能にしてくれるからです。施しものを受けることは人間を辱め、いやしくさせることとなります。一人の手元に集中した富は、それを負うものに快適さと豊かさを広める生きた水とならなければならないのです。おお、富めるあなた達よ。主の視点にしたがって富を使って下さい。あなた達の心は、その有益な泉に癒やされる最初の者となるのです。この人生のうちに、心の中に空虚をもたらす利己的な物質的な快樂の代わりに、得も言えぬ魂の喜びを享受することができるよう。あなた達の名は地上で祝福され、地上を後にする時、至上の主は、タラントのたとえ話のようにあなた達に言います。「良き忠実な使いよ。主人の喜びをともに分かち合うが良い。」このたとえ話の中で預けられたお金を地中に埋めた使いは、自分の手中で富を何の役にも立たせずに保管する貪欲な人々のことを表しています。しかし、イエスが施しものことを主に言うのは、イエスが住んでいた当時のその国では、富が職業や産業が後に生んだ労働や一般的な善のために有益に運用されることができ、ということがいまだに知られていなかったからなのです。よって、多かれ少なかれ、与えることができる者に対して私は言います。必要な時には施しものを与えなさい。しかし、可能な限り、それを受け取る者が恥じることはないように、それを報酬に変えて下さい。（フェヌロン、アルジェ、一八六〇）

地上の財産への執着心を捨てること

十四、友よ、あなた達がすでに入った完成の道を、安心して前進するのを助けるために、私の施しものを持って参りました。私たちはお互いに恩をこうむっています。霊たちと生きる者たちが誠実に同胞的に結びつくことによるのみ、更正は可能となるのです。地上の財産に対する愛は、あなた達の霊的、道徳的進歩の最も強い妨げとなっています。そうした財産を所有することへの執着は、あなた達の愛する能力を物質的なものに注ぐことで破壊してしまいます。誠実であって下さい。財産は混ざりけのない幸せをもたらしてくれるでしょうか。あなた達の金庫が一杯の時、いつも心の中には空洞が存在しませんか。この花の籠の底にはいつもへびが隠れていませんか。あなた達が感じる正当な満足感、すなわち敬われるべき勤勉な労働を通じて人間が体験するものについては理解することができます。しかし、神が認めたこの極めて自然な満足感と、他の感情を吸収し、心の衝動を麻痺させてしまう執着心との間には大きな隔たりがあります。また、行き過ぎた道楽と卑しい食欲さの間にも同様な隔たりがあり、神はこれら二つの悪癖の間に、貧しい者が卑屈になることなく受け取れるように、富める者が見せびらかすことなく与えることを教える、聖なる健全な美德である慈善を位置づけたのです。あなたの財産があなたの家族から受けたものであれ、あなたの労働によって得たものであれ、決して忘れてはならないことが一つあります。すべてが神より生じているということです。あなたのささやかな肉体でさえ、地上であなたに属するものは何もありません。その他の物質的な財産と同様に死はあなた達からそれを奪います。あなた達は所有者ではなく受託者なのですから、錯覚してはなりません。神はそれらをあなた達に貸し与えたのであり、あなた達はそれを返還しなければならないのです。神は少なくとも、余剰なものが必要なものを欠く人たちの手に渡すことを条件に貸し与えるのです。あなた達の友達がある金額を貸してくれるとします。あなたはどんなに正直でなかったにせよそれをきちんと返そうとし、その人に対して感謝するでしょう。よいでしょうか。豊かな人には皆こうした条件が当てはまります。神は、富を貸してくれた天にある友達であり、神は富める者の認識と愛以外には、何も自分に対して望んではいないのです。しかしその代わりに、その人と同様に自分の子である貧しい者たちに与えることを、富める者たちに求めるのです。神があなた達に信託した財産を手にとると、あなた達のうちに熱く狂った欲が目覚めます。あなた達自身のように一時的で消滅する運命にある財産に節度なく執着するのをやめ、いつの日か神より与えられた物に対して、主と精算を行わなければならないということを考えたことがありますか。富によってあなた達は、知性的な富の分配人と言われるように、地球上における慈善の神聖なる役割を身につけたのだということを忘れたのですか。ですから、あなた達に信託されたものをあなた達の利益のためだけに用いるのであれば、あなた達は不忠実な受託者以外の何であるといえるでしょうか。あなた達の義務を自ら忘れてしまうことがもたらす結果はなんでしょうか。無情で容赦のない死は、あなた達が身を隠すペールを引き裂き、忘れていた友とあなた達が精算を行うことを強要することになり、そしてそのとき、そ

の友はあなた達の前で裁判官の服を身につけることになるのです。地球上であなた達は、しばしばエゴにしかすぎないものを美德の名によって彩り、自分たちを無駄に欺こうとしています。貪欲やけちにしかすぎないものを経済性や用心と呼び、自分たちのための浪費にしかすぎない物を寛大さだと呼びます。例えばある家族の父親は、慈善を行わずにいると、お金を節約し、金を貯め、彼によれば、それは子供達が貧困に陥ることがないようにできる限り多くの財産を子供達に残すためだというでしょう。それはまったく正当で父親らしいことであり、誰にも非難すべきことではないことに同意します。しかし、それが彼の従う唯一の動機でしょうか。多くの場合、それは、地上の財産への個人的な執着を自分の目と世間の目の前で正当化するための、自分の良心との約束であるのではないのでしょうか。しかしながら、父性愛がその唯一の動機であると認めましょう。では、そのことは、神の前に兄弟達のことを忘れる理由でしょうか。すでに余剰があるとき、その余剰が少し少なく与えられるからといって、子供達が貧困に陥ることになるのでしょうか。その前に子供達にエゴイズムを教え、その心を堅くさせてしまうことになりませんか。彼らの中の隣人愛を衰弱させてしまうことになりませんか。父親達、そして母親達よ、その方法によってあなた達の子供達の最大の愛情を獲得できると信じているのであれば、あなた達は大きな過ちを犯しています。他人に対して利己的であることを子供達に教えることは、彼らに、あなた達自身に対してもそうあれと教えていることになるのです。多く働き、その汗によって財産を蓄えた人が、金は稼ぐほどにその価値を知る、と言うのを聞くのは一般的です。それ程正確な言葉ありません。では、それならば、お金の価値を知っているという人は、可能な範囲の中で慈善を行って下さい。そうすれば、豊かさの中に生まれ、労働の荒々しい疲労を感じない人々よりも大きな価値があることになります。しかしまた、自分の苦労や努力を覚えているその人が、利己的で、貧しい者に対して慈悲心を持たないのであれば、他の人たちよりも責任は重いことになります。というのも、貧困に隠された痛みを自分で知っていればいるほど、他人を助けようと感じなければならぬからです。不幸にも、豊かな財産を所有する人々の心の中には、その財産への執着心と同じくらい強い、ある感情が存在します。それは自尊心です。成り上がり者が自分の仕事と能力の話に酔いしれ、哀れな者が助けを求めると、助ける代わりに「私がやったようにやればよいのだ」というのを見るのは珍しいことではありません。彼らの見方からすれば、蓄えることのできた富の所有と神の善意とはまったく関係ありません。それを所有する功労は彼だけに属すると考えています。自尊心が彼の目を覆い、耳をふさいでしまうのです。彼の大した知性と能力にも関わらず、神はたった一言によって彼を地面に倒すことができるのだということを理解できないのです。財産を浪費することが地上の財産への執着心を捨てたことを示すではありません。それは不注意と無関心です。これらの財産の受託者である人間は、それを乱費する権利も、自分の利益のために取り上げる権利も有していません。浪費は寛大さではありません。それはしばしばエゴイズムの一種なのです。自由にすることのできる金を、幻想を満足させるために派手に費やす者は、雑務に対しては一銭も支払わないかも知れません。地上の財産への執着心を捨てるということは、その財産を正しい価値において評価し、自分のためばかりではなく、他人のためにそれをふるまうことを知り、未来の人生における利益を犠牲にすることなく、たとえ神がそれを奪うことを決めたとしても、不平を言うことなくそれを失うことができることです。もし予見できない不慮の出来事によって、あなた達がヨブのようになったのであれば、彼のように、「主よ、あなたは私に与えられ、私から奪われました。あなたの意のままにしてください。」それが本当に執着心を捨てることです。何よりもまず、従順であって下さい。あなた達に与え、あなた達から奪った神を信頼して下さい。神はあなた達から奪ったものを再び戻してくれるでしょう。あなた達の力を麻痺させる落胆と絶望に勇ましく抵抗して下さい。神は一撃を響かせる時、最も激しい試練の横にいつも慰安を与えるのだということを決して忘れてはなりません。そしてとりわけ、地上の財産よりも無限に貴重な財産が存在するのだということを熟考して下さい。その考えは、地上の財産への執着心を捨てる上であなた達を助けてくれます。あるものに対する評価をより少なくすることによって、その喪失に対してもより平気になります。地上の財産にしがみつく人は、そのときばかりしか目に入らない子供のようです。それらから解放されることのできる人は、救世主の次の預言を理解することによって、より大切なことが見える大人のようなようです。「私の国はこの世のものではありません。」主は誰に対しても、所有するものを捨てて自ら物乞いになれとは命令しません。なぜなら、もしそのようにすれば社会にとっての負担となってしまうからです。そのように行えば地上の財産に対する執着心を捨てるということを誤って理解していることになりません。それはまた別の類のエゴイズムであり、なぜなら財産を所有する者に重くかかる責任からその人

は免れるということになるからです。神は財産を、皆の利益のために管理するに適していると思われる者に与えます。ですから裕福な者には使命があり、それを美化し自分のために役立たせることができるのです。神が信託する財産を拒否することは、分別を持ってそれを管理することによってもたらされる善の恩恵を放棄することです。それを所有しない時には断念することを知り、それを所有するときには有益に利用することを知り、必要な時には犠牲を払うことを知ることによって、その人は主の意向に添って進むことができます。ですから、自分たちの手元にこの世で大きな富と呼ばれるものがもたらされた人は次のように唱えて下さい。「神よ、あなたは私に新しい役割を与えられました。その役割を果たすための力を、あなたの神聖なる意志に沿ってお与え下さい。」友よ、ここに私が教えたかった地上の財産への執着心を捨てることの意味が存在します。私が説いたことを要約して次のように申し上げます。「少ない物で満足することを覚えて下さい。」もしあなたが貧しいのであっても、財産は幸福には必要ないのですから富める者を羨ましがってはなりません。もしあなたが裕福であるならば、あなた達が自由にできる財産とはあなた達に預けられたものに過ぎず、弁護人のように、その用途について証明し弁明しなければならないことを忘れないで下さい。あなた達の自尊心と享樂を満足させるためだけにそれを使うことで、不誠実な受託者になってしまわないようにして下さい。受け取った物をあなた達の独占的な利益のために自由に扱うことのできる権利なのだとも、寄贈されたものだとも判断してはならず、それが単に貸与なのであると考えて下さい。それを返還することができないのであれば、あなたはそれを求める権利も持っておらず、また、貧しい者に与える人は神から受けた負債を精算するのだということ覚えておいて下さい。(ラコルデール、コンスタンティヌ、一八六三)

財産の相続

十五、人間が、生きている間にのみ享受することを神によって許された財産の、単なる受託者にすぎないという原理は、財産をその子孫に相続させる権利を人間から奪うことになりませんか。生きている間に享受した財産を、人間は死によってまったく完全に相続させることができます。なぜなら、この権利の結果も常に神の意志に従うものであり、神が望むときには、相続を受けた財産を子孫達が享受することを妨げることもできるからです。まさにそのことが、確実に形成されたと見えた財産が崩壊することの原因なのです。すなわち、所有する財産を自分の子孫のために守ることに対して、人間の意志は無力なのです。しかし、このことが神から受けた借り入れを譲る権利を人間から奪うわけではありません。なぜなら、神は好機であると判断した時に、その財産を奪うことができるからです。(聖ルイ、パリ、一八六〇)

第十七章 完全でありなさい

完全性の特徴—善人—良いスピリティスト—種蒔く人の話
 霊たちからの指導—義務—美德—上位の者、下位の者—優秀な者たちと地球上の人類—肉体と霊を大切に

完全性の特徴

一、あなた達の敵を愛しなさい。あなた達を嫌う者たちに対して善を尽くし、あなた達を迫害し、中傷する者たちのために祈りなさい。なぜなら、もしあなた達があなた達のことを愛する者たちだけを愛するのであれば、どんな報いを受けることができるでしょうか。税の取り立て人達もそうしているではありませんか。あなた達の兄弟達だけに挨拶をするのであれば、他人に比べなにをよけいに行っていることになるでしょうか。故に、あなた達は、天の父が完全であるように、完全でありなさい。
 (マタイ第五章、四十四、四十六から四十八)

二、神はすべてにおいて永遠の完全性を有していることから、「あなた達は、天の父が完全であるように、完全でありなさい」という命題は、文字通りに受け取ると絶対的完成に到達できる可能性を推測させます。もし創造物に、創造主と同様に完全になることが許されていたとすれば、創造物は創造主と等しくなってしまう、それは認められないこととなります。しかし、イエスが話をした人々は、こうしたニュアンスを理解することがなかったため、イエスは彼らにある模範を示し、達成するために努力することを伝えたのです。故に、この言葉は相対的な完全性、神に最も近い人類にとって可能な完全性という意味で理解するべきです。そうした完全性とは、なにから成っているのでしょうか。イエスは、「私たちの敵を愛し、私たちを憎む者に対して善を尽くし、私たちを迫害する者たちのために祈ること」にあると言いました。このようにしてイエスは、完全性の本質とは、その最も広い意味における慈善であることを示しており、なぜならそれは他のあらゆる美德の行使を含み込むからです。実際に、あらゆる悪徳は、本当に単純な欠点に至るまで、そのもたらす結果を観察してみると、そこには慈善の感覚を多少とも変化させないものはないことが認識されるでしょう。なぜならそれらは、その本質がエゴイズムと自尊心の中にあり、慈善とはその否定であるからです。また、アイデンティティーの感情を過剰に刺激するものはみな、真なる慈善の要素である善意、寛大さ、自己の放棄、献身を破壊するか、少なくとも弱めることになるからです。敵に対する愛にまで引き上げられた隣人愛は、慈善に反するあらゆる欠点にも結びつくことはなく、したがって、そうした愛は、いつも道德性の優劣を示す印となります。そのことから、完全性の度合は、その愛をどこまで広げることができるかということに直接関わっていることとなります。であるがこそ、イエスはその使徒達に慈善のきまりを教えた後、その内の最も崇高な教えである、「あなた達は、天の父が完全であるように、完全でありなさい」と言ったのです。

善人

三、真なる善人とは、正義、愛、慈善の法を、その最も純粋な意味において遵守する人のことです。彼が自分自身の行動について良心に問いかける時には、自分に対して、その法を破っていないか、悪を行っていないか、可能な限りの善を尽くしたか、有益な機会を自ら無駄にしなかったか、誰かが自分に対して不平を持っていないか、つまりは、自分にして欲しいように他人に対して行ったか、を問いつめるでしょう。神とその善意、その正義、その英知に対して信心を持っています。神の許可なしには何も起こることはないことを知っており、すべてにおいて神の意志に従うことを知っています。未来に対する信頼を抱き、そのために霊的な富を一時的な富の上に位置づけています。人生におけるすべての苦しみと痛み、あらゆる落胆は試練か報いであることを知っており、それらを不平を言わずに受け入れます。慈善と隣人愛の感覚を持ち、善のために善を、いかなる報酬をも期待することなく行います。悪に対して善で報い、強者から弱者を守り、正義に対して自分の利益を犠牲にします。善意を広めること、仕事に打ち込むこと、他人を幸せにし、他人の涙を乾かし、苦しむ者に慰安を与えることに満足を見出します。第一の衝動は自分のことを考える前に他人を思うこと、他人の

関心事の面倒を、自分の関心事の前に見ることで。反対に利己的な人は、あらゆる寛大な活動について、そこから生じる損害や利益を計算します。

善人とは良識を持ち、暖かく、すべての人に対して親切であり、人種や信仰の差別をせず、人類すべてをその兄弟として見るのができるのです。私たちすべての誠意ある確信を尊重し、彼と同じように考えない人を敵視することはありません。

どのような状況においても慈善をその指針とし、悪口によって他人を害したり、自尊心によって傷つけたり、他人の感受性を軽んじたり、どんなに小さな苦しみや不一致であれ、それを引き起こすことを避けようとしなないことが、隣人を愛する義務を怠っていることであり、そうあることは主の慈悲に値しないのだ、という確信があります。

憎しみや怒り、復讐の欲を抱くことさえありません。イエスの模範にしたがって、赦し、攻撃を忘れ、自分が赦したことに応じて自分も赦されることを知っているため、受けた恩恵の記憶だけを心に残します。他人の弱さに対して寛容で、なぜなら、自分も他人の寛容を必要としていることを知っており、次のキリストの言葉を覚えています。「罪を犯していないと思う者が最初の石を投げなさい。」他人の欠点を探すことを決して好まず、それを証言することも好みません。たとえそれを見るのが強いられても、常にその悪を緩和する善を求めます。自分自身の不完全性について研究し、それをなくすことができるように絶え間なく勉めます。次の日になって、前日に比べ何か良い事が自分にもたらされたと言えるように、あらゆる努力を用います。他人を犠牲にして自分自身の霊や才能の価値を高めようとはしません。反対に、他人にとって有益な事が目立つようにあらゆる機会を利用します。自分に与えられたものは、すべて奪われる可能性があることを知っているため、所有する富や個人的な優位性によってうぬぼれることはありません。自分に与えられた富について、それが預かりもので、いずれ精算をしなければならないことを知っており、また、自分の情熱を満足させるためにそれをを用いることが最も危害をあたえることになることを知っているため、それをを用いることはあっても乱用することはありません。社会秩序がその人の支配下に他の人々を置いたとしても、神の前には皆平等であるため、それらの人々を善意と寛容さによって扱います。その権威を彼らの道徳性を高めるために用い、自尊心によって彼らを押しつぶすことはありません。彼らの位置する従属的な立場がよりつらいものとなるようなことはみな避けます。従う人々は、自分のために、自分の占める位置における義務を理解しており、それを良心的に遂行します（第十二章 九）。最後に、善人は自然の法が自分の同胞達に与えるあらゆる権利を、自分が尊重して欲しいのと同じように尊重します。人を善人として区別するすべての特徴を詳細に述べることはできません。しかし、以上に述べたことを得ようと努力する者は、残りのすべての特徴をその道程で見つけることになるでしょう。

善いスピリティスト

四、善く理解され、何よりも善く意識されることにより、スピリティズムは上記のような結果を導きますが、それは真なるスピリティストを特徴づけることであり、同時に真なるキリスト教徒を特徴づけることです。なぜなら双方は同じものであるからです。スピリティズムは新しい道徳を定めるではありません。単に人類に対してキリストの実践と知性を容易にし、疑ったりぐらつく者に、揺るがぬ明確な信仰を与えるのです。しかし、心霊現象を信じる多くの人は、その結果や、そのことが及ぶ道徳性を学ばず、あるいは、学んでも自分自身に適応させることがありません。それはどんな理由からなのでしょう。スピリティズムの教義に何かしら明確さが欠けているのでしょうか。いいえ。なぜなら、教義には誤った理解をもたらすような装飾や形を含んでいないからです。その明確さはその本質そのものであり、直接知性に働きかけるために、すべての力がそこからくるのです。神秘的なものは何もなく、それに接して間もない人は、そこにどんな秘密も俗世間に隠されたこともあるとは思えないでしょう。それでは、それを理解するには並ならぬ知性が必要なのでしょう。いいえ。著しい能力の持ち主でそれを理解することができない人達がいる一方で、一般的な知性の持ち主で、まだ青年期を終えたばかりの若者でも、それを賞賛すべき正確さによって、最も繊細な意味合いについても学びとる人がいます。このことは、いわば、その科学の物質的な部分は、それを観察する目を必要とするのに対し、本質的な部分は、道徳性の成熟度と呼ぶことのできるある程度の感受性を必要としていることを証明しています。その成熟度とは年齢や教育の度合いからは独立したものですが、なぜなら、それは特に肉体を持つ霊の進歩に固有のものであるからです。ある人達にとっては、地上の

物から解放されるには物質の絆がいまだに強すぎることがあります。彼らを取り巻く霧は無限の視野を遮り、そのことから彼らには、自分たちの癖や習慣をそう容易には断ち切れず、彼らが入り込んでいることよりも良い何かが存在することに気づくことができなくなるのです。単なる事実として霊の存在を信じますが、そのことがその人の本能的な傾向を変化させることはほとんどないか、まったくありません。一言で言うなら、遠くから眺める一筋の光以上のものではなく、そのことが彼らを導き、傾向にうち勝つだけの強烈な熱望を与えるには至らないのです。彼らは、陳腐で単調に見える道徳よりも、現象にすぎります。すでに創造主の秘密を知るにふさわしくなったかどうか知ろうともせず、霊たちに対して、絶えず新しい神秘について話を始めることを依頼します。こうした人達は不完全なスピリティストで、彼らのうちの何人かは途中で止まったり、同じ信仰を持つ同胞達から遠ざかったりします。なぜなら、自己を改革する義務から逃れたり、同じ欠点や偏見を有する人たちと共感し続けることになるからです。その場合、彼らは容易に教義の原則を受け入れるという第一歩を踏み出しますが、第二歩目は、次の人生で踏むことになるのです。

理性に則り、真の誠実なスピリティストと分類されることのできる人は、道徳的進歩においてより優れた段階にあります。その人を物質よりも完全な形で支配するその霊は、未来に対してより明確な感覚を与えます。教義の原則はその人を、他の人の中では反応することのない神経までも震わせません。一言でいうならば、その人は揺らぐことのない信仰によって心を支配されています。それは、音楽家がある和音を聞いただけで感動する一方で、他人にはそれがただの音にしか聞こえないのと同じです。真のスピリティストは、その人の道徳的変化や、その悪しき傾向を抑制するために払う努力によって知ることができます。ある人たちが有限の地平線に満足する一方で、別の人たちはよりよいことを学び、そこから解放されようと努力し、それを固い意志を持って必ず達成することになります。

種を蒔く者の話

五、その同じ日、家を出ると、イエスは海岸に座っていました。その周りには大勢の群衆が集まりました。そこから舟に乗ると、そこに座りました。人々は海縁に居続けました。すると次のように多くのことをたとえ話によって話しました。種を蒔く者が種まきに出かけた。種を蒔くと種の一部は道端に落ち、すると鳥がやってきて食べてしまった。その他の種は石が多く土の少ない場所に落ちた。種が落ちた場所の土は浅かったので種はすぐに芽を出した。しかし、芽が伸びると太陽が照りつけ、根がなかったために乾いてしまった。別の種はとげのある草の間に落ちたが、その草が伸びると芽の育成を遮ってしまった。そして最後の良い土地に落ちた種は実を結び、一つの種から百、あるいは六十、あるいは三十の種がもたらされた。聞く耳を持つ者は聞きなさい。(マタイ、第十三章一一九) 故に種を蒔く者の話をあなた達は聞きなさい。王国よりの言葉を聞きながらも、それに注意を払わない者は、悪意のある霊がやってきて心の中に蒔かれた種を持って行ってしまふ。そうした者は種を道端で受けた場合と同じである。石の間に種を受ける者とは、言葉を聞き、それを最初は喜ばしく受け止める者である。しかし、そこには根が生えていないために、短い時間しか持続しない。言葉が原因で反対や迫害を受け、そのことを墮落と不正の理由としてしまふ。とげのある草の間に種を受ける者とは言葉を聞き入れる者である。しかし、やがてその者の中でその言葉はその時代や富への関心事によって押しつぶされ実を結ばなくなる。しかし、よい土地に種を受ける者は言葉を聞き、それに注意を払い、それによって実を結ぶことができ、一つの種から百、六十、三十もの種がもたらされる。

(マタイ第十三章十八—二十三)

六、種を蒔く人の話は、実際の福音の受けとめられ具合を正しく表現しています。実際に、その人にとって福音が死んだ文字にしか映らず、石の上に落ちた種のように、まったく実を結ばない人がなんと多いことでしょうか。様々なスピリティストの分類のなかにもまったく同じことが当てはまりません。物質的現象ばかりに気をとられ、珍しいものしか見ることがないために、そこからどんな結果も重要性も導くことがない人々は、この話の中に象徴されているのではないのでしょうか。霊の通信の輝かしい部分ばかりに気を取られ、それで自分の想像を満足させることだけに興味を持ち、通信を聞いた後にも、以前そうであったのと変わらず冷たく無関心でいる人はどうでしょうか。忠告を良いと認識し、それを賞賛しながらも、それは他人に当てはめられるもので、自分自身に当てはめられるもの

ではないと考えていないでしょうか。では、そうした教えを、良い土地に落ちて実を結ぶ種のように受けとめるのはどういう人でしょうか。

霊たちからの指導—義務

七、義務とは、まず第一に自分自身に対する、そしてその次に他人に対する、人間の道徳的任務のことです。義務は人生の法です。最もささいな事柄においても、より高尚な行動の中にも、それに出会うことができます。ここでは職業上要求される義務ではなく、道徳的義務についてだけ述べたいと思います。感情の秩序の中で、義務は、心や興味を引きつけるものと相反するものであるために、とても果たすのが難しいものです。その勝利に証人は存在せず、またその敗北は罰せられるものではありません。人類の内なる義務は、その自由意志に委ねられます。良心の痛みが、内心の誠実なる番人であり、人に警告を与え、人を支えています。しかし多くの場合、それは感情の詭弁の前に無力となってしまいます。心の義務は、忠実に守られれば人類を高尚にします。しかしそれをどのように正確に定めればよいのでしょうか。それはどこに始まり、どこに終わるのでしょうか。義務は、あなた達一人一人が同胞の幸福や平和を脅し始める点にまさしく始まります。そして、あなた達に対して誰も、我慢の限度を越えないようにと望むことがなくなる境界で終わります。神はすべての人類を、痛みに対して平等に創りました。小さな者も大きな者も、教育のある者も無知な者も、一人一人がその健全な良心によって引き起こしうる悪を判断することができるように、すべての人が同じ原因によって苦しむようになっています。善に関しては、その表現が無限に多様化しており、その基準は同一ではありません。痛みに対する平等は神の崇高なるはからいであり、神はその子すべてが、共通の体験に教えられることによって、自分の無知による弁明をしながら悪を働くことがなくなることを望んでいるのです。義務は、あらゆる道徳的な意向の実践的な要約です。それは戦いの苦しみに立ち向かう魂の勇敢な行動です。それは厳しくも寛大です。多様で複雑な場面の前に屈する準備がありますが、その企てにおいて不屈であり続けます。義務を果たす人は、神をその創造物よりも愛し、自分自身よりも創造物を愛していることになり、それはその原因自体に対する判事であると同時に奴隷でもあります。義務とは理性の最も美しいほうびです。母親から子供が生まれるように、理性からそれは生まれます。人類は義務を愛さねばなりません。それは、義務が人生の悪や人類が逃れることのできない悪から守ってくれるからではなく、人類の進歩に必要な力を魂に与えてくれるからです。義務は、人類のより優れた向上のための期間のそれぞれの場面において、あらゆる高尚な形に育ち、輝きます。創造物の神に対する道徳的義務は、途切れることはありません。創造物自身の美しさが自らの目の中に輝くことを神は望むため、不完全に終わることのない永遠なる神の美德を、義務は写し出しているのです。(ラザロ、パリ、一八六三)

徳

八、最も高揚した徳とは、善人を構成するすべての本質的な特徴の集合体です。善くあり、慈善を行い、努力家であり、質素で、慎ましくあることは徳の高い人の特長です。残念なことに、ほとんどいつもこれらとともに小さな道徳的な病が同居しており、徳を弱めてしまいます。自分の徳を見せびらかす人は徳が高いとは言えません。なぜなら、そこには謙虚さという最も重要な特長が欠けているからです。反対に、そこには謙虚さとまったく反する悪癖である自尊心が存在しているのです。美德とよばれるにふさわしい徳は、目立つことを好みません。その存在を想像することができても、闇の中に身を隠し、人々の賞賛から逃れようとします。聖ヴィンセンティオ・デ・パウロは、徳の高い人でした。クーラ・ダール(アルスの司祭・聖ヴィアンネー)やその他の大勢の人々も高德で、世界的に知られてはいませんが、神には知られているのです。これらの善人達は皆、自分たちが徳が高いということなど気にもしませんでした。自らの聖なるインスピレーションにまかせ、完全に私心を捨て、完全なる自己の放棄によって善を行いました。子供達よ、私はこのように理解され、実践される徳にあなた達を招きます。この真にキリストの教えを守る、真なるスピリティストの徳にこそ、あなた達に身を捧げて欲しいとお誘いします。しかし、あなたの心から自尊心、虚栄心、自己愛といった、最も美しい特性をいつも失わせてしまうものはすべて遠ざけて下さい。模範として自ら現れ、自分から自分の特徴をすべての親切な耳に言いふらす者のまねをしてはいけません。そのように目立つ

徳には多くの場合、多数の小さな醜行や憎まれるべき臆病が隠されています。概して、目立とうとする者、徳によって自分自身の彫像を建てようとする者はそのことだけによって手に入れることのできたあらゆる実際の功労をうち消してしまいます。では、実際の姿とは違った姿で現れることだけを唯一の価値としている人については、どう言えば良いのでしょうか。善を行う者は心の内なる満足感を得ることということにはまったく同意します。しかし、他人からの賞賛を得ようと、その満足をどの程度外面的にあらわすと、自己愛に転落してしまうのでしょうか。スピリティズムの信仰のによって心を熱くした、人類がその完成からどれだけ遠い所にあるかを知っているあなた達は皆、決して同様の選択をして躓いてはいけません。徳とは、誠実なすべてのスピリティストに対して私が望んでいる特長です。しかしながら、あなた達に申し上げます。謙虚さを伴う少ない徳の方が、自尊心を伴う多くの徳よりも価値があります。自尊心によって人類は代々迷うことになるのです。いつか人類は謙虚さによって贖罪することになるのでしょうか。（フランソワ・ニコラ・マドレーヌ、パリ、一八六三）

上位の者、下位の者

九、権威にせよ、富にせよ、それらは委任されたものであり、委ねられた者はいずれその精算をする必要があります。それらが単に無益な、命令する喜びをつくるためにだけ与えられたのであるとか、地上においてそうした力を与えられた者の大半が思っているように、それが権利であり、所有物であるなどと考えるはなりません。もっとも、神は絶えずそのことを証明しており、神はそう決めた時、彼らからその権威や富を奪います。もし彼らが個人に属する特権であるなら、譲渡し得ないものであるはずです。ある物が自分の同意なしに奪われる可能性があるとするれば、誰にもその人がその物に属しているのだと言うことはできません。神はそうあるべきだと判断した時、権威を使命または試練として託し、最も適した時にそれを奪います。権威を委託された者は誰であれ、主人と奴隷から君主と国民の関係に至るまで、その権威がどこに及ぶものであろうと、その責任範囲には、権威に従う者たちに与える方向性の善し悪しに応じて変化する魂が含まれていることを忘れてはなりません。彼らに対して犯した過ちや、悪しき模範や方向性の結果によって生まれた悪癖は、権威を託された者へ降りかかります。同様に、従う者たちを善へと導くように権威を行使する者は、その配慮の結果を得ることになります。すべての人が、大なり小なり、地上においてある使命を持っています。その使命がどのようなものであれ、それは常に善のために与えられています。その根本において欺く者は、その使命の達成に失敗します。

金銭的に裕福な者に対して、「あなたの周りに泉のように実りを溢れさせるはずであった、あなたの手中にあった富をあなたはどうしましたか」と尋ねるように、ある種の権威を有する者に対しても神は尋ねます。「あなたの権威をどのように用いましたか。どんな悪を避けることができましたか。どんな進歩をもたらしましたか。あなたに従う者たちを与えましたが、それはあなたの意志に応じて働く奴隷とするためでなければ、あなたの食欲さや気まぐれに従順な道具とするためでもありません。あなたが彼ららを助け、彼らが私の胸元まで上ってくることができるようにと、あなたを強くし、弱い者たちをあなたに託したのです。」キリストの言葉に納得している上位の者は、自分に従う者を軽んじることはありません。なぜなら、神の目に社会的な区別は存在しないことを知っているからです。今日その人に従う者は、かつてはその人に対して命令を下していたかも知れませんが、後になって命令を下すことになるかも知れず、だから、その人は、権威を行使していた時に自分が従う者たちをどう扱ったかに応じて扱われるのだということをスピリティズムは教えてくれます。上位の者に達成しなければならない義務があるのであれば、下位の者にも上位のものと同様に神聖な義務が存在します。スピリティストであるならば、その良心はより強制力をもって、その者がそれらの義務を遂行する必要があると考えてはいけなことを、たとえ、その上司がその人への義務を遂行しなくとも、主張します。なぜなら、悪に対して悪で見返ることが正当でないことを良く知っており、ある者が過ちを犯したからと言って、そのことは他人の過ちを正当化するものでないことをスピリティストは知っているからです。もしその立場が苦しみをもたらすのであれば、それが疑いもなく自分にふさわしいことだと認識します。なぜなら、おそらく、自分も過去に持っていた権威を乱用したために、他人を苦しめたことを自分で経験することになっているのだからです。その立場を我慢することが要求され、その他によりよい場所が見あたらないのであれば、それはその人の進歩に必要な謙虚さを養うための試練となっているのであり、スピリティズムはそれを甘受することを教えていま

す。スピリティズムを信じることは、その人の行動を指導し、自分がもし上司であったとしたら、部下達にして欲しい行動を、自分がするように導きます。それゆえ、自分の義務を遂行することはより気がかりになります。というのも、自分に決められた仕事に対する怠慢は、その人に報酬を払う者にも、時間と努力の借りがある者にとっても、損失をもたらすことを理解しているからです。一言で言うなら、その人の心には、信仰から生まれた義務の感情と正しい道から離れることが、遅かれ早かれ支払わねばならぬ債務を生むことになる、という確信があるのです。（モロー枢機卿、フランソワ・ニコラ・マデレイヌ、パリ、一八六三）

この世の人類

十、主の視野の下に集って善霊たちの支援を懇願する者たちの心を、常に慈悲の心が励まします。故に、あなた達の心を清めて下さい。その心の中にあらゆる世俗的な考えや無益な考えが長居することを許してはいけません。あなた達が呼ぶその霊の元へあなた達の霊をひき上げ、あなた達はその魂の中で発芽させ、慈善と正義の実を結ばせなければならない種を彼らが豊富に蒔くことができるように、あなた達の中に必要な準備を整えて下さい。しかし、私たちが祈りと精神を呼び起こすことを絶えずあなた達に勧めるからと言って、私たちがあなた達に、生きるように言い渡された社会の法から逃れた、神秘的な生活を送ることを望んでいるのだと判断してはいけません。そうです。あなた達は、人類がそうであるべきように、あなた達の時代の人々と共に生きなければなりません。その日のつまらぬ事に対しても、必要性に応じて自分を犠牲にし、それらを神聖なものとするように純粋な気持ちで自分を捧げて下さい。あなた達は違った性格を持つ霊たち、相反する特徴を持った霊たちと接触するように呼ばれたのです。あなた達が共にする彼らの誰とも衝突してはいけません。快活に、幸せであって下さい。しかし、その快活さが潔白な良心のもとからもたらされるように。その幸運が、あなた達が遺産を手に入れる日までの残された日々を数える、天の相続人のものであるように。徳とは、あなた達人類に許された快楽を嫌って厳しく陰気な表情を見せることではありません。あなた達に人生を与えてくれた創造主に対して、人生のあらゆる行動を報告すればよいのです。ある仕事を開始したり、終えたりした時、創造主のもとに思考をひき上げ、魂の喜びや、成功するための保護、あるいはその仕事を完成したのであれば、その祝福をお願いすればよいのです。何を行うにおいても、あらゆる物に対してあなたの額を上げ、あなたのどの行動さえも、神の記憶によって神聖化され、清純化されないことがないようにして下さい。キリストの言ったように、完成とは絶対的な慈善の実践の中にすべてが存在します。しかし、慈善の義務は小さい者から大きな者に至るまで、あらゆる社会階級に及びます。孤立して生きる人間にはどんな慈善も行うことはできません。唯一、同胞達との接触において、その最も厳しい戦いの中でのみ、人は慈善を行う機会に出会うのです。故に、自ら孤立し、自分を完成させる最も強力な手段を失ってしまう人は、自分のことしか考えることがなく、その人生は利己的なものとなってしまいます。（第五章、二十六）故に、私たちと絶えず通信をとりながら生き、神の御心にかなうように生きるために自らを痛めつけたり、灰を被ったりする必要があると考えてはなりません。そうではないのです。繰り返し申し上げます。人類の必要性に応じて幸せでありなさい。しかし、あなた達の幸せの中に、あなた達を愛しあなた達を導く者を攻撃したり、彼らの顔を悲しませたりするようなことが決してあってはいけません。神は愛であり、神を純粋に愛する者を祝福するのです。（ある守護霊、ボルドー、一八六三）

肉体と霊を大切にす

十一、道徳的完成は肉体の苦行がもたらすのでしょうか。この問題を解決するために、基本的な原則に則り、まず肉体を大切にすの必要性を示したいと思います。なぜなら、健康か病気かの選択は、肉体の虜と考えられる魂にとって大きな影響を及ぼすからです。この虜が生き生きとし、その広がりを見せ、自由の幻想を抱くようになるには、肉体は健全で、すぐれ、強くなければなりません。ある例を示してみましょう。ここに肉体と魂のいずれもが完全な状態にある人がいるとします。必要性や性質のまったく異なるこれらの二つの均衡を保つには何をしなければならぬのでしょうか。両者間の戦いは避けられず、それらを均衡に導く秘訣を見出すのは困難です。二つの考え方が対立しています。一つは修行者の考え方で、その基本は肉体を痛めつけることであり、もう一つは唯物主義者の考

え方で、その基本は魂を卑しめることです。いずれも曲解であり、勝るとも劣らず馬鹿げています。これら二つの両極端には、大勢の無関心な群衆が、確信もなく情熱を抱くこともなく、群がります。彼らは愛に対して冷たく、喜びに対してけちな人々です。そのとき、知性はどこにあるのでしょうか。生きるための科学はどこにあるのでしょうか。どこにもありません。スピリティズムが到来し、研究者達を助け、肉体と魂の間に存在する関係を示し、お互いが他方に依存しているために、両方を大切にしなければならぬと言わなければ、この大きな問題は解決されることはありません。だから、あなた達の魂を愛し、また、同様に、魂の道具であるあなた達の肉体を大切にしてください。自然自身が示す必要性を軽んじることは、神を軽んじることです。あなたの自由意志から犯された過ちによって肉体を痛めつけないでください。そうした過ちに対しては、自由意志も、下手に操られた馬と同様に、それが引き起こす事故の責任を負っているのです。肉体を苦行にさらし、あなた達の隣人に対して慈善を行うことも、へりくだることも、自己中心的でなくなることもなしに、肉体を痛めつけることによってあなた達はより完全になることができるのでしょうか。いいえ、完成とはそうしたものではありません。完成とは、あなた達の霊に対して行う改革にあります。魂を曲げ、服従させ、卑下し、苦しめなさい。それが神の意志に対して従順になり、完成に至ることのできる唯一の手段です。（守護霊、ジョルジュ、パリ、一八六三）（ここまで 2006/9/22）

結婚披露宴の話—狭き扉—「主よ、主よ」と叫ぶすべての者が天の国に入るのではない—多くを受け取った者には多くが求められる—霊たちからの指導—持つ者には与えられる—行いによりキリスト教徒であることを知る

結婚披露宴のたとえ話

一、イエスはたとえ話によってさらに述べた。天の国は、自分の息子の結婚披露宴を開こうとする王と同じである。その王は家来を送り、披露宴に招待した者を呼びに行かせた。しかし、彼らは行くことを拒んだ。王は別の家来達を、招待客に次の事を伝える命令とともに送った。晩餐の準備をした。私の牛と山羊を皆殺させた。すべてが整った。披露宴へ来たれ。しかし、彼らはそのことに気をとられることもなく、ある者は農場の家へ、またある者はその商売へと行ってしまった。別の者たちは家来をとらえ、大いに侮辱した後殺してしまった。それを知って王は怒り、彼らに対して軍隊を送り、殺人者たちを滅ぼし、その町を焼いてしまった。すると家来達に言った。結婚披露宴は完全に準備が整った。しかし、そこに招待された者たちは披露宴にふさわしくなかった。ゆえに、道の交差するところへ行き、そこで出会うすべての者を披露宴に呼べ。家来達は道へ出て行き、出会う者たちすべてを、善い者も悪い者も連れてきた。披露宴の部屋は人がいっぱいになり、人々はテーブルについた。続いて王が入ってきて、テーブルについた人々を見回すと、そこには礼服を着ていない男が一人いた。その男に向かって王は言った。「友よ、礼服を着ずにどうやってここへ入ったか。」男はだまり続けた。すると王はその家来に言った。その者の手足を縛り、外の闇へ放り出せ。そこで涙を流し、歯を鳴らして震えるがよい。故に、多くの者は呼ばれるが、選ばれる者は少ない。(マタイ第二十二章、一一―十四)

二、不信心な者はこの話のことを幼稚で単純だと笑い、なぜなら披露宴に出席するのにそれ程の困難があることが理解できず、さらには招待された者が家の主人に送られた者たちを殺してしまうまで抵抗することが理解できないからです。彼は、「たとえ話というものは疑いもなく象徴的なものです。しかし、そうであったとしても、真実の限界を越えない必要がある。」と言うでしょう。その他のたとえ話や、最も巧みにつくられたおとぎ話に関しても、それらから装飾的な部分を取り除き隠された本当の意味を見いだせなければ、同じような事が言えるかもしれません。イエスはそのたとえ話を生活の最も通俗的な習慣によって創り、その話を話す人々の特長や習わしに適応させました。それらの話の大半は一般大衆の間に霊的な生活の考えを浸透させることを目的としており、それらを解釈するとき、こうした視点から見なければ多くの話は、その意味において理解不能であるかのようです。ここで扱うたとえ話の中で、イエスはすべてが喜びと幸せに満ちた天の国を、披露宴にたとえています。最初の招待客のことにふれ、最初に神にその法を知るように招かれたヘブライ人達に注意を促しています。王に使わされた家来達とは真なる幸せの道に従うように唱えた預言者たちです。しかし、その言葉はほとんど聞き入れられませんでした。その注意は軽んじられました。たとえ話の中の家来達のように、多くの者は本当に殺されました。招かれながらも言い訳をし、畑や商売のめんどろを見に行かなければならないと言う者は、世俗的な人々で地上の事柄につきり、天の事柄に対して無関心でいつづける人達の事を象徴してあらわしています。当時のユダヤ人の間で、彼らの国がその他のすべての国々に対して勝らなければならないと信じるのが一般的でした。実際、神はアブラハムの子孫が全地上をおおうことを約束しませんでしたか。しかし、いつもそうであるように、真意を考慮せず形式をとらえ、彼らはそれが物質的、物理的な支配のことだと信じたのです。キリストの到来以前、ヘブライ人を除けば、すべての民族は偶像崇拝をし、多神教でした。人々の内、上位の人々から庶民に至るまで神の唯一性の考えを心に抱いたとしても、それは個人的な考えとして止まり、どこにおいても基本的な真実として受け入れられることはなく、もしくは、そうした考えを持つ者は神秘のベールの元にそうした知識を隠していたために、一般大衆にそうした考えが浸透することはありませんでした。ヘブライ人は公に一神教を始めた最初の民族です。神は彼らに対して最初はモーゼを通じ、その後イエスを通じて、その法を伝えました。その小さな焦点から世界中に向けてあふれ出す光が放たれ、異教に打ち勝ち、アブラハムに対して霊的な子孫を「天の星の数ほど」もたらすことにな

るのです。しかし、偶像崇拜を放棄しながらも、ユダヤ人達は道德の法を軽んじ、形式的な儀式というより容易な方に執着してしまっただけです。悪は頂点に達しました。国は奴隷化されるばかりか、党派によって崩壊し、宗派に分裂しました。不信心が聖地にまで及んだのです。するとそのときイエスが現れましたが、イエスは神の法の遵守を呼びかけ、未来の命へつながる新しい地平線を彼らに広げるために送られたのでした。全世界の信仰の大宴会に紹介された最初の者たちは、天から送られた救世主の言葉を拒み、生け贄にしたのです。そしてそれにより彼らのイニシアチブによって得ることのできた善き結果を失うことになってしまいました。しかし、そうであるからと言ってそうした状況になったことに対してその民族全体を非難することは不適當です。その責任は主に自尊心と狂信によって国を犠牲にした者たちや、その他の不信心な者たちであるファリサイ派やサドカイ人達にありました。故に結婚披露宴への出席を拒んだ招待客とイエスが同一視するのは、誰よりも彼らなのです。

「それを見ると、主は街角で出会う者は善い者も悪い者もすべて呼んでくるように命令した。」と付け加えています。このように言うことによって、神の言葉がその後、異教徒であれ偶像崇拝者であれ、すべての民族に伝えられたことを述べ、その言葉を受け入れれば彼らが宴会に参加することが許され、当初の招待客の場所が与えられることに触れました。しかし、誰でも招待されるだけで事足りるわけではありません。自分がキリスト教徒であると言うだけでは事足りず、テーブルにつき、天の宴会に参加するだけではいけないのです。何よりも最初に、しかも早急に、礼服を着ていること、すなわち、清い心を持ち、霊にしたがって法を守ることが必要なのです。ところで、その法のすべては次の言葉に要約されます。「慈善無しには救われません」しかし、神の声を聞くあなた達すべての間でも、それを守り、有益に用いる者のなんと少ないことでしょうか。天の王国に入るにふさわしい者のなんと少ないことでしょうか。故にイエスは言ったのです。「呼ばれる者は大勢います。しかし、選ばれる者は少ししかいません。」

狭き扉

三、狭き扉より入りなさい。なぜなら墮落の扉は広く、そこへたどりつく道は広く、多くの者がそこから入るからです。人生の扉のなんと狭いことか。そこへたどり着く道はなんと窮屈なことか。そしてその扉に出会える者のなんと少ないことか。（マタイ、第七章、十三、十四）

四、誰かが次の質問をした。「主よ、救われる者は少ないのでしょうか。」イエスは彼らに答えた。「狭き扉より入るように努力して下さい。明らかにしておきますが、多くがそこを通ろうとしますが、通ることができません。家族の父が入り扉を閉めた後、あなた達が外から扉をたたき、「主よ、開けて下さい。」といえども、彼はあなた達に答えるでしょう。「あなた達がどこの人であるか私は知りません。」あなた達は言います。「あなたと飲食を共にし、あなたは広場において私達を指導してくれました。」父は答えます。「あなた達がどこの人であるか知りません。非道を行う者は私から遠ざかりなさい。」そして、アブラハム、イザク、ヤコブやその他の預言者たちが神の国におり、あなた達は彼らから拒まれたのを見て、涙を流し、歯ざしりをするようになるだろう。東からも西からも、北からも南からも多くの者が神の国の宴会に参加する。そのとき、最後に参加した者が最初になり、最初に参加した者が最後になる。（ルカ、第十三章二十三—三十）

五、墮落の扉は広い。なぜなら、悪しき感情は多く、大抵の者は悪の道を進むからです。救いの扉は狭い。なぜなら、そこを通ろうとする者には自分自身の悪しき傾向に打ち勝ち、数少ない者が受け入れることのできる事柄に甘受するための、自分自身に対する多大な努力が強いられるからです。それが「多くの者は呼ばれるが、選ばれる者は少ない」という金言の補足です。地上における人類の状況とはそのようなものですが、それは地球が試練の世界であり、悪がより支配しているからです。それが変化した時には、善の道がより通われることとなります。故にそれらの言葉は、絶対的な意味によってではなく、相対的な意味において解釈されるべきです。もしその状態が人類の普通の状態であったなら、神はその創造物の大多数を墮落へ強いることとなりますが、全正義で善意である神を知る者にとって、それは受け入れられざる推測となります。しかし、もし全人類が地球だけに追いやられており、その魂に前世がなかったとしたら、現在、そして未来においてかくも悲しい運命が与えられた人類はいったいどんな罪を犯したのでしょうか。なぜ、あなた達の足下にはそれ程多くの妨げが置

かれていますでしょうか。もし、魂を待つ運命が死の直後永遠に定められるのだとしたら、なぜ、ほんの少しの者にしか通ることのできない狭い扉がなければならないのでしょうか。このように、単一の人生しかなかったとしたら、人類は常に神の正義に対して矛盾を感じるようになるでしょう。魂に前世が存在することや、世界の複数性によって地平線は広がります。信心の最も暗い部分に対する光となります。現在と未来は過去と共に一体化し、それによってのみキリストの教えの全英知、全真実、全深意を理解することができるようになります。

主よ、主よ、と言う者が皆天の国に入るわけではない

六、私に「主よ、主よ」と言う者すべてが天の国に入るわけではない。天にいる私の父である神の意志にしたがって行く者だけが入るのである。その日多くの者が私に言うであろう。「主よ、主よ、あなたの名において私たちは預言しませんでしたか。あなたの名において悪魔を追いやりませんでしたか。あなたの名において多くの奇跡を起こしませんでしたか。」そのとき私は大きな声で言う。

「非道を行う者は私から遠離りなさい。」（マタイ第七章、二十一—二十三）

七、故に、私の言葉を聞き、それを実践する者は岩の上に家を建てた慎重な者に喩えることができる。雨が降ったとき、川はあふれ、風が吹いた。家は岩の上に建てられていたので壊れることはなかった。しかし、私の言葉を聞き、それを実践しない者は、砂の上に家を建てた非常識な者と同じである。雨が降ると、川は溢れ、風が吹き家を打ち、家は壊れた。その倒壊は激しかった。（マタイ、第七章、二十四—二十七、ルカ、第六章、四十六—四十九）

八、これらの最も小さな戒めを破り、人にそれを破るように教える者は天の国において最後の者と考えられる。しかし、それを守り、教える者は天の国において偉大である。（マタイ、第五章—九）

九、イエスの使命を知る者は皆「主よ、主よ」と言います。しかし、その教訓に従わないのであれば、師、もしくは主と呼ぶことがどんな役に立つのでしょうか。外見的な献身の行動によって敬いながらも、同時に自尊心、エゴイズム、どん欲さ、その他の感情によってその教えを犠牲にする者はキリスト教徒でしょうか。毎日祈りながら過ごしながらも、少しも向上せず、その同胞に対して寛大になったり慈善深くなったりすることのない人達はイエスの使徒でしょうか。いいえ。それは祈りが口先にあっても心の中にないファリサイ派の人々が使徒ではないのと同じです。形式によって人間に対してそのことを印象づけることはできても、神に印象づけることはできません。「主よ、あなたの名において預言、すなわち教えを説きませんでしたか。あなたの名において悪魔を追い払いませんでしたか。あなたと飲食を共にしませんでしたか。」とイエスに言えども無意味となります。イエスは彼らに答えます。「あなた達が誰であるか知りません。あなた達は非道を行い、行動が口で言ったことに反し、あなたの隣人の悪口を言い、やもめ達を食物にし、姦淫を行いました。心から反感や憎悪をしたたらせ、私の名においてあなた達の兄弟から血を流させ、涙を乾かすかわりに流させる者は私から遠離りなさい。」神の国は優しく、謙虚で慈善深い者たちのためであるため、あなた達は涙を流し歯ぎしりをするようになります。言葉を多く唱えたり、ひざまづくことによって主の正義を曲げることを期待してはなりません。あなた達の唯一の道である愛と慈善の法の誠実な実践の道は開かれ、あなたはその前に恩恵をこうむることになります。イエスの言葉は真実であるがゆえに永遠です。天の生活への通行免状であるばかりか、地上の生活における平和、平安、安定の保証なのです。人類のつくる政治的、社会的、宗教的団体で、これらの言葉を支える団体が、岩の上に建てられた家のように安定しているのはこうした理由からです。人々はその中に幸せを感じることができるために、それらの言葉を守るようになります。しかし、それらの言葉に違反する団体は砂の上に建てられた家のように、革新の風と進歩の川によって取り壊されてしまうでしょう。多くを受けた者は多くを求められることになる

十、自分の主人の意志を知りながら、主人が望むとおりに行う準備の内者は厳しく罰せられる。しかし、その意志を知らずに、罰に値するような事を行った者は、より軽く罰せられる。多くを与えられた者には多くが求められ、より多くを託された者に対してはより大きな責任が問われる。（ルカ、第十二章、四十七、四十八）

十一、審判を下し、見えない者が見えるようになり、見える者が盲目になるようにこの世にやってきた。彼と共にいたファリサイ派の者たちはこれらの言葉を聞いて、彼に質問をした。「私たちもまた盲目なのですか。」イエスは答えた。「もしあなた達が盲目であったなら、罪はないでしょう。しかし、あなた達は見えると言い、そうであるが故にあなた達の罪は残ります。」（ヨハネ、第九章、三十九—四十一）

十二、これらの金言は霊たちの教えに特に当てはめられます。キリストの教えを知りながらそれを守らぬ者は誰であれ、責任が問われます。しかしながら、それを含む福音がキリスト教の宗派の中にしか広められていないばかりか、その宗派の中でさえもそれを読まない者がなんと多く、また読む者の中にもそれを理解できない者がなんと多いことでしょうか。結果的にイエスの言葉そのものは多くの人にとって無駄になっています。霊たちの教えは、これらの金言を別の形で再生し、発展させ、それに対する解説を加え、誰の手にも届くようになっており、特にそれが限られたものではありません。あらゆる人が、教養があろうがなかろうが、信仰があろうがなかろうが、キリスト教徒であろうがなかろうが、その金言を受け入れることができ、霊たちはあらゆる場所で通信をします。直接受けようが、誰かを介して受けようが、それを受ける者はその無知を言い訳にすることはできません。教育を受けなかったことのせいにするのも、そのたとえのあいまいさのせいにするのもできません。故に、これらの金言を自分の向上のために利用せず、それが心に響くことなく面白く興味深いものだと驚き、無益さ、自尊心、エゴイズム、物質的な物に対する執着を減らすことも、自分の隣人に対して善くなることもない者は、真実を知る手段をより多く持っているがために、より責任を問われることとなります。善い通信を受ける霊媒で、悪に固執する者は、自分自身に対する非難を多くの場合書いていることになるのですから、より注意をしなければなりません。なぜなら、自尊心に目をつぶらせることなしには、霊が本人に通信を向けていることを認識することはありません。しかし、書き留めたり、他人のために読んだりする教えを自分にために受け止めることなく、それを他人に当てはめることばかりに気を取られている人には、「隣人の目の中のおがくずを見て自分の目の中の杭が見えない」というイエスの言葉があてはまります。（第十章、九）「盲目であったなら罪もなかった」という文によってイエスは罪の責任とは、その人が持つ知識に応じていることを意味したかったのです。しかし、その国で最も博識であると考え、実際そうであったファリサイ派の人々は、無知な国民よりもより責任があると神の目には映ったのです。今日、多くを受けた者には多くが求められるとスピリティストに対して言うことができます。しかし、それをうまく利用した者には多くが与えられます。誠実なるスピリティストの払う最初の注意は、霊たちが与える忠告の中に、自分に対して述べられたことが何かないかと知ろうとすることです。スピリティズムは「呼ばれる者」の数を増やします。それがもたらす信心により「選ばれる者」の数も増やすこととなります。

霊たちからの指導—持つ者に与える

十三、彼に近づくと、使徒達は言った。「なぜたとえ話で彼らに伝えるのですか。」答えて言いました。「なぜなら、あなた達には天の国の謎が解き明かされましたが、彼らには解き明かされていないからである。」なぜなら、既に持つ者により多くを与えれば、その者は豊かになる。しかし、それを持たない者からは、持つものさえも奪われる。だから彼らにはたとえ話で伝える。なぜなら、見えても何も見えず、聞こえても何も理解解釈することも、理解することもない。彼らには次のように言ったイザヤの預言が当てはまる。「あなた達はその耳で聞くが何も理解せず、その目で見るが何も見えない。」（マタイ第十三章、十一—十四）

十四、聞くことに大いに注意を傾け、他人を測るときに用いる方法と同じ方法をあなた達自身に用い、さらに付け加えなさい。なぜなら、既に持つ者には与え、持たぬ者からは持つ者さえも奪われるからである。（マルコ第四章二十四—二十五）

十五、「持つ者に与え、持たぬ者からは奪う。」あなた達には逆説として映るこの偉大なる教えについて熟考して下さい。受けた者とは神の言葉を湯有する者のことを意味します。神の言葉にふさわ

しくなろうとしたためだけによってそれを受け、なぜなら、主はその慈悲深い愛により、善へ傾く努力を励ますからです。辛抱強く、勤勉なこうした努力は主の恩恵をひきつけ、それらは磁石のように進歩的に善いことである多くの恵みを自分に呼び、それはあなた達が頂上に勤労の後の休息の待ち受ける聖なる山に登ることができるように、あなた達を強化してくれます。「持たぬ者や少ししか持たぬ者から奪う」この言葉は比喩的に表現された対照的なものとして理解して下さい。神はその創造物からそれを行うようにし向けた善を奪うことはありません。盲目で耳の聞こえない人類よ。あなた達の知性と心を開いて下さい。霊によって見、魂によって聞き、あなた達の目に主の正義が光り輝くことを可能にしたあの言葉を、不徳で不公平な方法で解釈しないで下さい。少しを受けた者から奪うのは神ではありません。霊自身はその道楽と怠慢のために既に有する物、心に落ちたを小さな種を保持し、増やし、そこから多くを生ませることを知らないのです。父が与えたり、相続によって与えられた畑を耕さない者は、その畑の植物が寄生植物に覆われるのを見ることになります。そのときその者が準備しなかった収穫を奪うのは父でしょうか。管理が足りなかったのであれば、その畑で多くをもたらしただえらう種が死に、それらが何もたらさなかったことを責める相手はその父でしょうか。いいえ、違います。すべてを準備してくれた者や、譲り受けた物を批判するのではなく、自分の惨めさの真の作者を責め、悔やみ、勇気を持ち、生産的に労働に取りかかって下さい。恩知らずな土地を、意欲の努力によって開拓して下さい。後悔と希望の助けを借りて地面を耕し、その上に悪の中から仕分けて取り出した善の種を自信を持って蒔いて下さい。あなたの愛と慈善の水をまけば、愛と慈善の神は、すでに受けた者に対して与えることとなります。すると、その努力が成功の冠を受けるのを見、一粒の種が幾千もの種を生むのを見ることになるでしょう。労働者たちよ、元気を出して下さい。あなた達の鍬とくわを手にとりて下さい。あなた達の心を耕して下さい。毒草を引き抜き、主があなた達に託してくれた善き種を蒔けば、愛の露が慈善の果実をもたらすことになるでしょう。

(ある親しい霊ボルドー一八六二)

行いによりキリスト教徒であることを知る

十六、「主よ、主よ、と言う者が皆天の国に入るのではなく、天にいる私の父の意志に従う者だけが入るのです。」スピリティズムを悪魔の仕業と考え拒絶する者たちは師のこの言葉を聞いて下さい。耳を開いて下さい。聞くときが来たのです。従順な使徒となるのに主に決められた衣を持ってただけで充分なのでしょうか。キリストの使徒となるためには「私はキリスト教徒です」と言うだけで事足りるのでしょうか。真なるキリスト教徒を探せば、その行いによってそれを知ることができます。「良い木に悪い果実はなりませんし、悪い木には良い果実はなりません。」良い果実を結ばない木は切り倒され、火に投げられます。これらは師の言葉です。キリストの使徒達よ、これらの言葉を良く理解して下さい。強大で、その葉の生い茂る枝が世界の一部に木陰を与えながら、その周りに集まるすべての者すべてを宿らせるに至らないキリスト教の木はどんな実を結ばねばならないのでしょうか。命の木がもたらす果実とは命の果実、すなわち希望と信仰の果実です。キリスト教は、何世紀も前にそうしたように、これらの神聖なる美德を説き続けます。その果実を広げようと努力しますが、それを拾う者のなんと少ないことでしょうか。木は常に良いのですが、庭に働く者たちが悪いのです。自分達の考えに合わせて解釈しました。自分達の必要性に応じて裁断しました。切り抜き、縮め、軽視しました。役立たずと解釈されては、その枝は、もう実を結ばないのですから、悪い実を結ぶこともありません。のどを渇かした旅人がその枝のもとに立ち止まり、力と勇気を再び与えてくれる希望の果実を求めても、嵐を予告する乾いた枝葉しか見えません。命の木に命の果実を求めてもそれは無駄骨に終わります。乾いた葉が落ちてきます。男は手であまりに揺すったために、手を火傷してしまいました。故に、愛する者たちよ、耳と心を開いて下さい永遠の命を与えてくれるその命の木を育てて下さい。まだその木が神の果実を多く結ぶのを見ることがするために、それを植えた者は、あなた達がそれを愛を持って扱うように呼びかけます。キリストがその木をあなた達に預けた通りに、それを守って下さい。切断してはいけません。その木は宇宙に広くその木陰をもたらしたいのです。その枝葉を切ってはいけません。その有益な果実は豊富に落ち、旅の終わりまでたどり着こうとする飢えた旅人の食物となります。これらの果実を蓄え、貯蔵し、腐らせ、誰の役にもたたなくなってしまうようにしてはいけません。「多くの者が呼ばれるが選ばれる者は少ない。」物質的なパンを独占する者がいるのと同様に、人生のパンを独占する者がいます。その一人と数えられないように

して下さい。良い果実を結ぶ木は、すべての人にその果実を与えなければなりません。ゆえに飢えた者を探し求めに行ってください。彼らをその木の下へ連れて行き、その木がもたらす保護を彼らと分かち合ってください。「木いちごの木にぶどうはなりません。」兄弟よ、道に生えるいばらをあなた達に教える者たちから遠離り、人生の木の木陰にあなた達を導いてくれる者たちの後をついて行って下さい。至上の正義である神聖なる救世主は、既に伝え、その言葉は消えることはありません。「主よ、主よ、と言う者が皆天の国に入るものではありません。天にいる私の父の意志に従う者だけが入るのです。」神の恵みである主があなた達を祝福してくれますように。光の神があなた達に輝きを与えてくれますように。人生の木がその果実を沢山あなた達に与えてくれますように。信じ、祈ってください。

(シメオン、ボルドー一八六三)

信仰の力—宗教的な信仰揺るがぬ信仰の条件—枯れたいちじくの木の話—霊たちからの指導—信仰
慈善と希望の母、人間的な信仰と神聖なる信仰

信仰の力

一、彼が民衆に会いにやってくると、一人の男が近寄り、ひざまずいて言った。「主よ、私の子に慈悲を。彼は月盲病にかかりとても苦しんでおり、火の中や水の中に何度も落ちます。あなたの使徒達のところへ連れていきましたが、彼らには治すことができませんでした。」するとイエスは答えた。「おお、信仰のない墮落した者たちよ。私はあなた達とともにいつまでいればよいのですか。あなた達はいつまで苦しむのですか。」ここにその子を連れてきなさい。」するとイエスは悪霊を脅すと、悪霊は子供から出ていき、その瞬間子供は健康になった。使徒達は個別にイエスのもとへ行き、訪ねた。「どうして私たちはその悪霊を追い払うことができなかったのですか。」イエスは答えた。「あなた達の不信仰のせいです。誠に申し上げますが、からの粒ほどの信仰があれば、この山に対してあちらへ動けと言えど動き、なにも不可能なことはなくなります。」（マタイ、第十七章、四一—二十）

二、その意味の上では、自分自身の力に対する信念が物質的な事の実現を可能とさせるのであって、自分自身をも疑う者は実現できないというのは真実です。しかし、ここでは道徳的な意味においてのみこれらの言葉を解釈すべきです。信仰が動かす山とは、困難、抵抗、やる気のなさ、要約すれば、善い者に向かうときにさえも人間の間に見えるもののことです。日常の偏見、物質的な関心、エゴイズム、狂信の盲目、誇り高き感情とは、どれもが人類の進歩のために働く者の道を遮る山の数々です。強固な信仰は忍耐、エネルギー、小さな物に対しても、大きな物に対しても障害を乗り越える力を与えます。不安定な信仰は不確実さ、躊躇を生み、打ち勝たねばならない敵対者たちに利用されてしまいます。こうした信仰は打ち勝つ手段を求めることもありません。なぜなら打ち勝つことができることを信じないからです。

三、別の解釈において、信仰とはある事を実現できると信じる事、ある特定の目的を達成する確信と理解されます。それはある種の明晰さをもたらし、それによって思考の中にそこまでたどりつくための手段や達成しなければならない目標を見ることを可能にさせるが故に、それを持って歩む者は、いうならばまったく安心して歩むことができるのだと言うことができます。いずれの場合であれ、偉大な事柄の実現を可能にします。誠実で真実の信仰（信念）は常に平静です。知性と物事の理解に支えられ、望まれる目的に到達する確信があるために、待つことを知る忍耐をもたらします。ぐらついた信仰（信念）はそれ自身の弱点を感じています。関心がそれを刺激すると、怒りっぽくなり、暴力によって自分に足りない力を補おうとします。戦いにおける平静は常に力と自信の証です。反対に暴力は弱さと自分自身に対する不安を顕わしています。

四、信念とうぬぼれを混同してはいけません。真なる信仰（信念）は謙虚さを伴います。真の信仰（信念）を有する者は自分自身よりも神をより信頼しており、なぜなら自分自身は神意に従う単なる道具であり、神無しには何も存在しえないことを知っているからです。こうした理由によって善霊たちがその者を助けにやってきます。うぬぼれとは自尊心が信仰に上回っているからですが、自尊心は遅かれ早かれ彼らに課された失望や失敗によって罰せられます。

五、信仰（信念）の力は磁気的な行動において直接的で特別な形でその姿を示します。宇宙的動因であるフルイドに対して人間はその仲介として作用し、その性質を変化させ、言わば抑えようのない衝撃を与えます。そのようなことから、普通のフルイドのある大きな力に熱心な信仰（信念）が結びつき、善に向けた意志の力のみによって治療のような特別な現象を引き起こすこととなります。それらは昔は奇蹟として扱われましたが、自然の法則の結果に過ぎないのです。こうした理由により、イエスはその使徒達に言ったのです。「治すことができなかったのは、信仰がなかったからです。」

宗教的な信仰・揺るがぬ信仰の条件

六、宗教的な視点において、信仰とは様々な宗教を組織させたある特別な教義を信じることから成り立っています。どの宗教にもその信仰の対象というものがあります。この点において、信仰は理性的でも盲目的でもありえます。なにも検証することなく真実と偽りを確かめたりせずに、盲目的な信仰は受け入れ、一步步むたびに立証や理性と衝突します。それが過剰になると狂信を生みます。誤りの上に立っていると遅かれ早かれ崩壊します。真実に基づく信仰のみが未来を保証することができます。なぜなら啓蒙の進歩に対する恐れがまったくないからであり、闇の中で真実たるものは光の中でも真実でありつづけるためです。どの宗教も排他的な真実の主となろうとします。ある信仰のある部分を誰かに盲目的に信じるように教えることは、その信仰が理にかなっていることを示すことができないと告白するのと同じです。

七、一般に信仰というものは他人に示しようがないと言われますが、そのために信仰がないことには責任がないと言う多くの人の言い訳を生んでいます。確かに信仰を他人に示しようがありませんし、増しては強要することは不可能です。そうではありません。信仰は獲得するものであり、最も頑固な者でさえも、信仰を有することが許されていない者はいないのです。私たちが述べているのは霊的な真理の基本的なことについてであり、ある特定の信仰に関してどうこう言っているのではありません。信仰が人々を探し求めるのではないのです。信仰に出会うことができるように、人々が誠実に求めれば、それに出会えないことはないでしょう。ゆえに、「信じること以上によいものを私たちは望むことはないが、それができない。」と言うの心の底からではなく口先だけで言っているのだと言うことを確信し、そういう言葉を聞いたら耳をふさいで下さい。しかし、そうした者の周りには証が雨のように降り注いでいます。ではなぜ、それに気づくことができないのでしょうか。一部の人達には無視しています。他の人達には習慣を変えなければならなくなることに對する恐れがあります。大半の人達には自尊心があり、自分達より優れた存在を認めることを否定するのです。なぜなら、そうした存在の前に頭を下げなければならなくなるからです。ある人達にとって、信仰は生まれつきのものであるかのように見えます。火の粉程の信仰さえあればそれを発展させます。霊的な真理を受け入れることに対するこうした容易さは、前世における進歩の明らかな証拠です。他の人達にとってはその反対で、そうした真理が入り込みにくく、それは遅れた性格を同様に明らかに示す証拠です。最初の人達はすでに信じ、理解しました。再生した時には既に知ったことを直感的に持ち合わせて来ているのです。既に教育されています。後者の人々はすべてを学ばなければなりません。これから教育を受けなければなりません。しかしそれを行い、現世の内に終了できなければ、次の人生においてそれを行うことになるのです。信仰のない者の抵抗は、多くの場合その人自身よりも物事のその人に対する示され方からきているということに私たちは同意しなければなりません。信仰には基礎が必要であり、その基礎とは信じようとするものの知性です。そして、信じるためには見るだけでは事足りません。なによりも理解することが必要なのです。盲目的な信仰はもう今世紀のものではなく（注一）、そうであるがゆえに盲目的な信仰を教える教義が今日不信仰な人々の多くを生み出しているのです。なぜなら、そうした教義は強要し、人類の最も大切な特権である理性と自由意志の放棄を命ずるからです。不信仰な人々は主にこうした信仰に対して反抗するのであり、これに関して言えば、まったく信仰とは説明しえぬものだと言うことができるでしょう。証拠を認めないために、そうした教義は心の中に何か曖昧なものを残し、そこから疑いが生まれます。理性的な信仰は、理論と事実を支えられ、いかなる曖昧さも残すことはありません。つまり人間は確かだと思ふために信じるのであり、誰も理解することなしに確かさを感じ得ることはできません。理解しないために屈服しないのです。揺るがぬ信仰とは唯一、人類のいつの時代においても理性に対して真正面から向かい合うことのできるも信仰のことです。スピリティズムはこうした結果に導くことになり、意図的、もしくは制度的な反対がない限り、いつも不信仰な者に対して勝利を収めるのです。

枯れたいちじくの話

八、ベタニアから出たとき彼は腹を空かしていた。そして、遠くにいちじくの木を見ると、何かな

いか見に、そちらの方へ行った。しかし、近づくと、いちじくの季節でなかったために葉しかなかった。するとイエスはいちじくの木に言った。「誰もおまえから果実を食べることはないだろう。」使徒達はそれを聞いた。次の日、いちじくの木の下を通るとそれが根まで枯れているのを見た。イエスが言ったことを思い出すと、ペトロは言った。「師よ、あなたがののしいいちじくの木がどうなったか見て下さい。」イエスはその言葉を聞くと言った。(マルコ、第十一章、十二一十四、二十一二十三)

「神を信じなさい。誠に申し上げますが、そこをどき、海へ落ちよと、この山に心から躊躇無し、反対に言ったことはすべて起きると強く信じている者は、実際にそれがおきるのを見ることになるでしょう。」(マルコ第十一章、十二一十四、二十一二十三)

九、枯れたいちじくの木とは、みかけ上、善に対する関心があるように見えながらも、実際には善いものを生まない人達の象徴です。堅実さよりも輝きを持った説教者のように、その言葉の表面は虚飾に覆われ、それを聞く耳を喜ばすことはできても、詳細について吟味すると心に対して本質的な意味を何も持たないことがわかります。そして私たちは聞いた言葉の中から何を役立てることができるのだろうかと問い直すことになるのです。同時に、有益な存在となる手段を持ちながら、そうならない人々のことをも象徴しています。堅実な基礎を持たないあらゆる空想、無益な主義、教義にそれがあてはまります。ほとんどの場合、そこには真なる信仰である、生産性のある信仰、心の隅々をも動かす信仰、が不足しています。その信仰とは一言でいうなら、山を動かす信仰のことです。そうした信仰の欠けた人々とは葉に覆われながらも、果実に乏しい木のようなものです。だから、イエスはそうした木を不毛であると言いつ渡したのであり、いつかそれらが根まで乾くのを見ることになりま。つまり、教義も人類にとって何の善をももたらすことのないいかなる主義も、いかなる教義も、没落し、消滅すると言うことを指しています。自分の持つ手段を働かせないことにより無益と判断された人は皆、枯れたいちじくの木と同じように扱われるでしょう。

十、霊媒とは霊の通訳者です。霊たちにはその指導を伝えるための物質的な器官がありませんが霊媒はそれを補うのです。そのように、こうした目的のために使われる能力を持った霊媒が存在します。今日、社会が変革しようとしている時、彼らには非常に特別な使命があります。それは、同胞達に霊的な糧を供給する木となることです。糧が十分であるように、その数は増えていきます。あらゆる場所、あらゆる国、あらゆる社会階級の中に、裕福な者の間にも貧しい者たちの間にも、偉大なる者の間にも、小

多なる者たちの間にも現れ、そのためにどの場所にも不足することがなく、人類に対してすべての者が招かれていることを示されるのです。しかし、もし彼らが託されたその貴重な能力を神意のある目的からはずれた事に用い、不毛な事や、有害な事に使用するのであれば、あるいは、世俗的な関心事に仕えるために用いたり、熟した実の代わりに悪い実を結ばせ、それを他人の益のために用いることを拒んだり、自分達を向上しようとそこから自分達のために何かの利益も得ることもないのであれば、彼らは枯れたいちじくの木であるのです。神は彼らの中で不毛となった力を奪います。実を結ばせることを知らない種は、悪い霊たちの間につかまることになることを認めることになりま。

霊たちからの指導信仰—希望と慈善の母

十一、有益になるためには、信仰は活動的にならなければなりません。それを無感覚にしてしまっではいけません。神へ導くあらゆる美德の母は、それが生み出した子供達の成長を注意深く見守らなければなりません。希望と慈善は信仰から派生しますが、信仰とともに分離不可能な三位となります。主の約束の実現の希望を与えてくれるのは信仰ではありませんか。信仰を持たずに、何を期待することができるのでしょうか。愛を与えてくれるのは信仰ではありませんか。信仰を持たぬのであれば、あなたの価値やその愛は何でありましようか。神性のインスピレーションである信仰は、人間を善へ導くあらゆるあらゆる高尚な本能を目覚めさせます。信仰は更生の基礎です。必要なのは、この基礎が強く持続性を持つことです。と言うのも、もし、ほんの小さな疑問によってその基礎が動揺してしまうとしたら、その上に築いたものはどうなると考えまするか。したがって、不動の基礎の上にその建物を築いて下さい。あなた達の信仰は不信仰の者たちの詭弁やひやかしより強くなければなりま

せん。もっとも、人間の嘲笑に対抗できない信仰は、本当の信仰とは言えません。誠実な信仰は人の心をとらえ、影響力を持っています。信仰を持たなかった者や、信仰を持ちたくないとする者に訴えます。魂に響く、説得力のある言葉を持ち、一方で見せかけだけの信仰は、聞く者を無関心にし、冷たくしてしまう音の響く言葉を使います。あなたの信仰の模範によってそれを説き、人々に信仰を吹き込んで下さい。あなた達の事業の模範によってそれを説き、信仰の真価を示して下さい。あなたの不動の希望によってそれを説き、人生のあらゆる苦しみに立ち向かうことのできる状態に人間を強くしてくれる確信を示して下さい。故に美しく善き内容や純粹さ、合理性を持った信仰を抱いて下さい。盲目から生まれた目の不自由な娘である証明のない信仰を認めてはなりません。神を愛して下さい。しかし、なぜ愛するのかを知って愛して下さい。その約束を信じて下さい。しかし、なぜそれを信じるのか知って信じて下さい。私たちの忠告にしたがって下さい。しかし私たちが指摘する事柄やそれを成し遂げるための手段について納得した上でしたがって下さい。信じ、無気力になることなく待って下さい。奇蹟は信仰のなす業です。（ジョゼ、守護霊、ボルドー、一八六二）

人間的な信念と神性の信仰

十二、人間の信念とはその未来の運命に対して生来有する感覚です。自分自身の内に無限の能力を秘めているのだという認識であり、最初それは潜在的に存在しますが、意志の働きによって、それを発芽させ、育てることが必要です。今日まで、信念（信仰）とはその宗教的側面しか理解されませんでした。なぜなら、キリストが信念（信仰）を強力な梃子として示し、イエスは宗教の指導者として考えられていなかったからです。しかしながら、物質的な奇蹟を引き起こしたキリストは、こうした奇蹟によって、人間に信念（信仰）があれば、つまり、何かを望み、その望みが必ず満足されるという確信があれば、何ができるのかを示したのです。使徒達も、イエスの模範にしたがって、奇蹟を引き起こしませんでしたか。ただ、こうした奇蹟とは、人類が当時その原因をいまだに解明していなかった自然現象に過ぎません。今日、その大部分はスピリティズムと磁気の研究により解明され、まったく理解可能なものとなったではありませんか。人がその能力を地上の必要性を満たすために用いるか、天や未来に対する熱望に用いるかによって、人間的な信念か神性の信仰となります。天における自分の未来を信じる善なる人は、その存在を美しく高尚な行動によって満たしたいと望み、その信念の中から自分を待ちうける幸福の確信や必要な力を汲み上げ、そこで慈善、献身、自己放棄の奇蹟を引き起こします。つまり、信念（信仰）によって、打ち勝つことのできない悪は存在しないのです。磁気は行動に移した信念の力の最大の証のうちの一つです。治療や、こうした珍しい現象は、過去において奇蹟と呼ばれていましたが、それらは信念によって引き起こされるのです。繰り返します。人間的な信念と神性の信仰が存在します。もし生きる人々が自分が持ち合わせる力を良く理解し、それを自分の意志をその力を用いるために使おうと望めば、今日に至るまで奇蹟と考えられているような事柄を実現することができるでしょう。しかし、そうなることは人間の持つ能力の発達に過ぎません。（ある守護霊、パリ、一八六三）

（注一）アラン・カルデックはこれらの言葉を十九世紀に記しました。今日、人類の霊はさらに多くを求めます。盲目的な信仰は放棄されました。そうした信仰を強要する教会には不信仰が君臨しています。人類の多くは理想も無く、現世以外の人生への希望も持たずに、暴力によって世界を変えようとしています。経済的な戦いは風変わりな原因と結果の教義を生み出しました。経済的優勢を激しく切望した二度の世界大戦が地球を痛めつけました。人類のあらゆる希望はキリスト教の復興、キリストの教義の原則が示す、人生の永遠性や、思考、言葉、行動の責任が無限であることを教えるスピリティズムにかかっています。第三の啓示無しに、世界は大いに誤った暴力的、唯物的イデオロギーによって手の施しようもないほど失われていたことでしょう。（FEB一九四八）

（注二）原文では一つの言葉によって日本語の「信念」と「信仰」の二つの意味をで表現しています。（（仏）FOI（ポ）FE（英）FAITH）日本語の「信仰」には「神や仏を信じ、あがめたつとぶこと」とあるため、宗教的な意味においてしか用いられることはありません。本文では必ずしも「神仏」に対する信仰なしにも人間はその意志によって多くを実現することができることを説明しており、翻訳時には「信仰」と「信念」と使いわける必要がありました。

霊たちからの指導—最後の者が最初になる—スピリティストの使命—神の労働者たち

一、天の国とは、朝早く家を出ていき、自分のぶどう園で働く労働者たちを雇いに出かけたある家の主人と同じである。労働者一人に一日一デナリオを支払うことを取り決めると、ぶどう園へ行くように言った。九時ごろになって再び出ていくと、広場で何もせず会話をしている者たちを見つけた。彼らに言った。「あなた達も私のぶどう園へ行けば、それに見合う金を支払おう。」彼らは行った。十二時頃と三時頃再び出て行き、同じことをした。五時頃になり、再び出て行くと、まだ暇にしている者たちを見つけ、次のように言った。「なぜあなた達は働かずに一日中いるのか。」彼らは自分達を誰も雇ってくれなかったと言った。すると彼は言った。「あなた達も私のぶどう園へ行きなさい。」夕方になるとぶどう園の主人はその仕事を監督していた者に言った。「労働者たちを呼び、最後に来た者から始め最後に来た者にまで支払いなさい。」すると五時に来た者たちが近づくと、一人一デナリオを受け取った。最初に雇われた者たちの順番が来ると、より多くもらえるだろうと思いきりこんでいた。しかし、一人一デナリオしか受け取らなかった。受け取ると、主人に対して不満を言った。「最後に来た彼らは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日中暑さと重さに耐えた私たちと同じだけ支払うのか。」しかし、主人は答えて彼らに言った。「友よ、私はあなたに対してどんな損も与えていない。あなたの一日に対して一デナリオ支払うということ私と取り決めなかったか。自分に与えられたものを受け取り、行きなさい。最後に来た者に私はあなたと同じだけ与えたいのだ。」私は自分が望むように行ってはならないのか。私が良いことをねたむのか。」このように最後の者が最初になり、最初の者は最後になる。なぜなら、呼ばれる者は多いが、選ばれる者は少ないからである。(マタイ、第二十章、一一十六第十八章一、結婚披露の話参照)

霊たちからの指導—最後の者が最初になる

二、最後の労働者には報酬を受ける権利がありますが、その意欲がその者を雇う者のために保たれ、またその遅れは怠慢や意欲の結果であってはなりません。彼には報酬を受ける権利があります。なぜなら、夜明けから、その者を労働に呼んでくれる者が来るのを首を長くして待っていたからです。働き者でありながら、仕事が不足していたのです。しかし、もしその日のいつの時間かに労働を拒否していたとしたら。「私たちは辛抱強い。休息は私に心地よい。ぎりぎりになってその日の報酬のことを考えれば良い。私の知りもしなければ尊敬もしない雇い主にどうして迷惑をかける必要があるのか。より遅くなってからの方が良い。」と言っていたら。友よ、こう言った者には労働者の報酬はなく、怠惰な者の報酬しかなかったでしょう。では、働かずにいるばかりか、労働にあてられるべき時間をつまらない事に用い、神を冒瀆し、兄弟の血を流し、家族に動揺を与え、その者にたくされたものを破壊し、無実の者につけこみ、ついには、人類のあらゆる不名誉を増大させてしまった者たちには何を言えば良いでしょうか。また、次のような者はどうでしょうか。最後の時がやってきてから、「主よ、私の時間を無駄にしまいました。私を一日が終わるまで雇って下さい。そうすれば、ほんの少しではありますが、私は自分の任務を果たすことができるので、やる気のある労働者の報酬をお与え下さい。」いけません。それではいけません。主はこう言うでしょう。「今あなたに与える仕事はない。あなたは自分の時間を浪費しました。学んだことを忘れたのです。もうあなたは私のぶどう園では働けません。」故に、意欲のある時に学ぶことを再開し、私に申し出て下さい。そうすれば、あなたが一日のいつの時間にも働けるよう、私の広い農地をあなたに解放します。愛する善きスピリティスト達よ。あなた達達は皆最後の労働者です。「夜明けから働き始め、夜になってから終えるだろう。」と言う者は自尊心の強い者です。皆が呼ばれた時にやってきたのであり、ある者は少し早く、ある者は少し遅く、再生にたどりついたのであり、皆がそれに縛られています。しかし、主は何世紀もあなた達をぶどう園に呼びましたが、あなた達はそこへ行こうとはしなかったのです。あなた達には報酬の弁済をする時がやってきたのです。あなた達に残された時間を有効に使い、あなたの存在というものが、あなた達には長く感じられようとも、あなたに与えられた広大な永遠の時に比べれば、ほんのつかの間を過ぎないということを忘れてはなりません。(コンスタンティーノ、守護霊ボルドー、一八六三)

三、イエスは象徴の簡潔さを好みましたが、その力強い言葉の中で、最初にやってきた労働者たちとは預言者たち、つまり進歩の段階を残したモーゼやその他すべての開始者たちのことで、彼らは使徒達、殉教者たち、教会の創設者たち、賢者たち、哲学者たち、そして最後にはスピリティスト達によって目標とされ続けてきました。これらの最後に到着した者たちは救世主の登場の兆しがあったところから宣言され予言されておいら、同じ報酬を受けることになります。より大きな報酬とは何でしょうか。最後に到着した者たちは先駆者たちの知性的な働きを利用しますが、なぜなら、人類は人類から相続をしなければならず、それも人類の仕事というものが集合的なものであるからです。神は連帯性を祝福します。とは言え、その頃の人々の多くが今日再び生きているか、もしくは明日再び生きることになり、それによって昔開始した事業を終わらせることになるのです。一人の愛国者、一人の預言者、一人のキリストの使徒、一人のキリスト教信仰の宣教者、以上の者が彼らの間にいるのです。しかし彼らはより啓蒙され、より進歩しており、その仕事はもはや基礎の仕事ではなく、建造物の棟木を組む仕事に取り組んでいるのです。よって、仕事の価値に見合った報酬を受けることになりません。美しい再生の教義は霊的な従属関係を永遠のものとし、より明確にします。地上における任務の精算に呼ばれると、中断されながら、いつも再着手される仕事の継続性に霊は気づきます。彼は見て、自分より先に行った者たちの考えを大まかに拾ったことを感じます。そして経験によって成熟した上で、より前進するために再び挑戦を開始します。最初の労働者も最後の労働者も、神の深い正義に対して目をしっかり開いている者は皆、不平を言うことはありません。彼らは仕事を熱愛しているのです。これがこの話の真なる意味の一つであり、イエスが民衆に対して話すときに用いたすべての例え話と同様に、その中には未来の種と、あらゆる形式とあらゆる像による宇宙のすべてを調和する荘厳なる統合、現在のすべての者を過去と未来に結びつける連帯性、の啓示が含まれているのです。
(ヘンリー・ハイネパリー一八六三)

スピリティストの使命

四、古い世界を奪い去り、地上の非道を消滅させる嵐の音がまだ聞こえないのですか。ああ。主よ、至上の正義にその信仰を託したあなた達を祝福して下さい。上位からくる預言の声によって示された信仰の新しい使徒達よ、その使命を正しく達成したか、地上における試練に耐えたかにしたがっておこる霊の向上と、再生の教義を説きに行きなさい。もはや驚くことはありません。炎はあなた達の頭上まで届いています。スピリティズムの真なる使徒達よ。あなた達は神に選ばれたのです。神の言葉を説きに出かけて行きなさい。あなた達の習慣、労働、無用な従事を普及のために犠牲にすべき時がやってきました。宣教に出かけて行きなさい。高尚な霊たちがあなた達とともにあります。神の声は絶え間なく自己の放棄を呼びかけるので、あなた達は必ず神の声を聞きたがらない人々と話すことになるでしょう。どん欲な人々に無関心を、ふしだらな者たちには禁欲を、家内の君主や暴君達には温和さを説きに行きなさい。種を蒔く土地にあなた達の汗で水をまくことを仕事としなさい。一方で、福音の鋤やくわによって繰り返し耕されることがなければ、その種が育ち実を結ぶことはありません。行き、教えを説いて下さい。善き信心を持った者たちよ、無限の中にまき散らされた世界を前に、自分の劣性を認識する者たちよ。不正義と非道に対抗する運動に身を投じて下さい。行き、日を追う毎に広がる金の子牛の崇拜を禁じて下さい。行けば神が道を示してくれます。質素で無知な人々よ、あなた達の舌は動き、どんな雄弁家にも真似のできない話をする事ができるでしょう。行き、教えを説いて下さい。注意深い人々はあなた達の慰安、兄弟愛、希望、平和の言葉を幸せに受け止めるでしょう。あなたの行く道に待ち伏せる者のことを気にする必要はありません。狼の罠には狼しかはまることはなく、羊飼いはその羊達を生け贄の火から守ることを知っています。神の前に偉大なる人々よ、霊媒性の実際を目にすることにこだわらず受け入れる者たちよ、それを自分自身の手に入れることができなかつたとしても、トメよりも幸せな者たちよ、行きなさい。行けば神の霊が導いてくれます。だから、威厳のある一隊よ、信仰によって前進して下さい。朝霧が朝日の光に消えていくように、大きな不信心の集団もその前から消えていきます。信仰は山を動かす美德であることをイエスは言いました。しかし、最も高い山よりも重いのは、人類の心の中に横たわる不純さとそこから生まれるあらゆる悪癖なのです。ですから、勇気を満たして出発し、あなた達が異教徒の文明以前の時代についてとても不完全にしか知らないのと同じように、未来の世代には昔話としてのみ知られるべき

非道の山を取り除きに行きなさい。最も、地球上のあらゆる地点において、哲学的、道徳的反乱がまきおこるでしょう。神の光が二つの世界に溢れこぼれる時が近づいているのです。故に、神の言葉を運んで行きなさい。それらを軽んじる誇り高き者たちの元にも、証拠を強いる博学者たちの元にも、それらを受け入れる小さく、簡素な人々の元にも運んで行きなさい。なぜなら、特にそうした役割や地上の試練に殉じる者の中に信仰と熱意が存在しているからです。行きなさい。こうした者たちは神への感謝と賛美の歌とともに、あなた達が届ける聖なる慰安を受けとり、頭を下げ、地上が彼らに示向けた苦しみに対して感謝をするでしょう。決意と勇気によってあなた達の隊を武装しなさい。仕事に取りかかりなさい。鋤の準備は整っています。土地が待ち受けています。耕しにかかりなさい。神が託してくれた輝かしい使命のことを神に対して感謝をしに行きなさい。しかし、注意も必要です。スピリティズムに呼ばれた者たちの中でも、多くがその道を歪めてしまいました。故に、あなた達の道を修正し、真実にしたがってなさい。

質問—スピリティズムに呼ばれた者たちの中でも多くの者がその道を歪めたといいますが、正しい道にあるということを確認することのできる証とは何でしょうか。

答え—彼らの教え、実践する真なる慈善の原則によって知ることができます。彼らが慰安を届ける苦しむ人々の数によって知ることができます。その隣人愛、甘受の態度、個人的な関心事の放棄によって知ることができます。最後には、その原則の勝利によって知ることができます。なぜなら、神はその法の勝利を望んでいるからです。神の法に従う者が選ばれた者たちであり、神は彼らに勝利を与えます。しかし神はその法の真髄を偽り、自分の野望と虚栄心の満足の足がかりとして利用する者たちを消滅させます。(エラストゥス霊媒の守護霊、パリ、一八六三) (一) 主の労働者たち

五、人類の変革のために生じることが告知された事柄が成就する時が近づいています。そのとき、自己放棄と慈善以外の目的無しに主の農園で働いている者は幸運です。その労働の日々は期待していたよりも百倍にして支払われるでしょう。「主がやってきたときには仕事が終わっているように、共に働き、私たちの力を合わせましょう。」と自分の兄弟に伝える者は幸いです。彼らに主は、「よき使い達よ、私の元へ来なさい。あなた達は自分の妬みやあなた達の不和に対して静寂を強いることを知り、仕事に損害を与えませんでした。」というでしょう。しかし、自分達の意見の相違によって収穫の時期を遅らせてしまった者は不幸なものです。なぜなら、嵐が彼らの元へやってきて、竜巻の中に巻き込まれてしまうからです。「慈悲を、慈悲を」と叫ぶでしょう。しかし、主は「自分達の兄弟に対して慈悲がなく、彼らに手を差し伸べることを拒んだ者たちよ、弱き者たちを助ける代わりに圧したものたちよ、どうして慈悲を求めることができようか。」と言うでしょう。あなた達の報酬を既に地上の喜びや自分達の自尊心を満たす事の中に求めておきながら、どう慈悲を求めることができましょうか。すでに求めていた通りの報酬は受け取ったのです。あなた達に求められるものはなく、天における報酬は地上において報酬を求めなかった者たちのものなのです。神は今現在、その忠実な使徒達を調べにあたっており、献身が単に表面的な者たちには既に印をつけ、彼らが活力に満ちた使徒達の報酬を騙し取ることができないようにしています。自分達の仕事を前にして退くことのない者たちに、神はスピリティズムによる偉大なる更正の事業の中のより難しい役割を託すこととなります。次の言葉の通りになるのです。「天の国においては、最初の者たちが最後になり、最後の者たちが最初になる。」(真実の霊パリ、一八六二)

(注釈一) フランス語第三版においてこの通信は署名もなく不完全に記されている。原書第一版に合わせ、修正した。—FEB 編集一九四八

第二十一章 偽キリストや偽預言者が現れるであろう

果実によってその木を知る—預言者たちの使命—偽預言者たちの奇蹟—すべての霊を信じてはいけません—霊たちからの指導—偽預言者たち—真なる預言者の特徴—幽界の偽預言者たち—ジェレミアと偽預言者たち

果実によってその木を知る

一、悪い果実を結ぶ木は善くなく、よい果実を結ぶ木は悪くない。—このように果実によってその木を知ることができる。とげのある木からイチジクは採れないし、バラの木にぶどうの房がなることもない。—善人はその心の善き宝より善い物を取り出し、悪人はその心の悪しき宝より悪い物を取り出す。故に口は心を満たしていることを語る。（ルカ、第六章、四十三—四十五）

二、中身は貪欲な狼でありながら羊の毛を被りあなた達の元にやってくる偽預言者たちから身を守りなさい。その果実によってそれを知ることができるだろう。いばらの木からぶどうを採ったり、バラの木にいちじくがとれるだろうか。このように、善い木には善い果実が実り、悪い木には悪い果実が実る。善い木は悪い果実を生むことはなく、悪い木が善い果実を生むこともない。よい果実を生まない木は皆切り取られ、火に投じられる。ゆえに、そのころはその果実によって知ることができる。（マタイ第七章、十五—二十）

三、誰にも誘惑されないように気を付けよ。なぜなら多くの者が私の名において来てこう言うからである。「私はキリストである。」そして多くを誘惑するであろう。多くの人々を誘惑する多くの偽預言者が現れるであろう。なぜなら非道徳がはびこり、多くの慈善が冷めてしまうであろう。しかし最後まで守ることのできる者は救われる。故に、もし誰かがあなたに「キリストがここにいる」とか「キリストがあそこにいる」と言ったら絶対に信じてはならない。一方で偽キリストや偽預言者たちが現れ、大きな奇蹟や驚くべき事を行い、可能な場合には選ばれた者たちをも誘惑するであろう。（マタイ第二十四章、四、五、十一—十三、二十三、二十四、マルコ第八章、五、六、二十一、二十二）

預言者たちの使命

四、一般的に預言者には未来を予見する才能があるとするために、預言と予言は同意語のようになっています。福音上の意味において、預言者という言葉にはより広い意味を持っています。人類を指導する使命を持ち、不可視の事柄や霊的生活の秘密を人類に示す神より送られたすべての者を指します。故に、未来を予言する事無くとも預言者であり得ます。それらがイエスの時代のユダヤ人達の考え方であったのです。その事より、イエスを最高司祭カイファスの前へ連れて行った時、書記官や長老たちは集まり、イエスの頬に唾を吐き付けると、殴ったり打ったりしながら、「キリストよ、私たちに預言し、おまえを打ったのは誰か言え」と言ったのです。しかしながら、直感的、もしくは神よりの啓示として未来を予知し、人類に対する知らせを伝える預言者が存在していました。そして予言された出来事が実際に起きたことから、未来を予知することが預言者に属する能力の一つとして考えられていたのです。

偽預言者たちの奇蹟

五、「偽キリストや偽預言者が現れ、大きな奇蹟や、驚くべきことを引き起こし、選ばれた者さえも誘惑するであろう。」これらの言葉は私たちに奇蹟という言葉の真の意味を教えてくれています。宗教学上においては、奇蹟もしくは奇跡とは自然の法に反した特別な現象を意味します。それらすべてを神だけが行える業とするために、神が望めば、それを取り消すことができるということは疑いようありません。しかし、神が劣等で非道な者たちに、神と等しい力を与えるはずはなく、増しては神が成したことをやりかえる権利を与えるはずはないと私たちの単純な良識は訴えます。こうし

た原則をイエスが神聖化したはずはありません。もし、これらの言葉も持つ意味の通り、悪の霊が選ばれた者さえも騙すような奇蹟を引き起こす力を有し、神が行うこと行えるのであれば、奇蹟や奇跡が神から送られてきたもの達だけの特権ではなくなり、聖人の奇蹟と悪魔の奇蹟を区別するものがないことになってしまいます。よって、これらの言葉のより合理的意味を見出すことが必要になります。一般的な無知な人にとって、原因の知られざる現象は皆超自然、すばらしく、奇跡的な現象となってしまう。その原因が知られば、その現象が、それがどんなに特異なものに見えても、自然の法に適合した現象に過ぎないと認識するようになります。こうして、超自然の事実の輪は科学の輪の広がりとともに狭まっていきます。どんな時代にも、自らのためにその野心、関心と支配欲によって、超人的な力の持ち主という威力を得ようとしたり、自分を神の使いであると思わせようと、所有するある種の知識を悪用した人々が存在しました。こうした人々が偽キリストであり、偽預言者なのです。光が広がりには彼らは信用を打ち消し、結果的にそうした者たちの数は人類が啓蒙されるにしたがって減少していきます。故に、人々が奇蹟と考えるような事を行うことは、神からの使いである印とはならず、誰でもその入手に手の届くある知識や特別な肉体的能力の結果であり、それにふさわしくない者でも、それにふさわしい者と同様にその所有は禁止されていないのです。真なる預言者は最も真剣な道徳的特徴によってのみ知ることができます。

すべての霊を信じてはなりません

六、愛する者たちよ、あらゆる霊を信じるのではなく、その霊が神の霊か試しなさい。なぜなら、世には多くの偽預言者が存在するからである。（ヨハネの手紙一、第四章）

七、霊の現象は、ある人達が好んで言うように偽キリストや偽預言者を助長するどころか、彼らに致命的な一撃を与えます。スピリティズムに奇蹟や奇跡を求めてはなりません。なぜならそれらが引き起こされることはないことを決定的に宣言しているからです。物理学、化学、天文学や地学が物質世界の法を解き明かすのと同様に、スピリティズムは科学にとっての自然の法のように、その他の知られざる法、霊の世界と物質界の関係を支配する法を解き明かします。今日に至るまで理解されていない現象の一種の法則の解説を提供し、驚異の支配下に依然として存在し続ける事柄を破壊します。故に、現象を自分自身の利益のために悪用したいと感じ、自分を神より送られた救世主に仕立てようとするのであれば、他人の信用を長い間乱用することはできず、じきに仮面を引き剥がされることになるでしょう。もっとも、既に述べたように、そうした現象とはそれだけでは何を証明することはありません。使命とは道徳的な影響によって証明されるのであり、それは誰にでも引き起こせることではありません。それがスピリティズムの科学の発展の結果の一つです。ある現象の原因を調べることによって、多くの神秘のベールをめくることになります。光よりも闇を好む者だけがスピリティズムをうち消そうとします。しかし、真実とは太陽のようなものです。最も濃い霧をも消失させるのです。スピリティズムは偽キリストや偽預言者よりもずっと危険な分類、すなわち生きた人々の間ではなく、肉体を失った死者の間に存在する分類について明らかにしています。それは人を騙す霊、偽善的な霊、高慢な霊、知ったかぶりをする霊たちの分類であり、彼らは地上を後にして幽界へ行くと尊敬される名前を名乗り、ありとあらゆる馬鹿げた考えをより容易に受け入れさせようと仮面をかぶります。霊媒の関係について知られる以前は、直感を与えたり、聴覚に訴えたり話をさせる無意識の霊媒性といったより目立たぬ方法を通じて行動していました。様々な時代において、そして特に最近になって、キリスト、マリア、その母、もしくは神とまで自分を称する者の数は相当なものです。聖ヨハネは人類が彼らに対して注意するように、次のように言っています。「私の愛する者たちよ、すべての霊を信じてはなりません。そうではなく、その霊が神の元からくるのか試しなさい。なぜなら、多くの偽預言者たちがこの世に現れたからです。」スピリティズムは善霊であることを知る特徴である、常に道徳的で決して物質的ではない特徴を示すことによって（一）、私たちが霊たちを試す手段を与えてくれています。それは悪い霊と善い霊を区別する方法で、特に次のイエスの言葉をあてはめることができます。「果実によって木の質を知る。良い木は悪い果実を結ばないし、悪い木は良い果実を結ぶことはできない。」ある木をそこになる果実の質によって判断するのと同様に、霊はその成す行いの質によって判断することができるのです。

霊たちからの指導—偽預言者

八、もしあなた達に「キリストがここにいる。」と言っても行ってはいけません。反対に注意して下さい。なぜなら偽預言者が大勢いるからです。。いちじくの木の花の葉が白くなり始めるのが見えないのですか。多くの芽が花の咲く季節を待ちかまえているのが見えないのですか。また、キリストは「木を果実によって知る」と言いませんでしたか。故に果実が苦いのであれば、その木は悪い木であることがわかるでしょう。しかし、もしその果実が甘く、健康的であれば、「悪い泉から純粋なものが出るはずがない。」と言うでしょう。兄弟達よ、そのように判断し、成された行いを試さなければいけないのです。神からの力を授かったと言う者が高尚な性格を持った使命の印を示すのであれば、つまり、愛、慈善、寛大さ、心をなごませる善意と言った永遠のキリストの美德を最も高いレベルにおいて有しているのであれば、あるいは、言葉に支えられそれに伴った行動をとっているのであれば、「彼らは真に神より送られてきた」と言うことができます。しかし、蜜のように流れる言葉や、公の広場で祈る長い着物をまとったファリサイ派の人々や書記官達は信じてはいけません。真実を独占しようとする者たちを信じてはいけません。違います。キリストはそうした者たちの間には居らず、その聖なる教義を広め、人々を更正させるためにキリスト送る者はなによりもまず模範にしたがって柔和で謙虚な心を持っています。自ら示す模範と豊富に述べる忠告によって人類を救おうと、不信仰の元へ走り、歪曲した道のあちらこちらを駆け回る者は、本質的に謙虚で慎み深いのです。ほんの少しの自尊心でも示すものからは、さわる物すべてを害す伝染性のあるらい病から逃げる時のように逃げて下さい。誰もがその額や、特にその行動に、その偉大さ、あるいはその不完全性の印を持ち合わせていることを覚えておいて下さい。私の愛する子供達よ、故に行きなさい。背を向けることなく、隠し事なしに、選択した恵みの道を歩んで下さい。いつも、恐れることなく行きなさい。永遠の目的への歩みを止めようとするあらゆるものから、注意深く遠離って下さい。旅行者たちよ、永遠の法を啓示し、謎に対するあなた達の魂の抱くあらゆる願望を満たしてくれるこの優しい教義に対してあなた達の心を開くのであれば、試練の痛みと闇の間にいる時間はあと少しだけとなります。あなた達の夢の中で過ぎていくのを見ることができ、短命なためにあなた達の霊だけを魅了しあなた達の心には何も訴えることのなかった、うっすらとした妖精達にもう身を預けても良いのです。愛する者たちよ、もはや死は消滅し、あなた達の知る光を放つ天使、新しい出会いと再結合の天使にその場所を譲ったのです。さて、創造主がその創造物に託した使命を正しく遂行したあなた達は、その正義に対して何を恐れる必要もなく、なぜなら、彼は慈悲を嘆願する道を失った子供達をいつも赦してくれる父であるからです。故に、止めることなくして進み続けなさい。あなた達の標語が進歩、つまり、あらゆる物における継続的な進歩となり、最後にはあなた達の先を行った者すべてが待っていてくれる、幸福な旅の終結を迎えることができますように。(ルイス、ボルドー—八六一)

真なる預言者の特徴

九、「偽預言者は信じないこと」この忠告はどの時代においても有益ですが、現在のような人類に変化がおこる変遷の時代においては特に有益で、なぜなら、そのような時代には野心に満ちた策略家達の大群が、変革者や救世主と自称するからです。そしてこうしたペテン師達からは身を守らなければならず、正直な者には皆彼らの化けの皮を剥がす義務が生まれるのです。あなた達は間違いなくペテン師達をどうすれば知ることができるか尋ねるでしょう。それを示したものがここにあります。唯一自分の軍隊を指揮することのできる有能な将校だけがそうすることができるのです。あなた達は神が人間より慎重さに劣っていると考えるのですか。神はその任務を遂行する能力があると知っている者にしか重要な使命を託すことはないのだということを確信してください。なぜなら、偉大なる任務というのは重たい衣装のようなもので、それを身につける力に乏しい人間は押しつぶしてしまうことになるからです。あらゆることにおいて、師はその使徒よりも多くを知る必要があります。人類を知性的、道徳的に進歩させるには、知性と道徳性において優れた人が必要なのです。それ故に、こうした使命のためには過去の人生においてその試練を果たして来ている既に進歩した霊がいつも選ばれますが、と言うのも、もし行動する環境の中においてより優れていなかったら、その行動が周りに及ぼす結果は皆無となってしまいますからです。これらのことから、神より送られた真の使節というのは、その優位性、その美德、その偉大さ、その成す行いの持つ道徳的影響力、その託されているという使命

の内容によってそれを証明しなければならないと結論付けなければなりません。次の事も導き出して下さい。もし、その性格、その美德、その知性において、その持つ役割や名乗る人物よりも劣っているのであれば、それは自分で選んだモデルをまねることさえも知らぬレベルの低いペテン師に過ぎないということです。もう一つの留意点があります。神より送られた真なる使節は、ほとんどの場合自分がそうであることさえ知りません。彼らはその有する才能の力によって呼ばれたその使命を遂行し、嫌々ながらも彼らを導き、元気付ける見えざる力に助けられますが、予め考えられた計画は存在しません。一言で言えば次の通りです。真なる預言者たちはその行いによってそうであることを示し、そうであることを推測することができます。一方で、偽預言者たちは自らが神より送られた者だと言うことを示そうとします。前者は慎み深く謙虚です。後者は自尊心が強く、自信過剰で、偽善者たちがそうであるように高慢な態度で話し、自分を信じてもらえないことを常に恐れているようです。こうしたくわせ者たちの幾人かは、キリストの使徒となりすまそうとしたり、キリスト自身になりすまそうとしたりしましたが、人類の中には恥ずかしいことにも、そうした醜行を信じる、すっかり信じた人がいました。しかし、実に単純な思考を巡らせば、盲目者たちの目を開くには充分です。それは、もしキリストが地球上に再生したとすれば、その力とその美德によってそのことは明らかとなるはずだということです。もっとも、キリストが退化したという馬鹿げた考えを認めるのであれば話は変わりますが。同様に、もし神からそれに帰属するものを一つでも取り去ったとすれば、もはや神は存在しなくなるように、キリストの美德のうち、たった一つでも取り去るのであれば、それはもはやキリストではなくなります。「キリストとしてのあらゆる美德を有しているだろうか。」そこが問われるところです。彼らを観察し、その考えや行動を審議すれば、何よりもまず、彼らにキリストを特徴づける質である謙虚さ、慈善が欠けていることが分かり、キリストの有していなかった質である愚かさや自尊心といったものに彼らが支配されていることがわかります。現在様々な国において、キリストになりすました者、エリアになりすました者、聖ヨハネや聖ペトロになりすました者が多く存在していますが、誰もが本当であることが絶対に不可能であることを十分に承知し、彼らが単に他人の信心を利用する、彼らに耳を傾ける者に頼って生きることが都合が良いと考えている者たちにすぎないのだということを確認して下さい。故に、現在のような革新の時代には特に、偽預言者たちを疑いなさい。なぜなら多くのペテン師達が、自分が神から送られたと言うからです。彼らは地上においてその虚栄心を満足させようとしているのです。しかし、恐ろしい正義が彼らを待ち受けていることをあなた達は確信して下さい。(エラストゥス、パリー八六二)

幽界における偽預言者たち

十、偽預言者たちは人間の間ばかりに存在するものではありません。より多くの数の偽預言者たちが自尊心の強い霊たちの間におり、愛と慈善に見せかけながら不和の種を蒔き、霊媒に受け入れられた後、人類にばかげた主義を植え付けようとし、人類の解放の一大事業を遅らせます。そして騙そうとする相手をよりうまく魅了し、その理論により重要性を持たせるため、ためらいもなく人類が大いに敬意を払ってのみ呼ぶ名前を名乗ります。彼らこそがグループの間に敵意の原因を広め、それらが孤立し、お互いに警戒し合うようになるように強いるのです。そのことだけでも正体を暴くには充分です。なぜなら、そのように行動することによって、彼らこそが最初にその意図をはっきりと打ち消すことになるからです。すなわち、そのような粗雑なペテンに騙される人々は盲目なのです。しかし、それ以外にもその正体を確認する方法は多くあります。彼らが属すると言う分類の霊たちはあまり善くないばかりでなく、優れて理にかなっているわけでもありません。では、どうすればよいのでしょうか。彼らを道理と良識のふるいにかけて、何が残るか見ればよいのです。故に、人類の悪に対する薬や人類の変革を達成する方法として、幻想的で実現不可能なことや、馬鹿げた下らない方法を霊が指示した時には、いつも私の言うようにして下さい。一方で、個々が必ずしも真実を備えていなくとも、真実はいつも大衆の良識に評価され、そのことが新たな基準となるのだということを知って下さい。もし二つの原理が矛盾するのであれば、二つのうちのどちらが反響や共感が多いかを確かめることによって両方の固有の価値の量を知ることができるでしょう。それ以外にも、信者が累進的に減少する教義の方が信者が継続的に増加する教義よりも信憑性が高いと考えるのは不合理だということはもちろんです。神は真理がすべてに到達することを望むために、真理を狭い輪の中に託すことはありません。真理を様々な違った地点に出現させ、それによってあらゆる場所において闇のとなりに光を存在

させるのです。孤立と離別を説く独占的な助言者を装う霊たちを、彼らに従うことなく拒否して下さい。彼らはほとんどが共栄心の強いつまらぬ霊たちで、弱く信心深い人々を騙し、大袈裟な賛美を浪費させ、彼らを魅了し、支配しようとします。彼らは普通、生きている間は公であれ家庭内であれ独裁君主となる権力に飢えており、死後も压制する犠牲者を求めているのです。一般に、神秘で奇異な性格を持った通信や、贅沢な儀式を命じる通信は信じてはいけません。こうした場合には、疑う動機が必ず存在します。また同様に、人類に対して真理が啓示される時には、真剣な霊媒のいる真剣な団体すべてに、言うならば、たちどころに通信され、他の団体を排除してこの団体とあの団体だけに通信すると言うようなことはないということを確認して下さい。憑依があれば、どんな霊媒も完全ではありません。ある霊媒が特定の霊の通信しか受けないのであれば、その霊がどんなに高いレベルを装っても、それは明らかに憑依を示しています。よって、得る通信を受けることを特権だと考え、一方で迷信的な行いに従う霊媒や団体はすべて疑いようもなく典型的な憑依に支配されており、特に支配する霊が、生者も死者もが敬い尊ぶべき名によって着飾り、なんとしてでも衰えを許すまいとするのであればなおさらです。すべての詳細と霊からの通信を理性と論理のふりにかければ、その過ちや不合理性を拒否するのは容易だということは確実です。一人の霊媒が魅了され、その団体を錯覚させていることもあります。しかし、他の団体が行う厳格な審査、経験によって得た科学、団体の責任者の高い道徳的権威、主要な霊媒が得る通信、理性と最善の霊たちの認証の印を持てば、悪意をもった騙す霊の集団から放たれるこれらのうそつきで悪賢い内容に直ちに審判を下すでしょう。

(エラストゥス聖パウロの使徒、パリ、一八六二) (序章第二章霊の教えの世界的審査「霊媒の書」第二部第二十三章憑依について)

エレミアと偽預言者たち

十一、万軍の主はこういった。『あなた達に預言をし、あなた達を騙す預言者たちの声を聞いてはならぬ。彼らは自分達の心に描くことを公にするが、主から学んだことは言わない。彼らは私のことを侮る者たちに対してこう言う。「あなた達に平和が望むと主が言った。」と。そして心の墮落してしまった者たちにはこう言う。「あなた達にはどんな悪いこともおきないであろう。」と。しかし彼らのうちの誰が神の忠言を聞いたであろうか。彼らの内の誰が神を見て、その言うことを聞いたであろうか。「私はこのような預言者は送っていない。彼らは自ら始めたのだ。私は彼らにまったく話していない。彼らは自分の頭の中にあることを言っているのだ。」私はこうした預言者たちが私の名を名乗り「夢を見た。夢を見た。」と言い、偽りの預言をしたと聞いた。その預言が自分達の心の誘惑に他ならないというそを預言する者たちの心の中に、いったいつまでこうした空想が残るのであるか。だから、もしこうした人々が、預言者であれ、聖職者であっても、あなた達に「主の託宣は何ですか」と問うのであればこう答えよ。「主は、あなた達こそが重荷であり、私のもとより遠くへ迫いやると言うであろう。」(エレミア第二十三章十六―十八、二十一、二十五、二十六、三十三)

友よ、あなた達に伝えたいことはこの預言者エレミヤの一節のことです。神はその口から言いました。「彼ら話をさせるのは彼らの心の空想である。」これらの言葉は、既に当時、ペテン師や熱狂者たちが預言の力を乱用し、悪用していたことを明らかに示しています。結果的に、ほぼ盲目的とも言える人々の単純な信心を食い物にし、金、楽しく快いもののために預言をしました。ユダヤの国にはこうした一種の詐欺が一般的であったことから、当時のかわいそうな大衆は、その無知のために善と悪の判断をする可能性をもっておらず、ほとんどいつも詐欺師や狂信者にほかならぬ預言者になりました者たちに騙され、ばかにされていたということを理解するのは容易です。「私はこのような預言者は送っていない。彼らは自ら始めたのだ。私は彼らに言っていないが、彼らは預言をした。」という言葉以上に重要な言葉はありません。更に、「私はこうした預言者たちが私の名を名乗り「夢を見た。夢を見た。」と預言しているのを聞いた。」と書かれています。ここには、偽預言者たちが詐欺の対象とする人々の信用を食い物にしたときの手段が示されています。いつも信心深かった大衆は、その夢や空想の真実性を確かめようとは思いませんでした。それらを自然であると考え、いつも預言者たちに話してもらおうと招いたのでした。預言者の言葉を聞いた後には、使徒ヨハネの賢明な次の忠告を聞いて下さい。「すべての霊を信じてはいけぬ。その霊が神から来る霊なのか試しなさい。」なぜなら、目に見えぬ者たちの間にも、機会があれば人を騙して喜んでいる者たちがいるからです。騙された者たちとは、おわかりのように十分な用心のない霊媒のことです。疑いもなく、そこ

には多くの者、特にスピリティズムに接して間もない者が不幸なことにもつまづいてしまう最大の障害が存在します。そのことは大いに慎重になることのみがうち勝てるということをあなたたちに証明しています。故に、なによりもまず、善い霊と悪い霊を区別することを学び、あなた達自信が偽預言者とならにようにして下さい。

ルオスー守護霊（カールルシュー八六一）

（注一） 霊の区別の仕方参照のこと。「霊媒の書」第二部、二十四章及びその続き

第二十二章 神が結び合わせたものを引き離してはなりません

解消してはならない結婚

一、パリサイ人たちがイエスのもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻と離別することは律法にかなっているのでしょうか。」イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはや二人ではなく、一人なのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」彼らはイエスに言った。「では、モーゼはなぜ、離別状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」イエスは彼らに言われた。「モーゼは、あなた達の心が冷たすぎるので、その妻を離別することをあなた達に許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。まことに、あなたがたに告げます。妻が姦淫を犯したわけでもないのに、その妻と別離し、別の女を妻にする者は、姦淫を犯すことになるのです。また、夫に見放された妻をめとる者も姦淫を犯すことになるのです。（マタイ第十九章一三一九）

二、神からくるもの以外に、普遍なものは存在しません。人間によってつくられたものはすべて、変化する運命にあります。自然の法は、いつの時代も、どの国においても同じです。しかし、人間のつくる法は、時代、場所、知性的発展によって変化します。結婚というなかで、神はその法により夫婦の性が結ばれることを定められており、その結果、死すべき運命にある人間は新たな生命を与えられることとなります。しかし、結婚を規定する条件とはあまりにも人間的に決められており、それは国によって様々です。キリスト教の中でも、まったく同じように取り決める国は二つとなく、また時の流れとともに変更を強いられなかったものは一つもないのです。民法においては、ある国である時代合法的とされたことが、他の国において別の時代には不義となり得ます。なぜならば、民法とは家族的な関心事を調整することを目的としているからであり、そのような関心事とはその地域の習慣や必要性によって違って来るからです。ある国においては宗教的な結婚だけが法的に認められるとしても、他の国では民法上の結婚だけで十分だということがありますが、それはそのことの一つの例です。

三、しかし、夫婦の性の結びつきを定めるものには、どの国にも同じように人間の法が存在するのと同時に、他のすべての神の法と同じように、普遍の道徳的な神聖なる法、すなわち、愛の法が存在します。神は、肉体の上だけではなく、魂の上でも、人間同士が結びつくことを望んでいるのです。それにより夫婦がお互いの愛をその子供に伝え、一人ではなく二人でその子供を愛し、育て、子供の進歩を助けることができるよう望んでいるのです。普通の結婚において、この愛の法は考慮に入れているのでしょうか。いいえ、二人がお互いを引き合う気持ちは少しも考慮に入れられてはいません。だから、この気持ちは多くの場合途絶えてしまうのです。その様な結婚で求められているものは心の満足ではなく、自尊心、虚栄心、欲望の満足、つまり、物質的な関心事の満足です。こうした関心に基いてすべてがうまくいくと、結婚とは都合のよいものだと考えられるのです。夫婦の両方が経済的にうまく釣り合っていると、その夫婦は同じ様に調和し合っており、幸せに違いないと言われるのです。しかしどのような民法の規定も、またそのもとに約束されたいかなる決め事も、愛の法が二人の結びつきをつくっているのだから、それに勝ることはできません。そのため、しばしば、強制的に結ばれたものは自然と離れていきます。祭壇の前で単なる決まり文句のように宣誓の言葉を唱えたのであれば、その言葉は偽証の言葉となってしまいます。不幸な夫婦の結びつきとはそのようなものであり、罪深いものとなるのです。結婚する条件として、神の目に認められる唯一の法である愛の法を忘れることがなければ、防ぐ事の出来た二重の不幸です。神が「二人はたった一つの肉体に結ばれる」と言い、イエスが「神が結び合わせたものを引き離してはなりません」と注意したことは、普遍の神の法に基いて理解されるべきものであり、人間によってつくられた不安定な法の基いて理解すべきことではありません。

四、では民法は不必要で、自然の結婚に戻らねばならないのでしょうか。もちろん違います。民法

は、その文明の必要性に応じて、家族的な関心事や社会的な関係を調整するために存在するのです。だから民法は役に立つ、不可欠なものである一方で、変化しやすいものなのです。民法は社会の変化を見越したものでなければなりません。なぜなら、人間は野蛮人のように生きていくわけにはいかなからです。しかし、その民法が神の法に沿ったものとなることを妨げるものはなにもありません。神の法に従うための障害となるのは、民法の中にはなく、人々の持つ社会的偏見の中に存在します。その偏見とは、とても根強いものですが、この世の高尚な人々はもはや偏見に支配されていません。道徳的に進歩していけば、偏見も消滅して行き、人間は物質的な関心だけによって結ばれることから生じる無数の悪、過ち、罪に対し目を開くことになるのです。そしていつかは、共に生きることができない二人の人間を結び止めておくことと、各々が自由を取り戻すのと、どちらがより道徳的、人間的、慈善的だろうか、と問い直すことになるのです。取り消すことのできない拘束が、不正な結婚を増やさないように。

離婚

五、離婚とは人間の法律によって決められたもので、その目的は既に実際に離別しているものを法律上離別させることにあります。それは、神の法に違反することではありません。なぜなら、離婚とは人間の手でつくられた関係を正すもので、神の法が考慮されていなかった場合にのみ適用されるものだからです。もし離婚が神の法に反するものだとするならば、権威と宗教の名において多くの離婚を決定してきた教会の指導者たちのことを、教会自体が背任者であると判断しなければならなくなってしまいます。一方、そうした離婚も愛の法に則るのではなく、物質的な関心だけによって決定されていたのであれば、それは二重の裏切りをしたことになってしまいます。イエスさえも結婚が絶対に引き離してはならないものとは言ってはいません。「モーゼは、あなた達の心があまりに冷たいので、あなた達の妻と離別することを許しませんでしたか。」とイエス言いませんでしたか。結婚の唯一のきっかけとなる相互の愛がないのであれば、別離することも必要となるということが、モーゼの時代から続いているのだということがこのことから分かります。しかし、イエスは「はじめからそうであったのではない」とつけ加えています。つまり、人類はその起源においては、エゴイズム、自尊心によって墮落しておらず、神の法にしたがって生きており、その頃の夫婦の関係とは虚栄心と野心によってではなく、お互いの好感によって結ばれており、別離の原因となるものは存在しなかったのです。イエスは更に離別することを正当であると考えられる場合を的確に示しています。それは姦淫が行われた場合です。しかし、姦淫は夫婦相互の誠実なる愛が支配する関係が成り立っているところには存在しません。姦淫し、夫に見放された妻と結婚することを禁止しています。しかし、それを理解するには、その時代の習慣と人々の特徴を考慮に入れなければなりません。モーゼの法は姦淫した者を死刑に処していた習慣を捨て去ろうと規定されたのです。ある野蛮な習慣を廃止するには、それに代わる罰則をつくる必要がありましたが、モーゼは二度目の結婚を禁止することによってうける不名誉をその罰則としたのです。すべての民法が、時の流れとともに変遷していく運命にあるように、一つの法が別の法に置き換えられて行く必要があったのです。

第二十三章 聞き慣れない教え

父母を憎む—父、母、子を見捨てる—死者を葬ることは死者にまかせる—平和ではなく分裂をもたらした

父母を憎む

一、イエスの後を大勢の民衆がついていくと、イエスは振り返り彼らに言った。「父や母、その妻や子、兄弟、または自分の人生さえも憎むことがなければ私の使徒になることは出来ない。そして私についてきても十字架を担ぐのが嫌な者は私の使徒にはなれない。このようにあなた達の内で持つもののすべてを放棄することができない者は私の使徒にはなれない。」（ルカ、第十四章、二十五—二十七、三十三）

二、私のことよりもその父母を愛するものは、私にとってふさわしい者ではない。その子を私のことよりも愛する者は私にとってふさわしい者ではない。（マタイ、第十章、三十七）

三、非常にまれですが、キリストに帰するいくつかの言葉に関して、それが習慣的な話し方とあまりに奇異な対照を成すために、イエスの教義の崇高さに何の損害を与えずにそれを文字通りの解釈することを私たちは本能的に拒んでしまいます。どの福音もイエスが生きている間に書かれておらず、イエスの死後記述されたものであるために、このような場合にはイエスの根底にあった考えがうまく表現されていなかったか、あるいは、同等に起こりうることとして、元の考えがある言語から次の言語へと伝えられて行く中で何らかの変更がなされたと考えられます。歴史上の出来事においてよくあるように、一度誤ったことによって、それを複写する者には何度も繰り返されてしまうこととなります。「私の元へ来てもその父母を嫌わない者は」と言う聖ルカの一節の中の「憎む」という言葉は、こうした可能性の一つとして理解出来ます。誰もそれをイエスに帰することに同意しないでしょう。つまり、そのことについて議論したり、増しては、それを正当化しようとするのは余計なことなのです。第一に重要なのは、イエスはその言葉を発言したのかということ、もしそうであるならば、表現に使われた言語において問題の言葉が私たちの言語と同じ価値を持っていたのかということ、です。「この世においてその人生を憎む者は、永遠の命を保つことになる」という聖ヨハネの一節において、その「憎む」という言葉が私たちの与える意味を表現しているのではないということは疑いようがありません。ヘブライ語の語彙は豊富ではなく、その中には様々な意味を持った言葉がありました。その例として創世記の中に創造の段階を記述したものがあります。それは同時にある一定の期間と一日の変化について表現しています。そのことから、後になって「日」という言葉の翻訳によって地球は六 x 二十四時間に造られたという信仰が生まれたのです。綱がらくだの毛で造られていたことから「らくだ」という言葉がらくだと綱の意味を持っていることにも同様な例です。そこでは針の穴の例え話において綱のことが「らくだ」という言葉で翻訳されたのです。（第十六章、二参照のこと）（一）その他に場合には、その民族の言語の特別な意味に影響を与える習慣や性格に注意しなければなりません。こうした知識なくしてはある言葉の本当の意味はしばしば失われてしまいます。ある言語と別の言語との比較において、同じ言葉がより大きな力を持っていたりより小さな力を持っていたりします。その言葉が暗示する意味によっては、ある言語においては非道や冒瀆を含み、別の言葉においては重要性に欠けることもあります。同じ言語においても、何世紀も経過する間にいくつかの言葉はその持つ価値を失って行きます。そうであるため、厳格な文字通りの直訳がいつも完全にある考えを表現するとは限らず、その意味の正確さを保つには、時によってはその言葉に対応する言葉ではなく、別の同じ価値を持った言葉、または同意節を用いなければなりません。こうした注意は聖典、特に福音の解釈において当てはまります。もしイエスがどのような環境に生きていたのかを考慮に入れなければ、私たちには他人のことを自分のことに当てはめてしまう習慣があるために、いくつかの表現やいくつかの事実は、誤解にさらされることになってしまいます。いずれにしても、イエスの教えの精神に相対するために、「憎む」という言葉の現代的な意味を捨てる必要があります。（第十四章五とそれ以降参照）

父母と子を捨てる

四、私の名において、その家、兄弟、その父母、妻、子、その土地を捨てた者はそれらすべての百倍の物を得ることになり、永遠の命を引き継ぐことになる。（マタイ第十九章、二十九）

五、するとペトロはイエスに言った。「私たちについては、すべてを捨て、あなたにしたがっていることがおわかりでしょう。」するとイエスは言った。「誠に申し上げますが、神の国のためにその家、父母、兄弟、妻、子を捨て、この世界においてはもちろん、来る世紀においてさらに永遠の命を得ない者はいない。」（ルカ第十八章、二十八―三十）

六、別の者がイエスに言った。「私はあなたにしたがっています。しかし、その前に私の家にあることを行うことをお許し下さい。」イエスは答えた。「鋤に手をかけながらも、後ろを振り向く者は神の国にふさわしくない。」（ルカ、第九章六十一）

言葉についての議論をする事無しに、ここではそれらが明らかに次の考え方であったのだということを見出す必要はありません。「未来の人生における関心は人類のあらゆる関心や心配事に勝っている。」なぜなら、この考え方はイエスの教義の根本に即しているからで、一方で家族を放棄することはその教義の否定となってしまいます。とは言っても、母国への愛のために家族への愛情や関心を犠牲にすると、私たちはこれらの金言を当てているのではないのでしょうか。母国の防衛のために行進するために、父母や兄弟、妻を捨てるものに対して非難するのでしょうか。逆にある義務を遂行するために家庭の快適さや友情の結束から自分を断ち切ることは、その功績を讃えられるのではないのでしょうか。つまり、ある義務に勝る他の義務が存在するのです。娘はその夫に伴うために、その法を当てはめ、父母を捨てる義務を果たすではありませんか。世界にはより痛ましい別離が必要な場合が多く存在しています。しかし、だからと言ってその愛情が断ち切れるわけではありません。遠離することは敬意や子の父母に対する気遣いや、父母の子に対する優しさまでも減少させるものではありません。故に、それを文字通り理解し、「憎む」ということを行ったとしても、それらの言葉は人間にその父母を敬うことをや父母の子に対する愛情を説く教えの否定にはならないのです。それらの言葉には極端な表現を通じて、人間が未来の人生に対して心配する義務がいかに大きいかということを示す目的がありました。ただし、習慣によって家族の絆がより弱かった時代の一族に対して、それらの言葉は、道徳的により進んだ文明の中にある者に対してよりもその衝撃は少なかったと考えられます。こうした原始的な民族における絆は感受性や道徳性の発達に伴って強化されます。別離そのものは進歩に必要です。家族や民族は融合したり、統合されなければ没落していきます。それは自然の法であり、道徳的な進歩に関する事柄にも、物質的進歩に関する事柄についても当てはまります。ここでは物事が地上からの観点によってのみ考慮されています。スピリティズムは私たちにそれをより高い所から見せてくれ、真の愛情の絆というものが肉体によって結ばれたものではなく霊によって結ばれたものであるということを示してくれます。つまり、そうした絆が別離や肉体の死による死別によって断ち切れることはなく、霊の浄化によって霊界において強化されるという事示してくれ、そのことは真の慰安となり、人類はそこから大きな力を得ることができ、そのことによって人生の苦しみに耐えていくことができるようになるのです。

死者を葬ることは死者にまかせる

七、別の者に言った。「私についてきなさい。」すると別の者が答えた。「主よ、先に私の父を葬りに行くことに同意下さい。」イエスは返答した。「死者を葬ることは死者にまかせよ。あなたは神の国を伝えに行きなさい。」（ルカ第九章、五十九、六十）

八、「死者を葬ることは死者にまかせよ」という言葉は何を意味しているのでしょうか。前述のことを考慮に入れれば、まず第一に、これらの言葉が発せられた状況に置いて、これらの言葉が自分の父親を葬ろうとすることを子の慈悲であると考えられる者に対する非難を意味していたはずはないということは分かります。そうではなく、より深い意味があるのですが、それは霊の生活に関するより完全な知識によってのみ理解可能となります。霊的生活とは実際の真なる生活であり、霊の普通の生活であり、地上における存在とは一時的な一過性のもので、霊の生活における活動やその輝きに比較すれば、それはある種の死のようなものです。肉体は一時的に霊をおおう粗い衣服のようなものに過ぎ

ず、地球上につながり止める真の鎖のようなもので、そこから解放されたときには幸せに感じるのです。死者たちに捧げる私たちの敬意とは物質によって促されるものではありません。それは不在の霊に関わる思い出によって促されるものなのです。肉体は、その者が所有していたり触れたりした物でその者に愛情を抱く者が遺物として保管する物と同じなのです。その者本人が理解できなかったことはそのことだったのです。イエスは次のように言って教えたのです。「遺体のことは心配せず、まず霊のことを考えなさい。神の国を教えに行きなさい。人類の母国とは地上ではなく天にあるもので、なぜならそこにのみ真なる命が続いているということを人々に教えに行きなさい。」

平和ではなく分裂をもたらしに来た

九、私が地上に平和をもたらしにきたと考えてはならない。平和をもたらしにきたのではなく、剣を持ってきた。故に父からその息子を絶ち、母からその娘を絶ち、姑から嫁を絶ちに来た。人々は自分の家に敵を持つことになる。(マタイ第十章、三十四、三十六)

十、地上に火を放ちに来ました。既に火がついていたなら何を望むであろうか。受けなければならぬバプテスマがあり、それを成し遂げるまでなんと待ち遠しく感じることでしょうか。私が地上に平和をもたらしに来たと思うのですか。いいえ、あなた達に申し上げます。反対に私は分裂をもたらしに来ました。故に今後は、ある家に五人の人がいれば、彼らは分裂し三人対二人、二人対三人とお互いに対立するであろう。父は息子に、息子は父に、母親は娘に、娘は母親に、姑は嫁に、嫁は姑にそれぞれ対立し合うであろう。(ルカ、第十二章四十九―五十五)

優しさの具現化、隣人に対する愛を教えることを休むことがなかったイエスが「平和をもたらしに来たのではなく、剣をもたらしに来た。父親から息子を断ち、夫から妻を断ちに来た。地上に火をもたらし、それが早く燃え上がることを望む。」と本当に言った可能性があるのでしょうか。これらの言葉はその教えに対する明らかに矛盾していないのでしょうか。イエスに流血の征服者や破壊者の言葉を帰することは冒涇ではないのでしょうか。いいえ、それは冒涇でも矛盾でもありません。なぜなら、その言葉を発したのはまさにイエス本人であり、それらは高い英知を証明しているからです。ただ、多少曖昧で、その形がそこにある考え方を正確に表現していないため、それらの本当の意味に対して誤解を招いているのです。文字通りに解釈してしまうと、すべてが平和であるイエスの使命を動揺と不和に変えてしまうこととなりますが、それは馬鹿げた結論であり、イエスの言うことに矛盾が生じるはずはないために、良識はそれを拒みます。(第十四章、六)

十二、どんな新しい考えも、強制的に反対者に出会い、戦いなくして根付くことはありません。さて、そうした時、その抵抗とはいつも予期される結果の重要性に相応しています。なぜなら、重要であればあるほど、それによって損害を受ける者の数は多いからです。もしその考えが明らかに誤っていれば、それは重大な結果をもたらすことはなく、誰もそれに注意を払いません。その考えには活力が欠けていることを確信するために、人々はその考えをそのまま放っておきます。しかし、もしそれが本当で、確固たる基礎に基づき、その未来が予見できるのであれば、その反対者の中で内なる予感が、そのことが彼らや、彼らが保とうと従事する事柄の秩序にとって危機となりそうだとすることを喚起することになります。すると、その考えやその考えに従う者に対抗することになります。このようにある新しい考えがもたらす結果やその重要性の度合いとは、その考えの登場が巻き起こす感情、抵抗者たちが引き起こす暴力、反対者たちの憤りの度合いや続き具合によって測ることができます。

十三、イエスは、その当時の聖職者、書記官、ファリサイ派の人々が生きた乱用の土台を一掃する教義をもたらしに来ました。そのために彼を生贄とし、イエスを殺し、その考えをも消そうとしたのです。しかし、その教義は真実であったため生き続けました。その教義は、神の意志に答えたものであったために広がり、ユダヤの小さく世に知られぬ村落で生まれながらも、その旗印を多神教の世界の中心地にまで掲げ、確信よりもむしろ当時の関心によってその人々が大いに執着していた何世紀にもわたる信仰を覆したために、教義を打ち消そうと競った最も残忍な敵対者たちに直面したのです。最も恐ろしい戦いがそこでは信徒達を待ち受けていました。その犠牲者の数は知れません。しかし、その考えは常に広がり、勝利を得ました。なぜなら、それが真実であるがためにそれまでにあった考

えを征服していったからです。

十四、キリスト教が現れた時、異教は衰え始めており理性の光と戦っていた事に注意を払うことが必要です。異教は依然として形式的には実践されていました。しかし、その信仰は既に消えていました。個人的な関心のみが異教を支えていたのです。関心の強い者は頑固です。証拠を前にしても譲歩することはありません。彼らに対立する議論がその誤りを決定的に明らかにすればするほど彼らは苛立ちます。彼は誤っていることを知りながら、そのことによって動揺しませんでした。すなわち、真なる信心は彼の魂には存在しないのです。彼の恐れるものは、盲目者に視力を与える光なのです。その誤りは彼にとって使い道がありました。彼はそれに固執し、それを守たのでした。ソクラテスもある程度までキリストの教義と同様の教義を教えなかったではありませんか。しかし、なぜその時代、地球上の最も知性的な人々の間に彼の教義は優勢にならなかったのでしょうか。それは未だ期が熟していなかったからです。ソクラテスは耕されていない土地に種を蒔いたのでした。異教はまだ消耗されていませんでした。キリストはふさわしい時代にその使命を受けたのでした。もっとも、その時代のすべての人がキリストの考えを受け入れる水準に至るには多くが欠けていたことは明らかです。しかし、彼らの間にはより一般的にキリストの考えに同化する能力が存在しており、世俗的な信仰が彼らの魂にもたらす空虚を既に感じ始めていたのです。ソクラテスとプラトンは道を切り開き、霊たちを事前に準備したのでした。（前章一四ソクラテスとプラトン、キリスト理念とスピリティズム理念の先駆者たち）

十五、残念なことに新しい教義の信徒達は多くの場合たとえ話や言葉の比喩に暗示された師の言葉の解釈を理解しませんでした。そのために、すぐに多数の宗派が生まれ、それぞれが排他的に真実の主となろうとし、十八世紀の期間もそれらを合意させるには十分ではなかったのです。神の教えの最も大切な部分であるイエスとその建築の柱石として据えた、慈善、兄弟愛、隣人愛と言った救いの確実な条件を忘れるとそうした宗派はお互いを異端としあい、お互いを責め合い、強いものは弱いものをつぶし、それらを血に染め、拷問を与えたり、火あぶりにしたのです。異教に対して勝者となったキリスト教徒達は、それまで迫害されていたのが、迫害者となってしまったのです。二つの世界において汚点のない子羊の十字架を建てるために鉄と火が用いられたのです。宗教戦争が政治戦争より多くの犠牲者を出しており、より残酷であったという事は誰もが知る事実です。その他の戦争においてもそれ程までの残虐行ためや非情な行ためはありませんでした。その責任はキリストの教義にあるのでしょうか。明らかにありません。なぜなら、キリストの教義は暴力を非難するものであるからです。イエスがその使徒達に、あなた達と同じように信じない者を殺害し、全滅させ、焼き払いに行きなさいと言ったことがあったのでしょうか。ありません。反対にイエスは使徒達にこう言いました。

「全人類は兄弟であり、神は至上の慈悲である。隣人を愛しなさい。あなた達の敵を愛しなさい。あなた達を迫害する者に善を尽くしなさい。」また、同じように使徒達にこう言いました。「剣によって殺す者は剣によって消される。」したがって、その責任はイエスの教義にあるのではなく、教義を偽って解釈し、自分達の情熱を満足させるための道具と化した人々にあるのです。「私の国はこの世のものではありません。」と言うこれらの言葉を軽んじた人達に属するのです。イエスの深い英知には将来起こりうる出来事に対する先見の明がありました。しかし、そうした出来事とは人類の不完全な性質に帰するものであり、その性質を突然変化させることはできないため、避けることは出来なかったのです。キリスト教はこうした長く残酷な試練を十八世紀間受け、その力を示さねばならぬのでした。しかし、その名によってあらゆる悪が行われたにも関わらず、キリストの教えは純粹に保たれています。それは議論の対象となったことはありません。非難はいつも教えを乱用した者たちの上に降りかかりました。あらゆる狭量の行ために対してこう言われてきました。「もしキリスト教がより正しく理解され、実践されていたなら、そのようなことは起こり得ない。」と。

十六、「私が来たのは平和をもたらすためだと考えてはならない。平和ではなく分裂をもたらしに来た。」とイエスが言ったとき、その考えは次のようなものでした。「私の教義が平和のもとに確立と信じてはいけません。それは私の名のもとに流血の戦いをもたらすでしょう。なぜなら人類は私の考えを理解出来ないか、あるいは理解しながらないからです。それぞれの信仰に応じて分裂された兄弟達はお互いに対して剣をさやから抜き、同じ信仰を分かち合うことのない一つの家族の中には分裂

が支配します。害をもたらす植物を消すために野に火を放つと同じ方法で、偏見を持った者たちの過ちを消滅させるために、私は地上に火を放ちに来たのであり、浄化が早く進むためにその火が早く燃え上がることを望んでいます。闘争の後、真実が勝者となるのです。戦いは平和に、分裂の憎しみは全世界の兄弟愛に、狂信の闇は、理性的な信心の光に譲ることになります。やがて土地の準備が出来たら、私は慰安者である真実の霊を送ります。真実の霊はすべての物を再建に、即ち、私の言葉の真なる意味を教えに来ます。それにより、より教養のある人々も理解することができるようになり、同じ神の子供達を分裂させる兄弟殺しの戦いに終止符を打つことになるのです。家族の核心にまで荒廃と動揺ばかりだけをもたらす、結末のない戦いによろやく疲れ、人類はこの世とその先の世において本当の関心事がどこにあるのかを知りようになるでしょう。人類はその平静の敵や仲間がどこにいるのかを知ることができるでしょう。するとすべての者が唯一の旗の元に集まることになります。その旗とは慈善であり、私があなた達に教えた原則と真実にしたがって、地上における物事は再建されることになるでしょう。」

十七、スピリティズムは、予期された時代に、キリストの約束を守るために現れました。しかし、乱用を破壊することなくそれを行うことは出来ません。イエスの時と同じように、スピリティズムは自尊心、エゴイズム、野心、貪欲、盲目的な狂信に直面しますが、それらは最後まで追いつめられると、妨害や迫害を扇動することになります。故に、スピリティズムも戦わねばなりません。しかし、争いや流血の迫害の時代は終わりました。苦しまねばならないそれらの戦いとはすべてが道徳的秩序上の戦いであり、その終わるGTABS

\$>りも近い将来まで来ています。最初の戦いは何世紀にも及びました。今度の戦いは何年間かしか続くことはありません。なぜなら、その光は唯一の光源から放たれるのではなく、地球上のあらゆる地点で現れ、盲目者たちの目をすぐに開いてくれるからです。

十八、故にこうしたイエスの言葉は、その教義が引き起こすことになる怒りや、それが原因となって引き起こされる一時的な闘争、約束された土地に到着する前にヘブライ人達にあったような確固たる位置づけを得るために耐えぬかねばならない戦いについて言っているのだと理解しなければならず、先に考えられたようにイエスの言葉が無秩序と混乱を広める意向の結果の言葉であると理解してはいけないのです。悪は人類から生じるのであり、イエスは治療のために現れた医者のような存在です。しかしその薬は有益な危機をもたらす、病める者の悪しき体液を攻撃するのです。

(注一) ラテン語の "Nonodit"、ギリシャ語の "Kai" もしくは "misei" は憎むという意味ではなく、より少なく愛すると言う意味です。ギリシャ語の misein という動詞はイエスが用いたヘブライ語の動詞の意味をよりよく表現しています。この動詞は憎むという意味ばかりではなく、より少なく愛す、もしくは人々を同じように愛さないという意味を持っています。イエスがよく用いたシリア語の方言においては、その意味をよりよく現しています。こうした意味によって「創世記」(第二十九章、三十、三十一)には「そしてヤコブはリアよりもラケルを愛したが、エホバはリアが憎まれているのを見ると…」と書かれています。ここでの真の意味はより少なく愛されているであることは明白です。このように翻訳されなければなりません。その他の多くのヘブライ語の下りにおいて、特にシリア語の下りには、一方を他方と同じように愛さないという意味で用いられており、はっきりと定まった別の意味を持つ憎むという言葉で訳すと、理解しがたいものとなってしまいます。マタイの文章はそうした理解の難しさを遠ざけてくれています。(Pezzani 氏の注釈)

升の下のカンテラ・イエスはなぜたとえ話で話すのか—異邦人達のところへ行ってはならない—医者が必要としているのは健康な者ではない—信仰の持つ勇氣—十字架を背負う命を救いたい者は命を失う

升の下のカンテラ・なぜイエスはたとえ話で話すのか

一、カンテラを灯して、升の下に置く者はいない。反対に、ランプ台の上に置き、家中の者を照らすようにする。(マタイ、第五章、十五)

二、カンテラを灯した後、それを壺で覆ったり、ベッドの下に置く者はいない。ランプ台の上に置き、入ってくる者が光を見ることができるようにする。発見されない秘密は存在せず、知られ、公にならない隠されたことはなにもない。(ルカ、第八章、十六、十七)

三、近づいていくと、使徒達は言った。「なぜたとえ話でハナされるのですか。」彼らに答えると言った。「なぜならあなた達には天の国の未知が知らされたが、彼らには知らされていないからである。(一)」なぜなら、既に持つ者はより多くが与えられ、豊かになるであろう。しかし、持たぬ者は持っている者さえも奪われるであろう。たとえ話で話すのは、見に入っているも見えず、聞こえても聞かず、理解しないからである。彼らにはイザヤの次の預言があてはまることになる。「あなた達は耳で聞いても聞こえず、目で見ても見えない。なぜなら、民の心は鈍くなり、耳は聞こえなくなってしまう、目は閉ざされてしまったからである。だから目は見えず、耳は聞こえず、そのためにその心は理解せず、閉じてしまい、目は見えず、彼らが心を改め私が彼らを癒すことができない。」(マタイ第十三章、十一十五)

四、イエス自身がいつもその言葉の意味を誰もが理解することができるとは限らないたとえ話というベールによって隠したため、光を升の下においてはならないとイエスが言うことには驚かされません。イエスはその使徒達に次のように言って説明します。「あなた達には例え話で伝える。なぜならあなた達はある種の事柄については理解できる状態にないからである。人は見て、聞くが理解しない。だから、今はすべてを伝えることは無益である。しかし、あなた達にはこれらの謎が理解されるので言う。」つまり、イエスは当時の人々に対して、考えの未発達な子供に対する時と同じように行動したのです。こうすると「カンテラを升の下においてはならない。そうではなく、ランプ台の上に置き、入ってくる者誰もがみることができるようになさい。」という文の本当の意味が示されません。この文は何も考慮せずにすべての事を示すべきだという意味ではありません。あらゆる教えも指導の対象となる人の知性に応じていなければならず、それは光が明るすぎるために目がくらんでしまい、啓発されることのない人々もいるからです。同じ事がある特定の個人に当てはまることもあれば、一般の人々に当てはまることもあります。一つの世代にはその幼少期、青年期、成熟期があります。それぞれの出来事がそれにふさわしい時に起こらなければなりません。季節はずれに地上に落ちた種は発芽しません。しかし、慎重さが一時的に口を閉ざすことを強いたのであれば、遅かれ早かれ、その事は発見されるでしょう。なぜなら、ある程度の発達の度合いに達すると、人類は自ら生きた光を求めることになるからです。闇は人類にとって負担となるのです。神は人類が地上と天における物事を理解し、その中で進んでいけるように人類に知性を託したため、人はその信仰を理性に照らし合わせることになるのです。そうであるためにカンテラを升の下に置いてはならず、なぜなら、理性の光無しには、信仰は衰弱してしまうからです。(第十九章、七)

五、もし神意がその予見可能な知性によって真理を徐々に啓示していくのであれば、人類がそれらを受けるに十分な成熟度に達することに依って知らせることは明らかです。真理は升の下に置かれるのではなく、将来に向けてとっておかれるのです。しかし、人類はそれを手に入れようとし、それを支配してしまおうという意志のために人々からそれを隠してしまいます。こうした場合には、それはまさに光を升の下に置いていることになるのです。故にあらゆる宗教にはその謎があり、それを試す

ことが禁じられているのです。しかし、そうした宗教が衰退していくのにしたがって、科学や知性は発達し、謎のベールを取り除き行きました。人々は大人になると物事の根底にまで入りこむことを覚え、観察に反する事柄はその信念によって消去したのです。絶対的な謎は存在し得ず、人に知られることのない秘密は何もないというイエスは理に適っています。隠されたものはいつの日か必ず発見され、人類がいまだに理解できないものは、人類がより浄化した時、進歩した世界において次から次へと明らかにされて行くでしょう。ここ地球上ではそれらはまだ霧中にあるのです。

六、「意味が理解されないこれらの多くのたとえ話にどんな利用価値があるのでしょうか。」と聞かれます。しかし、イエスはその教義の言うならば抽象的な部分についてのたとえ話で表現したことに注目しなければなりません。しかし、救いの基本的な条件を隣人に対する慈善と謙虚さとし、これらのことに対して言ったことは完全にはっきりと、少しの曖昧も残さずに明確に示しました。それは行動の規則であり、すべての者がそれを理解し、それに従わなければならないために、そうである必要があったのです。「これが天の国を得るために行わなければならないことである。」とだけ言った事が無知な大勢の人々のために示した本質的な部分であったのです。その他の事については、使徒達にのみその考えを明かしました。彼らが道徳的にも知性的にもより進歩していたために、イエスはより抽象的な真理の知識を伝授することができたのです。そのときに言いました。「既に持つもには、より多くを与える。」(第十三章、十五)しかし、使徒達にさえも、多くの点については不明確なままとなり、完全な理解はその後の時代へと持ち越されました。そして、そうした点は、一方で科学が、またもう一方でスピリティズムが自然の新しい法を明らかにし、その真なる意味が理解されるようになるまで、多様な解釈を生む機会を与えることになったのです。

七、スピリティズムは今日多くの不明確な点に光を投じます。しかし、むやみに光を投じるのではありません。霊たちは驚くべき慎重さを持って指導をもたらします。教義の中の既に知られた部分についても徐々に、しかも継続的に考慮され、その他の部分については、それらが明確にされるべき時が訪れるにしたがって明らかにされるよう残されます。もし最初から完全な形で示していたなら、ほんの少数の人々にしかそれに近づくことはできなかったでしょう。それらを受ける準備のない人々はそれに驚いてしまい、その教義の普及には逆効果となってしまうでしょう。もし、霊たちが未だすべてを明らかに伝えないのであれば、それは教義の中に一部の特権のある者たちだけが知ることのできる謎が存在するからでもなければ、升の下に灯りを置くからでもありません。それは、一つ一つの事柄が、その適した時に現れる必要があるからなのです。霊たちは一つ一つの考えに対して、次の考えを示す前に、期が熟し広まるまで時間を与え、その別の考えが受け入れるための準備となる出来事にも時間を与えるのです。

異邦人達のところへ行ってはならない

八、イエスは次の指導を与えた後、十二人の使徒達を送り出した。「異邦人も探すな。サマリア人の町に入ってはならない。まず、イスラエルの家の失われた羊を探しに行け。そして行く先では、天の国が近づいたことを説け。」(マタイ第十章、五一七)

九、様々な状況において、イエスの目はユダヤの民だけ限って向けられていたのではなく、人類全体に向けられていました。ですから、その使徒達に異教徒のもとへ行ってはいけないと言うのであれば、それは彼らの改宗を軽蔑していたからではないはずですが、さもなければ、それは慈善に反することになってしまいます。ユダヤ人達はすでに唯一の神を信じており、救世主の出現を待っていたのであり、モーゼの法や預言者たちによって使徒達の言葉を受け入れる準備が出来ていました。異教徒達にはそうした基礎が欠けており、行わなければならないことがすべて残されており、使徒達はいまだにその理解が不十分であったためにそれ程重い任務を遂げることはできなかったのです。だから次のように行ったのです。「イスラエルの失われた羊を探しなさい。」つまり、既に教化された土地に種を蒔きに行きなさいということだったのです。イエスは異邦人の改宗は時とともに進むことを知っていました。後になって使徒達は異教の中心部へ十字架を掲げに行ったのです。

十、これらの言葉はスピリティズムを受け入れ、広めようとする人々にも当てはまります。体系的な不信心者や、それをあざける頑固な者たち、たくらみを持った敵対者たちとは、使徒達にとっての異邦人と同じです。故に彼らの模範のように、まず第一に、発芽間近な種を持った数多くの意志のある光を求める者たちの中に改宗者を探し、見たり聞いたりすることもいやがる、自分の改宗に関わる度合いが高ければ高いほど自尊心によってより抵抗をする人々に無駄な時間を費やさないようにしなければなりません。光を求める百人の盲目者の目を開くことの方が、闇にいることを喜ぶ一人の目を開くことより価値があり、なぜなら、その方が問題に対する支持者の数は大きな割合で増えるからです。他の者たちをそのままにしておくことは、無関心を示すことではなく、より賢明な手段なのです。その考えが一般の意見として支配するようになった時、彼らの番が回ってくることになり、その回りにいる者たちから同じ事を繰り返し聞くことになるのです。そうすれば、彼らは他人の圧力によってではなく自らの意志により、その考えを受け入れることになります。また、種のように扱われるべき考えも存在します。適切な季節が来なければ発芽することは出来なかつたり、前もって準備された土地に蒔かれなければ発芽できない種もあるために、適切な時期を待ち、発芽したものを栽培する方がよく、過度の栽培によって他の発芽を失敗させてしまうことがないようにしなければなりません。イエスの時代には、当時支配していた狭い物質的な考え方の結果、すべてののが限定され局地的でした。イスラエルの国は一つの小さな民族であり、異邦人達とは周辺に存在した別の小さな民族のことを指しました。今日、人々の考えは普遍化され、霊的になっています。新しい光は特定の国の特権をなすものではありません。その焦点はあらゆる場所へ向けられており、全人類は兄弟であるために、障壁は存在しないのです。しかし、同時に異邦人というのも特定の民族を指すのではなく、あらゆる場所で出会う様々な意見のことであり、キリスト教が多神教に対して勝利したのと同じように、それには少しずつ真理が打ち勝っていくことになるのです。それらはもはや武力や戦争によって撃退されるのではなく、考えの強さによって撃退されるのです。

医者が必要としているのは健康な者ではない

十一、イエスがこの者（マタイ）の家の食卓についていると、そこへ多くの税の取り立て人や罪人達がイエスや使徒達と同じ食卓についた。ファリサイ派の人々はそれを見ると使徒達に言った。「あなた達の師はなぜ税の取り立て人や罪人達と食事をするのですか。」それを聞いたイエスは行った。「医者が必要としているのは健康な者ではない。」（マタイ第九章、十一十二）

十二、イエスは主に貧しい者や、財産を受け継がない者たちに近づきましたが、なぜなら彼らこそ慰安をより必要としていたからです。イエスに視力を与えてくれるように頼む信心深く心優しい盲目者に近づき、すべての光を有しなにも必要としないと考える誇り高き者には近づきませんでした。

（序章、税の取り立て人、集税吏参照）これらの言葉はその他の多くの言葉のように、スピリティズムにもその適応を見つけることができます。ままた、霊媒性がそれを悪用する可能性のあるそれにふさわしくない人に授けられていると驚く人々がいます。そのような貴重な能力は最もそれにふさわしい人達に与えられるべきだと言うようです。なによりもまず、霊媒性というものが肉体器官上の素質に付属するもので、どんな人であれ、見たり、聞いたり、話したりする霊媒性を授かることができるということを述べておきます。しかし、人間には自由意志があり、乱用することのできないものは存在しません。例えば、もし神が、悪い言葉は預言しないような者にしか言葉を伝えていなかったとしたら、その言葉を話すことのできない者の方が、話すことのできる者の数より多くなってしまいます。神は人類に能力を託し、彼らにそれを使用する自由を与えますが、それを乱用した者を罰しないではありません。もし霊と通信する能力がそれにふさわしい者たちだけに与えられるのだとすれば、誰があえてそうなることを望むでしょうか。さらには、ふさわしさとそうでないことの境界はどこにあるのでしょうか。霊媒性は差別なく人々に与えられ、そのために霊たちは貧しい者から裕福な者に至るまで、あらゆる身分や社会階層に光をもたらすことができ、正しく歩む者はさらに善に対して強くなり、悪癖の多い者はそれを正すことになるのです。これらの後者が医者が必要とする病人達ではありませんか。罪人の死を望んでいない神は、その者をぬかるみから引き抜くことのできる救済をどうして奪うでしょうか。善霊たちは彼らの元へ助けにやってきて、直接与える忠告を与えるのは、間接的にそれを受け取る場合よりも、より鮮明に印象づけるためなのです。神はその善意によっ

て、その者を遠くへまで迎えに行く手間を省き、彼らの手に光を与えます。それを見たくないというのであれば、その責任は彼にあると言えないでしょうか。自分に対する非難を自分の手で書き、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の口で唱えたとしたら、無知の責任にすることができのでしょうか。それを有効に利用しないのであれば、託されたその能力を失ったり、その能力が荒廃し矯正せられることとなります。その場合には悪い霊たちが憑依したり騙そうとその能力を利用することになりますが、その苦しみは神に罰せられたエゴイズムと自尊心によって心の固くなってしまった恥ずべき奉仕者が感じる本当の苦しみとはまた別のものなのです。霊媒性は必ずしも優秀な霊たちとの習慣的な関わり合いを意味するものではありません。それは一般的に霊に対するおよそ従順な道具として仕えるための単なる素質に過ぎません。したがって、よい霊媒とは容易に通信する者のことではなく、善霊たちに対して同情を引き起こさせる者で、彼らだけから補佐を受ける者のことを指すのです。唯一こうした場合においてのみ道徳的性質の卓越が霊媒性に対して万能となるのです。

信仰の持つ勇氣

十三、私に打ち明け、私のことを人々の前で認める者については、私も天にいる父の前に打ち明け、その者を認めるであろう。私を人々の前で裏切る者は、私も天にいる父の前で裏切ることになる。（マタイ第十章、三十二、三十三）

十四、もし誰かが私のことや私の言葉を恥じるのであれば、聖なる天使と父の栄光の前に来た時、人の子もその者のことを恥じるであろう。（ルカ第九章、二十六）

十五、独自の意見に対して勇氣を抱くことは、人類に多くの敬意を表されることとして考えられて来ました。なぜなら、すべての人々の考えではない意見を公に発表することに恐れを抱かない者はほとんどいつも危険や迫害、矛盾やあるいは単純な皮肉にさらされることになり、それを乗り越えればその功績が讃えられるからです。いずれの場合においてもそうであるように、ここでもその功績とはそのときの状況やもたらされる結果の重要性に応じています。その考えが引き起こす結果を前に、後退したり、それを否定してしまう弱さというものはいつも存在します。しかし、そうした中にはそれが大きな臆病となり、戦いの時に逃げ出す場合もあります。イエスはその教義の特別な視点からこうした臆病を打ち消し、イエスの言葉を恥じる者がいれば、その者も恥じられることになると言いました。イエスを裏切る者は裏切られ、人類の前でイエスを認めた者は、天にいる父なる神の前で認められると言ったのです。言い換えれば、真実の使徒として自分を認めることに恐れを感じた者は、真実の国に置いて認められるにはふさわしくないのです。支えとする信仰の利益は失われることとなります。なぜなら、そうした信仰は、この世で不利益がでないようにと隠し自分のためだけにしまっておく利己的な信仰となってしまふからです。一方で、自分の物質的な関心事の上に真実を掲げ、公に宣言する者は、自分自身の未来と他人の未来のために働いていることとなります。

十六、スピリティズムを受け入れる者にも同じ事が当てはまります。なぜなら彼らが行う教義とは福音の適応と発展に過ぎず、彼らにもキリストの言葉が差し向けられるからです。彼らは霊界で刈り取るものの種を地上において蒔くのです。霊界ではその勇氣か弱さの結果を刈り取ることとなります。

十字架を背負う命を救いたい者は命を失うことになる

十七、人の子のせいで人々があなた達のことを憎み、分裂し、あなたの名前を悪しき名前として拒絶するのであれば、あなた達は幸いとなる。その日には喜び、喜びに飛び上がりなさい。なぜなら、あなた達には天において大きな報酬が蓄えられるからである。預言者たちの親たちも同じ事を行ったのである。

十八、民衆や使徒達を近くへ呼び寄せるとイエスは言った。「もし誰かが私の後を追うのであれば、自分自身を捨て、十字架を背負い私について来なさい。なぜなら、自分自身を助きたい者は、道

に迷うからである。私と福音のために自分を失う者は救われるであろう。まったく、世界中を征服したとしても自分自身を失ったのではなんのためになるというのであろうか。(マルコ第八章、三十四一三六、ルカ第九章、二十三―二十五、マタイ第十章、三十八、三十九、ヨハネ第十二章、二十五、二十六)

十九、「人々があなた達を憎み、私のせいであな達を迫害するのであれば、そのことは天において報われるので喜びなさい。」とイエスは言いました。これらの真実は次のように解釈できます。

「あなた達に対する悪意によってあなた達にその信仰の誠実さを試す機会を与えてくれたなら、彼らがあなたに行く悪はあなた達のためになるので喜ばしく思いなさい。彼らが盲目であることを悲しんでも、彼らをののしってはいけません。」その後にはこう付け加えます。「私についてきたい者は十字架を背負いなさい。」つまり、あなた達の信仰が引き起こす苦難に勇気を持って耐え、なぜなら、私を放棄することによって自分の命や財産を救おうとする者は天の国における利益を失うことになるからです。一方で、真実の勝利のために命に至るまですべてをこの世で失った者は、自ら証明した勇気、忍耐、甘受に対する報酬を得ることになります。しかし、天における富を地上の快樂のために犠牲にしてしまう者に対して神は、「もうすでに報酬は受け取っている。」と言うでしょう。

(注一) フランス語原文には十二節が欠落していたのでここに記載しました。 FEB 一九四八

第二十五章 探しなさい、そうすれば見いだせるでしょう

あなた自身を助けなさい。そうすれば天があなたを助けてくれます。一空の鳥を見てみなさい—金を所有することによって疲れてはなりません

あなた自身を助けなさい。そうすれば天があなたを助けてくれます

一、求めなさい。そうすれば与えられるでしょう。探しなさい。そうすれば見出すことができるでしょう。扉をたたきなさい。そうすればあなた達のために開くでしょう。求めれば受け取り、探せば見出し、扉をたたけば開くでしょう。あなた達のうちでパンを求める息子に石を与えるのは誰でしょうか。—あるいは、魚を求めるのにへびを与えるのは誰でしょうか。—あなた達のように悪くとも、自分の子供には善い物を与えることを知っているのであれば、なおさら、天にいるあなた達の父は、求める者には本当の善き物を与えるのではないのでしょうか。（マタイ第七章、七一—）

二、地上の視点から見ると、求めなさい、そうすれば与えられるでしょう、ということばは、自分自身を助ければ、天があなたを助けてくれます、という言葉と同じ意味を持っています。これは労働の法の原則であり、また進歩とは知性の力を活動させる労働の賜であるために、結果的に進歩の法の原則であると言えます。人類の幼少期には、人間は食物を集めたり、悪天候から身を守ったり、敵から身を守るためだけに知性を使っていました。しかし神は動物に与えるよりも多くを人間に与えました。それは、向上しようとする絶え間ない欲求で、その欲求は人間を自分の置かれた立場の向上の手段を調査することを強いることになり、結果的に人間に発見や発明、自分たちに何が不足しているのかということを与えてくれる科学の完成をもたらすこととなります。調査によって、知性は高まり、道徳は浄化します。肉体の需要は霊の需要をもたらします。こうして人は野蛮人から文明人へと変化していくのです。しかし、その大半においては、人生の間に一人一人が個人的に実現する進歩は非常に小さいか、ほとんどとらえることのできないものです。では、魂が既に存在し、再び存在することなしに、人類はどれほどの進歩をとげることができるのでしょうか。もし魂が毎日去って行き再び戻って来ないのだとしたら、人類は絶え間なく原始的な要素による再興を繰り返し、すべてを学ぶためにすべてをやり直さねばならなくなってしまう。一回毎の誕生においてすべての知的な作業を再開しなければならぬのですから、その場合には、地球の初期のころに比べ、今日の人間が進歩していると考えられる根拠は存在しなくなります。反対に、既に成し遂げた進歩とともに戻り、その都度より多くの何かを獲得すれば、魂は徐々に野蛮から物質的へそして道徳的文明へと変遷していくこととなります。

三、もし神が肉体の労働を人間から免除していたとしたら、その四肢は退化していたでしょう。知性の労働を免除していたとしたら、その霊は動物の本能の状態、つまり幼年期の状態で居続けたでしょう。だからこそ神は労働を必要なものとし、「探せば見いだせるでしょう。働き、生産しなさい。」と言ったのです。この方法によってあなたは自分の労働の産物となり、それらを自分の功績とし、行ったことに応じて報酬を受けることとなります。

四、この原則のために霊たちは、使われるために準備の整った既に完成していたり既に発見されたり発明されたものを人間にもたしたり、苦勞せずに自分たちの手中にできるもの以外は持たせまいと、捨てるために身を曲げさせたり、考えさせないようにし、人間から調査の仕事を免除しようとする人間を助けにやってくることはありません。もしそうであったならば、何の苦勞もせずに最も怠惰な者が豊かになり、もっとも無知の者が知識人となり、両者とも自分の行っていないことの功勞を受けることになってしまいます。いいえ、霊たちは人類を労働の法から免除するためにやってくるのではありません。霊たちは人類を導く道と達成しなければならない目標を示すためにだけやってくるのであり、次のように伝えるのです。「歩みなさい。そうすれば到着するでしょう。石に躓くでしょう。自分の目で確かめ、それを自分自身で遠のけて下さい。あなた達が使いたいのであれば、私たちはそれに必要な力を与えます。（「霊媒の書」第二部、第二十六章、二九一）

五、道徳的視点から見れば、これらのイエスの言葉は次のことを意味します。「あなた達を照らす光を求めれば、道はあなた達に与えられます。悪に抵抗する力を求めれば、その力を得ることができます。善霊たちの救援を求めれば彼らはあなた達に同伴してくれ、トビアスの天使がそうしたように、あなた達を指導してくれます。善き忠告を求めれば、決してそれを拒絶することはないでしょう。私たちの扉を叩いてくれれば、あなた達に扉は開かれます。しかし、信心、信頼、熱意を持って誠実に願って下さい。傲慢にならず、謙虚であって下さい。さもなければあなた達は自分達だけの力とともに見捨てられ、そのときの失敗はあなた達の自尊心に対する罰となるのです。それが「探さない、そうすれば見出せるでしょう。扉を叩けば、あなた達のために開くでしょう。」の言葉の意味です。

天の鳥を見て下さい

六、錆がつき、虫が食い、盗人達が掘り起こしたり盗んだりするこの地上であなた達は宝を蓄えてはいけません。錆がつかず、虫も食わぬ天において宝を蓄えなさい。あなた達の宝のある所にはあなた達の心も存在します。だからあなた達に申し上げます。「あなた達の人生を支える食糧をどこで手に入れようかと心配したり、体にまとう衣服をどこで手に入れようかと心配してはなりません。命は食糧にまさり、肉体は衣服にまさるではありませんか。空の鳥を見て下さい。種を蒔くことも、収穫することも、倉に蓄えることもありません。しかし、あなた達の天の父は彼らを養っています。あなた達は、鳥達にまさっていませんか。あなた達の内誰がその努力によって伸長を一寸でも伸ばすことができるのでしょうか。また、なぜ衣服のことを心配するのですか。野の百合がどう育っているか見て下さい。働くことも、紡ぐこともありません。しかし、あなた達に申し上げますが、ソロモンでさえその栄光の時、百合達程に着飾ることはありませんでした。今日生き、明日には炉に投げられる野の草を着飾ることに、神がこれ程までしてくれるのであれば、あなた達を着飾るのにどれ程多くをしてくれると考えますか。おお、信仰の薄い者たちよ。

「何を食べようか。」「何を飲もうか。」「何を着ようか。」と言って、異邦人達がこれらすべてのものを探し求めるように、心配してはいけません。なぜなら、あなた達の父はあなた達がそれらのものを必要としていることを知っておられるからです。

まず、神の国とその正義を求めなさい。そうすればそうしたものはすべてあなた達に添え与えられるでしょう。だから、あなた達は明日のことで心配をしてはなりません。明日のことは明日の日そのものが面倒を見てくれるからです。一日にはその日の悪だけで十分である。(マタイ、第九章、十九ー二十一、二十五ー三十四)

七、文字通りに解釈すると、これらの言葉はあらゆる用心、労働、そして結果的には進歩の否定となってしまいます。同様の原則によって人間は受動的に待つばかりとなってしまいます。肉体や知性の力は、活動することなく止まることになってしまいます。地上における一般的な人間の条件がそうであったとしたら、人間はもはやその原始的な状態から抜け出しておらず、その原則が今日のための法であったなら、人間には何もせずに生きる以外なくなってしまいます。イエスの考えがそのようであったはずはなく、さもなければ、その他の時に自然そのものの法について述べたことに矛盾することになってしまいます。神は人間を衣服も住処もなく創造しましたが、それらを生産する知性を与えたのです。(第十四章、六、第二十五章、二)

したがって、これらの言葉の中に、信ずる者を決して見捨てることは無くとも、彼らが自分のために働くことをのぞむ神意の詩的なたとえ以外を見出してはなりません。神はいつも物質的な補助をもたらすわけではありませんが、困難から抜け出せる手段に出会えるような考えを吹き込んでくれます。(第二十七章、八)

神は私たちが必要としているものを知っており、必要に応じてそれを与えてくれます。しかし、人間はその欲求に満たされることがないために、手中にあるものによって満足するとは限りません。必要なものだけでは人間は不十分なのです。余分なものを求めます。すると神はその者をそのままにしておきます。人間はしばしば、注意を促す良心を通じて聞こえた声に従わなかったために、自分のせいで不幸になります。そうしたとき、神はその者がそうした結果に苦しませ、それが未来に向けた教訓となるようにするのです。

八、人間が正義と慈善、隣人愛の法にしたがって地球がもたらすあらゆる物を管理することを覚えれば、地球はその住人すべてを養えるだけを生産するようになります。一つの国の違った地方の者たち同志のように、地球上の住人の間に兄弟愛が支配する時には、一方の一時的な余剰は、もう一方の一時的な不足を補うようになり、それぞれが必要な物を手に入れることになります。裕福な者は沢山の種を持った者のように考えることができます。それを広めれば自分や他人のために何百倍にも生産することになります。しかし、もしすべてを一人で食べ、余ったものを無駄にし、駄目にしてしまうのであれば、何も生産せず、すべての人のために十分に行き渡ることはないでしょう。それを倉にしまっただけでは、虫が食ってしまいます。そこにイエスの言った言葉があります。「消滅してしまう宝を地球上に蓄えてはなりません。永遠にある天に宝を蓄えなさい。」別の言葉で言うならば、「物質的なものを霊的なものよりも重要視してはいけません。そして前者を後者のために犠牲にすることを覚えなければなりません。」ということです。

慈善と兄弟愛は法律に定められてはいません。それぞれが心の中に存在しなければ、エゴイズムがいつもそこを支配することになります。慈善と兄弟愛を心の中に浸透させるのはスピリティズムの役割です。

金を手に入れることに悩んではいけません

九、金を手に入れることや、銀やその他の硬貨を手に入れたりポケットにしまうことのために悩んではいけません。旅に出るときは袋も二枚の衣服も、靴も、つえも準備してはなりません。なぜなら働く者は、支えられるからです。

十、どの町や村に入っても、誰があなたを泊めてくれるにふさわしいか訪ね、再び出発するまでそこに止まりなさい。一家には行った時には、このように挨拶をして下さい。「この家に平和が宿りますように。」もしその家がそれにふさわしければ、あなたの平和はその家に来るでしょう。そうでないのであれば、その平和はあなたのところへ戻るでしょう。

もし誰もあなたを迎えてくれず、聞いてもくれないのであれば、その家や町を出るときにはあなたの足の埃を払い落とさなさい。誠に申し上げます。審判の日にはその町はソドマやゴモラよりも厳しく扱われるでしょう。

十一、その時代、初めて福音を伝えるに使徒達を送った時、イエスが使徒達に向けたこうした言葉には少しも不思議な内容はありませんでした。それらは、旅人がいつもテントに迎えられた東洋の家父長制の習慣に従うものでした。しかし、そのころ旅人もまれでした。交通の発展によって近代の人々には新しい習慣が生まれました。昔の習慣は遠く離れた、大きな人の動きが到達していない場所にだけ残っています。もしイエスが今日戻ってきたとしたら、その使徒達にもはや「準備なしに出て行きなさい」と言うことはできないでしょう。その言葉そのものの意味と同時に、これらの言葉は非常に深い道徳的な意味を持っています。それらの言葉を唱えることによって、イエスは使徒達に神を信じることを教えました。それに加え、何も携帯しないことによって彼らを迎える人たちの欲を目覚めさせます。それは利己的な者と慈善深い者とを区別する手段でした。だからイエスは彼らに「あなた達を泊めてくれるのにふさわしい人が誰か探さなさい。」と言ったのです。つまり、「支払う金もない旅人に衣服を与えてくれるほど人間的なのは誰か探さなさい。なぜなら、あなた達の言葉を聞くべき人とはそうした人であるからです。」彼らの慈善によってそうした人を知ることができます。また、果たして、使徒達のことを迎えたり、聞き入れたがらなかった人達に対して、非難したり、暴力やおどしによって強制的に態度を改めさせることをイエスは勧めたのでしょうか。いいえ。単純かつ純粹にその場から去り、善意のある人を求めに行くように教えたのでした。スピリティズムは同じ事をその信徒に伝えます。「誰の意識をも害してはいけません」誰に対してもその信仰を放棄させ、あなたの信仰を受け入れさせようと強要してはなりません。あなた達と同じように考えない人を排斥してはなりません。あなた達のもとへやってくる者を迎え、あなた達を拒む者たちを静かにしておきなさい。キリストの言葉を覚えておいて下さい。昔、天は暴力によって支配されていました。今日は、慈愛によって支配されるのです。(第四章、十一十一)

神より恵まれた病を治す力—支払われた祈り宮を追われた行商人—ただで受けた霊媒性
神より恵まれた病を治す力

一、病人を治し、死者を生き返らせ、らい病人を清め、悪魔を追い出さなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。（マタイ第十章一八）

二、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」とイエスは使徒達に言いました。この教訓より、ただで受けたものに値段をつけて売ってはならないのだと結論づけることができます。使徒達がただで受けたものとは、神より恵まれた病を治す力、悪魔、すなわち悪い霊たちを追い払う力でした。これらの才能は、苦しむ者を助け、信仰を広めるために神によってただで与えられたものでした。イエスは使徒達にその能力を商売や投機的手段や、生活するための手段として使ってははならないと言ったのでした。

支払われた祈り

三、しかし、民衆皆がイエスの言葉に聞き入っている時、使徒たちにこう言いました。「律法学者たちから身を守りなさい。彼らは、長い衣装をまとって歩き回ったり、広場で挨拶をされたりすること、また集会の最前列や宴会の上座が好きです。また、長い祈りを装ってやもめの家を食いつぶします。こういう人たちはより厳しく非難されます。」（ルカ第二十章一四五一四十七）（同様にマルコ第十二章一三十八—四十四）（マタイ第二十三章一十四）

四、さらにイエスは言いました。あなた達の祈りに対し支払いをうけるようなことがあってはなりません。律法学者たちのようであってはなりません。「長い祈りを口実に、やもめの家を食いつぶします」とは、その富を手に入れるということです。祈りとは慈善の行いであり、心の衝動です。他人のために神に捧げたものに対し支払いを要求するということは、報酬をもらって働く仲介者となるということです。そのような時、祈りは内容にしたがって支払われる処方箋と同じようなものになってしまいます。神は祈りの言葉の数によってその価値を計るのでしょうか、計らないでしょうか。答えは二つのどちらか一方でしかありません。もし、たくさんの言葉が必要だったとすれば、少ししかお金を払えない者、あるいはほとんどお金を払うことのできない者はどうなるのでしょうか。それでは慈善の行いとは言えません。もしひとつの言葉だけで十分で、その他の言葉は不要であるとしたら、どうやって支払いを求めるのでしょうか。それは背任行ためではありませんか。神はその恩恵を売るのではなく、与えるのです。であれば、神の恩恵を分けてあげられるわけでもなく、それを得られることを保証してあげることさえもできない者が、神によって聞いてももらえないであろうお願いに対し支払いを求めるとはどういうことでしょうか。慈悲によってのみ懇願することのできる、神の寛容、恩恵、正義の行いを、神は特定の支払いに従わせることは出来ません。それ以上に、それらを支払いによって願うのであれば、神は寛容、恩恵、正義の行いを中止します。私たちの理性、良心、道理は、完璧絶対なる存在である神が、不完全な者に神の正義に値段をつける権利など与えるはずがないと教えてくれます。なぜなら、神の正義とは太陽のようなものであり、貧しい者、富む者すべてに行き渡るからです。地上の君主の権力を取引することが道徳に反する考えるならば、宇宙の統治者の正義を売ることが合法的といえるのでしょうか。支払われた祈りには、ほかにも不都合があります。祈りを買った者はほとんどの場合、自分で祈ることを忘れ、お金を払ったのだから祈る義務から逃れることができたのだと考えてしまいます。霊たちは、彼らに関心を持つ者の熱意に打たれます。第三者にお金を払うことによって自分の代わりに祈ってもらおうとする者の熱意とはどんなものでありえましょうか。祈る義務を他人に委任し、それを受けた者はまた他の者に委任することになるのです。お金の価値によって、祈りの効き目を弱めていることにはなりません。

宮を追われた行商人

五、それから、彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入ると、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、また宮を通り抜けて道具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。そして、彼らに教えて言われた。「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の住処にしたのです。祭司長や、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。(マルコ第十一章一五―一八) (同様にマタイ第二十一章一二―一三)

六、イエスは宮から行商人達を追い払いました。それによって、神聖なるものの取引を、それがどんな形で行われようと、あつてはならないことだと非難しました。神はその恵みも、その許しも、神の国に入る権利をも売ったりはしません。したがって、人間はそれによって支払いを求める権利は有していないのです。

ただで受けた霊媒性

七、使徒達にも霊媒性はあったのですが一現代における霊媒というものも、やはり神よりただでその才能を受けているのであり、それは人間を指導し、善の道を教え神への信仰をもたらしてくれる霊たちの通訳となるためのものなのです。自分たちのものではない言葉、つまりその霊媒の個人的な努力、研究、あるいは個人的な思考等から得た言葉ではない言葉、を売るための才能ではありません。神はその光がすべての人に行き渡ることを望んでおり、ある貧しい家に生まれた者が、「払うお金がなかったから神への信仰を手に入れることができなかった。」「私は貧乏だから、神の慈悲を受けることができなかった。」等と言うことがないことを望んでいます。なぜなら、霊媒性というのは特権ではなく、あらゆるところに存在するものだからです。それに対する支払いを要求するということは、その天が定めた用途を不当に変えるということなのです。

八、善霊が通信をするための条件がどのようなものであるのか、また、人間のどんな利己的な関心を善霊たちは拒絶し、ちょっとしたことでも彼らは集会の場から去ってしまうのだということを知っている人であれば誰でも、集会で呼び出されるたびに善霊たちがそれを聞き入れてくれるのだとは考えません。単純な良識があればそのような間違った考えを追い払います。ましては、私たちにとって大切な人や、尊敬する人をお金をとって呼び寄せるなどということは、神への冒瀆ではありませんか。このような方法であっても間違いなく心霊現象を引き起こすことはできるでしょう。しかし、そこに誠意が存在するかどうか、いったい誰に証明することができるのでしょうか。軽率な霊、うそつきな霊、悪賢い霊、その他劣等な霊は皆、不真面目であり、お金を取る霊媒に呼び寄せられても、いつもそこに現れ、質問されると真偽を問わず、その質問に答えます。ですから、真面目な通信を求める人は、まずそのような場を慎重に求めなければなりません。そして、その霊媒が霊界のどのような質の者と共感を持っているのかを明らかにしなければなりません。善霊たちの好意の恩恵を授かるには第一条件とは、霊媒の慎ましき、忠実さ、献身がもたらすものであり、物質的にも、道徳的にも利害関係が一切あつてはなりません。

九、道徳的な問題の他にも、それと同等に重要な、霊媒の能力に関する問題があります。真面目な霊媒性とは、生活手段ではなく、また、生活手段としようなどと考えてもいけません。なぜなら、そうすることによって、その力が道徳的信頼性を欠くようになり、ただの運勢占い師のようになってしまふばかりでなく、生活手段とするためには物理的にも障害があるからです。一霊媒性というものは本質的に非常に不安定な力であり、すぐに消えたり、変わったりするもので、誰にも完全に頼ることができないものです。ですから、その力を生活に用いようとする者にとって、それは非常に不確実な手段であり、最も必要となる時に消滅しうるものなのです。それと違っているのが、研究と労働によって得ることのできた能力であり、努力によって得たものであるからこそ本当の財産となりうるもので、そこから利益を得ることも当然許されています。しかし、霊媒性は芸術でもなければ能力でもありません。だから、生活手段としてはならないのです。霊媒性は、霊たちの協力があつてこそ存在するのです。霊たちが存在しないところに霊媒性は存在しえず、その才があつたとしても、それを使う

ことはできないのです。ですから、心霊現象を決まった時に確実に起こすことができる霊媒は、世界中に一人も存在しないのです。霊媒性の利益を得ようとするのは、確実に自分のものではないものを望むことです。その反対を言う者は、お金を払う者を騙しているのです。それだけではありません。心霊現象とは霊媒が自分自身で自由に決めるのではなく、霊たち、死者の魂が決めるのです。そうした霊たちの協力に、その霊媒は値段をつけて売っていることになるのです。霊媒性を売るということは、本能的に拒絶すべきことです。人々の無知、迷信、盲目的な信仰、ペテン師達に濫用され、墮落をもたらした、こうした取引をモーゼは禁止したのでした。現代のスピリティズムは、問題の重要性を理解した上で、霊媒性で利益を得ることを否定し、霊媒性を使命としてとらえるのです。

(「霊媒の書」第二十八章参照。「天国と地獄」第十二章。)

十、霊媒性とは神聖なるもので、慎ましく、信仰のもとに使われなければならないものです。それらの中でも、特に絶対にこうした条件が整わなければ使うことができないのが、治癒の力です。医師は、一般に苦しい犠牲によって得た、研究の結果を与えてくれます。磁気を伝える者は、自分自身のフルイドや、その健康を犠牲にすることによって、磁気を伝えてくれます。彼らはその犠牲に対し、お金を要求することができます。しかし、治癒する霊媒は善霊たちの有益なフルイドを伝えるのであり、それを売る権利は有しません。イエスとその使徒達は、貧しい生活をしていましたが、人々の病を治すとき、お金を要求することはありませんでした。ですから、生活するための手段を持たない者は、霊媒性以外に生活の手段を探しなさい。そして、必要であれば、物質的な必要性に満たされた上で余った時間だけに、身を捧げなさい。善霊たちは、あなたの献身と犠牲を考慮してくれ、逆に霊媒性によって生活を向上させようとする者からは遠ざかって行きます。

第二十七章 求めなさい。そうすれば与えられます

祈りの条件—祈りの効果—祈ること・思考の伝達—理解できる祈り死者や苦しむ霊たちへの祈りに
ついて—霊たちからの指導—祈り方—祈りの喜び

祈りの条件

一、また、祈る時、偽善者たちのように祈ってはいけません。彼らは、人に見られたくて教会や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに申し上げます。彼らは既に自分の報いを受け取っています。しかし、あなた達は、祈る時には自分の寝室に入りなさい。そして、戸を締め、隠れて、あなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で行われていることを見ておられるあなたの父は、あなたに報いてくれます。また、祈るとき、異国人のように多く唱えてはなりません。彼らは多く唱えれば聞かれると思っているのです。だから、彼らのようになろうとしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなた方がお願いをする先に、あなた方に必要なものを知っておられるからです。（マタイ第六章一五一—八）

二、また祈る時、あなたの心の中に、誰かに対する恨みを持っているなら、その者を赦してあげなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父は、あなたがたの罪をも赦して下さいます。なぜなら、あなた方が赦さないのであれば、あなたの父もあなたの罪を赦してはくれないからです。（マルコ、第十一章一二五、二六）

三、自分を正しいと自ら認め、他の人々を見下している者たちに対し、このようなたとえを話しました。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり税の取立人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなた方に申し上げます。税の取り立て人が、正しいと認められ家に帰り、もう一人は認められませんでした。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ第十八章一九—十四）

四、祈りの条件はイエスによって明確に示されています。イエスは言いました。「祈る時は、人目につくところで祈るのではなく、隠れて祈りなさい。」と。たくさん祈っているふりをしてはなりません。なぜなら、祈りの言葉の数ではなく、祈る人の誠意によって祈りは伝わるからです。誰かに対し、なにかひとつでも敵対の気持ちがあるのであれば、祈る前にその人を許してあげなければなりません。なぜなら、慈善と逆の感情は一切に捨てて、清い心をもって祈るのでなければ、その祈りが気持ち良く神に伝わるわけがないからです。「税の取立人」のような謙虚な気持ちで祈りなさい。「パリサイ人」のような虚栄心をもって祈ってはいけません。見るべきものはあなた達の短所であり、長所を見てはなりません。もし、他人と比較するのであれば、あなた自身に存在する悪を探しなさい。（参照—第十章七、八）

祈りの効果

五、「だからあなたたちに言うのです。求めるものが何であっても、祈って求めるときには、もうそれらを得たものだと信じなさい。そうすれば、それらを得ることができます。」（マルコ第十一章一二四）

六、神が私たちの必要としていることをすべて知っているのであれば、私たちはそれを神に対し言い直すまでもないと、祈りの効果を否定する人がいます。また、宇宙のすべてが永遠の法則によって動いているのであれば、私たちの願いで神の意向を変えることはできないと言います。一人一人のき

まぐれに依じて神が取り消したりするようなことはできない不変の自然の法則は、間違いなく存在します。しかし、だからと言って、人生のすべての状況下で、運命にただ身をまかせなければならないと信じるのは大きな間違いです。もしそうなのであれば、人類は単に受動的な存在でしかあり得ず、自由意志もイニシアチブも持つ事はできなくなります。運命のもたらす出来事の前に、人はただ頭を下げるだけでしかなくなってしまいます。そうした出来事を避けようともせず、危険から遠ざかるようともせず。神は、使わないために理解力と知性を私たちに与えてくれたのではありません。欲しながらぬために私たちに欲求を与えてくれたのではありません。なにもしないために私たちに行動力を与えてくれたのではありません。人は、自由に行動できるからこそ、その人の下した決定に応じた結果を、彼自身も、また他の人も、得ることができるのです。その人のイニシアチブによって、運命から取り除くことのできる出来事というものは存在するのです。しかし、だからといって、それは宇宙の法則の調和を崩すということではありません。言うならば、時計の差す針が遅れていようが進んでいようが、針を動かす時計の仕組みに変わりはないのと同じことです。つまり、神は全体を支配する法則の不変性をとり消すことなく、その意志によってある程度の願いを聞き入れてくれることができるのです。

七、「求めるものは、得ることができます。」という金言を、得るためには求めるだけでよいのだと解釈してしまっただけは不合理ですし、求めたものをすべて得ることができなかつたと言って神を非難するのは不当です。なぜなら、神は私たちにとってなにがふさわしいのか、私たちよりもよく知っているからです。それは、常識のある父親が自分の子供にとって不利益となるものは断ると同じことです。一般に人には現在しか目に入りません。しかし、もし苦しむことがある者にとって幸せな将来をもたらすのであれば、神は、外科医が病気を治すために手術を病人に受けさせるのと同じように、その者に苦勞させるでしょう。神を信じ、求めるのであれば、神は勇氣、辛抱、甘受の気持ちを与えてくれます。さらに与えてくれるものは、善靈たちからの暗示から導き出される、苦勞から解放されるための手段であり、あとはそれを本人が実行すればその暗示の真価を知ることができます。「自分を助けなさい。そうすれば、天は助けてくれます。」という金言のように、神は自分自身を助ける者を補助してくれるのです。自分の能力を使わず、何もせず他人まかせの助けを求め、すべてを待つ者を助けるのではありません。(第二十五章——以降参照)

八、例を挙げてみましょう。ある人が砂漠で迷っているとします。ひどく喉が渇き苦しんでいるとします。衰弱し、地面に倒れてしまうとします。その人は祈り、神の助けを求めますが、どんな天の使いも飲物を持ってきてくれるわけではありません。しかし、善靈は、ある一定の方向へ向かって進むという考えを暗示します。すると本能的な衝動によって、その人は全身の力を込め起き上がり、思いついた方向へ向かって進み出します。ある高台にたどりつき、遠くに小川が流れているのを発見し、それによって勇氣を得ることになります。信仰のある者であれば、「神様、よい考えを私にひらめかせてくれ、有り難うございました。」と言うでしょう。神を信じない者であれば、「私はなんとすばらしい考えを持っていたのだろう。左を選ばず、右の道を選び、わたしはなんと運がよかったのだろう。思いつきも實際役に立つものだ。倒れてしまわなかった自分の勇氣がうれしい。」ではなぜ善靈ははっきりと「この道を進みなさい。そうすればあなたの必要としているものが見つかります。」と言わなかったのかという質問が残ります。なぜ、その人が衰弱していた時、その人を導き、助けるためにその善靈は姿を表さなかったのでしょうか。そうしていれば、神による干渉というものを理解させることができただけです。それはまず、自分自身の力で自分を助けなければいけないと言う事を教えるためです。次に、はっきりと示さないことによって、その人の信心を試し、その人の意志に従うためです。神はその人を、転んだ時、誰かが見ていれば泣き叫び起こしてもらおうのを待ち、誰も見ていなければ自分で努力し立ちあがる子供のような状況に置いたのです。もし旅の供をしたトビアスを守っていた天の使いが、「あなたを旅の間守り、すべての危険から保護するよう神によって送られて来ました。」と旅の出発前に言っていたとすれば、トビアスにとってなんの価値もなかったこととなります。だから、その天の使いは旅から戻って来た後初めてその存在を現したのです。

祈ること—思考の伝達

九、祈るということは神や霊の加護を求めることです。祈りによって、私たちは、私たちが指導してくれている者と精神的に関係を結ぶことができます。祈ることの目的には、願い、感謝、または賛美があります。私たち自身のためにも、また、他人のためにも祈ることができます。生きている者のためにも、また、死んだ者のためにも祈ることができます。神への祈りは、神意に基づき行動する善霊たちに伝わります。善霊に伝わった祈りは、神にも伝わります。神以外の者に向かって祈るとき、神以外の者は単なる仲介者としての役割を果たします。なぜなら、何事も神の意志なしには生じないからです。

十、スピリティズムは、私たちが祈る相手が、私たちの訴えに答えてくれる時も、祈る相手に私たちの考えが彼らに伝わる時も、どうやって思考の伝達が行なわれるのかを教えてください。そのことは、祈ることに対する私たちの理解を深めてくれます。祈ることによって何が起きるのか理解するためには、空間を埋め尽くす宇宙フルイドのなかにある生きている者、死んでいる者のすべての存在を思い浮かべる必要があります。空間を埋め尽くす宇宙フルイドとは、地球上の空間を大気が包み、埋め尽くしているような状態にあります。宇宙フルイドは、意志によって衝撃を与えられると、空気が音を伝達するように、思考の伝達の手段となります。ただし、その違いは、空気の振動は制限されたものであるのに対し、宇宙フルイドの振動は無限に広がるということです。ある思考が、地上の人間や、宇宙に存在する何者かに伝わる時、または、生きた者から死んだ者に伝わる時、或いはその反対の場合、空気が音を伝達するように、宇宙フルイドは連鎖状態となって思考を伝えるのです。この連鎖状態のエネルギーは思考と意志の強さに直接関係があります。これによって、霊がどこにいたとしても、祈りは伝わります。また霊たちはお互いに交信しあうのです。同じ様な方法で、霊たちは私たちにインスピレーションを伝えてくれるのです。また、私たち人間もこれによって遠隔地同士で連絡を取り合うのです。この説明を、祈りを単なる神秘にとらえ、その効力を理解しない人たちのために送ります。しかし、祈りを具体化するためのものではありません。ただ、祈りの効力というものをより理解し易くするためのもので、祈りが直接的に、積極的に物事に働きかける力があるということを知るためのものです。しかし、だからといって、祈りの効力と神の意志に関係がないわけではありません。神は最高の万物に対する正義です。祈りを有効なものとするのができる唯一の存在だからです。

十一、祈りによって人は善霊を引きつけます。善霊は、人が良い決断をするように助けるため、良い考えをひらめかせてくれます。それによって、人は困難を乗り越えるのに必要な道徳的な力を受け、正しい道からはずれている場合には、正しい道に戻されます。また、過った行動が引き付ける悪い考えから、自分を遠避けようとする意志を与えてくれます。何かの過剰な摂取によって健康を悪化させた人がいたとします。死ぬ直前まで過剰な摂取を改めることなく、健康状態が悪いまま苦しい人生を続けたとします。この人は自分の健康が回復できなかった事に関し、神に対する不満を訴える権利があるのでしょうか。ありません。なぜなら、祈りによって誘惑に耐える力を得ようと思っていれば得る事はできていたはずだからです。

十二、もし、人生の中で出会う不幸を二つに分類するならば、一つは、人間にとって避けることのできないもので、もう一つはその人自身の不注意や、不品行によっておきる苦勞からくるもの（第五章一四、参照）ですが、一般に後者の方がずっと多いことがわかります。人間自身がその悲しみを自ら作っているということは明かであり、したがって、常に知恵と慎重さをもって生きることができれば、悲しみを軽減することが可能であるということがわかります。こうした不幸が神の法に私たちが違反することから生まれるというのは確かであり、もしこの神の法を厳重に守ることができれば、私たちは完全に幸福になれるということも明らかです。私たちが生命を維持するために最低限必要なものを満たしたことに飽きたらず、必要限度を越えて何かを摂取してしまうようなことがなければ、摂取過剰によって引き起こされる病にかかったり、その病がもたらす苦しみに悩まされることはないでしょう。わたしたちの野心を抑えることができれば、没落する恐怖を味わうこともありません。私たちの能力以上に向上することを望まなければ、落ちぶれることを心配する必要はありません。もし、謙虚であることができれば、プライドを傷つけられ失望することはありません。慈善に身を捧げることができれば、不満、不服、ねたみ、嫉妬を感じることもなく、けんか、別れを防ぐことができま

す。誰に対しても悪いことをしないことができるのであれば、人に恨まれる心配をする必要はありません。もう一方の悲しみに対しては、人間は何もすることが出来ず、どのような祈りもそこから解放されるためには役に立たないと考えることができます。しかし、そうであったとしても、自分自身の行動に帰因する悲しみのすべてを避けることができるのであれば、それだけでも充分ではないでしょうか。そうした場合には、祈ることとは何であるのか、容易に理解することが出来ます。祈ることの目的は善霊たちの道徳的なインスピレーションを引きつけることであり、また行動に移せば私たちにあって致命的となりうる悪い考えに抵抗するのに必要な力を得ることなのです。そうした目的が果たされるため、善霊たちは苦しみを私たちから遠ざけてくれるのではなく、苦しみを生じさせるような悪い考えから私たちを遠ざけてくれるのです。善霊たちは、神の意向を妨げることはありません。自然の法則の流れをさえぎることはありません。反対に、私たちの自由意志を指導しながら、私たちが神の法を破ることを禁じるのです。しかし、私たちが気がつかぬ間に、目には見えない形で、私たちが苦しみを避けようとする意欲を失わないように、それを行います。そのとき、人間は良い忠告を求めそれを実行しようとする姿勢にあります。同時にその忠告に従うか否かを選択する自由を有しています。神はそのように、人間がその行動に対する責任を持つことを望み、善か悪の選択をした後、それによって得たものの真価がその人に理解されることを望んでいます。祈りの結果は、人間が熱烈に求めたときいつも得ることができるのです。つまり、「求めなさい。そうすれば与えられます。」という言葉がそこに当てはまるのです。祈りの効果というものが、私たちに悪い考えから遠ざけてくれることだけに限られていたとしても、非常に大きな結果をもたらすことになるのではないのでしょうか。物質世界と霊の世界の関係を明らかにすることによって祈りの効果を証明することは、スピリティズムに課された役割です。しかし、実際の祈りの効果は私たちに悪い考えから遠ざけてくれるだけではありません。祈りはすべての霊によって勧められています。祈りを放棄することは、神の好意を無視することです。神の加護を自分から拒むことであり、また、他人に対して行うことのできる善い行いを拒むということです。

十三、神は神に向かって祈る者に答える時、多くの場合、祈る者の意向、献身、信仰に報いることを望みます。だからこそ、善い人の祈りの方が神の目にはより値打ちがあるものに映り、その祈りはより強い効力を持つのです。なぜならば、悪意を持つよこしまな者は、本当に信心深い者だけが感じることができる信頼と熱意をもって祈ることはできないからです。自己中心的で、口先だけの祈りを唱える者からは、単なる言葉しか出て来ず、祈りに力をもたらす慈善の気持ちが生まれてくることはありません。であれば、私たちが誰かに祈ってもらうとすれば、神を喜ばすことのできそうな行いの善い人に本能的に頼むだろうというこは明かです。なぜなら、そうした祈りの方が神にはよく聞き入れてもらえるからです。

十四、祈りとは一種の磁気的な力の働きなので、その効力はその人の持つフルイドの力によって変化すると仮定することができるかもしれません。しかしながら、そうではありません。人間の祈りに答える時、必要な場合はその祈る者にとって不足しているものを補うのです。それは、そのようにすることがその人にとって有益であり、そうした恵みを受けるに値すると判断された時であり、霊たちはその者に代わって直接的に働きかけたり、一時的に特別な力を与えたりするのです。健全な影響を他人に与えるにはまだ自分の善さは不十分だと考える者は、どうせ聞いてもらえないだろうと考え、他人のために祈ることを忘れてしまうようなことになってはいけません。自分の劣性を自覚することは謙虚であることの証拠であり、それはいつも神を喜ばすことになます。そして神はいつもそうする者の慈善的な志ををくんでくれます。神に寄せる信頼と熱意は、善へ向かうための第一歩です。そして善霊たちも喜んでそのような方向へ私たちを向けようとするのです。自分の権力や価値しか信じていることが出来ず、それが永遠の神の意志を越えるものだと考えるプライドの高い者の祈りは、拒絶されます。

十五、祈りの力とは、思考の中に在るもので、祈りに使う言葉、祈る場所、祈る時間とはまったく関係がありません。ですから、いつでも、どこでも、一人でも、また大勢でも祈ることは出来ます。場所と時間は単に黙想するための環境に影響を与えるものです。どんな祈りも、祈るすべての者が、同じ目的で同じ考えを持ち、心をひとつにしたとき、より強い力を持つことになります。そうするこ

とは、ユニゾンで声をそろえて唱えるようなものだからです。しかし、一人一人が個別にその者自身だけのために祈るのであれば、大勢で集まることがどれほど重要でありえましょうか。百人集まって、それぞれが利己的に祈ることができる一方、二、三人が息を合わせ真なる神の子の兄弟のように祈れば、その祈りは百人の祈りよりもずっと強いものとなるでしょう。（第二十八章一四、五参照）

理解できる祈り

十六、それゆえ、もし私がことばの意味を理解していないのであれば、話す相手にとって私は異国人であるということになります。また、話す相手にとっても私は異国人です。もし、私が誰も知らないことばで祈るのであれば、私の霊は祈っていることになりませんが、私の知性は実を結びません。あなたが、あなたの霊において神を賛美をしても、あなたの言っていることがわからないのであれば、席についている素朴な人たちは、どうしてあなたの感謝の言葉にあわせ、「アーメン（そうでありませうように）」ということができるのでしょうか。あなたの感謝は伝わりますが、他の人たちは築きあげられないでしょう。（第一コリント一十四章一十一、十四、十六、十七）

十七、祈りは、その祈りを形成している考えのみによってその価値が決まります。理解できない考えに考えを傾けることはできません。なぜなら、理解できない考えというのは心に響かないからです。多くの人が捧げる、理解していない言葉による祈りというのは、霊には何も訴えることのない、ただの言葉の羅列に過ぎないのです。祈りが心に響くには、一つ一つの言葉がある考えを映しだしていなければなりません。もし、一つ一つの言葉を理解できないのであれば、どんな考えをも映し出すことはできません。祈ることの利点が単なる繰り返しの回数の多少に比例すると考え、簡単な公式のように何度も唱え返す人がいます。多くの人が義務として祈ります。また、単に習慣として祈る人もいます。決められた順番で何回か祈りを繰り返すことによって、義務から逃れることができると考えるからです。しかし、神は人の心の底を読み、私たちの思考や誠意を知ります。それゆえ、神が祈りの根底にある意味よりも、祈りの形にこだわると考えることは、神を卑しめることになるのです。（第二十八章一二参照）

死者や苦しむ霊たちへの祈りについて

十八、苦しむ霊たちは祈りを求めますが、それは、祈りが彼らにとってとても有益なものだからです。なぜなら、彼らは思い出されることにより、自分が忘れ去られた存在ではない事を知り、その悲しみも軽くなるからです。しかし、祈りはその他にもっと直接的にも働きかけます。再び勇気を与え、反省と改心によって気持ちを持ち上げようとする意志を刺激し、悪い考えから遠ざけるのです。祈りにより彼らは苦しみを軽くするだけでなく、短縮することができるのです。（天国と地獄第二部一凡例）

十九、ある人は死者への祈りを否定します。なぜなら、魂には、永遠に救われるか、罰に処されるかのいずれかの選択しか与えられないと信じているからです。そうなのであれば、救われようが、罰に処されようが、祈りは役に立たないことになります。こうした信念の価値は別として、避けることのできない永遠の罰というものが実際に存在し、それは私たちの祈りでは中断させることはできないものであると少しの間仮定して考えてみましょう。では、だからといって、罰せられる者への祈りを拒絶することが正しく、慈善深いのでしょうか。それがキリストの教えに則っているのでしょうか。死者への祈りとは死者を自由にするには事足りないかもしれませんが、彼らに対する哀れみの表現となり、彼らの苦しみを和らげることにならないのでしょうか。地上である人が終身刑に処された時、その囚人には減刑の可能性はなかったとしても、その者の背負う拘束の重荷を軽く感じることができるようにと、ある慈悲深い人がその囚人を助けてあげようとするのが禁止されていますか。誰かが不治の病に犯されたとき、治る期待がないからといって、その者を助けることなく、見放すべきなのでしょうか。罰せられる者の中に、あなたにとってとても大切だった人がいるかも知れません。友人、父親、母親、息子。それなのに、彼らが許されることはないと信じているからといって、彼らのどの

渴きを癒すコップ一杯の水をあげることも拒否するのですか。彼らの傷口を癒す薬を塗ってあげることが拒否するのですか。親愛なる者のために、囚人にしてあげられるのと同じことをしてあげようとは思いませんか。彼らに愛の証と慰めを与えないのですか。それではキリストの教えに則っているとはいえません。心を固くしてしまう信念は、隣人を愛せよとなによりも第一に教える神への信仰と調和はできません。永遠の罰を否定するからといって、一時的な罰を否定するわけではありません。なぜなら、神はその正義によって善と悪を間違えるわけではないからです。しかし、罰に処されているからといって、祈りの効力を否定するということは、慰めや良い忠告、はげましの力を否定することです。そして、それは私たちを愛してくれている人達からの道徳的な救済によって得ることができる力をも否定するのと同じです。

二十、神の意向の不変性といった、もっと特殊な理由をあげることによって死者への祈りを否定する人もいます。神は既に決めてしまったことを人間の願いに応じて変えることはできず、さもなければ世界は何一つ安定することはない、と彼らは言います。したがって、人間は神に服従し、賛美する義務はあるが、神に願いをする必要はないと考えるのです。この考え方には、神の法の不変性の解釈の誤りがあります。言うならば、その人は未来における罰を示す神の法をまったく知らないのです。今日、人間は十分に成熟し、その信仰によって、何が神の善良に属し、何が属さないかを理解できるようになったのです。そこで、この神の法は、神意にしたがって行動する善霊たちによって示されたのです。罰の絶対性、永遠性を教える教義によると、後悔の念も、悔恨も念も、罰を受ける者にとって有益ではありません。罰を受けるものにとって、いかなる向上の意欲も無益ということになります。永遠に悪にとどまることを強いられるのです。しかし、もし、決められた期間だけ罰に処されたのであれば、刑期の終わりが来ればその刑は終了します。しかし、そのとき、罰せられた者が改心することができたと誰が断言できるでしょうか。地上で罰を受ける者の多くの例が示すように、刑務所から出てから、以前と同じように悪くなることはないでしょうか。罰が永遠であるという考え方の場合であれば、向上し善くなった人でさえも罰の苦しみのおかれることになります。罰が特定の期間与えられるという考え方の場合であれば、罪を負い続けながらも自由を得た者が得をすることになります。神の法とはより深い配慮に基づいた摂理です。常に公平であり、平等で、慈悲深いものです。どのような罰であれ、その期間を決められることはありません。神の法は次のように要約することができます。

二十一、「人は常に自分で犯した失敗の結果に苦しみます。罰を受けることのない神の法の違反は存在しません。」「罰の厳しさは、違反の度合いによって決まります。」「どのような罰であれ、その長さは決まってはいません。それは罰せられる者の反省と改善する意欲次第だからです。そのように、悪に執着すればするほど罰は長引きます。頑固である間は、罰に終わりはありません。すぐに反省するのであれば罰は短いものとなるでしょう。」「罰を受ける者が、慈悲を求めれば神はそれを聞き入れ、希望を与えてくれます。しかし、ただ後悔するだけでは足りません。過ちを正すことが必要です。このため、罰を受けるものは、新たな試練の中に身を置き、その中で自分自身の意志によって過去に犯した過ちを正すために善行にはげむことになるのです。」「人間はこのように、自ら自分自身の運を決めているのです。与えられた罰を短縮することも、不定の期間長引かすこともできます。人間の幸、不幸は善を行おうとする意志にかかっているのです。」「これが神の法なのです。神の善良と正義による、不変の法です。罪を負い、不幸な霊も、このように自分自身を救うことができます。神の法はどのような条件のもとでそうすることが可能なのか教えてくれています。不足しているものは向上するための意志、気力、勇気でしかありません。もし、祈りによってこの意志を感じさせ、加護を与え、勇気づけることができるのであれば、もし、私たちの忠告によって、彼らに不足している光を与えることができるのであれば、神にその法の撤廃を願うのではなく、自らその愛と慈善の法の実践手段となろうではありませんか。神が認めているように、そうすることによって、私たちはその法に参加することができ、私たち自身の慈善の証を示すことができます。 (天国と地獄第一部四、七、八章)

霊たちからの指導—祈り方

二十二、眠りから目覚め、日々の暮らしに戻った時、すべての人が第一番に取り入れねばならないのが祈りです。ほとんどの者が祈るでしょう。しかし本当に祈り方を知っている者はなんと少ないことでしょうか。他の義務がそうであるように、祈りを義務として負担に感じ、反復することに慣れてしまい、ただ機械的につなぎ合わされ、発音される言葉が神にとってどんな意味があるのでしょうか。キリスト教徒はどの宗派であったとしても、特にスピリティズムを勉強する者の場合は、霊が肉体に戻った時に祈りは行われなければいけません。謙虚な気持ちで偉大なる神の足元まで気持ちを引き上げ、同時に今日までに授かったすべての恩恵に対し、深い感謝の気持ちを抱かなければなりません。また、あなた方は覚えていなくても、新たな力と辛抱を得るために、親しい友達や、私たちを守ってくれている人達に昨夜、あなたの眠りのなかで再会させてくれた事を感謝しなければなりません。神の足元に謙虚な気持ちで身を寄せ、自らの弱さを感じ、神の支え、赦免、慈悲を授かるよう懇願しましょう。その気持ちは奥深くなければなりません。あなたは、その魂を神の元に通じさせ、愛と希望に白く光り放つまで、タボール山でその姿を変えたイエスのように、祈らなければならないのです。あなた方は、あなた方にとって本当に必要な神の恵だけを祈りの中でお願いしなければなりません。あなた方に与えられた試練の近道や、喜び、富を神にお願いしても無意味です。それらをお願いする前に、より大切な辛抱、忍耐、信仰の心をお願いしなさい。あなた方の多くが口にするように、「神は願いを叶えてくれないのだから祈ってもしょうがない。」等と言わないことです。あなた方は神にいつも何をお願いしていますか。あなた達自身の道徳的な改善を何回お願いしたか覚えていませんか。なんと少ないのでしょうか。あなた方が最も多くお願いすることは地上での生活や事業において成功するということばかりで、後になれば「神は私たちのことなどかまってくれない。かまってくれるのであれば、こんな不公平な世の中であるはずがない。」などと叫ぶでしょう。あなた方は愚かな恩知らずです。あなた方の良心の奥深くを探ってみれば、ほとんどの場合、愚痴のもととなっている不平の原因を見つけることができます。何よりも先に、あなた達が向上することをお願いしなさい。そうすればあなた達の上に注がれる大量の恵みと慰めを見ることができるでしょう。（第五章—四参照）いつも祈っていなければなりません、そのために公の広場で膝まづいたり、祈る場所を求めてはなりません。日々の祈りは、それ自体があなたに与えられた義務を果たすことになりませんが、他のいかなる種類の義務をも果たすことを怠ってはなりません。あなたの兄弟が道徳的、物理的になにかを必要としているとき、それを助けることは神への愛の行いではありませんか。何かうれしいことがあったときや、なにかの事故から逃れることができたとき、何かの誘惑が私たちの魂をかすめ通りすぎて行ったとき、気持ちを持ち上げ、神のことを考えることは神への感謝の行ためです。そのとき、心のなかで唱えることを忘れてはいけません。「神よ、祝福されますように。」失敗してしまったと感じた時、ほんの一時思い浮かべるだけでも、謙虚に、最高の審判者に向かって「神よ、許して下さい。（自尊心が強すぎ、身勝手な考えを持ち、慈善の気持ちが欠けていたために）罪を犯しました。同じ失敗を繰り返さぬよう、力を与えて下さい。私の欠点を改める勇気を与えて下さい。」と考えることは悔罪の行いではありませんか。こうした祈りは朝、夜、神聖な日に捧げる定期的な祈りの他に行われなければなりません。つまり、あなた達の習慣を断つことなく、いかなる時にも祈りは行われるべきなのです。そのようにすることにより、あなた達の習慣までもが、神聖なものとなるのです。そして、こうした心底より生まれる考えは、たったひとつの思考であったとしても、直接の動機はほとんどの場合存在しないにもかかわらず、単に習慣となっている時間が機械的にあなたを呼ぶからといって繰り返される長い祈りよりも天の神には聞き入れられます。（V. モノド、ボルドー、一八六二）

祈りの喜び

二十三、信じたい者は皆来なさい。天の霊たちがやってきて、すばらしいことを教えてくれます。子供達よ、神はその宝を広げ、その恵みをあなた達に分けてくれるのです。信心のない者よ。信仰というものがどれだけあなた達の心をなごませてくれ、魂を後悔と祈りに導いてくれるか、もしあなた達ができるならば、祈り。ああ。祈りの時、唇から出る言葉とは、なんと感動を与えるものなのでしょう。祈りとは、熱しすぎた情熱をさましてくれる神が降らした夜露のようなものなのです。信仰の生んだ愛しい娘は、私たちを神に通じる道へと案内してくれるのです。孤独のなかで、一人で深く考え込む時、神に出会うことができるでしょう。そのときあなたの謎は消えてなくなりません。なぜなら、神は彼の方から現れてくれるからです。信じる者よ。あなた達のために本当の人生と

いうものが開かれるのです。あなた達の魂は肉体を離れ、人類が未だ知らない無限なるエーテルの世界に放たれるのです。前進しましょう。祈りの道に沿って進み、天使の声を聞くのです。なんとというハーモニーでしょう。もはや地球で聞いた叫び、混乱した雑音ではありません。大天使の豎琴の音、森林の木々の枝葉の間にたわむれる朝のそよ風よりもやさしい、甘い熾天使の声。なんとという喜びを感じて進むことができるでしょう。この祈りの喜びを、地上のあなたの言葉ではどうも表現することはできないでしょう。あなたの体の隅々までしみ込む、この鮮明でさわやかな喜びは、祈ることによって飲むことのできる泉なのです。祈りによって知られざる生命の住む世界へ放たれる甘い言葉、芳香は、霊たちによって聞き入れられ、吸い込まれます。肉体の世界の欲望から切り離された熱望はいかなるものも神のものとなります。ゴルゴタからカルバリオまであなた達の十字架を運んだキリストのように、あなた達も祈りなさい。あなたの十字架を担ぎなさい。そうすれば、屈辱の十字架を担ぎながらもキリストの魂が感じていた、やさしい感動を得ることができるでしょう。キリストは死ななければなりません。しかし、死ぬということは彼の父の住処のある世界で生きるということだったのです。（聖アゴスティーニョ、パリ、一八六一

第二十八章 スピリティストの祈り

序文

一、霊はいつも私たちに言ってくれます。「形式は何の意味も持ちません。思考の内容そのものがすべてなのです。各々がそれぞれの信じている事にしたがって、最も心地のよい状態で祈りなさい。心に響かぬ数知れぬ言葉よりもたったひとつの善い考えのほうがずっと値打ちがあるのです。」霊は、これと言った絶対的な祈りの方法を示していません。ある方法を示す場合というのは、私たちの考えを導こうとする時で、スピリティズムの教義のある原則に対し私たちの注意を促す時です。あるいは、自分の考えをしっかりと決まった形式で表さなければ祈った気がしないと考えるような、自分をうまく表現するのが不得手な人を助ける時です。本章に集められた祈りは、様々な状況において霊が私たちに書き留めるよう求めたものです。そのときの特別な状況や様々な考え方に応じ、それら以外の違った言葉で、違った形の祈りを示したこともあるでしょう。しかしその根底にある考えが同じであるならば、その形式はどうでもいいのです。祈りの目的とは、私たちの魂を神のところまで持ち上げることです。それぞれの祈りの形式が多様性に富んでいたとしても、神を信じる者であればそれらはどれも違わないものであると理解することができます。スピリティズムを学ぶ者であればなおさらです。なぜなら、神は私たちが誠意を持っていれば、すべての人を受け入れてくれることを知っているからです。ですから、ここにまとめられた祈りを、絶対的な定型の祈りとしてとらえてはなりません。それらは本書にまとめられた福音の教える道徳を形に表したもののなのです。福音の示す、私たちの神と隣人に対し負っている義務を補足したものであり、その中にはスピリティズム教義の原則が盛り込まれているのです。スピリティズムにおいては、口先だけでなく心から唱えられたものであるならば、いかなる宗教の祈りもよいものであると考えます。エスピリティズは何も強要せず、何も非難することはありません。スピリティズムによると神は偉大であり、単にある形式に従わなかったからと言って、懇願したり賛美する者の声を聞き入れなかったりすることはありません。形の決まっていない祈りについて批判する人は、神の偉大さを知らないのです。神が定型の祈りだけを好むのだと信じる者は、神を小さく見ているのであり、人間的な感情の範囲でとらえているのです。聖パウロによると、祈る上で重要なことのひとつとして、祈りが私たちの魂に響くためには理解できるものでなければならぬということあげています。(第二十七章、十六)しかし、そのためには私たちの日常で使う言葉で祈るというだけでは不十分です。なぜなら、日常的な表現を使っている、知性には外国語のようにしか伝わらず、そのため心に響かない祈りがあるからです。一般に、祈りに込められた少しの考えは、過剰な言葉や言葉の神秘性によって押しえつけられてしまいます。祈りはまず第一に明瞭でなければなりません。単純、簡潔でなければならず、無意味に飾られた言葉、過剰な修飾語は、偽物をつくる単なるに金メッキにしかすぎません。言葉の一つ一つがある考えを映し出し、魂に触れ、その価値をもっていなければなりません。そして、一つ一つの言葉にあなたは反応しなければならないのです。そうすることによってのみ祈りはその目的を達成することができるのです。それ以外の方法であれば、その祈りは無意味な言葉の集まりにしかありません。しかし、ほとんどの場合祈る者の気は散り、その落ちつかない様子を見ることができます。口は動かしても、祈る者の表情やその発声を見ればそれが魂の伴わない外面だけの機械的動作であることがわかります。ここにまとめられた祈りは五つの分類に別れています。一、一般的な祈り、二、個人的な祈り、三、他人のための祈り、四、霊への祈り、五、病氣、憑衣に煩う者への祈り。一つ一つの祈りの目的について特に注意し、より理解し易いものとするため、序文として記した部分にはその祈りの動機となるものを並べ、祈りの前置きとしています。

I、一般的な祈り

「主の祈り」

二、序文—霊はこの祈りの章を、単に祈りの一つとしてではなく、祈りの象徴としてこの「主の祈り」で書き出すように勧めてくれました。その祈りはすべての祈りの中でも霊がまず第一に考えるものです。それは、その祈りがイエス自身によって教えられたものであるから（マタイ第六章九—十

三) かもしれませんが、あるいは、その祈りが祈る者の意向にしたがって、他のどんな祈りの代わりにもなるからかもしれません。簡素で最も完全な形、簡単な言葉に込められた崇高なる真の傑作です。最も短い言葉で人間が神との間に約束した自分自身に、また隣人との間に果たすべき義務がすべて効率的に要約されています。また、それは信仰の誓い、神への賛美、服従の行いであり、地上での生活や慈善の原理に不可欠なものを懇願することをも含んでいます。その祈りを他人のために唱えることによって、私たちが自分自身に望むことを他人のために願うことができます。しかしながら、その簡潔さがために多くの人々はその言葉の持つ深い意味を見逃しています。それは一般に一文一文の意味を考えずに唱えているからです。数多く唱えればその回数に応じて効力を増すかのごとく、公式のように唱えるからなのです。その回数とはほとんどいつも神秘的な数です—古くからの迷信的な数の力の信じたり、魔術によく使われる、三、七、九といった数であったりします。この祈りがその簡潔さゆえ私たちに残すことになる空間を埋めるため、善霊の忠告と助けにしたがって、祈りの一文一文にその意味を明らかにする解説と、その使い方を加えて示します。祈る時の状況と、祈ることができる時間に応じ、「主の祈り」は簡潔な形でも、またより詳しく述べる形でも唱えることができます。

三、

I 一天にまします私たちの父よ、御名があがめられますように。

主よ、私たちはあなたを信じています。なぜならすべての存在があなたの力とその善意を示してくれるからです。宇宙の調和は人類のあらゆる能力を超える英知、理性の証明です。偉大で博識なる存在の名は、つつましい草花、小さな昆虫から宇宙を飛ぶ星まで、あらゆる創造物に記されています。あらゆる所に私たちは父なる配慮の証を見ることができます。あなたの創造された物を見て、あなたを称えぬ者は盲目です。賛美せぬ者は自尊心の強い者です。また、その恩恵に感謝せぬ者は恩知らずです。

II—あなたの国（御国）が来ますように

主よ、守ることができたならば人類を幸せにしてくれる英知に満ちた法をあなたは与えて下さいました。この法によって人類は平和と正義を確立することができ、今やっているようにお互いを傷つけ合うのではなく、お互いを助け合うことができるようになるでしょう。強い者は弱い者を制圧するのではなく、加護することになるでしょう。あらゆる物の過剰や濫用から発する悪は避けられることになるでしょう。すべての惨めさとはあなたの法を守らないために生じるのです。なぜなら、致命的な結果をもたらすことのないあなたの法の違反とは存在し得ないからです。あなたは動物達には生きるための必要限度を示す本能を与えられました。動物達は自然にそれにしたがって生きています。しかし、人間には本能の他に知性と理性を与えられました。更に、一人一人に関係するあなたの法を守るか守らないか選択する自由を与えられました。すなわち、善と悪を選択する能力を与えられ、それにより人間が自分の行動に対し責任を負い、その真価を知ることができるようにされたのです。誰もあなたの法を知らないなどと訴えることはできません。なぜならあなたは父なる配慮によって、国籍、宗教を問わず、すべての人間の一人一人の良心の中にあなたの法が記されることを望まれたからです。ですから、あなたの法を守らない者はあなたを見くびっているのです。あなたが約束された通り、いつか人類すべてがあなたの法を守る日がやってくるでしょう。そのとき、神を信じない者はいなくなり、すべての人間が最高なる万物の主としてあなたを認め、あなたの法によって治められた者たちは地球上にあなたの国（御国）を築き上げるでしょう。主よ、人類が真実なる道を歩むことができるように、必要な光をお与えください。そして、あなたの国の到来を早めますように。

III—あなたの意志（みこころ）が天で行なわれるように地でも行なわれますように

子が父親に従うこと、劣等な者がより優秀な者に従うことが義務であるならば、創造された者がその創造主に従う義務はそれらにどれほど劣るのでしょうか。主よ、みこころが行われますようにとは、あなたの法を遵守し、不平をいうことなく神の決定に従うことです。人類は主がすべての英知の源であり、主無しには何事も存在し得ないのだということを理解した時、あなたに従うことになるのです。そのとき、天において選ばれた者たちが行っているように、地球でもあなたの意志の通りに行くこと

になるでしょう。

IV—私たちの日ごとの糧を今日もお与えください

肉体的な力を維持するために必要な糧を私たちにお与え下さい。また、私たちの霊が進歩できますように、霊的な糧をもお与え下さい。動物達は牧場にその糧を見つけます。しかし人類はその糧をその知的な財産と自らの活動によって得なければなりません。なぜなら、神は人類を自由な身に創造されたからです。あなたは言われました。「額の汗でパンをこねなさい。」と。その事によって、人間に労働を義務として与えられました。働くことは、肉体労働であれ、知的な労働であれ、人間に知性を使わせ、必要なものや、よりよい生活を得る手段となるのです。労働なしでは人類は不変なものとなってしまう、善霊の幸せを望むことはできません。怠惰を楽しみ、努力なくしてすべてを手にいれようとしたり、必要以上のものを求めるのではなく、必要なものを手にいれようと、神の意志を信頼し、意欲的に働く者を見守って下さい。（第二十五章）自分自身のせいで氣力を失ってしまう者がどれだけ存在するのでしょうか。不注意であったり、先見の明がなかったり、あるいは野心を抱き、あなたがお与えになられた物に満足しない者。彼ら自身が不幸を自らつくりだしているのですから、不平を言う権利は有しません。それも、自分で犯した罪そのものに罰せられているのだからです。しかし、無限に慈悲深いあなたは、そんな者たちをも見捨てたりはされません。言うことを聞かぬ子供が心からあなたの方向へ向き直るよう、天より手を差し延べて下さるのです。（第五章、四）私たちの運を悲しむ前に、その運が自分の手によってつくられたものであるか問ってみます。私たちにふりかかってきた一つ一つの不運を、避けることが出来なかったかどうか確かめてみます。神は私たちに苦境から抜け出せるよう知性を与えてくれ、それを正しく使うかどうかは私たち自身にかかっているのだと繰り返し言い聞かせます。主よ、ですから、私たちの日ごとの糧をお与えください。つまり、労働によって必要なものを得る手段をお与え下さい。必要以上のものを得ることが出来ないからと不満を言う権利は誰も有しません。もし、労働することが不可能である場合には、神意を信じます。もし、私たちの努力にもかかわらず、神の計画の中でより厳しい苦難によって私たちが試されることになっているのであれば、現世、もしくは過去の人生において犯したであろう罪の正なる償いとして受け入れます。なぜなら、あなたが正義であり、不当な罰は存在せず、理由なくして罰せられないことを私たちは知っているからです。主よ、私たちが持っていないものを持っている者や、私たちが必要としているものを必要以上に有している者に対し、私たちがねたみをおこすことがないよう、お守り下さい。神の教えられた慈善と隣人を愛する法を忘れてしまった人達をおゆるし下さい。（第十六章、八）悪人の繁栄、善人達をも襲う不幸を見ても、あなたの正義を否定するような考えを私たちの霊より遠ざけて下さい。一方、私たちはあなたが与えて下さった新たな光によって、あなたの正義が、誰一人例外とせず守られることを知りました。つまり、悪人の物質的な繁栄はその肉体の存在と同じようにはかなく、後に恐ろしい不幸を引き起こすことになるでしょう。一方で甘受することにより苦しむ者にとって、その喜びは永遠のものとなるでしょう。（第五章、七、九、十二、十八）

V—私たちの負いめをお赦しください私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました

主よ、あなたの法に対する違反の一つ一つは、あなたに対する私たちの攻撃であり、遅かれ早かれ支払うことになる私たちの負債を増やすことになるのです。これ以上増やさないよう努力することを約束いたしますので、どうか永遠なる慈悲においてお赦し頂けますようお願い致します。あなたは私たちすべてのために慈善を明確な法としてつくられました。しかし慈善とはただ単に私たちの同胞達を必要に応じて助けてあげるだけではなく、同胞達の攻撃を忘れ、赦してあげることでもあるのです。私たちの不満の原因をつくった者たちに対する慈善に欠けておきながら、どうしてあなたの赦免を求めることができますでしょうか。主よ、私たちの回りの人々に対しどんなうらみ、憎悪、怒りの気持ちをも抑える力をお与え下さい。私たちの心の中に復讐の欲望を抱かせようと死が不意をついて襲ってきませんように。もし、あなたが私たちを今日この世から連れて行かれ試されたとしても、処刑の執行者たちのために最期の言葉を残したキリストのように、うらみの感情からまったく解放されてあなたの前へ出向くことができますように。（第十章）私たちに苦しめる悪人達による迫害とは私たちの地上における試練のひとつです。それらはあなたがイエスの言葉を通じて「正義のために苦しむ者は幸いです」と言われたごとく、その他の試練と同じように永遠の幸せへの道を開くのですから、彼らの非道の好意をののしることなく、不平をこぼさず受け入れなければなりません。したがって、私

たちを傷つけ辱める者たちに祝福がありますように。なぜなら肉体の苦しみによって私たちの魂は強化され、私たちは侮辱からも解放されることになるからです。（第十二章、四）主よ、御名があがめられますように。なぜなら、私たちの運命とは死後、取り消し不能に決められてしまうのではないということをお教えたからです。私たちは、更なる進歩のため、過去の過ちを償い改めたり、現世において行うことができなかつたことを新たに実現させるための手段を、また別の人生において得ることができるのです。（第四章、第五章、五）

このことによって、はじめて人生におけるすべての見かけ上の変則的な出来事が説明されます。光は私たちの過去にもと未来にも差しています。それはあなたの最高なる正義と永遠の善意の輝かしい印です。

VI—私たちが誘惑に負けませんように①、悪からお救いください。

主よ、悪霊の勧めに抵抗できる力をお与え下さい。彼らは私たちに悪い考えを思いつかせ、私たちを善の道から反らそうとします。しかし、私たちはこの通り向上と償いのために地球上に生まれた未完成な霊です。悪の原因は私たち自身の中にあり、悪霊は私たちの悪い性癖を利用し、そこへ入り込み私たちが誘惑しているに過ぎません。私たちの一つ一つの未完成な部分が悪霊の影響に対し開かれた扉のようなものである一方で、悪霊は完璧な者の前には無力であり、対抗しようとはしません。彼らを遠ざけようと何を行ったとしても、私たちが悪を完全に放棄し、善を行う強固な意志を彼らの前に見せるのでなければまったく無効です。したがって私たちは努力を私たち自身に向けなければならないのです。そうすることによって悪霊は自然に私たちの回りから遠ざかって行くのです。なぜなら、彼らと呼ばれ寄せるものは悪であり、善に対しては拒絶するからです。（この先の「憑衣に煩う者への祈り」参照せよ）主よ、私たちが弱くなったときお守り下さい。私たちの守護霊や善霊の声を通じ私たちの欠点を改めようとする意志をお与え下さい。そのことによって、不道徳な霊の接近に私たちの魂を閉ざします。（この先十一参照せよ）主よ、したがって悪とはあなたの仕業ではないのです。なぜならすべての善の源よりどんな悪も創られるわけではないからです。悪とは、私たち自身があなたの法を破り、あなたが与えてくれた自由を悪用することによって、作りだしているのです。人類があなたの法を守るようになった時、より進歩した世界がそうであるように、地球上からも悪は消えるのです。誰にとっても宿命的な悪は存在しません。その悪を楽しむ者にとってそれが抵抗できないもののように映るだけなのです。私たちに悪を働こうとする意志を持つことができるのなら、善を働こうとする意志を持つこともできるのです。ですから主よ、私たちが誘惑に抵抗できるように、あなたの、そして善霊の助力をお願い致します。

VII—アーメン（そうでありますように）

主よ、私たちの望みが実現しますように。しかし、すべてをあなたの無限の英知に委ねます。私たちが理解できないことに対しても、私たちの意志ではなく、あなたの聖なる意志が働きますように。なぜならあなたは私たちの善を望まれ、私たちには何がふさわしいのか、私たちよりもよく知っておられるからです。主よ、私たちはこの祈りを私たち自身のために唱えます。しかし、生きている者、死んでいる者を問わず、他の苦しんでいる者や、私たちの仲間、私たちの敵、また、私たちの救済を特に求めている〇〇〇〇〇のためにも捧げます。すべての人達のためにあなたの慈悲と祝福をお願いいたします。

（注）ここで神に向かい、与えられた恵みに対する感謝と、あなた自身もしくは他人のための願いを形に表し、唱えることができます。

注釈—①いくつかの聖書の翻訳は「私たちが誘惑に引き込まないで下さい」とありますが、その場合誘惑というものが神よりくるような意味にとらえられてしまい、神が自ら人類を悪へ引き込もうとするかようになってしまいます。明らかにそれは神への冒瀆であり、神とサタンとを同等にしていることになり、そうした祈りがイエスから出たものとは考えられません。しかし、一般的に信じられている悪魔の行ためという考え方とは一致しています。（「天国と地獄」第十章、「悪魔」参照）スピリティズムの集会

四、私の名において二人でも三人でも集まるのであるならば、私はその間にいます。（マタイ、

第十八章、二十)

五、序文—イエスの名において集まるには、物理的に集まるだけでは事足りません。善の方向を向いた意志と思考の共有によって霊的に集まる必要があります。そうすればイエスはその集会の中にあることになり、イエスもしくは純粋な霊がその代わりとなって参加します。スピリティズムは霊がどのように私たちの間に存在するのか私たちに教えてくれます。流動的、霊的な体によって、または可視状態になるとときにはその姿によって、私たちはその存在を知ることが出来ます。等級が高ければ高い程その光の放射する力は大きく、その遍在性の才により同時に多くの場所に存在することができます。そうするには、思考の光一筋を送るだけで可能となるのです。これらの言葉によってイエスは統合と同胞愛の力を示したかったのです。人数の多少が霊を呼ぶものではありません。もし、そうであったなら、イエスは二人、三人という代わりに、十人、二十人と言っていたでしょう。そうではなく、お互いを励まし会う慈善の気持ちなのです。そのためには二人でも十分ですが、たとえ祈りがイエスに向けられたとしてももし二人が別々に祈るのであるなら、また、なによりもお互いを思いやる気持ちが存在しないのであるならば、二人の間に思考の共有はありません。もしお互いに警戒しあい、憎しみ、妬み、嫉妬を抱くなら、流動体の思考の鎖は、同情の衝撃によって一つに結びつく代わりに反発しあうことになり、そうであれば彼らはイエスの名において集まっていないことになります。そのような場合、イエスはその集会の口実でしかなく、真なる集会の目的ではないのです。(第二十七章、九) だからと言って、イエスがたった一人の言うことを聞いてくれないわけではありません。彼が「私を呼ぶ者は誰でも耳を傾けましょう。」と言わなかったのは、なによりもまず、隣人への愛が不可欠であり、それは個人でよりも複数と一緒にになった方が証明しやすいからです。なぜなら、いかなる個人的な感情も隣人への愛を否定することになるからです。と言うことは、大勢の集会において、二、三人だけが真なる慈善の気持ちで心から結ばれたとしても、残り的人達が自己中心的な考えや世俗的な考えに気をとられているとすれば、イエスは後者たちとはではなく、二、三人の者たちだけとともにあるのです。ですから、言葉や賛美歌やその他外見的な身ぶりが同時に発することによってではなく、イエスの人格そのものであった慈善の精神に基づいた思考を共有することによって、イエスの名において集会を開くことができるのです。(第十章、七、八、第二十七章、二一四)これが、心から善霊の協力を望むことのできる真剣なスピリティストの集会のあるべき姿です。

六、祈り—(集会の始まりにおける祈り) 私たちの集会に全霊が参加し、私たちが悪へ導こうとする者たちを遠ざけ、真実と偽りを区別するために必要な光が与えられることを全能なる神にお願い致します。生きている者も、死者も含め、私たちの結束を分裂させることによって慈善と隣人への愛から私たちが遠ざけようとする邪悪な霊を私たちのもとから連れ去って下さい。もしこの場に入り込もうとする者がいるのであれば、私たちの心の中に彼らが入り込むすきができないようにして下さい。私たちが指導して下さる善霊よ、私たちがあなた達にとって教えやすい生徒となれますように。どんな利己的な考えも、高慢な考えも、また羨み、妬み深い考えも私たちのもとから遠ざけて下さい。ここに集まる者たち、不在の者たち、友達、敵に対しても、寛大さ、慈悲深さをお教え下さい。私たちが励ましてくれる感情によってあなた達の道徳的な影響力を私たちが感謝をもって認識することができますように。あなた達の教えを伝える役目を負った霊媒達に、彼らに託された役目の神聖さ、実践しようとする行い重要性を自覚させ、それによって献身的働き、必要な収穫を得ることができますように。もし、私たちの間に善とは異なるその他の感情を持った者がいれば、その目を光に向けてあげて下さい。また、悪意を持ってここに参加しているのであれば、その者を赦してあげて下さい。私たちがその者を赦します。私たちの霊の指導者である、〇〇〇〇には、特に私たちが監視し、見守ってくださるようお願いいたします。

七、祈り—(集会の終わりににおける祈り) 私たちに教えを伝えに来てくれた善霊に感謝致します。教えられた事柄を実践できるようお助け下さい。私たち一人一人が善を実践し隣人を愛する意欲を強め、ここを出ていくことが出来ますように。これらの教えが、今日の集会に参加することができた苦しむ霊、無知な霊、悪習のある霊にとっても有益なものとなりますように。彼らにも神の慈悲がありますようにお願い致します。

霊媒への祈り

八、神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての肉体に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。（使徒第二章、十七、十八）九、序文一主は光が人類すべてを照らし、霊の声があらゆる所へ響きわたり、不死の証が示されることを望まれたのです。今日霊が世界中の様々な所でその存在を示しているのはそのためであり、老若男女、年の差、おかれた状況の違いに関係なく霊媒力があらゆる人達の間に見られるのは、そうあるべき時がやってきている証拠です。可視の世界を知り、自然の秘密を探るため、神は人類に物理的な視力や肉体的な感覚を与え、また特別な道具を与えました。望遠鏡によって人類は宇宙の彼方を見つめることができるようになり、顕微鏡によって無限に小さな世界を発見することができたのです。見えざる世界を知るため、神は霊媒力を与えられました。霊媒は霊からの教えの通訳となりますが、より分かり易く言い換えるならば、彼らは霊が人間との交信を行うために使用する道具となるのです。霊媒は永遠の生命の地平線を示してくれるのですから、その使命は神聖なものです。霊は人類にその未来を教えるためにやってきます。それは人類を善の道へ導くため、この世で与えられた人類自身の進歩をもたらす物質的な仕事を減らすためではありません。また、人間の野心、欲望を満たすためでもありません。このことから、霊媒はその与えられた能力を悪用してはならないということをよく納得しなければなりません。委任された者で任命されたことの重要性を理解した者はその能力を信心深く用います。もう一つの世界の存在との関係を結ばせ、真剣な目的のために与えられた能力を、自分、もしくは人の娯楽や気晴らしのために用いるなら、神聖を汚した行いとして、良心はその者をとがめるでしょう。霊媒は霊の教えの通訳者として、霊が働きかける私たちの道徳的な変化を遂げるための重要な役割を果たさなければなりません。霊媒が果たすことのできる役割は、その霊能力を向けた方向の正しさに応じます。間違った方向へ向ける者は、スピリティズムにとっては有益どころか、悪い影響をもたらします。彼らと与える悪い印象はまた一人、道徳的に変化することを遅らせることとなります。ですから、同胞の善のために与えられた能力をどのように使ったかということ問われることになるのです。善霊の助けを失いたくない霊媒は、自分自身の向上のために働かなければなりません。その能力を伸ばし、大きくしたい者は、その者を神聖なる目的からそらせてしまうあらゆる事を避け、自分自身を道徳的に成長させなければなりません。もし時々、善霊が不完全な霊媒を使うのであれば、それはそうすることによってその霊媒を善の道へ導こうとするからです。しかし、その霊媒の心が固く、善霊の忠告が聞き入れられない場合は、善霊はそのもとを離れ、すると悪は自由にそこへ入り込むことができるようになるのです。（第二十四章十一、十二）ある期間の間目覚めるようなひらめきを与えられておきながらも、善霊の忠告や通信を利用したり聞き入れない霊媒は、過ちを犯し、無意味でばかげたことを訴えるようになり、明らかに善霊が離れていった印が見られるようになるということを、私たちの経験は教えてくれています。善霊の救済を受け、軽はずみで偽った霊から解放されることがすべての真剣な霊媒の継続的な努力の目的でなければなりません。そうでないのであれば、霊能力というものはそれを持つ者を害し、危険な憑衣へと悪化させる不毛な能力でしかありません。その責任を理解する霊媒は、いつでも奪われる可能性のある彼に属しているわけではないひとつの能力を、自慢するのではなく、それによってどのような善を得ることができるのか神に委ねます。通信が賞賛に値するものであったとしても、それによってうぬぼれたりはいしません。なぜなら通信というものがその霊媒の個人的な功勞とは関係ないことを知っており、彼を通じて善霊が現れることが許されたことを神に感謝するからです。通信の内容が非難の的となったとしても、そのことによって自分を攻めたりはしません。なぜなら、そうした通信内容とはその霊媒がつくりだすものではないということを知っているからです。反対に、自分が悪い霊の干渉を妨げるのに必要な才能をすべて持っておらず、良い通信手段ではなかったと反省するのです。ですから、そうした才能を得ようとして下さい。そして祈りによって不足している力を求めなさい。

十、祈り—全能なる神よ、懇願された霊との通信を善霊が見守ってくれますようにお許し下さい。自分は悪い霊に影響されることはないなどうぬぼれることがありませんように。授かることのできる価値を取り違えてしまうような過ちに導く自尊心から私をお守り下さい。他の霊媒に対し、慈善に反するいかなる感情も持つことがないようお守り下さい。もし私が過ちを犯しそうになった時には、

誰かが私を注意してくれますように。そのような時には、そうした過ちを自覚し、注意を受け入れることができるだけの慎ましさを私にお与え下さい。また、善霊が私に与えてくれる教えを、他人のためではなく、自分のためとして受けとめることができますように。何事であれ、もし、過ちを犯す誘惑に負けそうになったり、私にお与えになった能力によってうぬぼれるようであれば、神聖なる目的のための能力が間違ったことに使われる前に、私自身の道徳的進歩のためにも、私からその力を剥奪して下さい。

Ⅱ、個人的な祈り

守護霊、保護霊への祈り

十一、序文—私たちは生まれた時から、私たちを守護下においてくれた善い霊と関わりを持っています。子供を守る父親のように、与えられた任務を果たします。人生の試練を通じ、私たちを善と進歩の道に導いてくれます。私たちに対する彼の配慮に私たちが答えると彼はたいへん幸せに感じますが、私たちが屈服してしまうのを見ると彼は苦しみます。彼の名前等大した問題ではありません。なぜなら、彼の名はこの地球上では知られたものではないかも知れないからです。ですから、私たちの守護霊、もしくは私たちの善き守神と呼びましょう。彼のことを私たちが親しみを感じるある特定の優秀な霊の名で呼んでもかまいません。私たちには、必ずより優れた霊である守護霊の他に、同じように善く、寛大でも進歩はより少ない保護霊がついています。保護霊とは友達の霊であったり、家族の者の霊であったり、あるいは現世においてはまったく知らない誰かの霊であったりします。彼らは助言によって私たちの人生を見守り、しばしば私たちの日常の行動の間に入ってきます。親切な霊とは、私たちと趣味や嗜好の上で類似性のある霊のことです。そうした霊をひきつける私たちの性質の傾向により善い霊でも悪い霊でもありえます。誘惑する霊は、私たちに悪い考えを植え付け、私たちが善の道から遠ざけようとします。私たちの魂への接近を容易にする開かれた扉のように、私たちの弱点をすべて利用します。私たちが獲物にしようとする者もいますが、私たちの意志と対抗するには無力であることを知ると離れていきます。神は私たちの第一の案内人として、より優れた守護霊を送り、第二の案内人として保護霊や家族の霊を送ってくれています。しかし、保護霊が私たちに与える善い影響とつりあわせるために、私たちのとなりに悪の力もが強制的におかれていると考えるのは間違いです。悪い霊は、私たちの間に優勢を占める方法がある場合において自発的にやってくるのです。それは私たちが弱気になったり、善い霊が与えてくれるひらめきに従うことを無視する場合があります。つまり悪い霊を寄せ付けるのは私たち自身なのです。私たちは善い霊の支援を受けていないことはなく、悪を遠避けることは私たち自身であるのだということがこのことから結論づけることができます。不完全であるがゆえ、人間を苦しめる困難の第一の原因は、多くの場合においては自分自身の性質なのです。（第五章、四）守護霊や保護霊への祈りは、神との間を取りもち、悪い提案に対抗する強さを与え、日常の偶発的な出来事の中で私たちを見守ってくれることをお願いすることを目的としなければなりません。

十二、祈り—神の使いとして人間を見守り、人間を善の道へ歩ませることをその使命としている高尚で慈悲深い霊よ。この人生における試練に向かう私をお支え下さい。悲嘆することなく試練に耐えることができるよう、力をお与え下さい。悪い考えを持たないことによって、私を悪へ導こうとするどんな悪霊にも入り込めなくなるようにしてください。私の欠点をはっきりと自覚できるよう、自分の欠点を知り、自分自身に言い聞かせることを阻む自尊心のバールを私の目の前より取り去ってください。特別に私を見守ってくれている私の守護霊である、〇〇〇〇には特に、また、私のことを心配してくれているその他の保護霊すべてには、私があなた達の保護に値することができますようにお願い致します。私の必要としていることが知られ、それらが神の意志にしたがって聞き入られますように。

十三、（別の祈り）—神よ、私が苦しんでいるとき、私の回りにいる善霊が私を助けに来てくれ、私の力が衰えてしまった時には私を支えてくれることをお許し下さい。彼らが信仰心、希望、慈善の気持ちを私に吹き込んでくれることをお願い致します。それらは私の支え、激励であり、彼らの慈悲

の証なのです。それらの中に人生の試練に立ち向かうために私に欠けている力を見いだすことができますように。そして悪いひらめきに抵抗するために、私を救ってくれる信仰心と私を慰めてくれる愛をお与え下さい。

十四、（別の祈り）一神のお許しのもと、その無限の慈悲をもって人類を見守ってくれている親愛なる霊、守護霊よ。地上での試練の間、私たちをお守り下さい。気力、勇気、そして忍従する力をお与え下さい。善であるものはすべて私たちにお教え下さい。悪に傾くことから私たちを引き留めて下さい。あなた達の善なる影響が私たちの魂に響きますように。私たちを熱愛してくれる友達が、私たちのとなりで苦しみを見守り、喜びを分かち合ってくれていると感じることができますように。善なる守護霊よ、私を見捨てないで下さい。神が私のもとにお送りになる試練を、信心と愛をもって乗り切るために、あなたのすべてのご加護が必要です。

悪い霊を遠ざけるために

十五、忌わしいものだ。偽善の律法学者、ファリサイ派の人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬファリサイ派の人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。忌わしいものだ。偽善の律法学者、ファリサイ派の人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。（マタイ第二十三章、二十五—二十八）

十六、序文—悪い霊はその非道を広めることができる可能性のあるような場所を探しているのです。彼らを遠ざけるには、彼らに遠ざかるように頼んだり、あるいは遠ざかるように命令しても事足りません。人間が自ら引きつけている者を追放しなければなりません。肉体の傷つくところを蠅がかぎつけてくるように、悪い霊は魂の傷をかぎつけてやってきます。したがって虫がつくのをふせぐために肉体をきれいにするように、悪い霊を避けるには魂の汚れたところをきれいにする必要があるのです。悪い霊が多くはびこる世界に住んでいると、心の善良な資質は彼らに抵抗する力を与えてくれますが、それだけでは悪霊にその試みをあきらめさせるには不十分な場合があります。

十七、祈り—全能なる神の名において、私から悪い霊を遠ざけて下さい。善霊が彼らに対し防壁となってくれますように。有害な霊は人間に悪い考えを思いつかせます。ずるい霊、うそつきの霊は人間を騙します。人間の信心を利用し面白がるひやかしの好きな霊よ。私は魂の力をすべて使いあなた達を追放します。あなた達の提案には耳を閉ざします。しかし、神の慈悲があなた達にもあることをお願い致します。私を見張ってくれている善霊よ。悪い霊の影響に抵抗することができる力と、彼らのたくらみの犠牲とならないために必要な光をお与えください。自尊心、うぬぼれに陥らないようにしてください。羨み、嫉妬、憎悪、敵意、慈善に反するあらゆる感情も私から取り除いて下さい。そうした感情は悪い霊を迎え入れるために開かれた多くの扉のようなものだからです。

欠点を治すために

十八、序文—私たちの持つ悪い性癖は私たちの不完全な霊の結果であり、私たちの肉体がもたらすものではありません。もしそうでないとしたら人間はいかなる責任からも逃れることができるはずで、私たちの進歩は私たち自身にかかっています。なぜなら、様々な能力を授かった人間は皆、物事を行うか行わないかを決める自由を持っており、善を行うために不足しているのは本人の意志のみだからです。（第十五章、十、第十九章十二）十九、祈り—ああ、神よ。あなたは私に善と悪を区別するために必要な知性を与えてくれました。それ故、あることを悪いと認識したときはその誘惑に抵抗しようと努力しなかった自分が悪いのです。自分の欠点を認識するための妨げとなる自尊心や、欠点を改めずにいつまでも持ち続けさせようと働く悪い霊から私をお守り下さい。不完全である私は、特に〇〇〇に欠けています。それに対し抵抗できないのはその悪癖に屈してしまう習慣を身につけてしまったです。神は正義であるがため、私を罪ある者としてではなく、善にも悪にも同じように適応できるように創造されました。私が悪の道を進むのは私の自由意志が働いた結果です。しかし悪を行う

自由が与えられたのと同じ理由から私は善を行わなければなりません。それにより、私は進む道を変えなければならぬのです。私が今持っている欠点は、以前の私の人生から持ち続ける不完全性の一部です。それらは私の原罪ですが、私の意志と善い霊の助けによって取り除くことができます。善霊よ、私をお守り下さい。とりわけ、私の守護霊には、悪の勧めに抵抗し悪との戦いにおいて勝利を収めることができる力を与えて頂けますことをお願いいたします。私たちの欠点は私たちを神から遠ざける障害です。しかし、改められた欠点の一つ一つは神の元に近づくために通らねばならない進歩の小道に記される新たな一歩となります。主よ、あなたはその無限なる慈悲によって、私の進歩のためにこの人生を与えて下さいました。善霊よ、この機会を無駄にすることがないように、この人生を有益なものとするように私を助けて下さい。そして神が私をこの世から連れ去ろうと認められた時、この世に生まれて来た時よりも進歩して出ていくことができますように。（第五章五、第七章三）

誘惑に抵抗する力を求めるために

二十、序文—どんな悪い思いつきにもその根源が二つ考えられます。それは私たち自身の霊の不完全性か、私たちの霊に対して働く有害な影響力のいずれかです。しかし後者であるならばこうした影響力に対して無防備であるという弱点を示していることになり、私たちの魂が不完全であるということになるのです。したがって、失敗を犯した者は単に知らない霊の影響を受けたのだと責任逃れすることはできません。なぜなら、誘惑に対して屈しない状態であったなら、その霊はその者を悪に導くことはできなかつたからです。悪い考えを持った時、邪悪な霊が私たちに悪を促しているのだと想像することができますが、それに屈するのも抵抗するのも私たちの完全な自由によります。それは何かを私たちに頼んでくるある生きた人を目の前にした時と同じです。また同時に、私たちの守護霊もしくは保護霊が私たちへの悪い影響と戦っており、私たちがいかなる選択をするか心配し見守っているのだということを思い出さねばなりません。悪行のためらいとは、善霊が私たちの良心を通じて訴えている声なのです。ある考えがすべての道徳的価値の基礎である慈善から離れると、その考えは悪いのだと言うことを認識することができます。自尊心、虚栄心、エゴイズムが先行し、それが他人に損害を与えるものであったり、自分にはして欲しくないことを他人にさせようとしているのであれば、それは悪い考えなのだということになります。（第二十八章、十五、第十章、十）

二十一、祈り—全能なる神よ、失敗すべき誘惑に対し、私が負けてしまわないようにして下さい。私を守ってくれている慈悲深い霊よ、その悪い考えの矛先を変え、悪の勧めに対し抵抗する力をお与え下さい。もし私が抵抗することに失敗してしまったなら、私の過ちに対する報いをこの現世または次の人生において受けます。なぜなら、選択の自由は私に与えられているからです。

誘惑に勝つことができたときの感謝の祈り

二十二、序文—ある誘惑に対し抵抗できたのは善霊の助けのおかげです。なぜならその者は、善霊の声を聞き入れることができたので抵抗することができたからです。神と守護霊に感謝をするべきです。

二十三、神よ、悪にする負けることができなかつた戦いに、私が勝利を得ることをお許し下さいまして有り難うございました。この勝利が新たな誘惑において抵抗する力をもたらししてくれますように。そして、私の守護霊よ、私に助けを与えてくれ有り難うございます。あなたからの勧めを受け入れ、新たにあなたの加護を受けることができますように。

忠告を求めるために

二十四、序文—ある事をすべきか、すべきでないか迷っている時、私たちはなによりもまず次の疑問を投げかけてみなければなりません。

第一、行動にうつすことを躊躇しているそのことは、誰か他人に損害を与え ることになるでし

ようか。第二、それは誰かのためになることですか。第三、もし同じ事を誰かが私にしたら私は満足するでしょうか。

たとえ実行しようとしていることが、自分達だけにしか関わりがないとしても、そのことが自分達にもたらすことになる利益と不都合を秤にかけてみるべきです。もしそのことが他人に関わりがあり、ある人には善をもたらし、別の人には悪をもたらすのであれば、同様にもたらされる善と悪を計算し、実行すべきかやめるべきかを決めるべきです。つまり、最善のことをやろうとしている時でさえも、それを行う機会や、それに伴う状況について考慮することが大切です。それは、そのこと自体が善いことであったとしても、間違った者の手によって行われたり、用心深く慎重に行われなかったりすれば悪い結果をもたらすこともあるからです。そのことを行う前に、それを実行しようとする自分達の力や実行の手段を診断してみるべきです。いかなる場合においても、「疑う時は、避けよ。」という賢明なる金言を思い出し、私たちの守護霊の助けを求めることができます。

二十五、祈り—全能なる神の名において、私を守ってくれている善霊よ、疑いに直面した時には、最善の決定を下すことができますように、感得させてください。私の思考を善の方向へ導き、私を迷わそうとする影響から解放して下さい。（第二十八章、三十八参照）

人生の苦悩の時

二十六、序文—真面目で有益な目的が存在するのであれば、私たちはこの地上における利益を神に願うことができます。しかし、物事が有益であるかどうかということについて私たちは自分達だけのその時点における視点から見てしまい、求めていることの悪い側面というのは必ずしも見えていません。神は、私たちよりもずっとよく物事を見ることができ、私たちには有益となることだけを望んでいるので、自分の子供に害をもたらすものを否定する父親のように、私たちの願いを聞き入れてくれないことがあります。願いが認められなかったからといって、私たちは落胆してはなりません。その反対に、願い求めたものが奪われたことによって、私たちには試練や報いの機会が与えられたのであり、その報酬は、私たちが耐え抜かねばならないことに対する私たちの甘受の気持ちにに応じて受けることができるのだと考えなければなりません。（第二十七章、六、第二章、五一七）

二十七、祈り—私たちの惨めさを見、私たちのことを聞いてくれ、慈悲深く全能なる神よ、ここに哀願いたします。もし、わたしの願いが不合理であれば、私をお許し下さい。もし、あなたの目にも正しく映り、同意に値するのであれば、あなたの意志を実行する善霊が私の願いが叶うように私を助けに来てくれますように。いずれにしても、神よ、あなたの意志の通りになりますように。私の願いが叶わなかったとしても、それは私を試されたあなたの意向であり、私は不平を言うことなくしたがつてます。ですから、私が落胆してしまったり、私の信心と甘受の気持ちが揺らぐことのないようにして下さい。（願いを実際に唱える）

願いが叶ったことを感謝して

二十八、序文—幸いな出来事だけが私たちにとって重要な出来事なのだと思う必要はありません。見かけは小さくとも、私たちの運命にとって大きな影響を及ぼすことがしばしばあります。人間はすぐ善を忘れてしまい、その者を苦しめる事ばかりを先に考えがちです。毎日毎日私たちがたのまないのに受けている恵みというものを記録してみれば、多くの者がその数の多さに驚き、またそれらが私たちの記憶から消えて閉まっていることを知り、自分の恩の知らなさに恥ずかしくなることでしょう。毎晩、魂を神の高さへ持ち上げ、その日の間与えてくれた恩恵を思いだし、そのことを感謝しなければなりません。しかし、特に神の善意と加護の結果を受けた時こそ、自然な形で私たちの感謝の気持ちを表さなければなりません。そのために私たちは仕事をしている手を休めることもなく、その恩恵が神のおかげであるということ考えればよいのです。神の恵みは物質的な物だけではありません。善い考えや、私たちに勧められる幸いな発想についても同様に感謝しなければなりません。自尊心の強い者はそれを自分自身の才能であると思い、神を信じない者は偶然の出来事であると考えますが、信心の強い者はそれを神や善霊のおかげであると感謝します。ですから、長い祈りの文句は必要ないのです。「神よ、私に善いひらめきを与えてくれ、有り難うございました。」と言うほうが多く

の言葉を並べるよりも気持ちが伝わります。私たちに起きた幸いな出来事が神の恩恵によるものだと思う、自然な私たちの心の衝動は感謝の習慣と慎ましさを証明するもので、善霊の共感を呼ぶことができます。

二十九、祈り—無限の善意である神よ、私に与えてくれる恵みによって、あなたの名が崇められますように。それらの恵みが偶然であるとか、自分自身の才能による物だ等と考える者は恥じるべき者たちです。神の意志を实践する善霊よ。そのうちでも、特に私の守護霊には感謝致します。受けた物によって私の自尊心が強くなってしまふことがないように。またそれを善いことだけに利用することができますよ。〇〇〇〇を受けましたことを特に感謝致します。

甘受と忍従の気持ち

三十、序文—苦しみをもたらす出来事が私たちに襲って来たとき、もしその原因を追求するのであれば、しばしばそれは私たちの無謀さや、それ以前の行動における先見の明のなさの結果であることがわかります。その場合の苦しみは自分自身のせいにならなければなりません。もしある不幸の原因が私たちの関わりとはまったく独立しているのであれば、それはその人生における試練であるとか、過去の人生に犯した過ちの報いであると考えることができ、後者であるなら、私たちは自分の犯した罪と同じ方法によって罰せられる償いの法則から、私たちの過去の過ちがどのような物だったのかを知ることができます。（第五章、四、六、七）一般に、私たちが苦しめる物の中には、その場で起きている悪しか見えず、その苦しみが原因で未来のおいてもたらすであろう好ましい結果までは目に入りません。善とは多くの場合過ぎ去った悪の結果であり、病気からの回復というものがそれを目的に痛々しい手段を経た結果であるのと同じです。いずれにしても、苦しみを自分達のためにしたいのであれば、神の意志にしたがって、人生の苦難に勇気を持って立ち向かわなければなりません。そうすれば、「苦しむ者は幸いです。」と言うキリストの言葉が私たちにあてはめられるでしょう。（第五章、十八）

三十一、祈り—神よ。あなたは最高の正義です。したがって、この世におけるすべての苦しみにはその原因とその必要性があるに違いありません。私が経験している苦しみを過去における過ちの報いとして、また、将来への試練として受け入れます。私を守ってくれる善霊よ、悲しむことなしに苦しみに耐えることができる力をお与え下さい。その苦しみを有り難い注意としてとらえることができますように。それによって私の経験が増し、自尊心、野心、虚栄心、エゴに打ち勝つことができますように。また、それが私の向上のためになりますように。

三十二、（別の祈り）神よ、あなたが送られた試練に耐え抜く力が与えられることをお願いすることの必要性を感じます。必要な事を理解することによって、光が私の霊の中に強く輝き、私を救ってくれようと苦しみながら広がっている愛を十分に感じ受けることができますように。神よ、私は忍従し、身を捧げます。しかし、悲しいことに私はとても弱く、神が私を助けてくれないのであれば、気力を失ってしまいます。主よ、私を見捨てないで下さい。あなた無しに、私は何者でもありません。

三十三、（別の祈り）永遠なる神よ、あなたの方を見上げると、元気づけられました。あなたは私の力です。私を見捨てないで下さい。神よ、私は自分の不正の重さに押しつぶされてしまっているのです。私を助けて下さい。あなたは私の肉体の弱さを知っているのですから、私から目を離さないで下さい。燃えるようなどの渇きに苦しんでおります。命の水のほとばしる出水をお与え下さい。私はそれで渇きを癒します。私の口が、人生の苦悩に対する不満をこぼすためではなく、あなたを賛美する歌を歌うために開きますように。私は非弱です。しかし、あなたの愛が私を支えてくれます。永遠なる神よ、あなただけが偉大であなただけが私の人生の目的であり、行き着く所です。私を痛めつけるのであっても、それはあなたが私の主人であり、私が不忠実な奉仕者であるのですから、あなたの名が崇められますように。そのとき、私は悲しむことなく頭を下げます。なぜなら、あなたは偉大で、あなただけが私たちの人生のめざすものであるからです。

切迫した危険の前に

三十四、序文—私たちが出逢う危険を通して、神は私たちの弱さや私たちの命のはかなさを私たちに思い出させます。私たちの命とは神の手中にあり、それは私たちがまったく予期せぬ時にいつでも切れる可能性のある一本の糸によってつながれているのだということを示してくれます。この点に関しては誰も特権は与えられていません。なぜなら大きな者も小さな者も同じ条件にしているからです。ある危険の性格と、そのもたらす結果をよく調べてみるとほとんどの場合、その結果が生じていたならば、それはある失敗や義務を怠ったことを罰するためであるということが判ります。

三十五、祈り—全能なる神よ、私の守護霊よ、私を救って下さい。もし死んでしまわなければならないとしても、神の意志の通りになりますように。もし、救われるのであれば、残された人生の中で、今後悔している私の悪を改め、更に犯すであろう悪を改めることができますように。

危険から免れることが出来たことを感謝して

三十六、序文—私たちが遭遇する危険によって、人生という労働の精算をするため、私たちはある時突然神に呼び戻されるのだということを示してくれます。それによって神は、私たちが集中して自己の改善をするよう注意してくれるのです。

三十七、神よ、そして守護霊よ、私に危険が襲いかかって来たとき、救助を送ってくれたことを感謝致します。この危険が私にとって警告となり、私が陥りやすい過ちをはっきりと見せてくれますように。主よ、私の命があなたの手中にあり、あなたが認められた時、私をこの世から呼び戻すのだということを理解しています。私を見守ってくれている善霊を通じ、この世で与えられた残された時間を有益に使うことができるような考えをお与え下さい。私の守護霊よ、神が私を呼び戻すことを認められた時、できる限り欠点を減らした上で霊の世界に到着することができるよう、私の欠点を改め、私にできるすべての善を行おうとする私の決意を支えて下さい。

就寝の時

三十八、序文—眠りは肉体の休息ですが、霊に休む必要はありません。無感覚になっている間、魂は物質の世界から解放され、霊としての特性を享受します。眠りは有機的な力と道徳的な力の回復のために人類に与えられているのです。起きている間の活動で失ったものを肉体が取り戻している間、霊は別の霊とともに元気を回復しに行くのです。霊は見ること、聞くこと、与えられた忠告を飲み込み、それらの考えは起きている間直感的に思い出されるのです。眠りは真なる母国を追放された人類の一時的な帰国であり、眠る者とは一時釈放された囚人のようなものなのです。しかし不道徳な囚人がそうであるように、霊は必ずしも眠りによる解放の時をその進歩のために有効に使うわけではありません。その霊が善霊と伴にしようとする代わりに悪い資質を持っているのであれば、その霊と同類の霊を探し、その悪癖を自由に行おうとするのです。この真実を理解する者は就寝が近づくとその考えを持ち上げます。善霊の忠告や、覚えておく貴重な者たちの勧めを受けるため、与えられた短い時間に彼らと伴に会うことができることをお願いします。すると目覚めた時には悪に対しより強くなり、敵対する者たちに対しより勇敢になっていることを感じるべきでしょう。

三十九、祈り—私の魂は短い間他の霊に会いに行きます。善なる者たちがその忠告とともに私を助けに来てくれますように。私の守護霊よ、目覚めた時には、それらの忠告が健全で長続きする印象となって残っていますように。

近い死を感じたとき

四十、序文—生きている間、未来を信じ、未来の運命に目を向け、気持ちを持ち上げることは、霊

を肉体につなぎとめている絆を弱めることになり、霊がすぐに肉体から離れていくのを助けます。そのことにより、肉体がまだ消滅していないうちから、しばしば我慢しきれない魂は広大な無限の空間へ飛び立とうとしてしまいます。反対に、すべての考えを物質的なものの中にとらえる人間にとって、その絆は強固で、それを解くのは痛く、苦しく、死後の世界に目覚めることは心配と混乱をもたらします。

四十一、祈り—神よ、私はあなたを信じ、あなたの無限の善意を信じています。だからこそ、人類が将来、無の世界へ戻るために、知性と未来への熱望を人類に与えたのだとは信じられません。私の肉体とは私の魂を取り囲む、消滅すべき包みのようなものでしかなく、生きることを終えたときには霊の世界に目覚めるのだということを信じています。全能なる神よ、私の魂を私の肉体につなぎ止めている絆が解かれていくのを感じ、後にしようとしている人生という労働の精算を、もう少ししたら行わなければならないのだということを感じます。私が行った善と悪の行いの結果に耐え受けます。向こうの世界にはもう幻は存在しません。ごまかしも効きません。私のすべての過去が私の前で展開され、私の行った業に基づいて裁かれるのです。地上の富は何も持っていくことができません。名誉、富、虚栄心の満足、自尊心、肉体に結びついているのもはすべてこの世に残されるのです。どんなに小さな荷物も伴うことはできず、それらどれもが霊の世界においてはほんの少しの役にも立ちません。私は魂に結びついた物だけしか持っていくことができません。それらはつまり、私の善と悪の性質であり、それらは厳正なる正義の秤にかけられ、私に与えられた地上に於ける地位と同じ厳密さによって、善を行うことのできた機会に、善を行わなかった時のことを計られるのです。（第十六章、九）慈悲深い神よ、私の後悔があなたの元まで届きますように。あなたの寛容を私の所まで差し伸べて下さい。もし私の生存を延長して下さるのであれば、残りの人生は、私の中にある悪も行っていかも知れない悪をも改めるために捧げます。私の順番がついにやってきたのであれば、新たな試練によって償うことが許され、いつか選ばれた者たちの幸せを得るに値することができるであろうという慰めの気持ちを持つことにします。完全なる正義にしか値しない一つの汚点もない至福をすぐに得ることができなくても、それを得る期待は永遠に妨げられるのではなく、働くことにより、遅かれ早かれ、私の努力次第で目的は達成することができるのです。善霊や、私の守護霊が私の近くにいて、私を迎えてくれるのだということを知っています。もう少しすれば、彼らが私を見ることができるようになるでしょう。私がそれにふさわしいのであれば、地上で愛した者に会うこともできるでしょう。また、ここに残して行く者たちは、いつかある日私に会いにやって来ることができ、永遠に伴にいることができるようになるでしょう。それまでは、私がここまで会いに来ることができるようになるでしょう。私が攻撃した者たちにも会うことを知っています。私の自尊心、私の心の堅さ、不公平等、彼らに非難されるべきことを彼らが赦してくれ、彼らの登場が私を辱めることにならないようにして下さい。地上において私に対し悪を働いたり、悪を望んだ者を赦します。彼らに対する憎しみはありません。神には彼らが赦されることをお願いいたします。主よ、この地上の重たい喜びを未練なく棄てることができますように力をお与え下さい。そのような喜びとは、今から入ろうとする世界の純粋な喜びとは似ても似つかぬものです。その世界では、正しい者には苦しみ、悲しみ、惨めさは存在しません。罪のある者だけが苦しみますが、その者にも希望が残されるのです。善霊よ、また私の守護霊よ、この崇高なる時、失敗を犯さぬようにして下さい。私の信心が揺らいだときには、更に強められるよう、神の光の輝きが私の目に入りますように。注—この先V、病人や霊に取り付かれた者への祈り参照。

Ⅲ、他人への祈り

苦しむ者への祈り

四十二、序文—苦しむ者にとってその受ける試練が続くことを望ましいのであれば、私たちの願いによってその試練を短縮させることはできないでしょう。しかし、私たちの祈りを聞いてもらえる訳がないなどと言い訳をし、苦しむ者を見捨ててしまうのは慈善の気持ちに欠けているといえるのではないのでしょうか。それに、例え、その試練が打ち切られることはなくとも、その者の苦しみを最小限にするための何かしらの慰めを与えることができるはずで、試練に耐えなければならない者にとっ

て実際に役に立つものとは、勇気と甘受の気持ちであり、それら無しに試練はその者になにももたらすことはなく、再び同じ試練が与えられることとなります。そのためにこそ私たちは努力し、善霊にお願いをし、忠告や元気づけによって苦しむ者が精神的に回復できるように、また、もし可能であれば、物質的にも援助を受けられるようにするのです。そのとき、祈りはさらに直接作用し、精神力を強めることになるフルイドの鎖を苦しむ者に与えることができるのです。（第五章、五、二十七第二十七章六、十）

四十三、祈り—無限なる善意である神よ、もしそれがあなたの意志にそうのであれば、〇〇〇〇の苦しい状態を和らげてあげて下さい。善霊よ、全能なる神の名において、苦しみに対しあなた達が救援してくれることをお願い致します。あなた達から見て、それらの苦しみが短縮されることが可能でないのであれば、それらの苦しみが苦しむ者の進歩のために必要なのだということを理解させてあげて下さい。苦しむ者が神と未来を信じ、苦痛をより弱く感じるようにしてあげて下さい。落胆し苦しみに屈服してしまい、苦しむことがもたらす有益な結果を失ってしまうことによって、同じ状態が再び未来においてより苦しくなってしまうまいよう、力を与えてあげて下さい。苦しむ者が勇気を失わずにいることを助けるため、私の考えを苦しむ者の所まで運んで行って下さい。

他人に与えられた利益への感謝の祈り

四十四、序文—エゴイズムによって支配されていない者よ、あなたの隣人に起きた善い出来事を喜んで下さい。例えあなたが祈りを通じその事を願ったのでなかったとしても。

四十五、祈り—神よ、〇〇〇〇〇に起きた幸せにより、あなたが崇められますように。善霊よ、その幸せの中に彼が神の善意の力を見つけることができるようにして下さい。もし、その善い出来事が試練であるならば、その出来事が未来においてその者の不利益となってしまうまいよう、その出来事を正しく利用し、その事によってうぬぼれてはいけないのだということを気付かせてあげて下さい。私を守り、私の幸福を願ってくれている善なる守護霊よ、私の心からすべての羨みと嫉妬の気持ちを取り除いて下さい。

私たちの敵や私たちの不幸を望んでいる者への祈り

四十六、序文—「敵を愛しなさい。」とイエスは言いました。キリストの慈善であるこの金言は崇高です。しかし、それによってイエスは、私たちが味方に対し抱く親しみを私たちの敵に対しても抱かなければならないということを規則として与えようとしたものではありません。その金言により、イエスは私たちに敵の違反を忘れ、私たちに対して働く悪を赦し、その悪を善によって報いることを勧めているのです。神の目から見たそのような行いの価値だけでなく、人間にとって本当の優越とはなにかを示しているのです。（第十二章、三、四）

四十七、祈り—神よ、〇〇〇〇〇が私に対して行った悪、行おうとした悪をお赦し下さい。同時に私が犯した過ちを彼が赦してくれますように。もし私の試練として彼を私の前に置かれたのであれば、神の意志の通りにされて下さい。神よ、彼をののしろうとする考えや、彼に対するあらゆる悪意からも私を解放して下さい。彼に起きる不幸を喜ぶ等という、キリスト教徒として恥じるべき考えによって魂を汚すことがないようにして下さい。主よ、あなたの善意が彼に元にも届き、彼が私に対しより好意的な気持ちを持つことができるようにして下さい。善霊よ、悪を忘れ、善を思い出させて下さい。憎悪や復讐心とは、生きていようが、死んでいようが、悪い霊だけに属するものなのですから、どんな憎しみも、どんな怒りも、悪を報いようとするどんな別の悪意も私の心の中に忍び込んでこないようにして下さい。反対に、彼に兄弟愛の手を差し伸べ、彼の悪を善によって報い、私の手の届く範囲であれば、彼を助けてあげることができるようにして下さい。私の発言の誠実さを試すため、彼にとって私が有益となる機会が与えられることを望みます。しかし、神よ、なによりも、私がこのことで見栄を張ったり、うぬぼれてしまったり、屈辱的な親切さによって彼をけなしてしまい、自分の行動が結んだ実を失うようなことをしないようにして下さい。そのような場合は、「あなたはすでに償いを受けています。」というキリストの言葉が私にあてはまるのです。（第十三章、一以

降)

私たちの敵に与えられた利益への感謝の祈り

四十八、序文—あなた達の敵に対し悪を望まないということは慈善の気持ちが半分あるということです。本当の慈善の気持ちとは彼らに対しても善を切望し、彼らに利益がもたらされたとき、幸せに感じることです。（第十二章、七、八）

四十九、祈り—神よ、あなたの正義により、〇〇〇〇の心を喜びで満たされました。私に対し悪を行ったり、行おうとしたことは考慮に入れず、私はそのことを感謝します。もしこの善い出来事を私を侮辱するために利用するならば、私はそれを私の慈善の気持ちに対する試練として受けとめます。私を守ってくれている善霊よ、そのことにより私が悲しむことがないようにして下さい。私の価値を下げる羨みや嫉妬を取り除いて下さい。逆に私の価値を高める寛大さを私に与えて下さい。侮辱は悪の中にあり、善の中にはありません。遅かれ早かれ、そのなした行いにしたがって、一人一人が皆正義によって裁かれることを知っています。

スピリティズムの敵対者への祈り

五十、正義に飢える者は幸いです。彼らは満たされることになるからです。正義への愛のために迫害される者は幸いです。天の国は彼らのものだからです。私のせいで、人々があなたを悪者にし、あなたを迫害し、あなたに対しあらゆる悪口を言うのであればあなた達は運がよいのです。一だから喜びなさい。天にはあなた達への大きな報いが用意されているのです。あなた達の前に送られた預言者たちも同じように彼らは迫害したのです。肉体は殺せても、魂を殺すことのできない者を恐れてはなりません。魂と肉体を地獄に失ってしまう者を恐れなさい。（マタイ第十章、二十八）

五十一、序文—すべての自由の中で、最も犯しにくいものは良心をも含めた思考の自由です。考えの異なる者に、彼がそのように考えない事柄を押しつけることは、自分のためには思考の自由を求め、他人にはそれを与えないことになり、それはイエスの第一の戒めである隣人に対する愛と慈善の教えを破ることになります。人との信念の違いを理由に他人を迫害するということは、それぞれが理解するように神を崇め、同意することだけを信じるという、すべての人間が有する最も神聖なる権利を侵害することです。私たちの外見的な行いだけを他人にも似させようと圧迫することは、私たちが物事の根底に存在するものや、確信することよりも表面的な形を重んじているのを示すことになってしまいます。強い誓いは決して誰にも信仰心を与えることはできず、偽善者を生むだけなのです。そうした行いは物質的な力の濫用であり、真実を証明するものではありません。真実とはそれ自身が自立するものです。説得はしますが、迫害することはありません。なぜなら、その必要はないからです。スピリティズムは一つの見解であり、一つの信仰です。しかし、スピリティズムも、一つの宗教であるならば、カトリックであるとか、ユダヤ教であるとか、プロテスタントであるとか、どの哲学的な教義の党派であるとか、どの経済主義の持ち主であるというのと同じように、なぜ自らスピリティズム教徒であると自ら主張しないのでしょうか。その信仰は本物なのでしょうか、あるいは偽物なのでしょうか。もし偽物であるならば、人々の知性に光が射したとき、自ら消滅していくでしょう。なぜなら偽りは真実にまさることはできないからです。もし真実であれば迫害さえもそれを偽りに変えることはできないでしょう。迫害とは、偉大で正しく、世界の発展とともに成長し、その重要性を増していくことになる新しい考え方が受ける洗礼です。その考えへの敵対者の怒りと乱暴な態度は、その考えが彼らにもたらす恐れの大きさに応じているのです。それが大昔キリスト教が迫害され、今日スピリティズムが迫害される理由です。しかし、その違いは、キリスト教が異教徒達に迫害されたのに対し、スピリティズムはキリスト教徒達によって迫害されていることです。もちろん流血の迫害の時代は終わりました。それにより、もはや肉体を殺すことはありませんが、その代わり、魂を痛めつけ、最も大切な愛情を壊すことにより心の奥底の感情を傷つけるのです。家族崩壊をもたらし、母親を娘に対して怒らせ、妻を夫に敵対させます。肉体に対しても攻撃をします。物質的な必要性を悪化させ、飢えにより信じる者を減らすために生計を奪うのです。（第二十三章、九以降）スピ

リテリスト達よ、あなた達を襲う攻撃に苦しんではありません。それらの攻撃はあなた達が真実とともにあることを証明しているのです。もしそうでないのであればあなた達をそっとしておき、迫害する事などないはずです。迫害はあなたの信仰に対する試練です。なぜなら、神はあなたの勇氣、甘受の気持ち、忍耐によってあなたを多くの忠実なる使徒達の間に認めることができるからです。それぞれの成した行いにしたがって、一人一人にその手が届くものを与えるため、神は今日もそのような者たちを数えているのです。最初のキリスト教徒達の模範の通り、自分の十字架を誇りをもって担ぎなさい。「正義への愛のために迫害される者は幸いです。天の国は彼らのものだからです。肉体は殺せても、魂を殺すことのできない者を恐れてはありません。」と言ったキリストの言葉を信じなさい。キリストはまた、「敵を愛しなさい。あなたに悪を働く者に対し善を働き、あなたを迫害する者たちのために祈りなさい。」とも言いました。キリストが教え、行ったことを自分達も行うことによって、自分達は真なる使徒であり、自分達の教義がよいものであることを示しなさい。迫害は長続きはしません。夜明けがやってくるのを忍耐強く待つのです。地平線の向こうには明けの明星がもう輝いているのですから。（第二十四章、十三以降参照）

五十二、祈り一神よ、あなたは救世主であるイエスの言葉を通じ、「正義への愛のために迫害される者は幸いです。敵を赦しなさい。あなたを迫害する者たちのために祈りなさい。」と言いました。そして、イエス自身も死刑の執行人達のために祈ることによって、その模範を示しました。神よ、この模範に沿って、この世界ともうひとつの世界において平和をもたらすことができる唯一の神聖なる規律を軽んじる人々に対し、あなたの慈悲を嘆願いたします。キリストのように、「父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは自分達が何をしているのか知らないのです。」と私たちも申し上げます。私たちの信仰心と慎ましさが受ける試練である、あざけり、侮辱、中傷、迫害を辛抱と甘受の気持ちをもって耐える力を私たちにお与え下さい。また、どんな仕返し of 気持ちからも私たちが免れることができますように。なぜなら、すべての者に神の正義が響く時が到来することを知っているからです。そのときを、私たちはあなたの聖なる意志にしたがってながら待ち望んでおります。

生まれたばかりの子供への祈り

五十三、序文一霊は肉体が与えられた生活における試練をくぐり抜けなければ完成することはありません。幽界にいる霊は、与えられる苦しみを通じて自分の犯した過ちに報いたり、人類に利益をもたらす任務を遂行したり、進歩する方法を備えた人生が再び与えられることを神が許してくれるのを待ち望んでいるのです。人間の進歩の度合いと未来における幸せは、地上にいる間の時間を何に利用したかによって決まります。そうした人間が最初の一步を踏みだすのを助け、善の方向へ向かうように導いてあげることが、その者の父母の役割であり、父母等は任された任務をどれだけ成し遂げたかを神の前に答えることになるのです。そうすることをより容易にするため、神は父の愛、子の愛を自然の法とし、その法は罰せられずに破られることは決してないのです。

五十四、祈り（父母によって唱えられる祈り）— 私たちの子供の肉体に生まれてきた霊を私たちは喜んで迎えます。全能なる神よ、私たちが授かった子供により、あなたが崇められますように。この子供は私たちに託された預金のようなものであり、その精算をいつかしなければなりません。もしその子供が地上に住む新しい世代の霊に属する霊であるならば、神よ、その恵みに感謝致します。その子供が不完全な霊であるならば、その霊が善へ向かって進歩していくのを、忠告や模範によって助けてあげるのは私たちの役割です。私たちのせいで、もし悪の道へ落ちてしまったなら、その子供と共にあった私たちの任務の遂行に私たちは失敗したことになります。主よ、私たちの任務の遂行にあたり、私たちをお守り下さい。また、その任務を達成しようという気力と意志を私たちにお与え下さい。もしこの子供が私たちの霊にとって試練として生まれてきたのであれば、神の意志の通りとなりますように。誕生の時からこの子供を指導し、その生涯をともにする善霊よ、この子供をどうか見捨てないで下さい。この子供を悪へ導こうとする悪い霊を遠ざけて下さい。悪い勧めに抵抗する力と勇氣と、地上に待ち受ける試練に耐える忍耐力と甘受の気持ちこの子供に与えてあげて下さい。（第十四章、九）

五十五、（別の祈り）—あなたに属する霊のうちの一人を私の運命に託してくれた神よ、課された役割に値することができますように。あなたのご加護をお与え下さい。あなたの穏やかさを子供の中に灯すために、私が準備しなければならない事は早期の内から感知することができますよう、私の知性に光をお与え下さい。

五十六、（別の祈り）—善なる神よ、この子供の霊を再び地上の試練に立ち向かわせることを認められたのは、その霊の進歩のためなのでしょう。神を知り、神を愛し、神を崇めることができますように、その霊に光をお与え下さい。全能なるあなたの力にて、その魂があなたの博識なる指導の源に生まれ変わることができるようにして下さい。守護霊の保護のもとにその知性が広がり、発達することによって、その霊をよりあなたの元へ近づけてくれますように。スピリティズムの知識が輝く光となり人生の危機においてもその霊を照らしますように。最終的には、私たちの浄化のために私たちに試練を与えてくれる神より広がるすべての愛を感じ取ることができますように。主よ、その魂を託された家族に対し、子を見守る父の眼差しを向けて下さい。その家族が課された任務の重要性を学び、その子供の中に善なる種が芽生え、いつの日か自ら望み、自分だけであなたの元までたどりつくことができますように。おお、神よ。「子供達を私のもとに來させなさい。天の国はこのような者のためにあるのです。」と言われた方のかんがうのであれば、その名においてこの慎ましい祈りをどうか聞き入れて下さい。

危篤状態にある者への祈り

五十七、序文—危篤とは魂と肉体の離脱の序章です。この時人間は一方の足でこの世を、もう一方の足でもう一つの世界を踏んでいるのだということができません。物質への執着が非常に強く、もう一方の世界のものよりもこの世の富のために生きた者や、良心が悔いや苦悩に動揺している者にとって、この間は非常に苦しいものです。一方で、物質への執着が弱く、神を求めながら生きた者にとっては、彼らを地上につなぎ止める綱はより容易に解かれ、最期の時に苦痛を与えるものは何もありません。そのような場合においては、魂と肉体をつなぐのはたった一本の綱なのです。しかし、もう一方の場合においては、その綱以外に深く生えた根が魂を肉体に縛りつけているのです。いずれにせよ、危篤の時、祈りは魂が肉体から離脱する上で大きな働きをします。（「天国と地獄」第二部、第一章—「死」）

五十八、祈り—全能で慈悲深い神よ、ここに今にも地上でのまといを後にし、その本当の故郷である霊の世界へ戻ろうとしている魂が在ります。その魂を平穩にするものが与えられ、あなたの慈悲が差し伸べられますように。地上で生活する間付き添ってくれた善霊よ、この最高の時にその魂をどうか見放さないで下さい。未来におけるその魂の進歩のために、この地上で体験すべく最期の苦しみに耐える力を与えてあげて下さい。残された知性や、まだやってくる知性の最期のきらめきをその魂が自分の犯した過ちの後悔にささげるように導いて下さい。私の思考が、その魂の肉体からの離脱をより楽にし、その魂が地上を後にする時、その魂にとって希望に満ちた慰めとなることができるようにして下さい。

IV、霊への祈り

死後間もない人への祈り

五十九、序文—地上を後にしたばかりの霊へ向けられた祈りの目的は、彼らに対する親しみを示すことだけではありません。霊が肉体から解放されるのを助け、そのことにより、肉体からの魂の離脱の時にはつきものである混乱を短縮し、霊の世界への目覚めをより安らかなものにするのです。しかし、他のいかなる場合でもそうであるように、その祈りの効力というのは思考の誠実さの中にあるのであり、盛大に唱えられながらもしばしば心の込められていない言葉の数にあるではありません。心から放たれた祈りは、眠りから起こしてくれるやさしい友の声のように、まだ混乱した状態にある霊の回りに響きわたるのです。（第二十七章、十）

六十、祈り—全能なる神よ、たった今、地上よりあなたに呼び戻された〇〇〇〇の魂に、あなたの慈悲が注がれますように。その魂がこの地上で苦しみ耐えた試練が、霊界において受けるべき罰を和らげたり、短縮させたりする要因として考慮されますように。その魂を迎えに来た善霊よ、その中でも特にその守護霊よ。その魂が物質を棄てることを手伝ってあげて下さい。肉体の生活から霊の生活への移行に伴う混乱から早く抜け出すことができるように、その魂に光と自分自身の自覚をお与え下さい。永遠なる至福の生活へ向かって行く速度を速めるために、その魂に自分の犯した過ちに対する後悔の気持ちと、それを改める許しを得ようとする意欲をお与え下さい。霊の世界へ入って行ったばかりの〇〇〇〇よ、それでもあなたはここにこうして私たちの間に存在しているのです。あなたには私たちを見、聞くことができるのですから、あなたと私たちの違いは、あなたは間もなく灰となってしまう消滅すべき肉体を失ったということだけなのです。あなたは、苦しんだり、死すべく運命にある重いまといを脱ぎ捨て、苦痛から解放された、消滅することのないエーテル状のまといだけにつつまれているのです。あなたはもう肉体によって生きているのではないのです。霊の生活をしているのであり、その生活に人類を苦しめる悲惨は存在しないのです。私たちの目の前にある死後の世界の輝きを覆い隠すベールは、もうあなたの目の前にはないのです。これからは、私たちが暗闇に居続ける間、あなたは新たなすばらしい世界を眺めることになるのです。自由に宇宙を駆けめぐり、様々な世界を訪れなさい。その間、私たちは重い鎧のような肉体の中に閉じこめられたまま、地上を苦しうに這いまわっているのです。あなたの前には無限の展望が広がっているのです。その広大さを前にすれば、私たちが地上で抱く欲望、世俗的な野心、人類が好む不毛な喜び、というものの空しさを知ることができるでしょう。人類にとって死とはほんのわずかな間に行う物質からの離脱にすぎないのです。神の意志と、この世で遂げなければならない義務を守り続けながら生きているために送られてきたこの場所より、あなたが先に逝った者たちと再会したように、私たちもあなたと再会する許しが得られる時まで、私たちは思考によってあなたのお供を致します。私たちはあなたに会いに行くことはできませんが、あなたは私たちの元まで来ることができるのです。だから、あなたが愛する者、あなたを愛してくれている者の元へ来るのです。人生の試練においてそうした者たちを支えてあげて下さい。あなたにとって大切な人を守ってあげて下さい。あなたのできる範囲において彼らを保護してあげて下さい。今のあなたが以前よりも幸せだということや、いつかある日、良い世界において皆で再会できるのだという慰安となる確信を、思考によって彼らに感じさせることにより、彼らの悲しみを和らげてあげて下さい。あなたがいるその世界では、悪感情も失わなければなりません。あなたの未来の幸せのために今後は、そうした感情から身を遠ざけて下さい。だから、あなたが悪を働いた者たちがあなたを赦してくれているように、あなたに対して悪を働いた者を赦してあげて下さい。

注—どのような祈りにもあてはまりますが、家庭や人間関係の特別な状況や、死去した者のおかれた立場に応じて、この祈りに特別な言葉を付け加えてもかまいません。死去した者が子供であったとしても、その霊は生まれて間もない霊なのではなく、既に長い間生き、より進歩した霊でありうるとスピリティズムは教えてくれています。地上における最後の生命が短かったとしても、それはその子の試練を補うもの、もしくは、その子の親のための試練であるに過ぎません。

六十一、(別の祈り) (一) 全能なる主よ、地上を後にする私たちの兄弟にあなたの慈悲が行き渡りますように。あなたの光が兄弟の目に映り輝きますように。彼らを暗闇から遠ざけて下さい。彼らの目と耳を開かせてあげて下さい。あなたに従う善霊が彼らをとるまき、平和と希望の言葉を聞き入れるようにすることができますように。主よ、私たちはそれに値しないかもしれませんが、追放された土地より呼び戻された私たちの兄弟のために、あなたの慈悲深い寛容をあえてお願い致します。彼の帰還が放とう息子の帰宅と同じように迎えられますように。神よ、彼が行うことができた善を思い出すことにより、彼の犯した過ちが忘れられますように。あなたの正義は不変だということを私たちは知っています。しかし、あなたの愛も偉大です。あなたの胸からわき出る善意の泉によって、あなたの正義が柔らかくなりますようお願い致します。地上を後にする者たちがあなたの目に光り輝いて映りますように。あなたとともにある善霊が、彼を地上につなぎ止める鎖をちぎるのを手伝うため、彼に近づき、彼に寄り沿ってくれますように。私たちの主の偉大さを見て、理解することができますように。不平を言うことなく、あなたの正義にしたがって、しかし、あなたの慈悲に対し決して落胆することがないようにして下さい。兄弟よ。あなたが真剣に過去を見つめ、後に残してきた過ちや、

あなたに実行することが任された過ちを改めるための仕事に気付くことが、未来の扉を開くことになるのです。神があなたを赦し、善霊があなたを支え、元気づけてくれますように。あなたのために地上の兄弟が祈り、また彼らのためにあなたも祈ってくれることを願っています。

(一) ある知らない人の棺が家の前を通った時、ボルドーに住むある霊媒にこの祈りが伝えられた。

私たちが愛情を抱いていた人への祈り

六十二、序文—恐ろしいのは「無」の概念です。真空の中にすべてが失われてしまい、友達のことを思い泣いてくれる声も、返答の声もこだましないと信じている者のなんとあわれなことでしょう。すべてが肉体とともに死んでしまうと考える人は、純粋で聖なる愛情をとて知ることはできません。一広い知性によって世界を啓発した賢人も、物質の組み合わせに過ぎず、一吹きで永遠に無くなってしまいます。最も愛しい人、父、母、愛される息子も、否応にも風に吹かれ分散してしまう粉に過ぎないのです。心を持った人間がこのような考え方を冷静に受けとめることができるでしょうか。絶対的な絶滅の考えはその恐ろしさに心を凍りつかせ、少なくとも、そうあつては欲しくないと考えたのではないのでしょうか。あなたの霊からあらゆる疑いを晴らすだけの理由が今日のあなたにとって、もし、まだ不十分であるなら、魂の存続や、死後の存在を明らかにする物理的な証拠を通じ、スピリティズムが未来に関するすべての疑問を晴らしてくれます。あまりにも明らかであるため、そうした証拠は大きな喜びをもって受けとめられます。以降、人間は地上における生活はより良い生活へ導く短い通り道でしかないということを知るため、再び信じるができるようになります。—地上における労働は無駄にはならず、聖なる愛情はどんな希望をも引き裂くことはできないからです。

(第四章、十八、第五章、二十一参照)

六十三、祈り—神よ、〇〇〇〇〇の霊のために私が送る祈りをどうか慈悲深く受け入れて下さい。永遠の幸福への道を進むことが容易になるよう、神の明かりを彼に見せてあげて下さい。善霊が私の言葉と私の思考を彼の元へ伝えてくれることをお許し下さい。地上にいる間、あなたは私にとってたいへん大切な存在でした。私の愛情の新たな証を捧げるためにあなたを呼んでいる私の声を聞いて下さい。神は私より先にあなたを自由にされましたが、そのことを前に私は利己的になれず、不平を言うことはできません。なぜなら、さもなければ、あなたにもっと地上の苦しみや罰を受けさせることを望むことになってしまうからです。ですから、先にあなたが行ってしまったより幸せな世界で私たちが再び一緒になる時を、甘受して待ちます。私たちの別離は一時的なもので、それがどんなに私にとって長く感じられようと、神によって選ばれた者に約束された永遠の幸せの時に比べればその時間は無いに等しいのです。あなたの善意により、熱望される時の到来を私が遅らすようなことをしないように、また、私が地上の牢から解放された時、あなたに会えない苦しみを味わうことがないようにしてください。おお。あなたと私の間には、あなたを私の目には見えなくしている物質的なベールが存在しているだけで、あなたは私の横に来ることができ、昔からそうであるように私を見、私を声を聞くことができ、私があなたのことを忘れないのと同じようにあなたも私のことは忘れず、私たちの思考がいつも行き交い、あなたの思考はいつも私についてきてくれ、私を助けてくれる、ということを確認することは、なんと甘く、なんと心をなごませてくれることでしょうか。神の安らぎがあなたと共にありますように。

祈りを求める苦しむ魂への祈り

六十四、序文—祈りが苦しむ霊をどれほど楽にするかを理解するには、既に説明したとおり、祈りが霊に対しどのように作用するのか知る必要があります。(第二十七章、九、十八及びそれ以降)その真実をよりよく納得している者は、無駄に祈っているのではないという確信より、より献身的に祈ることができます。

六十五、祈り—寛大で、慈悲深い神よ、私たちの祈りを求めるすべての霊、特に〇〇〇〇、の元まであなたの善意が行き届きますように。善を行うことのみに従事している善霊よ、私と共に彼らを楽にするための仲立ちとなって下さい。彼らの目の前に希望の光が輝き、彼らを至福の家から遠ざけて

いる彼らの不完全性を、神の光が明るく示してくれるようにして下さい。彼らの進歩の速度を速めるために、後悔と浄化しようとする意欲によって彼らが心を開くようにして下さい。彼らの努力によって試練の時間は短縮されるのだということを彼らに理解させてあげて下さい。神がその善意により、彼らに善い決意を保ち続ける力を与えてくれますように。慈悲を思い出させるこれらの言葉が彼らの罰を和らげ、地上に彼らの幸せを望み、彼らに同情する者がいるということが彼らに示されますように。

六十六、（別の祈り）—神よ、あなたの愛と慈悲の恵みを、宇宙にさまよう霊の間にも、私たち人間の間にも、ある苦しむ者すべてにちりばめて下さい。私たちの弱さをあわれんでください。あなたは私たちを間違いを犯しやすく創られましたが、同時に悪に抵抗し、克服する能力を与えてくれました。悪の傾向に抵抗しきれず、まだ悪の道を進んでいる者すべてにあなたの慈悲が届きますように。善霊が彼らを取り囲みますように。あなたの光が彼らの目に映り、その光の生き生きとした暖かさに引かれ、あなたの足元までやってきて、謙遜、後悔、服従の念にひれ伏すことができますように。慈悲の父よ、地上での試練においてそれに耐える力が十分でなかった私たちの兄弟のために、同じことをお願いいたします。神よ、あなたは私たちに荷を負わせましたが、それはあなたの前でしか降ろしてはいけないものです。しかし、私たちは弱く、旅の途中、しばしば私たちには勇気が欠けてしまいます。仕事を決められた時以前に放棄してしまった怠惰な従僕達に同情して下さい。あなたの正義が彼らをいたわり、善霊が彼らに安らぎ、慰安、未来への希望をもたらすことを許してくれますように。赦されるであろうという兆しは、魂を補強してくれます。神よ、途方に暮れた罪ある者たちにその兆しを見せてあげて下さい。その希望に支えられ、その過ちと苦しみの大きさと同じだけの大きな力を吸い込み、過去を償い、未来への準備をすることができますように。

他界した敵への祈り

六十七、序文—私たちの敵に対する慈善の行いは、その敵が他界した後も続けなければなりません。彼らが私たちに対して行ってきた悪とは、私たちにとっての試練であり、それを有益に利用することができていたなら、私たちの進歩にとってよい機会であったはずです。私たちに勇気、甘受の気持ち、慈善、攻撃を忘れる気持ちを手に入れさせてくれたように、純粹に物質的な痛みよりも、より有効な試練であったかも知れません。（第十章、六、第十二章、五、六）

六十八、祈り—主よ、〇〇〇〇の魂を、私より先に呼ばれたのは、あなたの満足によるものです。彼が私に対して行った悪や彼が抱いていた私に対する悪意をお赦し下さい。この世の幻想に惑わされなくなった今、彼がそれらの事を後悔することができますように。神よ、あなたの慈悲が彼の上にも降り、彼の死を喜ぶ気持ちを私から遠ざけて下さい。もし、私が彼に対する過ちを犯してしまったら、私も彼が私に対して犯した過ちを忘れるように、どうかお赦し下さい。

犯罪者への祈り

六十九、序文—もし祈りの効果はその長さに応じて変わるのであったなら、清く生きた者より罪の重い者の方が祈りを必要としているのですから、長い祈りは、より罪の重い者のためにとっておかなければならないはずです。犯罪者への祈りを拒否することは慈善の欠如であり、神の慈悲を忘れていることとなります。ある罪を犯したからといって、犯罪者を無益な者と決めつけることは、神の正義を勝手に判断していることとなります。

七十、主よ、慈悲なる神よ、たった今地上を後にしたこの犯罪者の受け入れをどうか拒まないで下さい。人間の正義は彼を罰しましたが、彼の心の中に後悔の念が浸透していないのであれば、あなたの罰から免れることはできません。彼の罪の深さを見えなくしている目隠しを彼の目から外してあげて下さい。後悔することによって、あなたの寛大なる保護を受け、その魂の苦しみの緩和に値することができますように。私たちの祈りや善霊のとりなしが、彼に希望と慰安をもたらしますように。彼の悪行を新たな人生の中で改めようとする望みを抱かせ、辛抱しなければならない新しい戦いに負け

てしまわないように、彼に力を与えて下さい。主よ、彼にあなたの慈悲をお与え下さい。

自殺者への祈り

七十一、序文一人類には決して自分の生命を放棄する権利はありません。神のみに、適当であると判断された時、地上の牢から人を連れ出すことが許されているのです。神の正義は、状況に応じてその厳格さは緩和されることもありますが、人生の試練から逃れようとした者に対する厳しさは保たれます。自殺者とは刑期を終えることなく、牢から抜け出した囚人のようなものです。再び捕らえられた時には、より厳しく罰せられます。現生のみじめさから逃れようと決断してしまい、より大きな不幸にはまってしまった自殺者に同じ事が言えます。（第五章、四以降）

七十二、祈り一神よ、自分から生命の日数を短縮し、あなたの法を破った者を待ちうける運命がどのようなものであるかを私たちは知っています。しかし、あなたの慈悲は無限であることも知っています。どうか〇〇〇〇の魂にあなたの慈悲を差し伸べて下さい。試練が終結するまで待つための勇気が欠如したため今、彼が経験している苦しみの辛辣さが、私たちの祈りと神の憐れみによって和らげられますように。不幸な者を救援する任務を負った善霊よ、彼をあなたの保護の元に置いて下さい。彼の犯した罪の重さを感じさせてあげて下さい。あなたの救援によって、彼の過ちを改めるために立ち向かわねばならない新たな試練を甘受し耐え抜く力が与えられますように。再び彼に悪を強要し、苦しみを長引かせることによって、未来おける償いの結果を失わせることになる悪い霊を彼の側から遠ざけて下さい。私たちの祈りを誘った不幸の持ち主であるあなたにも、あなたの苦悩を短縮させる私たちの同情をあなたが願い、よりよい未来への希望を自分の中に生み出すことができるように祈ります。神はあなたの手の中に存在します。神の善意を信じて下さい。神の胸は固くなった心に対しては閉ざし続けますが、すべての後悔に対しては開かれます。

後悔する霊への祈り

七十三、序文一祈りを求める苦しむ霊や後悔する霊を悪い霊の範疇に入れてしまっは不公平です。彼らは悪かったかも知れませんが、自分の過ちを知り、嘆き悲しんでいるのですから、もう悪くはないのです。彼らは不幸なだけです。そのうちのある者は、もう相対的な幸せを感じ始めることができるようになります。

七十四、祈り一生きる者、他界した者を問わず、罪を犯した者の誠実な後悔を聞き入れてくれる慈悲深い神よ、今までは悪に喜びを感じていたものの、これまでの自分の過ちに気づき、善の道に向かおうとしている霊がここにいます。神よ、どうか放蕩な息子のように受け入れ、赦してあげて下さい。彼は今まで善霊の声を聞き入れようとはしませんでした、今では聞こうとしています。神によって選ばれた者の幸せに届くまで、浄化しようという欲望を持ち続けることができるように、そうした幸せを垣間見ることができるようにしてあげて下さい。彼の善き決断を支え、悪癖に抵抗する力を与えてあげて下さい。〇〇〇〇の霊よ、あなたの内なる変化を祝福し、あなたを助けてくれた善霊に感謝します。以前、悪に喜びを感じていたのは、善を行うことの喜びの気持ちよさを理解していなかったからであり、また、その喜びを得ることを望むには自分は低すぎると感じていたからです。しかし、善の道に一步踏み出した時から、あなたの目には新しい光が輝いています。あなたの心の中に入った今まで知らなかった幸せと希望を享受し始めたのです。神は後悔する罪人の声を必ず聞き入れてくれます。神を求める者の誰をも拒否することはありません。神の恵みの中に再び完全に入るためには、今後悪を働かないだけでなく、善を行うことに努め、何よりも行ってきた悪を償わなければなりません。そうすれば神の正義にかなうこととなります。一つ一つの善い行いが過去の過ちを消していくこととなります。既に第一歩は踏み出しているのです。これからは道を進めば進むほど、その道は易しく、楽しくなるでしょう。だから、根気よく続けて下さい。いつか善霊や至福を享受する者の一人として数えられる栄光を得る日が来るでしょう。

強情な霊への祈り

七十五、序文—悪い霊とは、いまだに後悔することを知らない霊のことです。彼らは悪を楽しみ、それによって何等苦悩を感じることはないのです。強いとがめに対しても鈍感で、祈りを拒否し、多くの場合、神の名を汚します。強情になってしまったこのような霊は死後、生きている間に我慢した苦しみの復讐を人間に対して行おうと、生きている間自分に対して悪を働いた者を、憑衣によって、または、あらゆる有害な影響を与えることによって、憎み、つきまといます。(第十章、六、第十二章、五、六)

不道徳な霊ははっきりと区別のつく二つの分類に分けることができます。単純に悪いものの分類と偽善的なものの分類です。善に導くには二番目の分類のものより、一番目の分類のものの方が限りなく容易です。一番目の分類のものは、人間の場合がそうであるように、ほとんどの場合、荒々しく野蛮な性格をしています。計算してというよりも、本能的に悪を行います。自分のある状態を越えようとはしません。しかし、彼らの中には、発芽させる必要がある潜在的な種子を持っており、それはほとんどの場合、忍耐、慈悲と結びついた固い意志、忠告、理性、祈りによって発芽させることが可能となります。霊媒力を通じ、彼らが示す神の名を書くことの難しさとは本質的な恐れ印であり、彼らの内なる本心が神の名を書かせようとしません。その点において彼らは自分を変化させることができ、私たちも彼らに対しあらゆる希望を抱くことができるのです。彼らの心の弱点を見出すことさえできればよいのです。偽善的な霊はほとんどの場合知性的ですが、心の中に一筋の感受性をも有していません。何も彼らを感動させることはできません。信用を得るためにあらゆる善い情操をまね、彼らを神聖な霊だと思いこんでしまう愚かな者に出会うと喜び、そうした者を好きなように支配することになります。神の名は彼らに恐れを感じさせるにはほど遠く、逆に自分達の醜行を隠すための仮面として使います。目に見えない世界では、目に見える世界と同じく、誰にもそれを疑わせることなく偽善者は闇の中で行動するので、最も危険な存在です。見かけだけの信仰を持ち、誠実な信仰は決して持つことはありません。

七十六、祈り—主よ、未だ無知の闇の中にあり自分を見失っている不完全な霊、特に〇〇〇〇の霊をあなたの善意にあふれた眼差しで見上げて下さい。善霊よ、人間を悪に導き、憑衣により苦しめることは、自分の苦しみを長引かせることになるのだと言うことを彼に理解させるために、私たちに助けて下さい。あなたが感じている幸せの例が、彼にとって勇気づけとなるようにして下さい。いまだに悪に喜びを感じている霊よ、あなたのために捧げる祈りを聞きに来て下さい。その祈りは、あなたが悪を働こうと、私たちはあなたのための善を望んでいることの証です。悪をし続けながら幸せにはなることができないのですから、あなたは哀れです。その苦しみを避けることがあなた自身にかかっているのに、なぜあなたは苦しみの中にとどまろうとするのですか。あなたを取り囲む善霊を見て下さい。彼らはなんと幸せそうなことでしょうか。あなたも同じ幸せを享受することができたら素晴らしいではありませんか。あなたは、それは不可能だと言うかも知れません。しかし、望む者にとって不可能なものはなにもなく、神は、そのすべての創造物にそうしたように、あなたにも善と悪、つまり幸せと不幸、のどちらかを選ぶ自由を与えたのであり、誰も悪を働くことを強いられていることはありません。悪を働こうという意志があるのと同様に、善をしようという意志を抱き、幸せを得ることが可能なのです。あなたの目を神の方向に向けて下さい。神の方向へあなたの思考を一時運べば、神の光はあなたを照らしてくれるでしょう。私たちと共に次の簡単な言葉を唱えて下さい。「神よ、私は後悔しています、私をお赦し下さい。」自分を省み、悪を行う代わりに、善を行おうとすれば、すぐに神の慈悲があなたにも注がれ、語りようのない良い気分が、あなたが体験している苦痛にとって変わるでしょう。善の道を歩み始めることさえできれば、残りを歩み続けるのはあなたにとって容易でしょう。そうすれば、幸せの時を自分のせいでどれだけ逃してきたかを知ることができるでしょう。しかし、希望に満ちあふれた広がる未来があなたの前に開け、あなたの惨めな過去のことは忘れさせてくれるでしょう。混乱と道徳的な拷問がもし永遠に続くとすれば、それはあなたにとって地獄と同じです。どんなに高く払おうともその拷問を止めさせたいと思う日がやって来るでしょう。しかし、その日が遅くなればなるほど、止めさせることは難しくなります。今いる状態に永久にいるなどと信じてはいけません。その様なことは不可能なことです。あなたの前には二つの見通しがあります。—今まで苦しんできたより更にずっと苦しむ見通しと、あなたを取り囲んでいる善霊と同じよ

うに幸せになるという見通しです。一つ目の見通しは、あなたが強情を張り続けるのであれば避けることはできませんが、あなたに小さな努力の意志さえあれば、あなたがいる苦しい現状から出れることができるでしょう。一日遅れることは、あなたの幸せを一日逃すことなのですから、急ぐことです。善霊よ、こうした言葉が、このいまだに遅れている魂にこだまし、神に近づくための助けとなるようにして下さい。イエス＝キリストの名において、悪い霊に対する偉大なる力をお願い致します。

V、病人、憑衣に煩う者への祈り

病人への祈り

七十七、序文―病気は地上における試練や苦しみの一部です。私たちの物質的な特長の粗悪さや、私たちの住む世界の劣性に固有のものです。感情やあらゆる種類の過剰は、私たちの体の組織の中に不健全な状態を造りだしますが、それは時々遺伝によって伝えられます。物質的にも道徳的にもより進んだ世界では、人間の組織は、より浄化され、より非物質的で、私たちと同じ様な病気にはかからず、感情の荒廃によって、体が隠れたところで侵食されていくようなことはありません。（第三章、九）ですから、私たちの劣性の位置する環境の結果に苦しむことを、別の場所へ移されるまでは、甘受することが必要です。だからといって、そのことは、私たちが現状を改善しようとして戦うことの妨げとなつてはなりません。しかし、私たちの努力にもかかわらず、改善することができないとき、甘受をもって一時的な悪耐えることをスピリティズムは私たちに教えてくれています。私たちの体の苦しみが和らぎ、治癒されることを、神が望まなかったのであれば、その場合、私たちの手の届くところに治療の手段を与えません。保護本能によって確認することができるように、この点において私たちの義務とは治療の方法を探し、その方法を応用することであるということを示しています。科学によって作り上げられた普通の薬による治療の他に、磁力の発見はフルイドの作用の力を教えてくれ、その後、スピリティズムはもう一つ別の力である、祈りの作用による治療の力を、霊媒力を通じ教えてくれました。（第二十六章、治療する霊媒に関する記述参照）

七十八、祈り（病人が唱える祈り）―主よ、あなたは全正義であり、私はそれに値したがため、あなたは私を病気にしました。なぜなら、動機なしに神は人を苦しめることはないからです。しかしながら、あなたの慈悲のもとに、私は自らを治療しようとしています。あなたの気に沿うことであれば、どうか私の健康を回復させて下さい。私はあなたに感謝致します。もし、その反対で、私は苦しみ続けなければいけないとしても、同じようにあなたに感謝致します。あなたが行うすべての目的は、あなたの創造物のための善でしかないのですから、不平を言うことなく、神の法令にしたがっています。おお、神よ、この病気が私にとって有益な注意となり、私が自分自身を試そうとするようにして下さい。病気を過去の報いとして、また、私の信仰とあなたの聖なる意志への服従のための試練として受けとめます。（四十、の祈り参照）

七十九、祈り（病人への祈り）―神よ、あなたの意志には測り知れません。あなたはその英知により、〇〇〇〇を病いを送りました。彼に同情によって見守り、彼の苦しみを終わらせてあげて下さい。全能なる神の使いである善霊よ、彼を楽にしてあげたいという私の望みを助けてくれることを私はあなたにお願い致します。私の思考が、彼の体に有益な慰安の芳香油のように、また彼の魂に慰めとして注がれるようにして下さい。彼に忍耐と神への服従を感じさせて下さい。キリスト教徒の甘受の気持ちによって、痛みに耐える力を与え、今おきているこの試練の結果を無駄にすることがないようにして下さい。（五十七、祈り―参照）

八十、祈り（治療する霊媒の唱える祈り）―神よ、私がそれだけのことに値しないにもかかわらず、私を使うことを望まれるのであれば、私はあなたの力を信じているので、あなたの意志がそうである以上、私はこの苦しみを治療することができるでしょう。しかし、あなた無しにはなにもできません。善霊にその健全なフルイドを私にしみこませ、それを私がこの病人に伝えることができるようにし、また、フルイドの純度を低下させる可能性のある自尊心やエゴイズムによるどんな考えも私から遠ざけて下さい。

憑衣に煩う者への祈り

八十一、序文—憑衣とは悪い霊がある人に対して不断の作用することです。それには、外見的には感知できるような兆候の無い単なる道徳的な影響から、精神的、肉体組織的な能力の完全な混乱まで、様々な性格が見られます。いかなる霊媒力をも妨げます。自動筆記、あるいは記述、の霊媒力においては、ある特定の霊だけが他の霊には筆記させまいとすることによって憑衣が起ります。地球に住む人間の道徳的な劣性の結果、悪い霊は地球の回りに増えて行きます。その悪行はこの世で人類が耐えている苦しみの一部をなしています。憑衣は、病気と同じように、また、人生のあらゆる苦悩と同じように、試練、もしくは報いとしてとらえ、その状況を受け入れなければなりません。病気が外部からの有害な影響を受けやすくする肉体的な不完全性からくるように、憑衣は悪い霊の影響を受けやすくする道徳的な不完全性から常に起りまう。病気から身を守るためには肉体を強化します。憑衣が起きないように保証するには魂を強化することが必要です。このことから、憑衣に煩う者は、自分自身の回復のため、自分で働かなければならないということになりますが、ほとんどの場合、他の人に助けを求めなくとも、それだけでとりついた霊から解放されるには十分です。憑衣がとりつかれた者を征服したり、支配するところまで悪化してしまったとき、煩う者は、自分自身の意欲や自由意志を失ってしまうため、他人の助けが必要となります。憑衣はほとんどの場合、霊の復讐の行ため、多くの場合、その原因はとりつく者ととりつかれた者との前世における関係にあります。（第十章、六、第十二章、五、六）重傷な憑衣の場合、健全なフルイドの作用を無効にし、それらを追い払う有害なフルイドがとりつかれた者を取りまき、しみ込んでいます。このフルイドからとりつかれた者を解放することが必要です。しかし悪いフルイドは同種の別のフルイドによって追い払うことはできません。治療する霊媒が病気を治す時に行うように、悪いフルイドを、ある種の抵抗作用を生む善いフルイドの助けを借りて追い払う必要があります。これは機械的作用と呼ぶことができますが、それだけでは十分ではありません。なによりも、道徳の優位性のみが与えてくれる権威によって話し、知性に働きかけることも必要です。道徳的に優位であればある程、権威も強大になります。とりついた霊からの解放を保証するには、まだそれがすべてではなく、不道徳な霊の悪いたくらみをあきらめさせなければなりません。道徳的な教化を目的として、特定の人を呼び起こし、うまく教えを差し向けることによって、後悔と善への欲求に目覚めさせることが必要です。そうすれば、生きた者を解放させることと、不完全な霊を改心させるという二つの満足を得ることができます。とりつかれた者が自分の状況を理解し、その意志により、また、祈ることにより協力をしてくれるのであれば、仕事はより容易になります。うそつきの霊にそそのかさされ、支配する者の性質に錯覚し続け、その神秘性に楽しむのであればその逆になります。その場合、解放を助けるどころか、とりつかれた者自身がどんな救援をも受け付けなくなるからです。それは、悩殺された状態であり、最も暴力的な征服よりも常に反逆的です。（「霊媒の書」第二十三章参照）憑衣のすべての場合において、とりつく霊に対する最も強力な手段は祈りです。

八十二、祈り（憑衣に煩う者が唱える祈り）—神よ、私にとりついた悪い霊から善霊が私を解放してくれるようにして下さい。もしそれが私の過去において彼に対して行った悪の結果に対する彼の復讐であるならば、神よ、私が自分のせいで苦しむことができるようにして下さい。私の後悔があなたの赦免と私の解放に値するものとなるようにして下さい。しかし、何が原因であれ、彼に対するあなたの慈悲をお願い致します。神よ、悪を行おうとする考えによって道はずれてしまいましたが、彼の進歩の道をよりたやすくして上げて下さい。私は、自分の役割として、彼の悪に対し善で報い、彼をよりよい感情の方向へ導くことができますように。しかし神よ、不完全な霊の影響を受けやすくするのは、私の不完全性であることを知っています。それらの不完全性を自覚するのに必要な光をお与え下さい。なによりも、私の欠点に対し私を盲目にする私の自尊心を遠ざけて下さい。私を悪い霊が支配することができるということは、私がどれだけ恥じるべきかということです。神よ、私の虚栄心へのこの一撃が私の未来のための教えとなるようにして下さい。今後、悪い影響の攻撃に対し防壁を築くことができるよう、善、慈善、慎ましさの実践により、浄化しようという私の決断をその教えが補強してくれますように。神よ、この試練を忍耐と甘受をもって耐えるだけの力を私にお与え下さい。これ以外の試練と同様に、この試練も、私が不満をこぼすことなくその試練の結果を失うようなこと

がなければ私の進歩のために貢献するものだということを理解しています。なぜなら、その試練は私の神への服従を示し、不幸な兄弟の私に対して行った悪を赦すという慈善を行う機会を与えてくれているからです。（第十二章、五、六、第二十八章、十五とその続き、四十六、四十七参照）

八十三、祈り（憑衣に煩う者への祈り）—全能なる神よ、〇〇〇〇にとりつく霊から解放させてあげることができる力を私にお与え下さい。もし、あなたの意志の中にこの試練を終わりにすることがあるのであれば、必要な権威をもってこの霊に話す機会を私にお恵み下さい。私を助けてくれている善霊よ、そして〇〇〇〇の守護霊よ、あなた達の助けを私にお与え下さい。あなたをとりまいた不純なフルイドから彼を自由にするのを助けて下さい。全能なる神の名において、この人を苦しめる悪い霊を遠ざけるようにお願いします。

八十四、祈り（とりついた霊への祈り）—永遠の善である神よ、〇〇〇〇にとりついた霊にあなたの慈悲が及ぶことを嘆願いたします。彼が神の光に気付き、今たどっている道の虚偽を知ることができるようにして下さい。善霊よ、悪を行うことによってすべてを失うことになり、善を行うことによりすべてを得ることができるのだということを彼に理解させるのを助けて下さい。〇〇〇〇を苦しめることに喜びを感じている霊よ、神の名において話す私のことを聞いて下さい。熟考するのであれば、悪は善に導くことはできず、あなたは、あなたのあらゆる企てからも〇〇〇〇を守ることができる神や善霊より強くなることはできないということを理解することができるでしょう。神がそうしなかったのは、〇〇〇〇には苦しむ試練が与えられたからです。しかし、この試練が終わった時には、彼らは〇〇〇〇に対して行動をおこそうとするあなたを妨げることになるでしょう。あなたが行う悪は、〇〇〇〇に損害を与える代わりに、〇〇〇〇の向上のためになり、〇〇〇〇をより幸せにすることでしょう。このように、あなたの悪意は無駄になり、しかしそれはあなたに対し致命的となります。あなたより強大な力を持つ全能なる神、優れた霊、その使者たちは、解きたい時にこの憑衣を解くことができ、それによってあなたの強情さは至上の権威に破壊することになります。しかし、善であるからこそ、神はあなた自身の意志にて憑衣が解かれることの価値をあなたの手にゆだねたのです。あなたに与えられた許可であり、それをうまく利用しないと嘆かわしい結果に苦しまなければならない、その場合大きな罰や大きな苦しみがあなたを待つことになるのです。あなたの犠牲となった者の慈悲心と祈りをあなたは彼に嘆願せざるを得なくなるでしょう。なぜなら、彼はもうあなたのことを赦し、あなたのために祈っていることを神に高く評価し、彼を解放をするからです。だから、まだ間に合う間に熟考して下さい。なぜなら、神の正義は、他のすべての反抗的な霊と同じように、あなたをも圧することになるからです。今行っている悪は強制的に終わらせられるのに、もしあなたが頑固に固執し続けるのであれば、あなたの苦しみは止むことなく増していくでしょう。あなたが地上にいたとき、偉大なる善を、小さい一時の満足のために犠牲にすることがばかげたことであるとは考えませんでしたか。霊として存在する今、同じ事が言えます。あなたが今行っていることで何を得ることができるのでしょうか。他人を苦しめることの悲しい喜びは、いくらあなたがそうではないと主張しようとも、あなたを不幸することの妨げとはならず、あなたの未来において更に不幸をもたらします。それとは別に、あなたが何を失っているか見て下さい。あなたを取り囲む善霊を見、彼らの幸せがあなたにとっても望ましいものであるか言ってみて下さい。あなたが望むのであれば幸せはあなたのもものにもなります。そうなるには何が必要なのでしょう。神にその助けを嘆願し、悪の代わりに善を行うのです。あなた達が突然変化できないことはよく知っています。しかし、神はあなたに不可能なことは望みません。あなたの意志だけが望まれるのです。だから、やってみて下さい。私たちはあなたを助けます。すぐに私たちがあなたを悪い霊として数えることなく、あなたのために後悔する霊への祈り（七十三）を唱えることができるようにし、もうすぐあなたを善い霊として数えることができるようにして下さい。（七十五、強情な霊への祈り参照）

解説—重傷な憑衣の治療は多くの忍耐、勤勉、献身、を必要とします。また、多くの場合とても反抗的、強情で悪賢い霊を善に導くには、そうした霊の中には最も反抗的な者もいるため、技術や能力も必要です。ほとんどの場合、状況に応じて進めるべきです。しかし、霊がどのような性格であっても確実なのは、脅迫や強制によって得られるものは何もなく、どのような影響も道徳的に上位であるかによります。同様に経験により確かめられ、論理的に実証されているもう一つの真実は、厄払い、呪

文、神聖なことば、魔除け、お守り、外見上の儀式、あらゆる物質的な印はまったく無力であるということです。長引きすぎた憑衣は病理学上の混乱の原因となり、同時または連続して、肉体機能の回復のため、磁氣的、または医学的に治療をすることが必要です。原因が遠のいても、その結果を取り除く必要性がまだあるのです。（参照—「霊媒の書」第二十二章—憑衣について、「レビュー・スピリテ」一八六四年二月号、一八六五年四月号—憑衣の治療の実例）スピリティズムによる福音 0
EVANGELHO SEGUNDO 0 ESPIRITISMO 二四二